

# 平安京左京四条一坊二町跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 平安京左京四条一坊二町跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所





2区池452（北東から）



1 2区岬848土留構築状況（南西から）



2 2区池462（北東から）



1 1区石組溝262・292、池288（北西から）



2 1区庭園遺構2期（北西から）



木墨8



木墨1



木墨2



木墨3



木墨6



木墨7



墨30



墨28



墨24



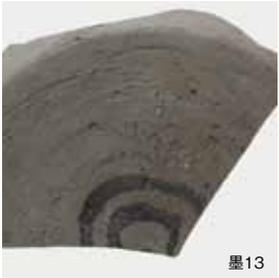
墨23



墨5



墨18



墨13



墨6



墨35

墨書土器

# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、マンション建設に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

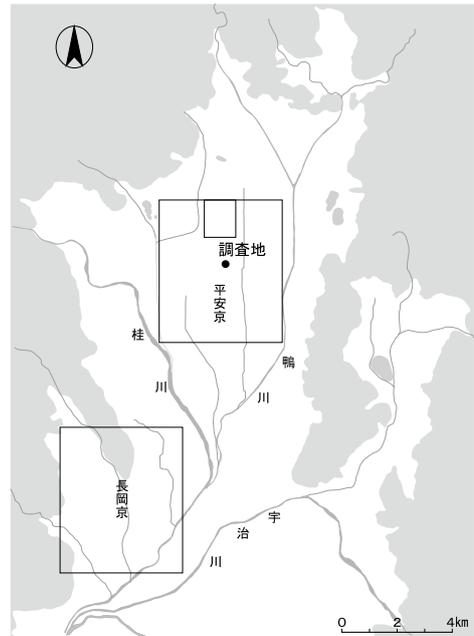
# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京四条一坊二町跡（文化財保護課番号 13H215）
- 2 調査所在地 京都市中京区壬生朱雀町37番の1・37番の6
- 3 委 託 者 伊藤忠都市開発株式会社 執行役員 井筒康友
- 4 調査期間 2014年5月16日～2014年9月30日
- 5 調査面積 1,323㎡
- 6 調査担当者 丸山真史・南 孝雄・金島恵一・柏田有香
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 丸山真史：第1章、第2章、第3章1～3、第4章1（3）・4～7、第5章1（1・2）  
南 孝雄：第3章4、第4章1（1・2・4）・2・3・8・9、第5章1（3）・2・3  
付章1：パリノ・サーヴェイ株式会社  
付章2：株式会社 京都フィッション・トラック
- 14 積 文 木簡と墨書土器の積文は、乾 義彦氏（関西大学）、佐野 宏氏（京都大学）、鈴木景二氏（富山大学）、竹本 晃氏（万葉文化館）、長谷川千秋氏（山梨大学）、西山良平氏（京都大学）、吉野秋二氏（京都産業大学）に依頼した。諸氏の意見のとりまとめは吉野氏が行った。  
まじないに関連する墨書土器については、上野勝之氏（国際日本文化研究センター）からご教示を得た。
- 15 分析・同定 落込み456・池452の大型植物化石・花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に分析を委託した。井戸359出土の井戸材・池452の種実、その他木製品の樹種同定は当研究所の竜子正彦が行った。
- 16 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

17 協 力 者

調査・整理作業にあたっては下記の方々からご教示を頂いた。記して謝意を表します。(五十音順、敬称略)

尼崎博正、網 伸也、市川 創、植山 茂、河角龍典、北野信彦、國下多美樹、高 正 龍、後藤玉樹、栄原永遠男、佐藤泰弘、鋤柄俊夫、鈴木久男、仲 隆裕、中島 正、浜中邦弘、東影 悠、東影友美、美川 圭、三好孝一、村田和弘、元木泰雄、山田邦和、横内裕人、若杉智宏



(調査地点図)

# 目 次

第1章 調査経過	1
第2章 位置と環境	4
1. 位置と環境	4
2. 周辺の調査	4
第3章 遺 構	8
1. 基本層序	8
2. 平安時代前期の遺構	9
3. 平安時代中期の遺構	13
4. 平安時代後期の遺構	16
(1) 庭園遺構1期	16
(2) 庭園遺構2期	17
(3) 庭園遺構3期	23
(4) 庭園遺構4期	25
(5) その他の遺構	25
第4章 遺 物	34
1. 土器類	35
(1) 平安時代前期の土器類	35
(2) 平安時代中期の土器類	46
(3) 平安時代後期の土器類	47
(4) その他の土器類	51
2. 土製品	53
3. 瓦類	54
(1) 瓦廃棄土坑出土の平安時代後期の瓦	54
(2) 山城産軒丸瓦	55
(3) 山城産軒平瓦	58
(4) 和泉産軒丸瓦・軒平瓦	60
(5) 丸瓦	64
(6) 平瓦	64
4. 木製品	64
(1) 平安時代前期の木製品	64
(2) 平安時代中期の木製品	69
(3) 平安時代後期の木製品	71

5. 石製品・ガラス製品	72
6. 銭貨	73
7. 動物遺存体・植物遺存体	73
8. 墨書土器	74
9. 木簡・絵馬	80
第5章 まとめ	84
1. 遺構の変遷	84
(1) 平安時代前期	84
(2) 平安時代中期	86
(3) 平安時代後期	87
2. 庭園遺構と大江公仲邸・藤原為隆の「坊城堂」について	90
3. 「なにはつ」木簡について	91
付章1 自然科学分析	95
付章2 石組溝262掘形出土の火山灰分析結果	109

## 図 版 目 次

巻頭図版1	遺構	2区池452(北東から)
巻頭図版2	遺構	1 2区岬848土留構築状況(南西から) 2 2区池462(北東から)
巻頭図版3	遺構	1 1区石組溝262・292、池288(北西から) 2 1区庭園遺構2期(北西から)
巻頭図版4	遺物	絵馬・木簡
巻頭図版5	遺物	墨書土器
図版1	遺構	第3面 平安時代前期遺構平面図(1:300)
図版2	遺構	第2面 平安時代前期から中期遺構平面図(1:300)
図版3	遺構	第1面 平安時代後期遺構平面図(1:300)
図版4	遺構	庭園遺構1期平面図(1:120)
図版5	遺構	庭園遺構2期平面図(1:120)
図版6	遺構	庭園遺構3期平面図(1:120)
図版7	遺構	庭園遺構4期平面図(1:120)
図版8	遺構	池南北断面図(1:50)

- 図版9 遺構 池東西断面図（1：50）
- 図版10 遺構 1区中央セクション断面図（1：50）
- 図版11 遺構 1区北壁断面図（1：50）
- 図版12 遺構 掘立柱建物1実測図（1：80）
- 図版13 遺構 掘立柱建物2実測図（1：80）
- 図版14 遺構 溝329実測図（1：50）
- 図版15 遺構 水場448実測図（1：50）
- 図版16 遺構 石組溝262、タタキ433実測図（平面図1：80、断面図1：20）
- 図版17 遺構 1区 第1面全景（北東から）
- 図版18 遺構 1 1区西半 第3面全景（東から）  
2 1区 落込み456（南東から）
- 図版19 遺構 1 2区 掘立柱建物2（西から）  
2 2区 掘立柱建物1（西から）  
3 2区 掘立柱建物1ピット865断面（南から）
- 図版20 遺構 1 1区 井戸359（東から）  
2 1区 井戸359断割状況（北西から）
- 図版21 遺構 1 1区 井戸359井戸枠構築状況（南西から）  
2 1区 井戸359横棧取り付け状況（南西から）  
3 1区 井戸359墨書「東三」（北西から）  
4 1区 井戸359和櫃出土状況（北から）
- 図版22 遺構 1 1区 溝329（北から）  
2 1区 溝329（北西から）  
3 1区 溝329護岸杭断割状況（北西から）
- 図版23 遺構 1 1区 水場448（西から）  
2 1区 水場448・溝329交差部（北西から）  
3 1区 水場448北肩断割状況（東から）
- 図版24 遺構 1 2区 井戸847断割状況（北から）  
2 2区 井戸847遺物出土状況（北から）  
3 2区 井戸847完掘状況（北から）
- 図版25 遺構 1 1区 溝261（北東から）  
2 2区 枡状遺構828（北東から）  
3 2区 枡状遺構828遺物出土状況（北東から）
- 図版26 遺構 1 2区 池462（北から）  
2 2区 池462北岸（南東から）  
3 2区 池462南岸（東から）

- 図版27 遺構 1 2区 池462東岸、礎石建物2（南西から）  
2 1区 池462（南東から）
- 図版28 遺構 1 2区 池452（北西から）  
2 2区 池452（北から）  
3 2区 池452北岸（東から）
- 図版29 遺構 1 2区 景石827・887（南西から）  
2 2区 集石856（東から）  
3 2区 岬848北岸構築状況（北東から）
- 図版30 遺構 1 2区 岬848南岸土留（北東から）  
2 2区 岬848北西岸土留（南西から）  
3 2区 岬848南岸土留（西から）
- 図版31 遺構 1 2区 庭園遺構3期（北東から）  
2 2区 入江820土器出土状況（南東から）  
3 2区 入江820完掘状況（東から）
- 図版32 遺構 1 1区 池450（北西から）  
2 1区 池450、遣水457（北東から）  
3 1区 瀬落とし449（南東から）
- 図版33 遺構 1 1区東半 庭園遺構4期（南西から）  
2 1区 池288（北から）
- 図版34 遺構 1 1区 礎石建物1、石組溝292（西から）  
2 1区 石組溝292北側堰石（南西から）  
3 1区 石組溝262（南西から）
- 図版35 遺構 1 1区 列石882、礎石443（北から）  
2 1区 礎石443断割状況（西から）  
3 1区 土器溜211（西から）  
4 1区 礎石建物1断割状況（東から）
- 図版36 遺構 1 1区 土坑96（北から）  
2 1区 土坑106（南西から）  
3 2区 土坑631（北から）  
4 2区 土坑716（北から）
- 図版37 遺物 落込み456・井戸359出土土器
- 図版38 遺物 井戸359・溝329出土土器
- 図版39 遺物 土坑189・井戸847・岬848出土土器
- 図版40 遺物 池452・入江820・池288出土土器、輸入陶磁器、製塩土器
- 図版41 遺物 輸入陶磁器

- 図版42 遺物 軒丸瓦 1  
 図版43 遺物 軒丸瓦 2  
 図版44 遺物 軒平瓦 1  
 図版45 遺物 軒平瓦 2、丸瓦 1  
 図版46 遺物 丸瓦 2、平瓦  
 図版47 遺物 木製品 1 (落込み456出土)  
 図版48 遺物 木製品 2 (井戸359・847、柵状遺構828、池452・462、土坑716出土)  
 図版49 遺物 土製品・ガラス製品・石製品・銭貨  
 図版50 遺物 鉱物・自然石・動物遺存体・植物遺存体  
 図版51 遺物 木簡赤外線写真 (原寸)  
 図版52 遺物 木簡・絵馬赤外線写真 (原寸)

## 挿 図 目 次

図1	調査地位置図 (1 : 2,500)	1
図2	調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図3	1区調査前全景 (西から)	3
図4	1区重機掘削風景 (北西から)	3
図5	1区オルソ測量風景 (西から)	3
図6	2区第1面写真撮影前清掃作業風景 (北西から)	3
図7	井戸359井戸材取り上げ作業風景 (北東から)	3
図8	岬848検出作業風景 (西から)	3
図9	京都盆地北部の扇状地 (1 : 60,000)	5
図10	周辺調査位置図 (1 : 5,000)	6
図11	基本層序断面図 (1 : 40)	8
図12	断面位置図 (図版8~11)	9
図13	井戸359実測図 (1 : 30)	11
図14	井戸359井戸枠墨書位置図 (1 : 20)、墨書実測図 (1 : 3)	12
図15	土坑189実測図 (1 : 20)	13
図16	溝261実測図 (1 : 50)	14
図17	井戸847実測図 (1 : 30)	15
図18	柵状遺構828・876実測図 (1 : 40)	15
図19	礎石建物2実測図 (1 : 50)	17
図20	岬848構築状況実測図 (1 : 60)	18

図21	岬848土留南側実測図（1：30）	19
図22	岬848、池462断面図（1：80）	20
図23	景石827・887実測図（1：30）	21
図24	集石856実測図（1：30）	21
図25	池450、遣水457平面図（1：60）	22
図26	入江820土器出土状況実測図（1：60）	23
図27	瀬落し449実測図（1：30）	24
図28	礎石建物1、石組溝292実測図（1：50）	26
図29	柵1実測図（1：50）	27
図30	柵2・3実測図（1：50）	28
図31	集石277、列石882実測図（1：30）	29
図32	礎石443・885・886実測図（1：40）	30
図33	土坑96・106実測図（1：30）	30
図34	土坑631・716・732・739実測図（1：30）	31
図35	土器溜211実測図（1：40）	32
図36	落込み456出土土器実測図1（1：4）	36
図37	落込み456出土土器実測図2（1：4）	37
図38	落込み456出土土器実測図3（1：4）	38
図39	井戸359出土土器実測図（1：4）	39
図40	溝329出土土器実測図（1：4）	41
図41	水場448出土土器実測図（1：4）	43
図42	土坑189出土土器実測図（1：4）	45
図43	井戸847出土土器実測図（1：4）	46
図44	溝261出土土器実測図（1：4）	47
図45	枘状遺構876出土土器実測図（1：4）	47
図46	池462、岬848、池452出土土器実測図（1：4）	48
図47	入江820、池288出土土器実測図（1：4）	49
図48	土器溜211出土土器実測図（1：4）	50
図49	輸入陶磁器実測図（1：4）	51
図50	製塩土器実測図（1：4）	52
図51	弥生・古墳時代土器実測図（1：4）	53
図52	土製品実測図1（1：4）	53
図53	土製品実測図2（1：4）	54
図54	山城産軒丸瓦拓影及び実測図（1：4）	56
図55	山城産軒平瓦拓影及び実測図（1：4）	59

図56	和泉産軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（1：4）	61
図57	丸瓦拓影及び実測図（1：6）	62
図58	平瓦拓影及び実測図（1：6）	63
図59	木製品実測図1（1：4）	65
図60	木製品実測図2（1：4）	66
図61	木製品実測図3（1：16）	67
図62	木製品実測図4（1：16、1：10）	68
図63	木製品実測図5（1：4）	70
図64	石製品・ガラス製品実測図（1：4）	72
図65	銭貨拓影（1：2）	73
図66	墨書土器実測図1（1：3）	75
図67	墨書土器実測図2（1：3）	76
図68	墨書土器実測図3（1：2）	79
図69	木簡・絵馬実測図（1：2）	80
図70	遺構変遷図1（1：1,000）	85
図71	遺構変遷図2（1：1,000）	88
図72	遺構変遷図3（1：1,000）	89
図73	池変遷図（1：300）	90
図74	大江公仲邸復元図	91

## 表 目 次

表1	周辺調査一覧表	7
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	34
表4	落込み456出土土器の構成	35
表5	井戸359出土土器の構成	40
表6	溝329出土土器の構成	40
表7	土坑189出土土器の構成	44
表8	溝261出土土器の構成	46
表9	西群土坑出土瓦の重量一覧表	55
表10	東群土坑出土瓦の重量一覧表	55
表11	出土墨書土器一覧表	78
表12	「歌木簡」と今回出土「なにはつ」木簡集成表	93

# 平安京左京四条一坊二町跡

## 第1章 調査経過（図1～8）

今回の発掘調査は、マンション建設を契機として実施した。調査地点は、平安京左京四条一坊二町跡に位置する。調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が行われ、平安時代の遺構・遺物が確認されたため、発掘調査が必要であるとの指導が原因者に対してなされた。原因者は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査を委託し、実施する運びとなった。

調査区は、排土置き場を確保するため1区と2区に分け、順次調査を行った。1区は西端で南北約14.0m、東端で約7.0m、東西約63.0m、2区は南北約21.5m、東西約26.5mに設定した。なお、調査の過程で、1区中央部で検出した礎石建物1の規模を確認するため、北壁際の一部を北へ拡張した。

調査は、平成26年5月16日から開始した。重機により盛土・耕作土層などを掘削した後、平安時代後期の整地層を検出し、この上面を第1面とした。第1面では平安時代後期の遺構の調査を行い、建物・池・柵などを検出した。平安時代後期の整地層を人力で除去後、平安時代前期の整地層を検出し、この上面を第2面とした。第2面では平安時代前・中期の遺構の調査を行い、建物・

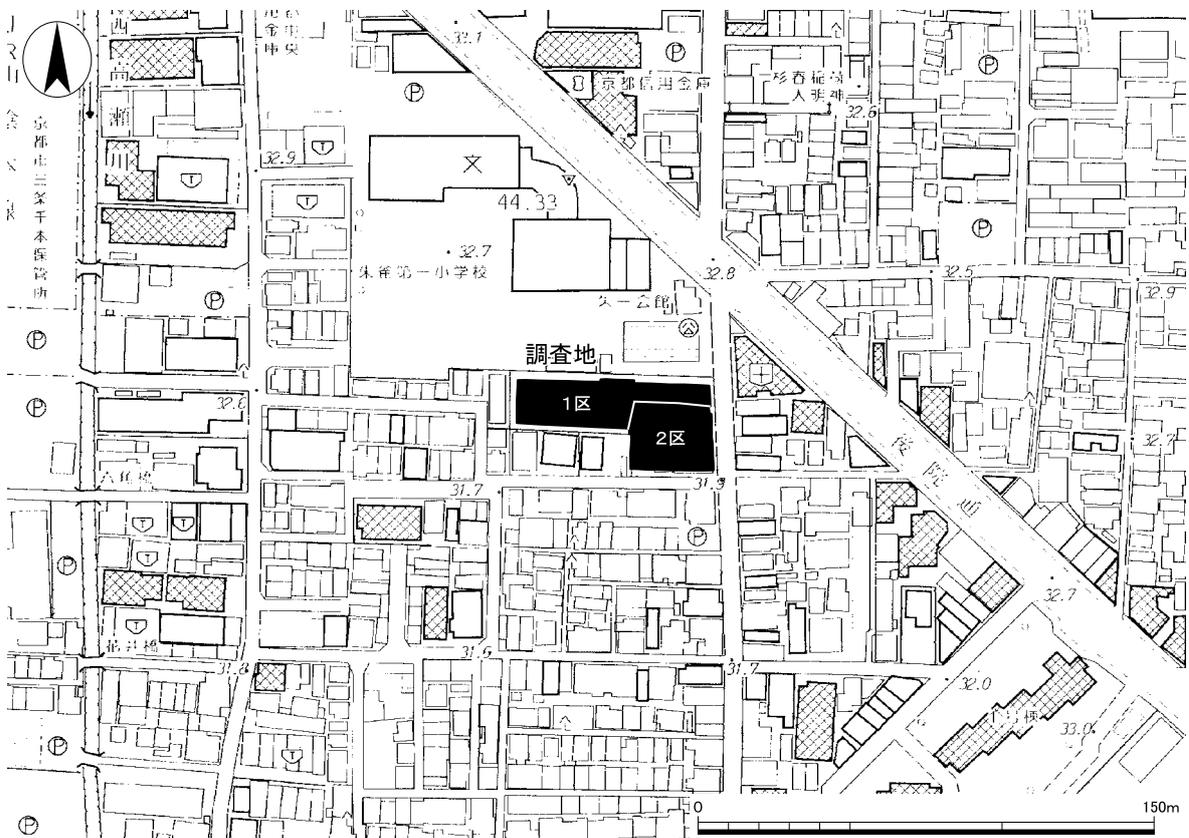


図1 調査地位置図（1：2,500）

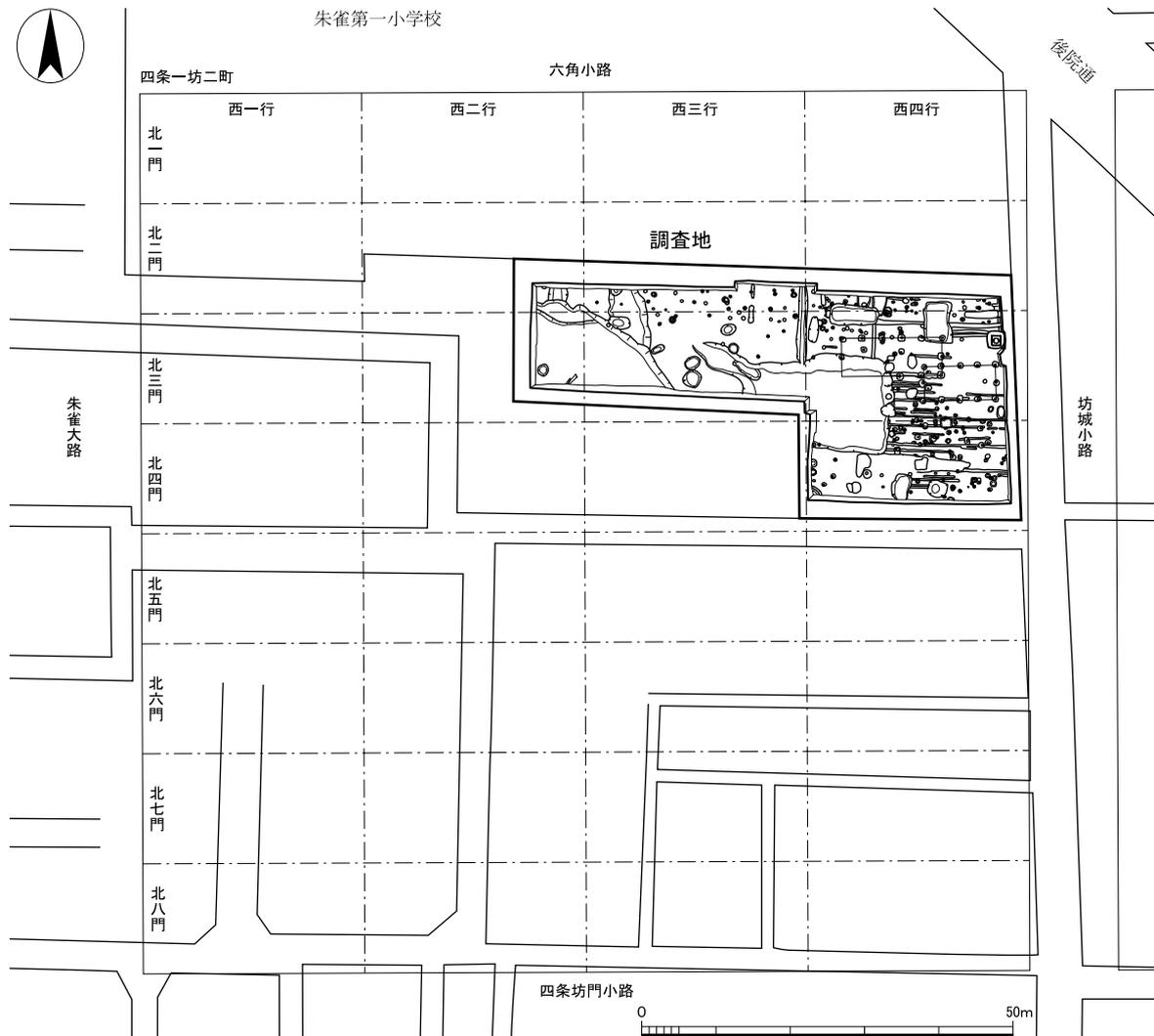


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

溝・井戸などを検出した。平安時代前期の整地層を人力で除去後、地山を検出し、この上面を第3面とした。第3面では平安時代前期の落込み・井戸を検出した。各遺構面では、遺構の掘り下げを行った後、写真撮影・遺構実測などの記録作業を行い、9月30日にすべての現地作業を終了した。遺構の実測は、主としてトータルステーションによる測量を行い、平面図を作成した。また、平安時代後期の庭園遺構に伴う池の洲浜や岬の構築状況、石組溝などの立体的な遺構については、オルソ測量を行い、平面図・立面図を作成した。

調査では、平安時代前・中・後期の遺構・遺物を検出した。平安時代前・中期は建物・井戸などを検出し、多量の遺物が出土した。注目される遺物として、まとまった量の本簡や墨書土器をあげることができる。平安時代後期は、池を中心とする庭園遺構を検出した。庭園遺構は4時期にわたる変遷を確認し、後述する文献史料との対比が可能な事例として重要である。なお、平安時代中期のなかでも10世紀後半から11世紀代の遺構・遺物は検出していない。



図3 1区調査前全景（西から）



図4 1区重機掘削風景（北西から）



図5 1区オルソ測量風景（西から）



図6 2区第1面写真撮影前清掃作業風景（北西から）



図7 井戸359井戸材取り上げ作業風景（北東から）



図8 岬848検出作業風景（西から）

## 第2章 位置と環境

### 1. 位置と環境（図9）

平安京は京都盆地北部のほぼ中央に位置し、東西を鴨川と桂川の2つの河川によって挟まれている。京内の地形は、鴨川・桂川やその他の小河川によって形成された複数の扇状地からなり<sup>1)</sup>、調査地点は鴨川扇状地と天神川扇状地の間の谷地に位置する。この谷地形は、北東から南西に向かって緩かに傾斜しており、調査地点でも北東部の標高が最も高い。

調査地点は、左京四条一坊二町内の北東部にあたる。二町は、平安京の中央やや北寄りに位置し、北は六角小路、南は四条坊門小路、西は朱雀大路、東は坊城小路に面する（図2）。

史料では、平安時代前・中期の二町の利用状況は明らかでないが、周辺には京内離宮の朱雀院や公的機関の奨学院などが存在した。また、朱雀大路に面する左・右京一坊は、それぞれ坊城・西坊城小路までの東西半分が、都城の中心部の景観を保つため、坊城垣が整備されたと考えられている<sup>2)</sup>。

平安時代後期になると、史料に拠って二町の土地利用の在り方を知ることができる。嘉保2年（1095）散位従四位下大江公仲は罪に問われて隠岐国へ配流されることになった。これに際して1町四方の邸宅を4分割して処分している<sup>3)</sup>。また、左大弁藤原為隆は、大治2年（1127）に仏堂を建立し<sup>4)</sup>、大治5年にこの地で薨去したとされる<sup>5)</sup>。

### 2. 周辺の調査（図10、表1）

これまでの周辺の調査では、平安時代を中心として、中世・近世の遺構が検出されており、平安時代を遡る遺物が出土した地点もある。

平安時代を遡る遺物は、左京四条一坊五・六・七町の調査（9）で、平安時代の遺物包含層から弥生時代と古墳時代の土器が出土しており、当該期の集落などが周辺にあったことがうかがえる。

平安時代には、朱雀大路（試-3）、四条坊門小路（9・試-10）などの路面が検出されており、街路が整備されていた。右京四条一坊一・七町で、朱雀院に関連する建物などが検出されている（1・4）。左京四条一坊では、一町で池（庭園）・六角小路の築地など（5・6・7・試-6）、三町で池（庭園）・湿地状堆積（試-9・立-6）、四町で溝・井戸など（8）、五町で掘立柱建物・錦小路南側溝（9・立-9）、六町で四条坊門小路側溝（9・試-10）、七町で土坑群（9）、十三町で池や井戸（11）が検出されている。

中世から近世は、右京四条一坊一町で安土・桃山時代の溝や土坑（2）、四町で室町時代の柱穴・溝（3）、左京四条一坊十町で室町時代の池（試-11）、十二町と十三町の間で室町時代後期の堀・溝など（10）、江戸時代の土坑（11）、十四町で鎌倉時代の土坑、室町時代の井戸（12）などが検出されている。

時期は明らかでないが、試掘および立会調査で、左京四条一坊二町で四条坊門小路北側溝（立-

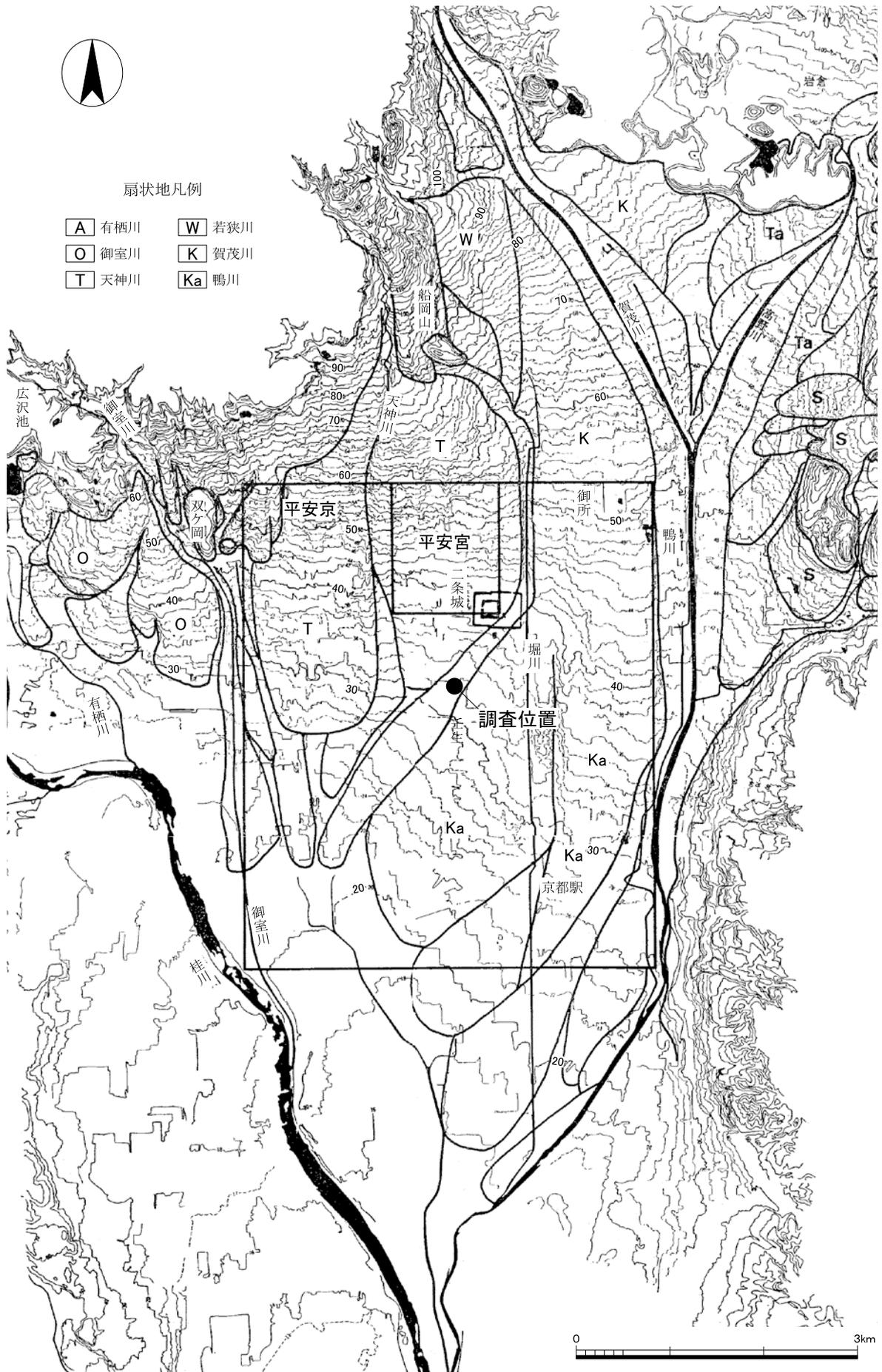


図9 京都盆地北部の扇状地（1：60,000） 註1文献より一部改変

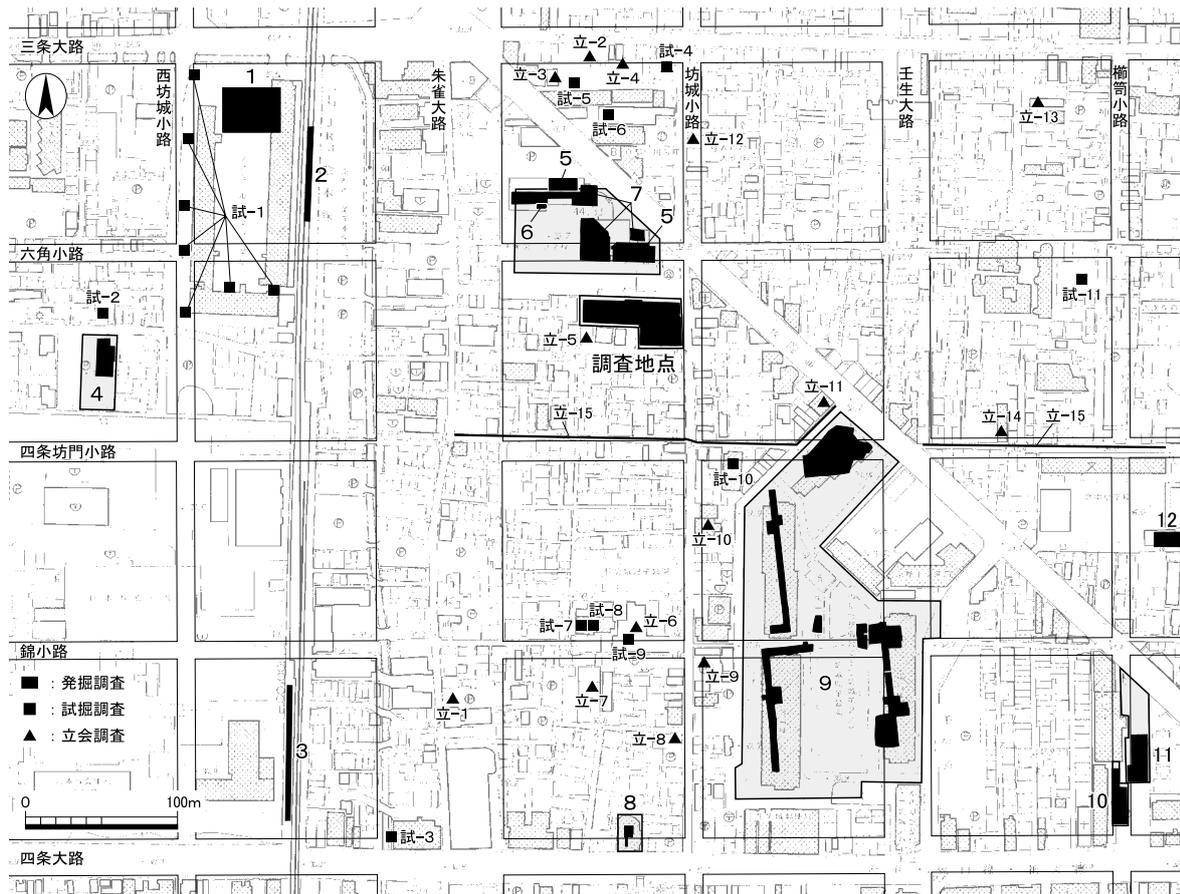


図10 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

15)、七・九・十町で湿地状堆積 (立-11・立-13・立-14) などが検出されている。

周辺の調査では、平安時代には条坊道路が敷設され、前期には建物・井戸・池 (庭園) などが構築されるが、中期には遺構、遺物の出土が減少し、土地利用が低調であったと推察できる。しかし、後期には溝・井戸・池 (庭園) などが構築され、土地利用が再び活発になったことが窺える。また、平安時代前期から鎌倉時代までの池や湿地状堆積が多く、多くの地点で検出されており、調査地点一帯が扇状地外縁部に立地することから、湧水量が豊富な地理環境であったと考えられる。

註

- 1) 石田志郎「京都盆地北部の扇状地 - 平安遷都時の京都の地勢 -」『古代文化』34巻12号 1982年
- 2) 岸 俊男『日本古代宮都の研究』岩波書店 1988年
- 3) 『平安遺文』1338号
- 4) 『中右記』大治二年十月一七日条
- 5) 『長秋記』大治五年九月八日条

表1 周辺調査一覧表

No.	条坊	方法	調査概要	文献
1	右京四条一坊一町	発掘	平安時代前期の朱雀院関連の建物、柵、溝、門、西坊城小路・地鎮遺構。	未報告
2	右京四条一坊一町	発掘	平安時代後期の土坑。安土・桃山時代の溝、土坑、遺物包含層。江戸時代の遺物包含層。	『平安京右京四条一坊』『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
3	右京四条一坊四町	発掘	室町時代の柱穴、溝。	『平安京右京四条一坊四町(朱雀院)跡』『平安京跡・御土井跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-18 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
4	右京四条一坊七町	発掘	平安時代前期の朱雀院関連の掘立柱建物。中世～近世の耕作溝。	『平安京右京四条一坊七町(朱雀院)跡』京都平安文化財発掘調査報告第1集 有限会社京都平安文化財 2013年
5	左京四条一坊一町	発掘	平安時代の池など。	『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧 1981』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年
6	左京四条一坊一町	発掘	平安時代の池。中世の溝。	『平安京左京四条一坊』『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
7	左京四条一坊一・二町	発掘	平安時代前～中期の六角小路南築地下暗渠・北側溝・北築地内溝、井戸、池など。平安時代後期の六角小路路面・北築地・北側溝・南側溝、井戸、溝、瓦溜など。遺物:「朱雀院」墨書の題箋など。	『平安京左京四条一坊』『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
8	左京四条一坊四町	発掘	平安時代前期の井戸。平安時代後期の溝、井戸、土坑、柱穴。	『左京四条一坊』『平安京跡発掘調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
9	左京四条一坊五・六・七町	発掘	平安時代前期の井戸・土坑。平安時代中期の井戸。平安時代後期の掘立柱建物。平安～鎌倉時代の四条坊門小路路面・側溝。中世の掘立柱建物。遺物:弥生・古墳時代の土器、平安時代の墨書土器など。	『平安京跡発掘調査報告一左京四条一坊一』平安京調査会 1975年
10	左京四条一坊十二・十三町	発掘	平安時代以前の旧流路、火山灰堆積。平安時代前期の湿地状堆積。室町時代後期の土坑、堀、溝など。	『平安京左京四条一坊十二・十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-33 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
11	左京四条一坊十三町	発掘	平安時代前～中期の池。平安時代後期の井戸。中世の井戸、溝、土坑など。近世の土坑など。	『平安京左京四条一坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-10 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
12	左京四条一坊十四町	発掘	鎌倉時代の土坑。室町時代の井戸。近世の井戸・土坑・土取穴。	『平安京左京四条一坊十四町』『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
試-1	右京四条一坊一・二町	試掘	平安時代以前～近代の池の一部・岸辺、湿地状遺構。平安時代前期の東西溝。平安時代前半のピット、土坑、整地層。	『平安京右京四条一坊・朱雀院』『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
試-2	右京四条一坊七町	試掘	-1.0mで平安時代中期の溝状遺構。園池。	『平安京右京四条一坊七町跡 No.58』『京都市内遺跡試掘調査概報 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
試-3	右京四条一坊四町	試掘	-1.4mで鎌倉時代の遺物包含層。-1.5m以下で平安時代末の朱雀大路路面、不明路面。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
試-4	左京四条一坊一町	試掘	-1.1mで三条大路南溝か。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
試-5	左京四条一坊一町	試掘	平安時代の湿地状堆積。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
試-6	左京四条一坊一町	試掘	平安時代の池跡。	『平安京左京四条一坊一町跡 No.4』『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
試-7	左京四条一坊三町	試掘	-0.6mで平安時代前期の遺物包含層。-0.8mで平安時代前期の池状堆積。	『平安京左京四条一坊三町跡 No.12』『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』京都市文化市民局 1995年
試-8	左京四条一坊三町	試掘	-0.62mで平安時代の遺物包含層。-0.82mで平安時代の池状堆積。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成5年度』京都市文化観光局 1994年
試-9	左京四条一坊三町	試掘	平安時代中期の池。中世の錦小路北溝。	『平安京左京四条一坊三町跡 No.24』『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
試-10	左京四条一坊六町	試掘	-0.76mで平安時代前期～鎌倉時代の四条坊門小路路面・南溝。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
試-11	左京四条一坊十町	試掘	-0.66mで室町時代の遺物包含層。-0.9mで室町時代の池屑口。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
立-1	左京四条一坊四町	立会	-0.82mで砂礫地山上で鎌倉時代の湿地堆積。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化観光局 1997年
立-2	左京四条一坊一町	立会	平安～鎌倉時代の湿地状堆積。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
立-3	左京四条一坊一町	立会	平安～鎌倉時代の湿地状堆積。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
立-4	左京四条一坊一町	立会	平安～鎌倉時代の湿地状堆積。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
立-5	左京四条一坊二町	立会	-0.71mで平安時代中期・不明の池状堆積。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
立-6	左京四条一坊三町	立会	-0.78mで錦小路路面。-1.03mで平安時代前期の湿地状堆積。-1.18mで平安時代前期の池・洲浜。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
立-7	左京四条一坊四町	立会	平安時代後期～鎌倉時代の池・洲浜。銭貨入り壺。源国信の邸宅。	『平安京左京四条一坊四町(05HL167)』『京都市内遺跡立会調査概報 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
立-8	左京四条一坊四町	立会	-1.13mで平安時代後期の湿地状堆積。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化観光局 1997年
立-9	左京四条一坊五町	立会	-0.9mで平安時代後期の錦小路南側溝。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
立-10	左京四条一坊六町	立会	-0.7mで平安時代中期の遺物包含層、池状堆積。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年
立-11	左京四条一坊七町	立会	-0.75mで湿地状堆積。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
立-12	左京四条一坊八町	立会	-0.82mで室町時代前期の遺物包含層。-0.95mで坊城小路路面。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
立-13	左京四条一坊九町	立会	-1.0mで湿地状堆積。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
立-14	左京四条一坊十町	立会	1区で-0.5～-1.1mで鎌倉～室町時代の遺物包含層。2区で-0.4mで湿地状堆積、-2.2mで砂礫地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
立-15	左京四条一坊二・七・十・十五町	立会	四条坊門小路北側溝。	『左京四条一坊』『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年

※No.は図10の調査地点の数字と対応する。

# 第3章 遺 構

## 1. 基本層序 (図11)

基本層序は、現地表面から現代盛土層・近世耕作土層・平安時代後期の整地層・平安時代前期の整地層が堆積し、地山となる。

現代盛土層は、北部で厚さ0.5～0.7m、西部で厚さ0.5～1.1mと西側でやや厚く堆積する。近世の耕作土層は、厚さ0.1～0.2m堆積する。平安時代後期の整地層は、北部ではシルト混じりの黒褐色細砂層で、厚さ0.08～0.15m堆積する。また、西部では褐灰色細砂層・黄褐色細砂層・黒褐色シ

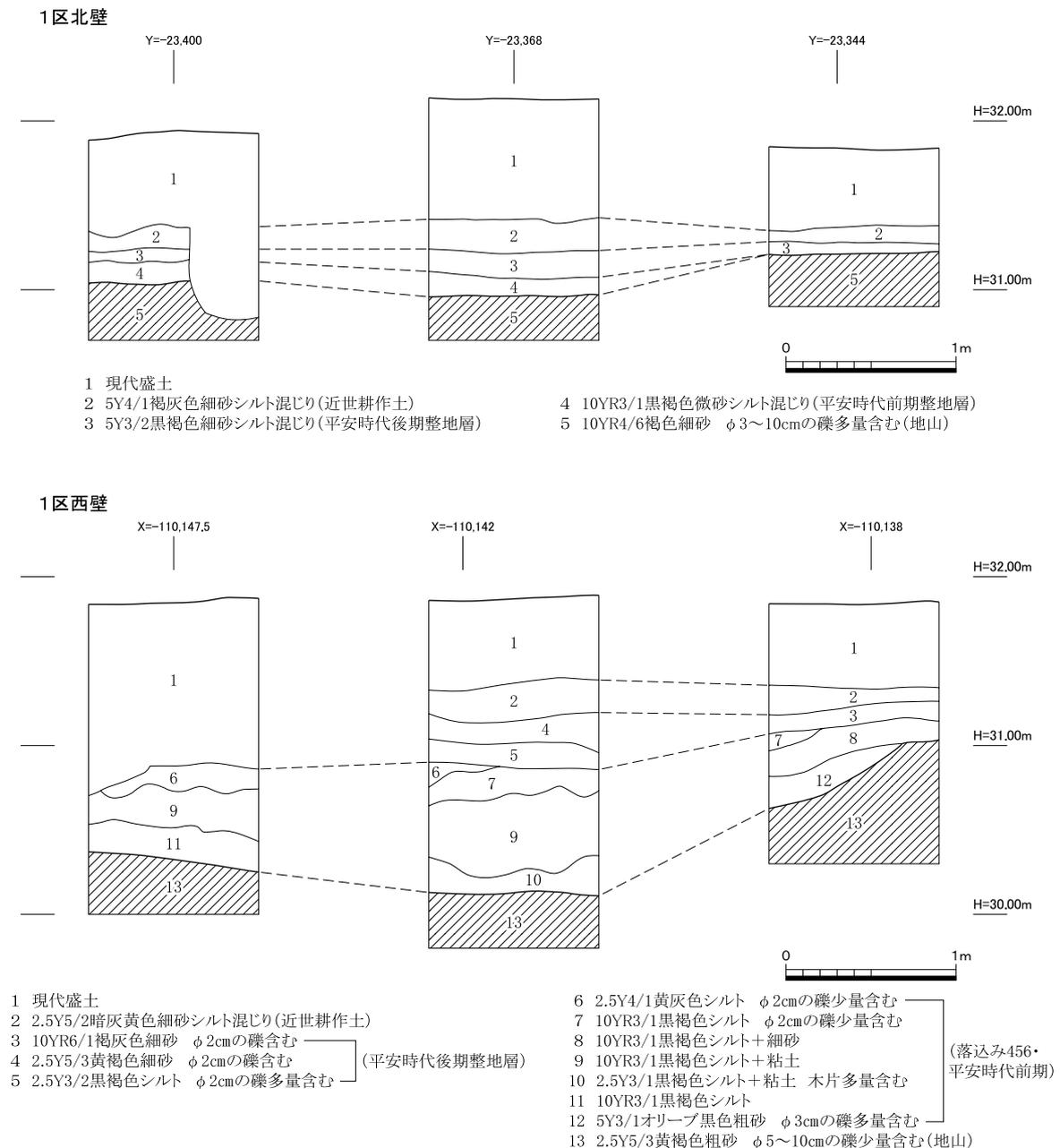


図11 基本層序断面図 (1 : 40)



図12 断面位置図（図版8～11）

ルト層が厚さ0.1～0.3m堆積する。平安時代後期の整地層の上面を第1面として、平安時代後期の遺構を検出した。平安時代前期の整地層は調査区中央部から西部にかけて堆積しており、東部では存在しなかった。中央部から西部にかけてシルト混じりの黒褐色微砂層で、厚さ0.1m程度堆積する。平安時代前期の整地層の上面を第2面として、平安時代前・中期の遺構を検出した。平安時代前期の整地層の下は遺物を含まない地山である。地山は、北東部では褐色細砂層で礫を多量に含み、西部では黄褐色粗砂層で礫を少量含む。地山上面を第3面として、平安時代前期の遺構を検出した。

## 2. 平安時代前期の遺構（図版1・2・18）

掘立柱建物・溝・井戸・土坑・ピット・水場・落込みなどを検出した。大規模な造成を行い、建物や井戸を構築している。

**掘立柱建物1**（図版12・19-2・3） 2区北東部で検出した。南北2間、東西5間の東西棟である。方位は梁行方向で座標北に対して、約1°西に振れる。柱間は梁行2.4m（8尺）・桁行2.7m（9尺）の等間である。柱掘形の平面形は方形を呈し、一辺0.6～0.9m、深さ0.2～0.7mを測る。北側柱列のピット858、南側柱列のピット883に柱根が遺存する。柱根径はピット858が25cm、ピット883が12cmを測る。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代前期	掘立柱建物1・2、溝329、水場448、井戸359、土坑189、ピット702・796、落込み456・875	第2面・第3面
平安時代中期	溝261、井戸847、枅状遺構828・876	第2面
平安時代後期	礎石建物1・2、タタキ433、石組溝262・292、柵1～3、築地295、列石882、集石277・856、礎石443・885・886、土坑96・106・510・631・716・732・739、土器溜211、池288・450・452・462、入江820、岬848、景石827・887、瀬落し449、遺水457・509	第1面

**掘立柱建物2**（図版13・19-1） 掘立柱建物1の南東隅と掘立柱建物2の北西隅が重複する。南北2間、東西4間の東西棟である。方位は梁行方向で座標北に対して、約2°西に振れる。柱間は梁行・桁行ともに2.4m（8尺）の等間である。柱掘形の平面形は方形を呈し、一辺0.6～0.8m、深さ0.1～0.2m、柱当たり痕跡から柱根径は0.1～0.2mに復元できる。

**溝329**（図版10・14・22・23-2） 1区西部で検出した南北方向の溝である。北は調査区外へ延び、南方で水場448に接続する。底面は南北端の標高差が約0.2mあり、南に傾斜する。東・西の肩口は杭と横板で護岸を施し、遺存状態は東肩口で良好、西肩口で不良である。溝の中央東寄りの底面には東肩口と平行する杭列が遺存することから、護岸が作りかえられた可能性がある。底面中央部は凹む。護岸の杭の樹種はヒノキである。検出長約11.5m、掘形の幅1.2～1.9m、護岸の内法幅約1.2m、深さ0.2～0.4mを測る。埋土は概ね上・下層にわけられ、上層は粗砂層、下層はシルトが混じる細砂層が堆積する。遺物はI期新段階からII期古段階の土器類が出土した。

**水場448**（図版15・23） 1区西部の南壁際で検出した溝329に接続する遺構である。溝329の南東部から溝状の掘り込みが東へ約3m延び、南に曲がって調査区外へ続く。幅約1.1～1.3m、深さ0.25mある。北肩口の土留の杭と板の遺存状態は良好である。掘り込みの底面には径10～20cmの礫が敷き詰められ、溝329との合流点まで敷かれる。溝329の東肩口の南延長付近に堰板が据えられる。東端から堰板までの底面の標高差は0.12mあり、西に傾斜する。護岸の形状から溝329と同一の造作により敷設されたと考えられる。埋土は概ね細砂とシルトが互層をなす。堰板によって水を溜める構造の水場と考えられる。遺物はI期新段階からII期古段階の土器類が出土したほか、土製品・木製品・銭貨などがある。

なお、北肩口の陸部には南北1.0m・東西0.5mの範囲に径10cm程度の礫が敷かれる。足場や通路の一部など、水場に関連する施設の可能性もある。

**井戸359**（図13・14・62、図版20・21） 1区東端で検出した。掘形の平面形は方形を呈し、一辺約2.4m、深さ約2.0mを測る。井戸枠は方形隅柱横棧横板組で、底面には曲物が据えられる。井戸枠の規模は内法で南北約1.3m、東西約1.2m、隅柱の柱間は南北1.2m、東西1.1mを測る。曲物は直径約70cm、高さ50cmを測る。井戸枠材はすべてヒノキである。

隅柱はすべて角材で上・下2箇所にはホゾ穴があり、上部にのみ横棧を取り付ける。外側に横板を4段積み上げる。横板の組み合わせ方は、南北辺の横板の両端やや内側に幅5cm程度の直線的な溝を切り、東西辺の横板の木口をはめ込む構造となっている。井戸枠内の埋土は暗灰色シルト層が堆積する。

東・西・南辺の横板には、掘形に接する面の中央付近に方位と段数を示す墨書が記されたものがある。図14に墨書の位置を示し、図62に遺存状態の良好なものを掲載した。図14-1～4・6～8は平面形が長方形を呈し、図14-5は長方形材の一辺の両端を切り欠いたものである。それぞれの配置は、東辺の上から2段目が「西□」（図14-1）、3段目が「東二」（図14-2）、4段目が「東一」（図14-3）、南辺の上から2段目が「南三」（図14-4、図62-木28）、4段目が「南一」（図14-5）、西辺の上から2段目が「西<sup>三</sup>□」（図14-6）、3段目が「西<sup>二</sup>□」（図14-7）、

4段目が「東三」（図14-8、図62-木27）である。「東一」の「東」、「西<sup>ニカ</sup>」の「西」は墨痕が不明瞭であるが、文字の部分の色調が周囲とは異なり、識別できる。「東一」・「西<sup>ニカ</sup>」・「東三」は、文字が倒立した状態で据えられる。墨書の方位・段数と実際の配置が異なるものがあり、井戸枠は転用されものと考えられる。遺物はI期中段階から新段階の土器類が出土したほか、瓦類・木製品・動物骨などがある。

土坑189（図15）井戸359の上面で検出した。南北の肩口は、後世の遺構などの影響で削平を受ける。平面形は南北に長い楕円状を呈し、幅1.1m、深さ0.15mを測る。底面よりやや高い位置

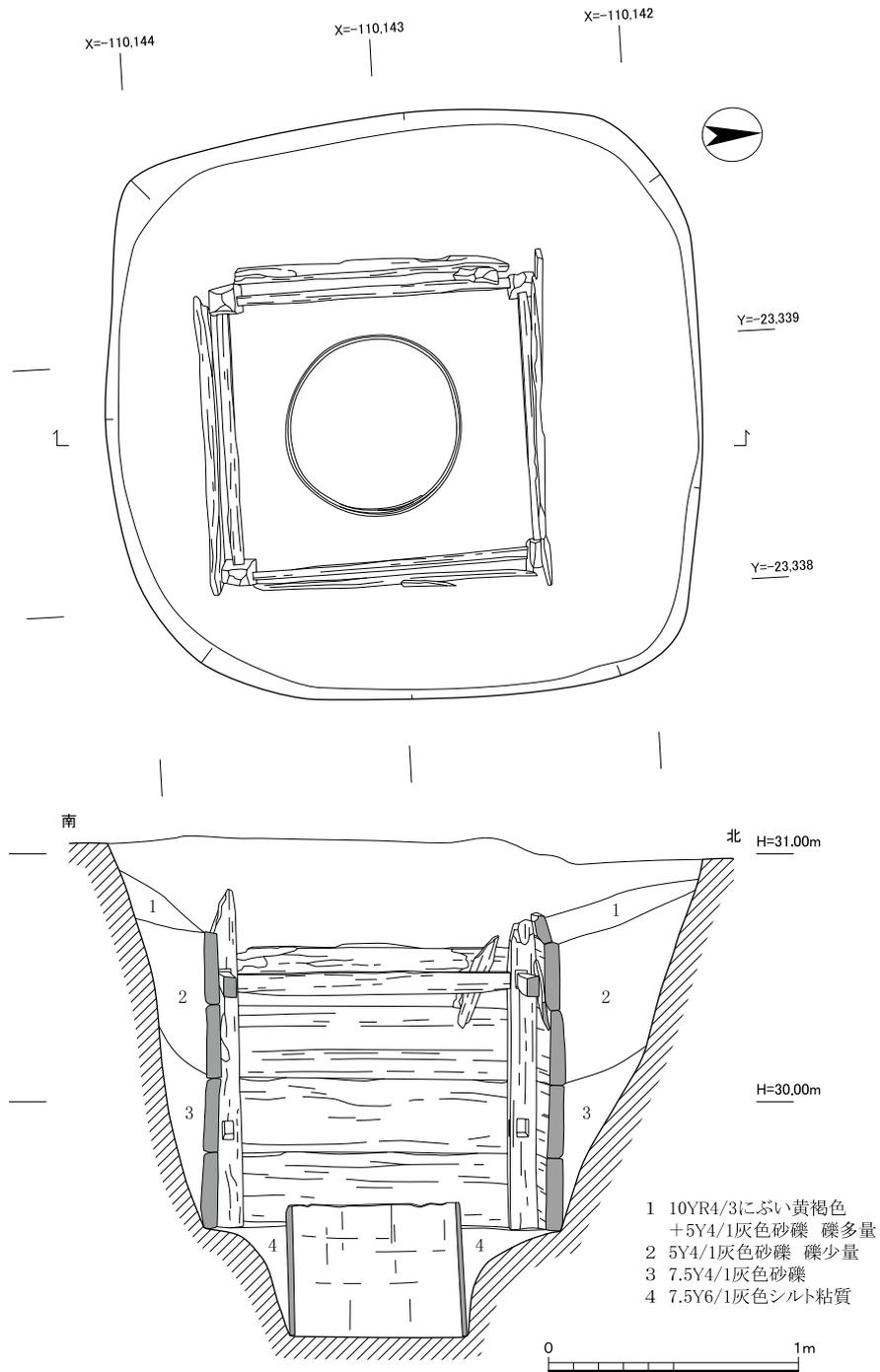


図13 井戸359実測図（1：30）

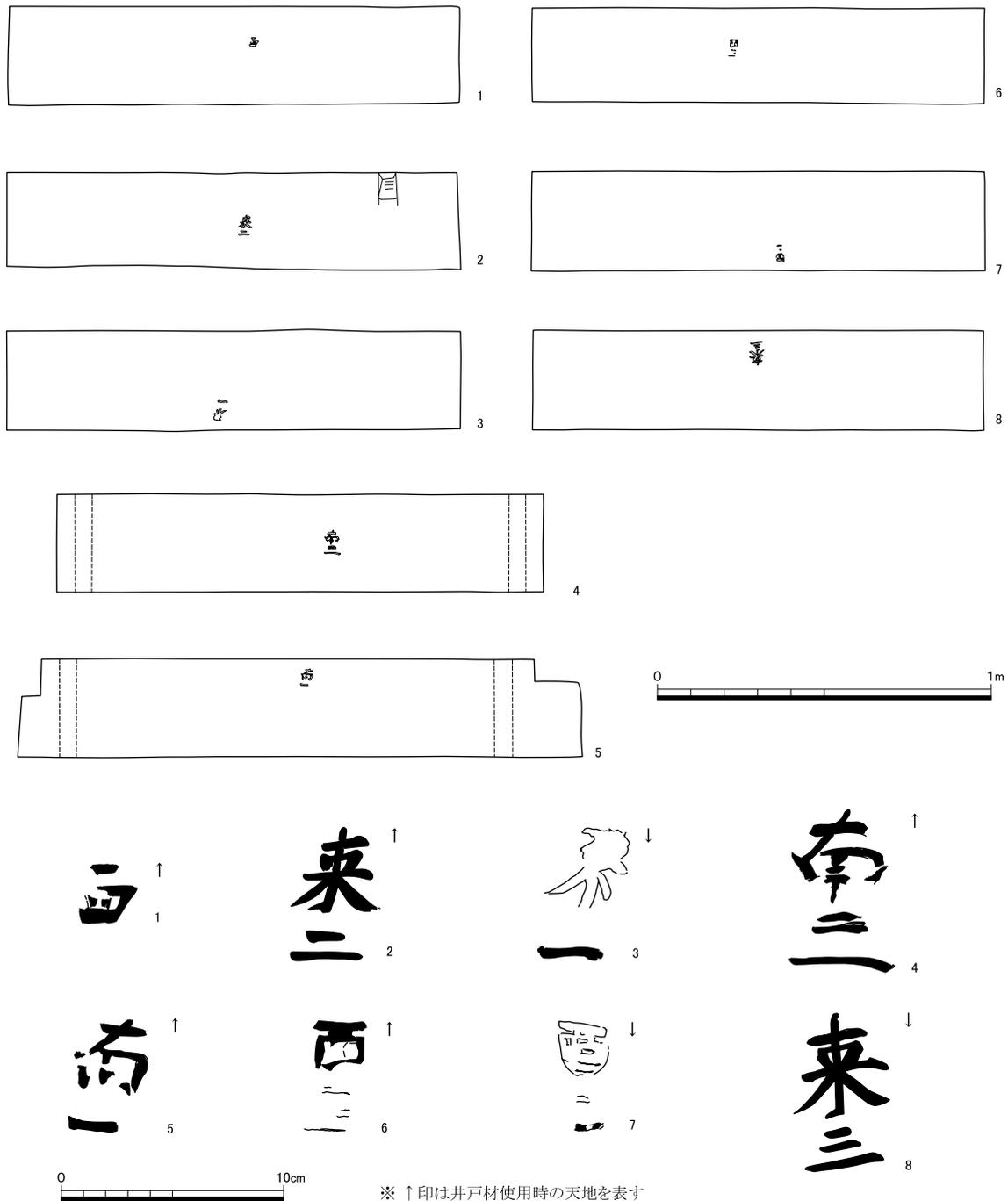


図14 井戸359井戸枠墨書位置図（1：20）、墨書実測図（1：3）

で、多量の土器が出土した。土坑189は多量の土器が投棄されており、井戸359を埋めた後に浅い窪みが残り、投棄場となったのであろう。

ピット796 2区南東部で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺0.75m、短辺0.65m、深さ0.2mを測る。出土遺物は長岡京期とみられる軒平瓦などがある。

ピット702 2区南東部で検出した。平面形は長方形を呈し、長辺0.75m、短辺0.60m、深さ0.2mを測る。平安時代前期の軒平瓦などが出土した。

落込み456（図版10・18-2） 1区西部で検出した南西に向かって落ち込む自然地形で、北東

に肩口がある。落込みに対して平坦地を造成するため、東から西へ向かって埋立てを行う。規模は西壁で南北約11m、南壁で東西約19m、深さ0.5～0.6mを測る。落込みの埋立土は、砂層と粘土層が互層をなす北東から南西方向の斜め堆積で、上面は固く締まる。

調査中に平面形を確認できなかったが、中央セクションの断面観察では、調査区西端の埋土(29・30層)は偽礫を含まない純粋なシルト層がほぼ水平堆積している。調査区西端から東約3mの部分は、すべて埋められたのではなく、東が肩口となる遊水機能を持つ凹地として残された可能性がある。この埋土は上・下にわけられ、粘質の黒褐色シルト層で、下層には有機物が多く含まれる。

落込みの底面では、北西から南東方向の2条の杭列を検出した。杭の下端は底面より若干下で止まることから、埋立て前に打たれた杭ではなく、埋立て中か、埋立て後であることがわかる。板などの構築材は未検出であるが、埋立て中に土留として利用したことが想定される。杭の樹種はアカガシ亜属9点、ウルシ属3点、サクラ属とヒサカキ2点ずつ、モミ属とアキニレ1点ずつ、そのほか属種不明の広葉樹環孔材が3点、広葉樹散孔材が2点ある。溝329や後述する中期の溝261の護岸の杭・板が、スギとヒノキに限定されるのとは対照的である。遺物はI期中段階から新段階の土器類を主とし、II期古段階のものも少量が出土したほか、木製品・石製品・墨書土器・木簡などがある。

**落込み875**(図版8) 2区南西隅で検出した。北西から南西に落ち込む遺構である。深さは0.4～0.5mを測る。出土遺物は墨書土器などがある。

### 3. 平安時代中期の遺構(図版2)

溝・井戸・柵状遺構などを検出した。前期にくらべ遺構数は少なく、調査区東半に集中する。

**溝261**(図16、図版25-1) 1区東西中央部で検出した南北方向の溝である。北は調査区外へ延び、南は後述する平安時代後期の池により削平を受ける。検出長約10.6mを測り、底面は南北端で高低差が0.02mあり、南に緩やかに傾斜する。北壁の断面観察では短期間に作りかえられた2時期の溝が重複することがわかった。古段階は幅0.8m、深さ0.35mを測る。南端付近の西肩口に2

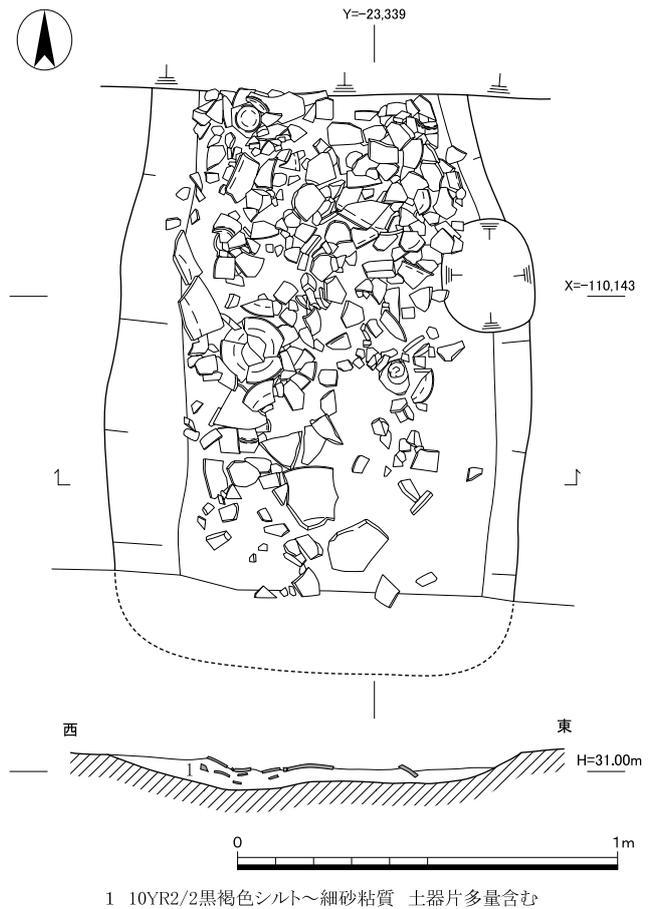


図15 土坑189実測図(1:20)

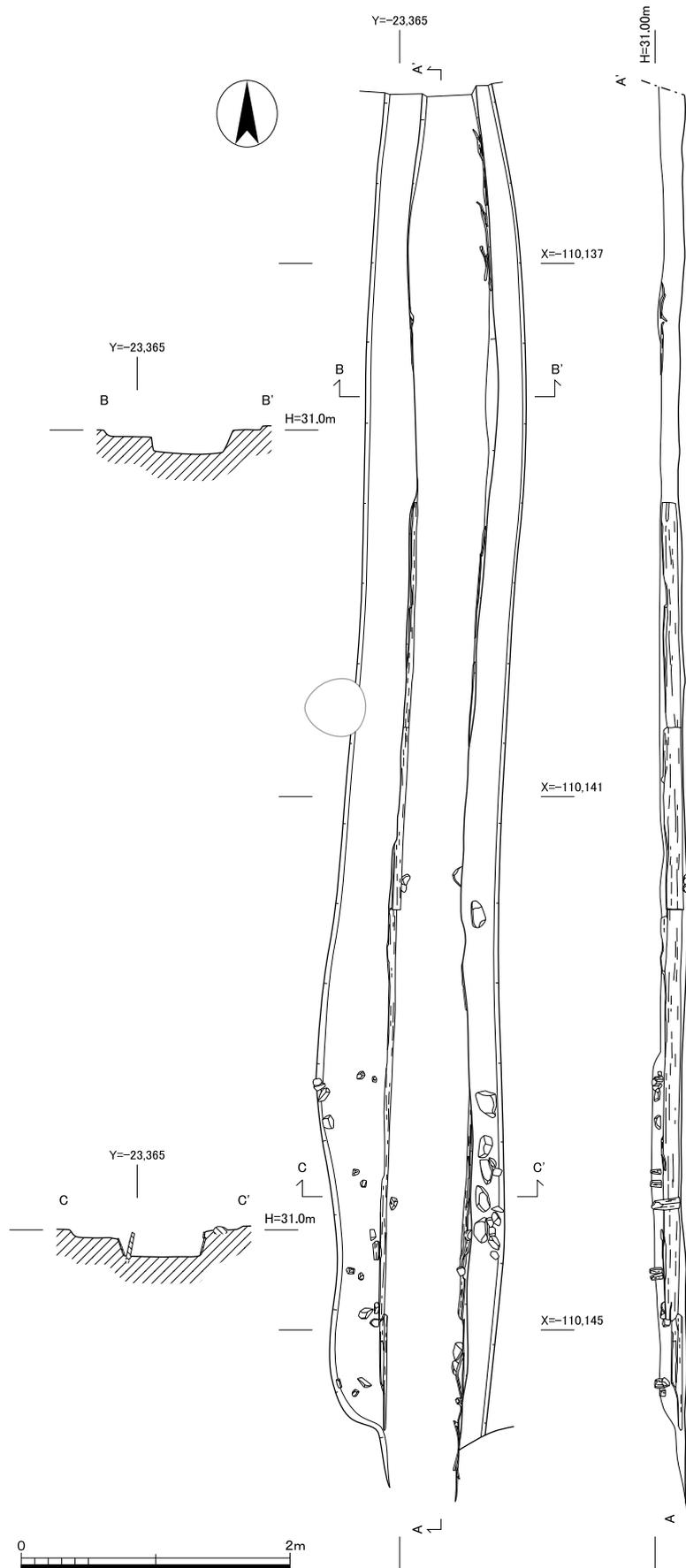


図16 溝261実測図 (1 : 50)

条の杭列が遺存しており、護岸施設があったと考えられる。杭の樹種は2条のうち西列がすべてヒノキ、東列は1本がヒノキ、その他はスギである。新段階の幅は0.4～0.5mを測る。東・西の肩口には杭と横板で護岸が施される。西肩口では遺存状態が良好で、東肩口は断続的に材が遺存する。護岸の横板の樹種はスギである。埋土は上層に細砂から粗砂層、中層に泥砂層、下層に細砂層が堆積する。条坊復元データによる北三行と北四行の境界に位置する。遺物はⅡ期新段階の土器類が出土したほか、瓦類・硯・銭貨などがある。

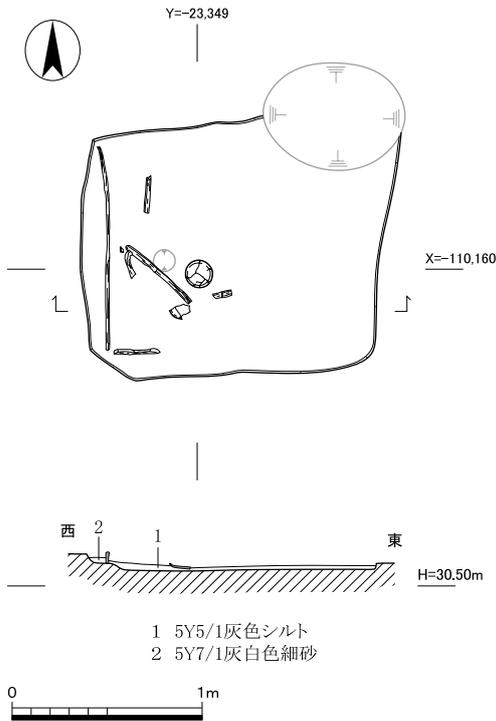
**井戸847 (図17、図版24)**

2区南端で検出した。掘形の平面形は南北にやや長い楕円形を呈し、長径は1.5mを測る。井戸枠は円形縦板組であり、底面には曲物が据えられる。井戸枠は内側から曲物と縦板を交互3重に巡らせて構築する。内法で径0.6m、深さは0.7mを測る。縦板の長さ30～40cm、幅15～20cmを測る。曲物は径35cm、高さ10cmを測る。遺物はⅡ期中段階から新段階の土器類が出土したほか、歌を墨書した木簡などがある。

**柵状遺構828** (図18、図版25-2・3)  
 2区南東部で検出した。掘形の平面形は方形を呈し、南北1.3m、東西1.5m、深さ0.1mを測る。西肩口に沿って横板が遺存する。また、南肩口は西端に横板が遺存する。構造は井戸に類似するが、底面の標高は井戸847より約0.4m高いことから湧水があったとは考えにくく、水溜めとして機能した可能性がある。遺物はⅡ期中段階の土器類が出土した。

**柵状遺構876** (図18) 柵状遺構828の西側で検出した。掘形の平面形は歪な方形を呈する。南肩口と連続する舌状の窪みがある。底面は東から西へ向かって傾斜する。南北約2.2m、東西約1.9m、深さ0.2~0.3mを測る。西肩口の中央部は、杭と横板で土留が施される。底面の標高は井戸847より約0.3m高いことから、湧水があったとは考えにくく、柵状遺構828と同様に水溜めとして機能した可能

柵状遺構828



柵状遺構876

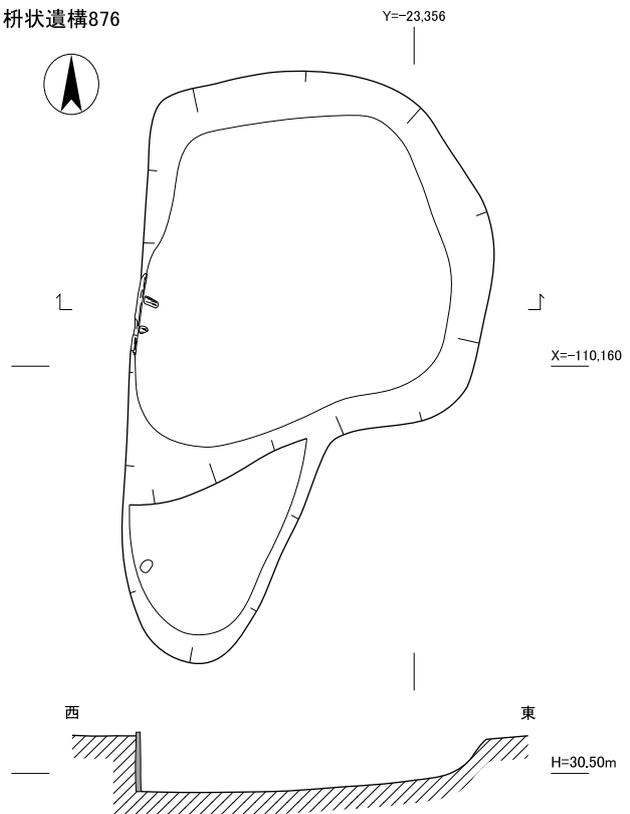


図18 柵状遺構828・876実測図 (1:40)

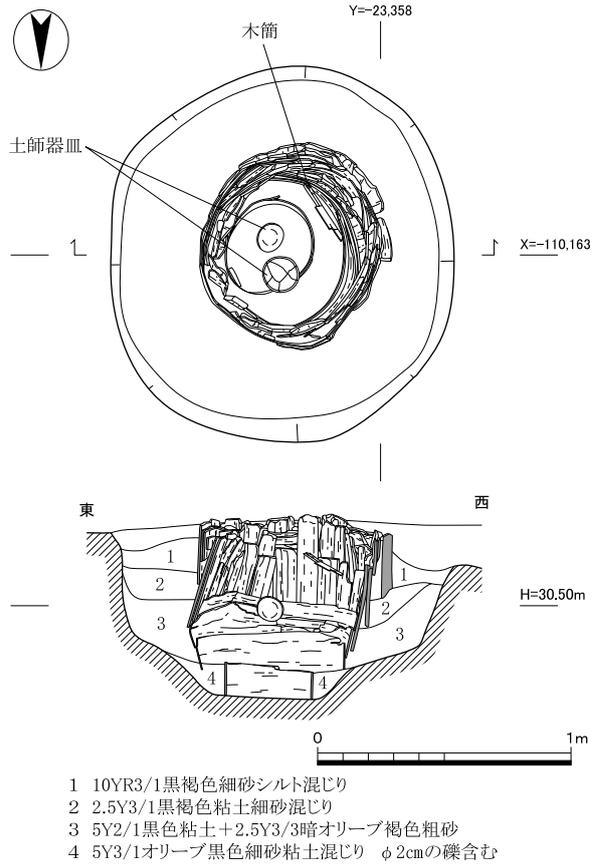


図17 井戸847実測図 (1:30)

性がある。遺物はⅡ期新段階の土器類が出土した。

#### 4. 平安時代後期の遺構（図版3・17）

礎石建物・柵・土坑・集石・石列・築地・石組溝・庭園遺構（池・遣水・瀬落し・景石）などを検出した。庭園遺構は、池を中心として遣水・岬・景石などによって構成され、1区中央から2区にまたがって検出した。池は一部を埋めることによって改変を繰り返しており、4時期の変遷が明らかとなった。時期はすべて12世紀である。以下では、4時期の庭園遺構を古い順から述べ、その後、それ以外の遺構について述べる。

##### （1）庭園遺構1期（図版4・8・9）

池462と池の北西部で遣水の痕跡と思われる土坑510、東岸で礎石据付の柱穴857・881（礎石建物2）を検出した。また、池462の北岸東半の北側には、東西長3.4m、高低差0.1～0.2mの築山状の高まりがある。この高まりは、1・2期を通じて存在しており、建物などが存在した可能性もある。

池462（巻頭図版2、図版26・27） 南西部は調査区外であるが、南北13m、東西24mを測り、東西に長い長方形を呈すると推定される。池の深さは北岸では0.4～0.5m、南岸では0.3mとなる。北岸の傾斜角度は約15°、南岸の傾斜角度は約30°で北岸に比べて急角度である。北岸と東岸の北半部には礫敷によって洲浜が作られる。北岸洲浜は庭園遺構2期の池452と共有している。池462の本来の洲浜は、池452への作り替えに際して埋められる部分、池462北東コーナー部から西へ9mの範囲である。礫の大きさは3～5cmである。石材は砂岩が多い。洲浜は、地山の上にオリーブ褐色を主とする砂を積んで岸の傾斜を決め、その上面に礫を敷き、叩き締めて構築している。礫の密度はそれほど高くはないが、池底からは滑落したと思われる礫がほとんど出土していないことから、当初の状態に近いと考えられる。また、池の北東コーナー部の北岸と東岸では長さ約30cmの石を複数検出しており、景石として設置されたと考えられる。

南岸中位の標高と北岸の裾部の標高がほぼ同じであることから、池の水位は標高30.7～30.8mと推定される。東岸南半部と南岸に洲浜が施されないのは、岸部の6割程が水中になるためと思われる。

池底はほぼ水平であるが、わずかに北東から南西方向に傾斜する。池底の標高は30.5～30.6mである。池底には地山の砂礫層の上に礫を敷いている。礫の大きさは3～20cmであるが、5～10cm程度の石が多い。池462は、次の池452の段階でその東部を埋められるが、その埋め土の下層の池底でも礫敷を検出しており、当初から存在したことがわかる。このような池底に保水力はないことは明らかである。池462の南側で検出した10世紀の井戸847底面の標高は30.2mであり、池底より少し下に湧水層があり、これによって池の水位が保たれたと考えられる。

土坑510 池462の北西コーナー部の池底で検出した遣水に関連すると考えられる遺構である。長さ4m、幅1m、深さ0.1mを測る。埋土は灰白色細砂で泥の堆積はなかった。この後の庭園遺構2期で遣水509を検出しており、池462の遣水も基本的には共有していたと思われる。なぜ土坑

状になるかは不明であるが、流水を一旦受けて池に流し込んだとも考えられる。

**礎石建物 2**（図19、図版27-1）池462の東岸の北半部で検出した礎石建物。東岸から池に張り出す建物と考えられる。柱穴は池の東岸に沿って南北に2基並ぶ。柱穴の平面形は楕円形を呈し、南北2m、東西約1.1m、深さ0.4mを測る。柱穴857・881の掘形中央部には石の平坦面を水平にして据えている。石の大きさは、長さ40cm、幅30cm、厚さ10cmを測る。石材は砂岩である。石の大きさや設置状況から礎石とみられる。埋土の上面は、洲浜構築土と同じオリーブ褐色を主とする砂で固く締まっており、池462の岸として機能していたとことがわかる。池岸の検出面では柱跡は確認できなかったが、これらの礎石は地下式礎石であったと考えられる。

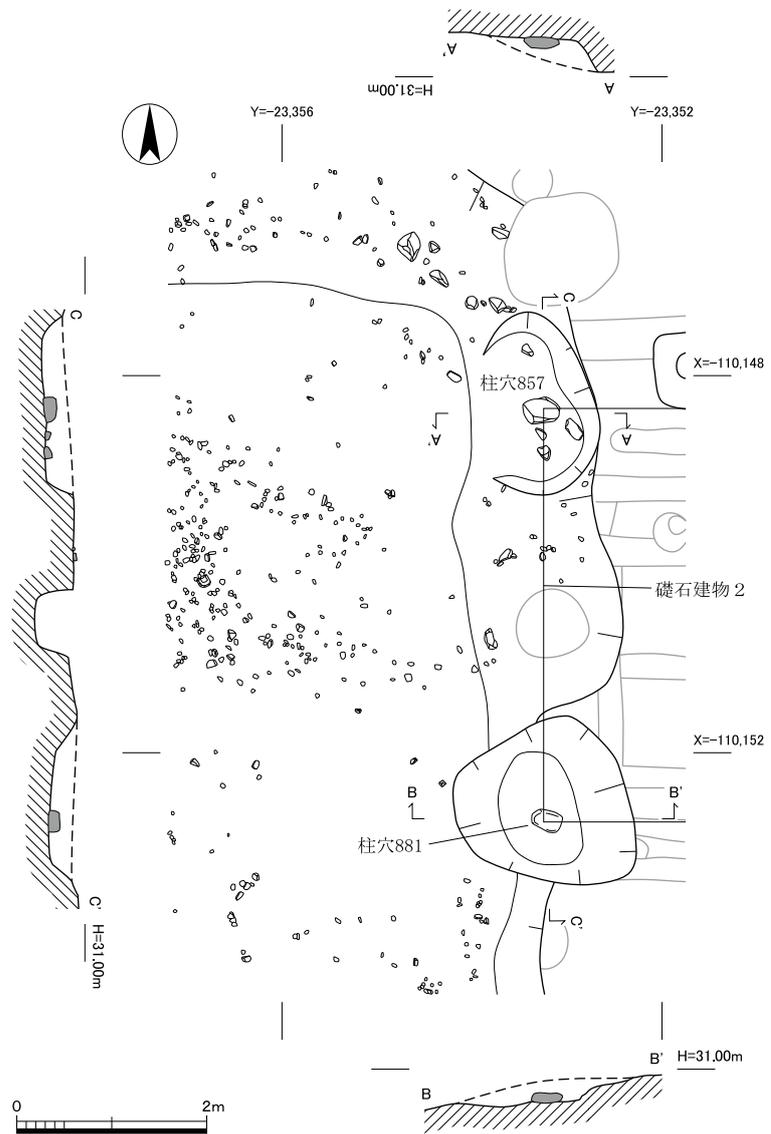


図19 礎石建物2実測図（1：50）

**(2) 庭園遺構 2期（巻頭図版3、図版5・8・9）**

庭園遺構を構成する遺構として、池452・遣水509・岬848・景石827・景石887・集石856などを検出した。池452は、池462の北東部を埋め作り替えたもので、池452の東岸から西へ張り出す岬848を作っている。

**池452**（巻頭図版1、図版28）南北最大検出長11.4m、東西13mを測る。池452は、池462の東・南岸と北岸の東部9m分を埋め、東岸に岬848を構築することによって大きく景観を変えている。東岸は、池462ではほぼ南北に直線であったが、岬848の構築によって北西から南東方向へと傾き、平面形は歪な「M」字形を呈する。

池の深さは北岸では0.4～0.5m、南岸では0.3mとなる。北岸の傾斜角度は約15°である。南岸の傾斜角度は、庭園遺構3期の入江820の構築に際して一部削られているが25～30°とみられる。北岸の洲浜は、池462から引き継がれたもので、礫の大きさは径3～5cm、石材は砂岩が多い。北

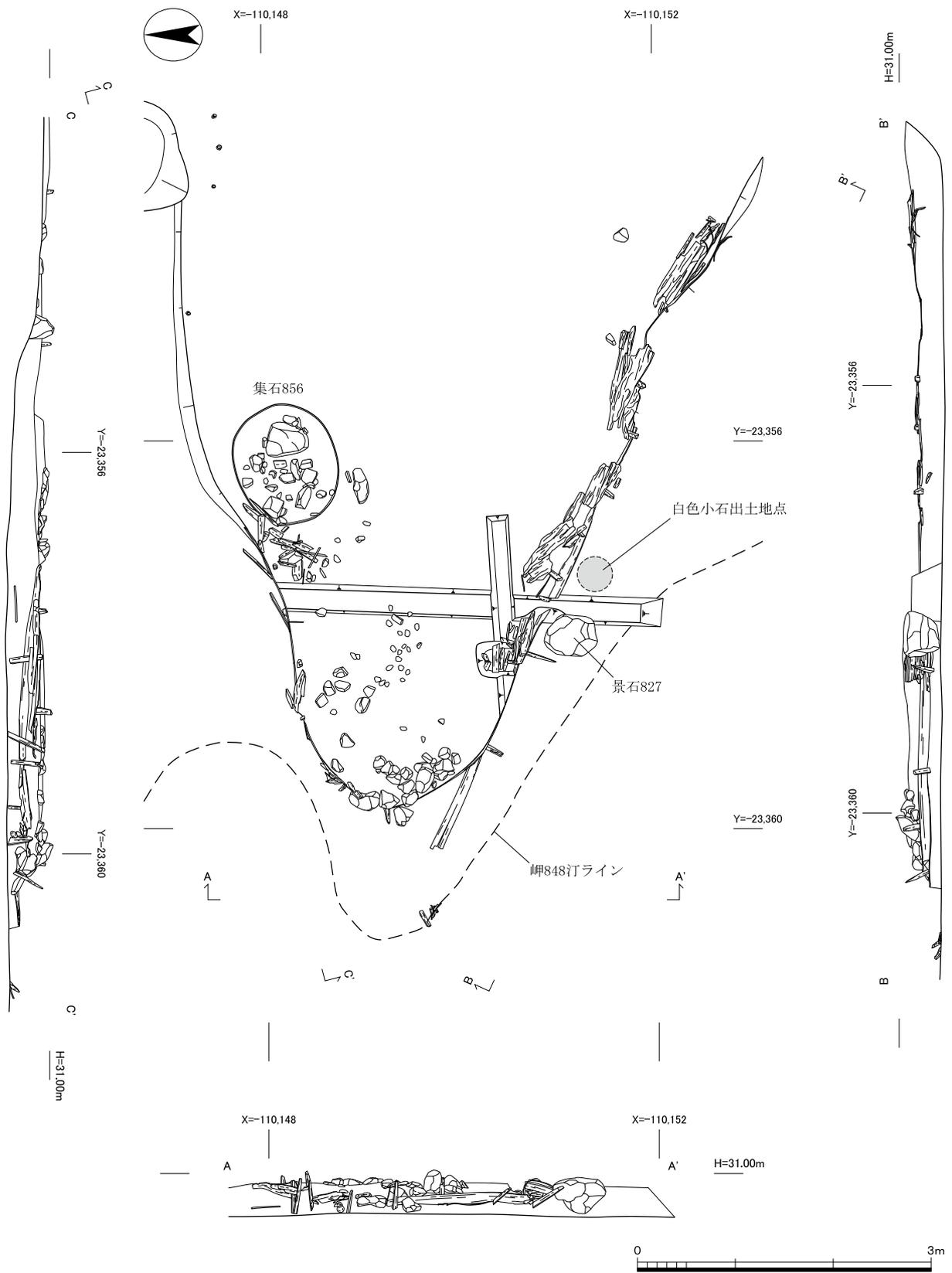


図20 岬848構築状況実測図 (1:60)

岸の東西長は、池462よりも約9m短くなっているが、池462の段階と傾斜角度や洲浜の様相に異なる点はない。池の水位は1期の池462と同じく標高30.7～30.8mである。

池底は池462を継承している。池底の礫の大きさは径3～20cmで、5～10cm程度の石が多い。礫の密度は、池462の埋められる部分と比較すると、池452池底の範囲の方が高く、礫の敷きなおしが行われたものと思われる。

岬848(図20～22、巻頭図版2、図版29-3・30) 池452東岸北半の半島状の張出し部。汀のラインは池452北岸から東岸へのコーナー部から南西方向へ約2m張り出し、その頂点から南東方向へと延び池452東岸に繋がる。岬848と池452東岸は連続しているが、景石827付近で若干汀ラインが屈曲して変化しており、この付近を岬848裾部とする。岬848は、東西方向の低い尾根状の高まりをもって作られており、先端部に比べ付け根付近が約0.3m高くなる。岸部には、長さ10～35cmの石を上面が面をなすように敷かれている。北岸が5～10cmの礫敷を主とした洲浜であるのとは対照的で、浜から磯への意匠の変化を表すものとみられる。

池452の東岸と岬848は、1期の池462の池底に土を盛って構築する。基本的にはその両者の構築方法に違いはないが、岬848はより入念な工夫がなされている。これは、池側に突き出す岬部は、浸食されやすいためと考えられる。以下に岬の構築方法について述べる。

1. 土留の構築 岬848の計画ラインに沿って約0.5m間隔で杭を打つ。この杭列付近には池462の堆積土はなく、構築に先立って部分的に浚渫したものとみられる。杭の間に薄板を通して土留を設ける。薄板は杭の前後を交互に縫うようにして通しており、釘などを使用することなく、その張力をもって留められている。薄板は2段から3段重ねる。杭は太さ5～8cm、長さ60～90cmの角杭。薄板は厚さ0.5cm、長さ2～3mである。検出した杭・薄板のうち、それぞれ15本と8枚の樹種を検査した結果、すべて杉材であった。なお、岬848南側の杭は南側に倒れているが、池底に残る杭は垂直に刺さっている。当初、池底に垂直に打ち込まれた杭が、土を盛り上げていく過程でそ

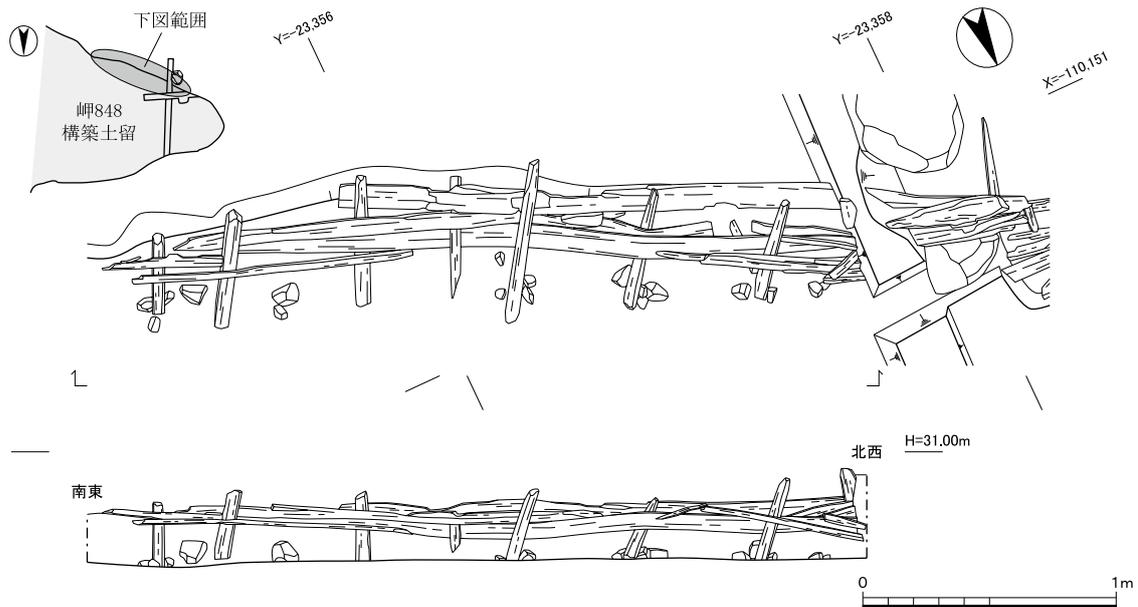


図21 岬848土留南側実測図(1:30)

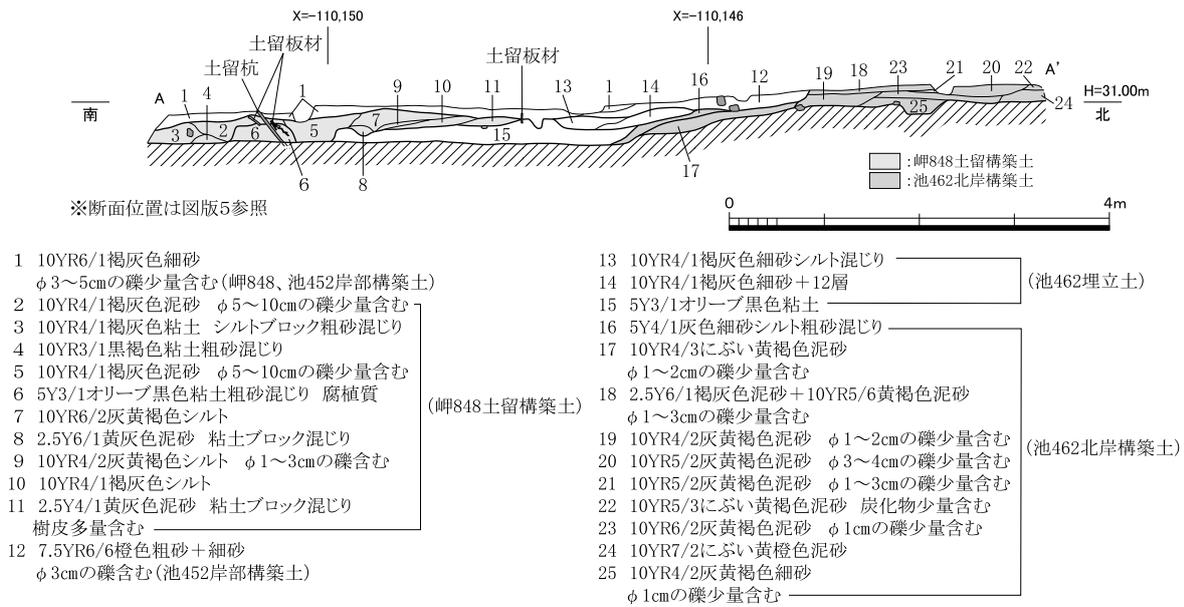


図22 岬848、池462断面図 (1:80)

の土圧によって倒れたものとみられる。

2. 構築土の積み上げ 土留構築後、それを挟むように両側に粗砂混じり粘土を置き(図22-6層)、さらに、土留の内側から構築土を積んでいく。なお、岬848の中心部は池462の埋立土の上に積まれている(図22-15層)。構築土はシルトや泥砂などを積み上げていくが、土留近くには樹皮・薄板や径約20cmの石などを入れている。主に岬の南側には杉の樹皮、薄板は主に岬の北側、石は岬の先端部で主に検出した。また長さ15cm、厚さ0.5cmほどの薄い板材が、岬848先端部から東側約1.8mの範囲で面を成して敷かれていた。これらは構築土が崩れるのを防ぐことを目的として入れたものとみられ、敷葉工法の一つと考えられる<sup>1)</sup>。なお、平安時代後期、池の埋立てに際して杭と薄板で土留を作り、その内部に積土をする例として、鳥羽離宮東殿近衛天皇陵の東側外堤がある<sup>2)</sup>。

3. 汀の構築と仕上げ 土留天場近くまで内側に構築土を積み上げると、土留外側には主として粘土を積み(図22-2~4層)、汀のラインを整える。

この後、磯の意匠を表す石を敷き、景石を据え、褐灰色細砂で上面を覆い(図22-1層)、岬848の構築は完成する。なお、景石827東側の土留外側の構築土中からは、白色の小石が1000点以上まとまって出土した(図版50)。小石は丸みを帯びた川石で、色調は半透明と不透明のものがあ、それぞれ石英質と珪岩であると思われる。径約1.0~1.5cm、総重量1713.1gを測る。構築土を固めるなどの機能的な意味は考え難く、岬構築中に行われた祭祀などに伴うものの可能性がある。

遺水509 池452の北西隅部で検出した。東西長約9m、最大幅3.4m、深さ0.05~0.3mである。埋土は白色砂と炭混じりの泥が互層になって堆積していた。底面は庭園遺構3期の遺水457の流水の影響を受けている部分もあり、その区別が判然としない部分もある。

景石827(図23、図版29-1) 岬848南岸で検出した。平面形は楕円形を呈し、径約50cm、厚さ40cmである。上面をほぼ水平に据える。色調は青灰色で、筋状に白色の脈が入る。石材はチャー

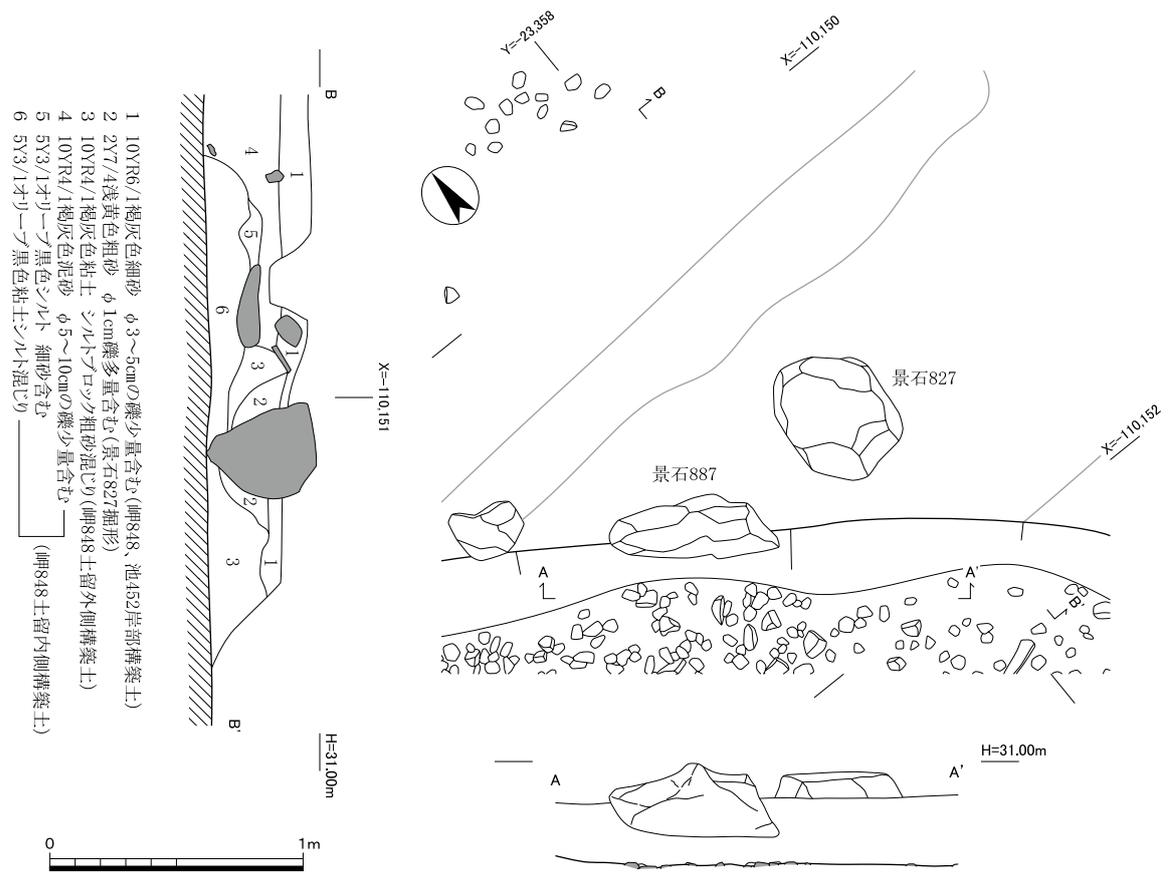


図23 景石827・887実測図 (1:30)

トである。岬848土留外側の構築土に掘形を掘って設置される。掘形は池底まで達しないが、石は自重で沈んで下部は池底に達する。

景石887 (図23、図版29-1) 岬848南岸で検出した。平面形は弾頭形を呈し、長さ約70cm、幅25cm、厚さ30cmである。上面をほぼ水平に据える。色調は青灰色で、筋状に白色の脈が入る。石材はチャートである。掘形の存在は明らかでなく、岬848の南岸と軸方向を揃えて設置される。

集石856 (図24、図版29-2) 池452北岸東端から東へ約1.5mの地点で検出した。平面形が楕円形を呈する掘形に多数の石が入れられている。掘形は南北1m、東西1.2m、深さ0.2mを測る。石は径5~15cmが多いが、40cmを超えるものもある。埋土は比較的締まった黒褐色細砂である。検出位置や形状・構造から景石の根固めの可能性が考えられるが、その場合規模の大きなものとなる。

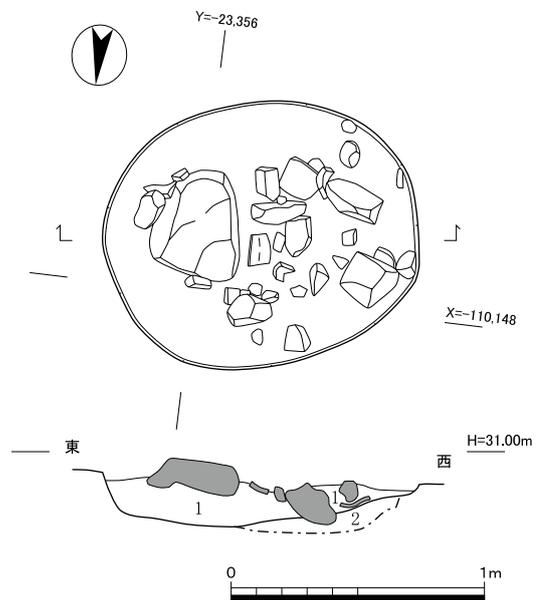


図24 集石856実測図 (1:30)



图25 池450、遣水457平面图 (1 : 60)

### (3) 庭園遺構3期 (図版6・8・9・31-1)

池450・入江820・遣水457・築山状高まりなどを検出した。池450は、池452の南・北・東岸を埋めて規模を小さく作り替えたものである。池全体の形状は1～4期のなかで最も変化に富む。この段階の池を示す遺構名として、池450と入江820の2つの名称を用いるが、これらは1つの池の西部と東部である。調査時に1区と2区でそれぞれを検出しそれぞれ遺構名を付したこと、その形状や構造が異なることなどから、遺構の記述としては別個に述べる。

池450 (図25、図版32-1・2) 南北4.0m以上、東西8.6m、深さ0.25～0.35mを測る。東西長は、入江820東端まで含むと約19mとなる。平面形は、池450と入江820とでは扁平なL字形を呈し、遣水457を合わせると、北西から南東方向へ蛇行して流れる川のような形状となる。

北岸の傾斜角度は約15° 北岸と西岸では洲浜を検出した。礫の大きさは径3～5cmである。石材のほとんどは、地下水などの影響で鉄分などの付着により黒色に変色した砂岩である。礫は、遣水457との接点部分で特に礫の密度が高い。また、この付近には長さ30～50cmの石を7個ほど並べており、石組を構築していた可能性がある。遣水457からの流水の影響による北岸の崩壊を防ぐためのものとみられる。池底は池462から継承している。また、池の西岸の陸部には礫を盛り上げて作られた高さ0.1m程の築山状の高まりがある。礫の石材は砂岩であり、洲浜に用いられている礫と同様に黒色化している。

入江820 (図26、図版31-2・3) 東西9.5m、南北2～3.8m、深さ0.3mである。池底は東から西へ緩やかに傾斜する。北岸には径5～15cmの礫を敷いて洲浜を構築する。底面は池452の堆積土の上に土を積み構築している。東半部では土師器皿が多量に出土した。池の水位は、池450と



図26 入江820土器出土状況実測図 (1:60)

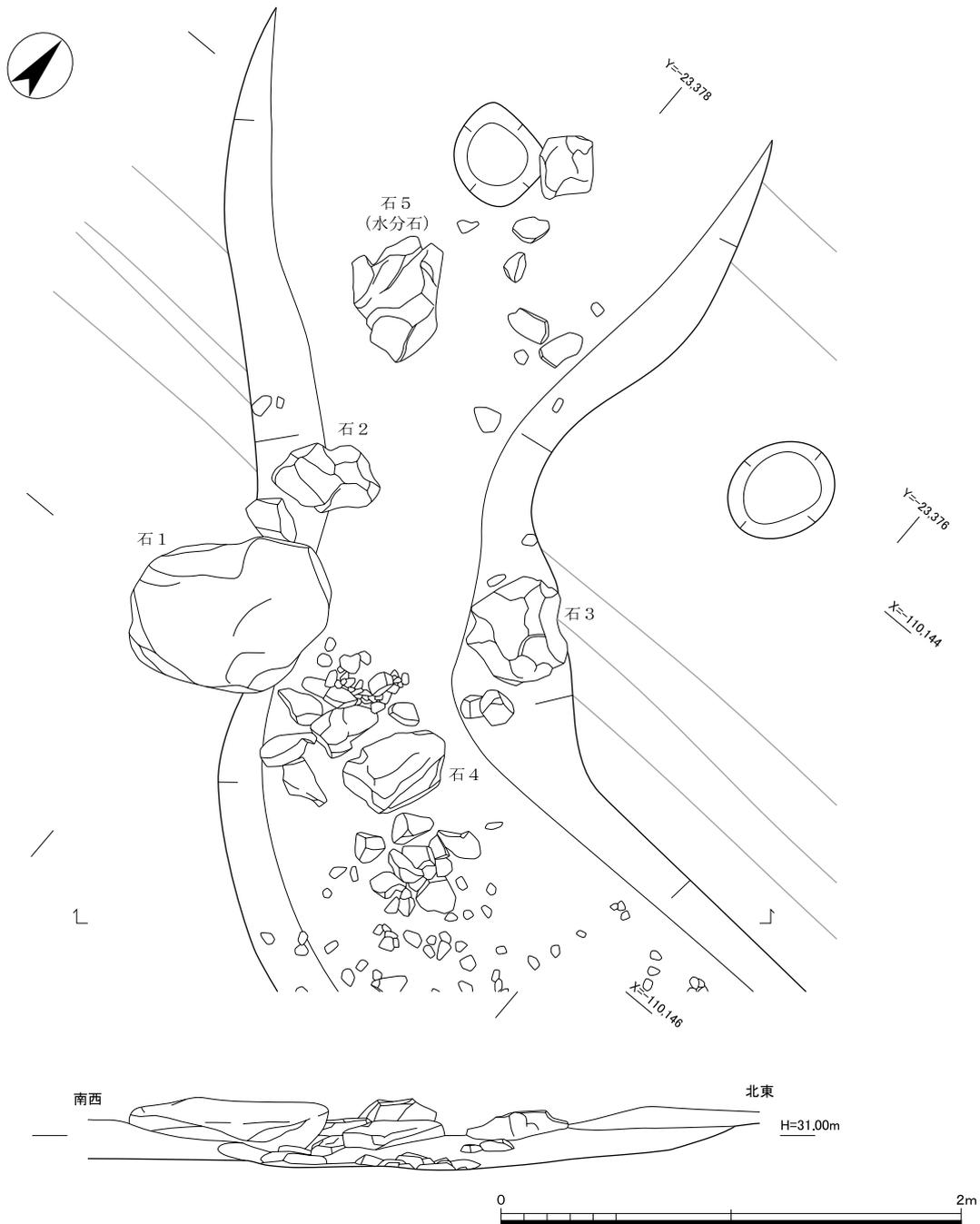


図27 瀬落し449実測図（1：30）

入江820の汀裾部の標高から30.8mとみられる。

遣水457(図25、図版32-2) 池450北西部で検出した。東西長8.5m、幅1.6～2.4m、深さ約0.1mである。底面は北西から南東に緩やかに傾斜する。埋土は、瀬落し449の上流側では白色粗砂、下流側では白色砂と炭混じりの泥が互層になって堆積していた。遣水457は北西から南東方向へ延び、小さく蛇行しながら池450に繋がる。北西側の延長部は、後世の削平のため失われており不明である。

瀬落し449(図27、図版32-3) 遣水457の北西部の屈曲点で検出した。4つの石(石1～4)を菱形に配置し、石1より下流側では底面にチャート・砂岩の石を敷く。遣水の底面は石1を境に

南東側が約0.2m低くなる。上流には流れの中位に「水分石（石5）」が置かれている。石1は白色の花崗岩、石2は白色のチャート、石3は赤色のチャート、石4は青色のチャート、水分石（石5）は青色のチャートである。

#### （4）庭園遺構4期（図版7～9・33-1）

庭園遺構を構成する遺構として、池288を検出した。池288は、池450の北・東岸と入江820を埋めて作り替えたものである。池の規模は最も小さくなる。池の導水施設は、1期から一貫して池北西隅部の遣水であったものが、東側に移動して直線的な石組溝262になる。庭園遺構1～3期の構成要素を引き継ぐものが少ない。

池288（巻頭図版3、図版33-2）東西6m、南北3.4m、深さ0.1mを測る。北岸と西岸には洲浜を構築する。洲浜を構築する礫は径5～10cmで、砂岩を主としチャートも含まれる。池底は、池450の底面の上に、礫混じりのにぶい黄褐色細砂を積んで構築しており、これまでの池底を共有しない。池の埋土直上には近世の耕作土が堆積しており、一定の削平を受けていると思われるが、石組溝262との関係からみるとそれほど大きな影響は受けていないとみられ、当初から浅い池であったと思われる。検出面では土師器皿などがまとまって出土した。

#### （5）その他の遺構

礎石建物1（図28、図版16・34-1・35-4）1区中央の北壁際、石組溝262・292の交点の北東側で検出した東西棟の礎石建物である。南側に縁が付く。建物部分は東西2間分を検出したのみで、身舎か庇のいずれかは明らかではない。柱間は2.35mである。礎石は2基検出し、西端は抜き取り痕を検出した。礎石は長辺約45cm、厚さ約15cmで、チャートの自然石である。縁部分は東西方向に2間、礎石は2石検出したが、中央の礎石は抜き取られており存在しなかった。建物部分と縁の間は1.0mを測る。縁の礎石は、平面形は歪な楕円形を呈し、径約20cm、厚さ約10cmで、建物部分の礎石よりも一回り小さくなる。砂岩の自然石である。礎石の基部はよく締まった黒褐色微砂シルトで覆われているが、これは礎石から石組溝292まで広がっており、溝縁の部分よりも建物部分の方が厚く積まれている。礎石建物は低い亀腹状基壇を有していた可能性がある。

タタキ433（図版16）東西5m、南北8m、厚さ0.04mである。平安時代後期の整地層とは異なる、均質な灰黄褐色細砂をタタキ締めながら構築したと思われ、上面は平滑で固く締まる。構築土は石組溝262東側石列と石組溝292南側石列の石の間にまで及ぶ。タタキ面の上面は、各辺とも石組溝262・292に向かって緩やかに傾斜するように仕上げている。これらのことからタタキ433と石組溝262・292は並存したことがわかる。

また、掘立柱や礎石など上屋に関する遺構は検出していないが、タタキ面上面に水が流れたような痕跡は確認されず、風雨に晒される状態であったとは考え難い。簡易な構造の屋根を伴う施設であったと考えられる。

石組溝262（巻頭図版3、図版16・34-3）1区東西中央部で検出した南北方向の石組溝である。北方で石組溝292と交わり、2条の溝全体で「T」字形を呈する。南側は池288に注ぎ、北側は調査区外へと続く。検出長5.4m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。溝を構成する石は、溝292交点よ

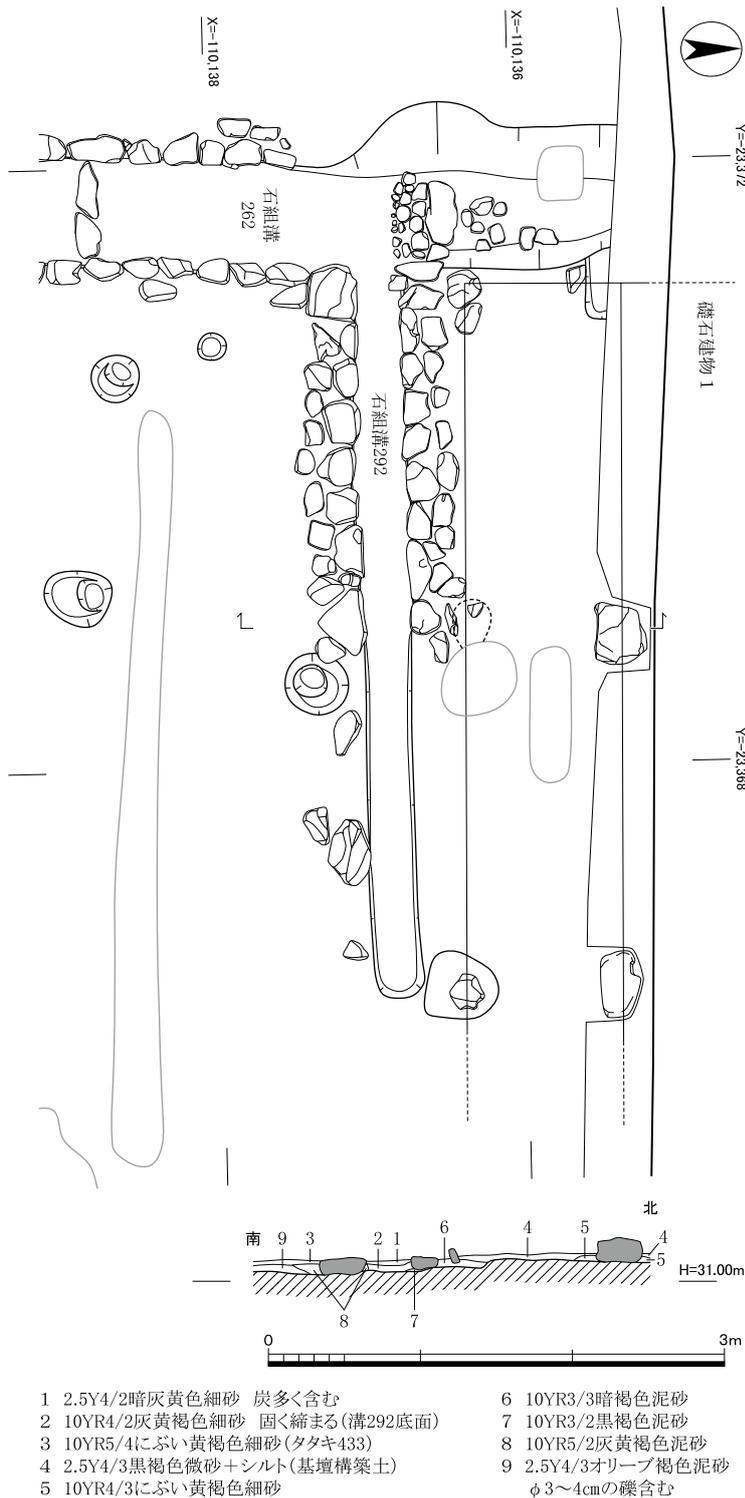


図28 礎石建物1、石組溝292実測図(1:50)

溝の埋土は灰オリーブ色の細砂で、溝の北半部では炭を、池288に近い部分では大量の土師器皿を含んでいる。小片の為に図示していないが、V期古段階の土師器である。

溝の底には南・北・中央の3箇所縦長の石を東西方向に堰状に置く。堰石は長さ30~40cm、幅15~20cm、厚さ10~15cmを測る。溝底は全体としては緩やかに南方へ低くなるが、逆に3箇所の堰石は池288に近い南側が最も高くなっている。北側から流れてくる水は、中央の堰石付近に溜

り北側では抜かれており存在しない。

個々の石は、長さ20~40cm、幅10~15cm、厚さ10~15cmである。石材は、ほとんどが砂岩で、花崗岩とチャートが少量含まれ、緑泥片岩が1石ある。緑泥片岩は、石組溝262東列と石組溝292南列のコーナー部の角石で、平面形が方形を呈し、一辺約40cmと他の石よりもやや大きい。

石の配置は、南半部の東列は二重に置かれる部分があるが、ほとんどは一重である。溝底は、灰黄細砂をタタキ締め底面とするが、石組溝292との交点より北側では石を敷いている。礎石建物1の西面に接する部分であることから、建物からの景観、あるいは屋根からの雨水に対して配慮したものと思われる。なお、石列の掘形には部分的に火山灰が含まれている。分析の結果、約100万年前のピンク火山灰であることが判明した。京都盆地に自然堆積する可能性はなく、壁の仕上げ材などとして使用するために持ち込まれたものと思われる<sup>3)</sup>。

まりながらオーバーフローさせつつ、池288に流し込んだと考えられる。また、北側の堰石の南北両側には、溝底に拳大の石を敷いている。この部分は、溝底が堰石を境にして南側の方が低くなり、小さな段差を有し瀬落し状となる。

なお、一辺0.5～2cmの雲母片が掘形から出土した（図版50）。一定量がまとまって出土しており、重量15g。何らかの使用目的のために持ち込まれたと思われるが、用途は不明である。

石組溝292（図28、巻頭図版3、図版16・34-1・2）1区東西中央部で検出した東西方向の石組溝である。西方で石組溝262と交わる。東側は後世の削平により失われている。検出長4.9m、幅0.3m、深さ0.05mを測る。石は溝の東西両側で内側と外側の2重に置かれる。溝を構成する石は、内側の石が長さ20～45cm、幅10～30cm、厚さ5～10cmを、外側の石は長さ10～20cm、幅10～15cm、厚さ5～10cmを測る。石材は、ほとんどが砂岩でチャート・花崗岩・緑泥片岩がわずかに含まれる。緑泥片岩は、石組溝262と292南列のコーナー部の角石である。灰黄細砂をタタキ締め、溝の底面とする。溝の埋土は、灰オリーブ色細砂で炭を含む。溝を構成す

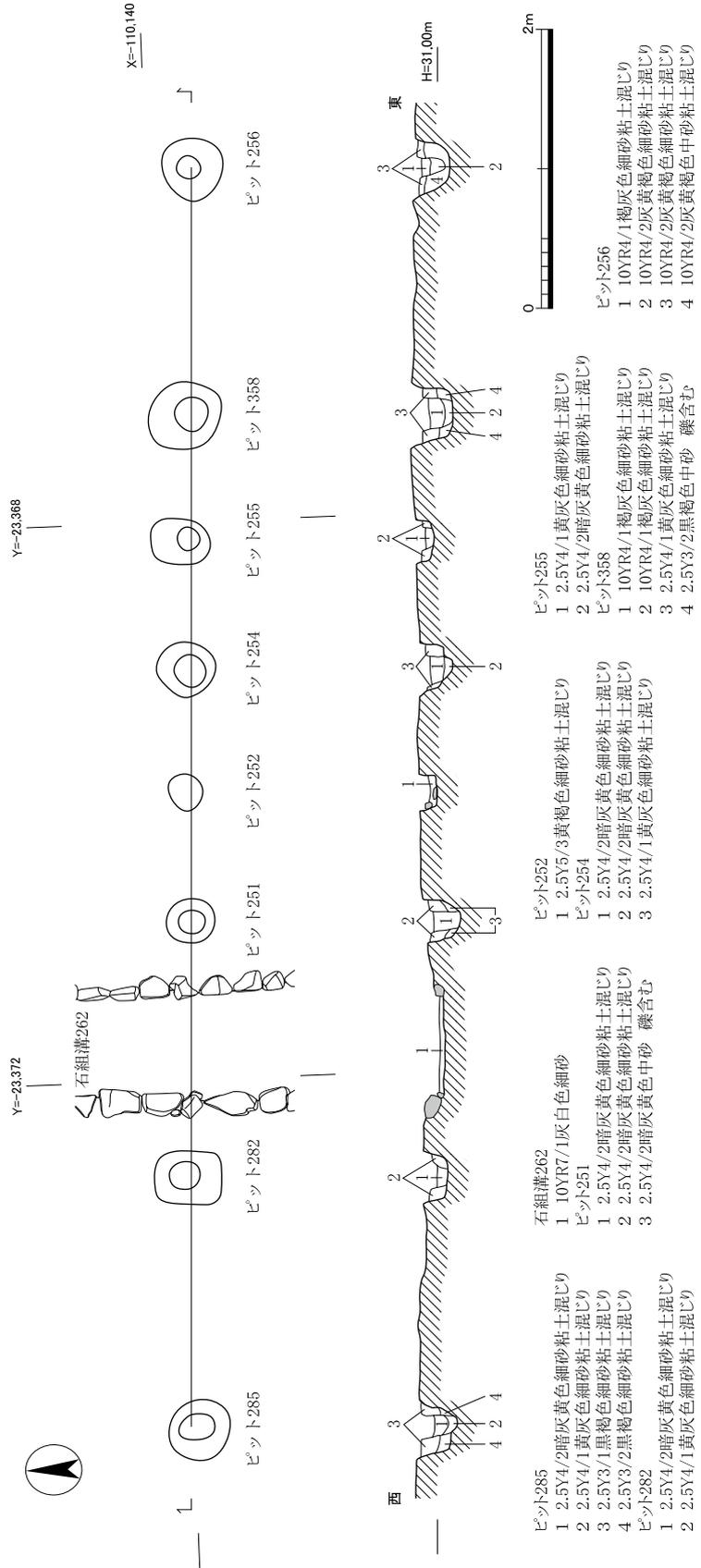


図29 柵1実測図（1：50）

る石には被熱痕跡があるものもあり、埋土の炭化物の存在と合わせて、火災を受けた可能性が考えられる。遺物は小片のために図示していないが、V期古段階の土器類が出土した。

柵1 (図29) 1区中央部で検出した東西方向に7間の柵。柱間は、西から1.8m・1.8m・0.9m・0.9m・0.9m・0.9m・1.8mである。柱掘形は、平面形が方形もしくは楕円形を呈し、径0.15～0.5

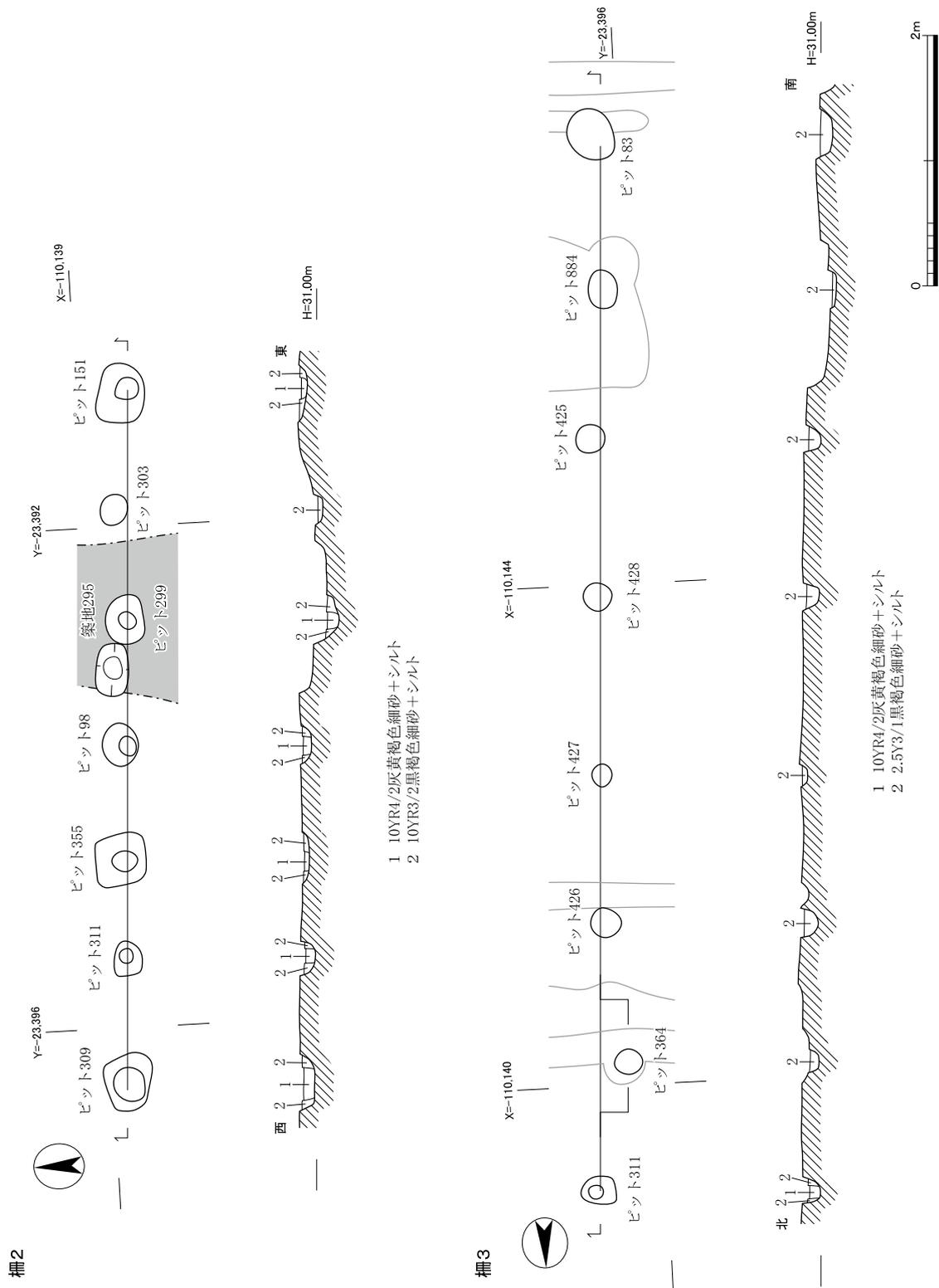


図30 柵2・3実測図 (1:50)

m、深さ0.15～0.3mである。柱間が0.9mとなるのは中央の4間分で、この間にあるピット252・255の掘形の深さは他のものよりも浅い。当初からのものでなく、後に補助的に設けられた可能性がある。その場合、当初の柱間はすべて1.8m（6尺）となる。タタキ433の上面から掘り込まれており、これより新しいことがわかる。条坊復元データによる北二門と北三门の境界付近に位置する。

**柵2（図30）** 1区西部で検出した東西方向に6間の柵。柱間は西から1.0m・0.75m・0.9m・1.0m・0.9m・0.9mである。柱掘形は、平面形が方形もしくは楕円形を呈し、径0.25～0.4m、深さ0.05～0.2mである。条坊復元データによる北二門と北三门の境界付近に位置する。柵1の西延長線上にある。

**柵3（図30）** 1区西部で検出した南北方向に7間の柵。柱間は、柱痕跡を検出していないために正確には不明であるが、おおよそ北から1.0m・1.1m・1.15m・1.4m・1.3m・1.2mである。掘形の平面形は、円形もしくは楕円形を呈し、径0.2～0.4m、深さ0.05～0.15mを測る。条坊復元データによる二町の東西中心より1m西側に位置する。北端で柵2と直交する。

**築地295（図版10）** 1区西部で検出した南北方向の築地基底部と考えられる遺構。幅0.2～1.2m、深さ0.2mを測る。構築土は2層、上層は灰色微砂で、下層は灰色礫混じり粗砂である。いずれもよく締まっている。条坊復元データによる二町の東西中心より1m東側に位置する。当初、南北方向の溝として掘り下げたが、検出位置や断面観察の結果、築地基底部の可能性が高いと判断した。

**列石882（図31、図版35-1）** 1区東西中央西寄りで検出した東西方向の石列。北側に面を揃え3石を東西に並べる。石列を構成する石は、長さ30～40cm、幅10～20cm、厚さ10～15cmを測る。石材は砂岩である。亀腹状基壇縁石の一部である可能性もあるが、性格は不明である。

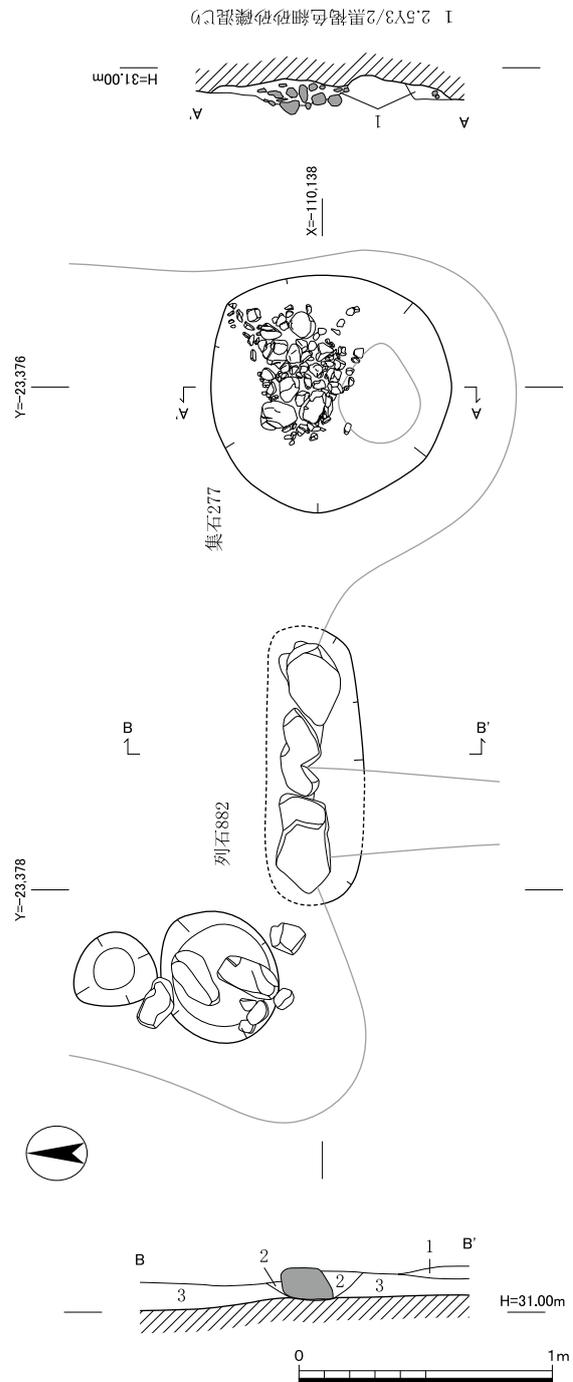


図31 集石277、列石882実測図（1：30）

集石277(図31) 1区中央西寄り列石882の東側で検出した。掘形は平面形が円形で、径0.9m、その中央付近に多数の石を置く。石の大きさは径5~15cmである。性格は不明、礎石の根固めなどが考えられるが、今回検出した礎石でこのような集石を伴うものはない。列石882と集石が東西に並ぶ位置にあり、有機的な関係を有していた可能性もある。

礎石443(図32、図版35-1・2) 1区中央西寄り列石882の南側で検出した。礎石は長さ60

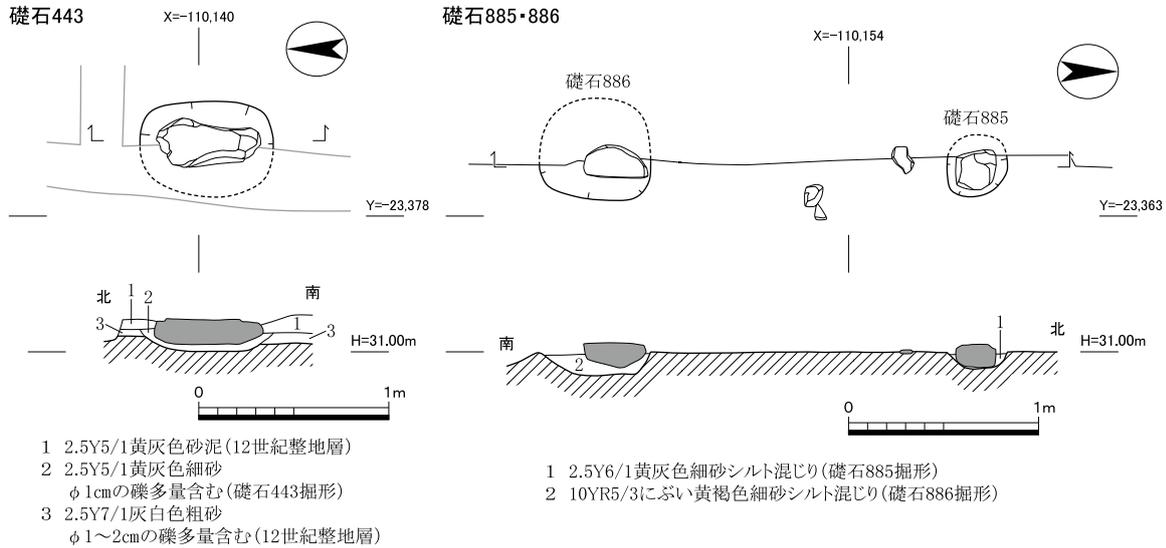


図32 礎石443・885・886実測図(1:40)

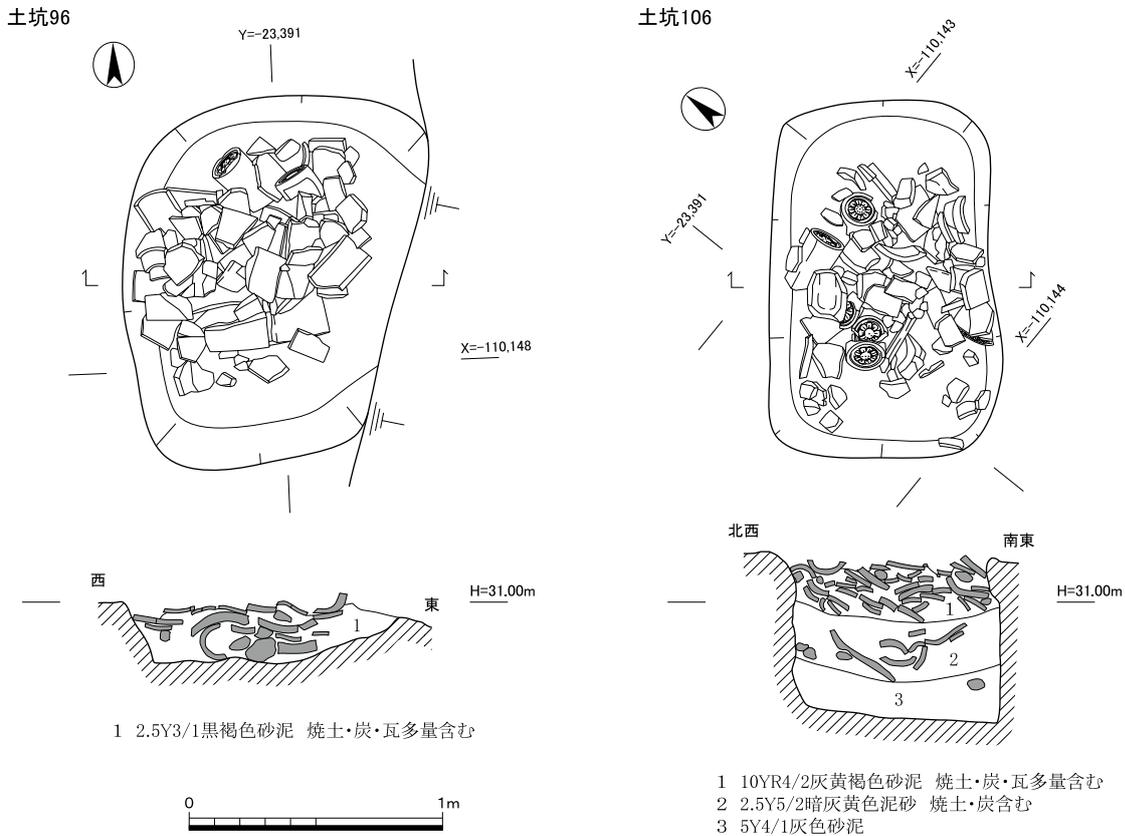
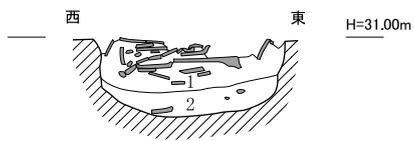
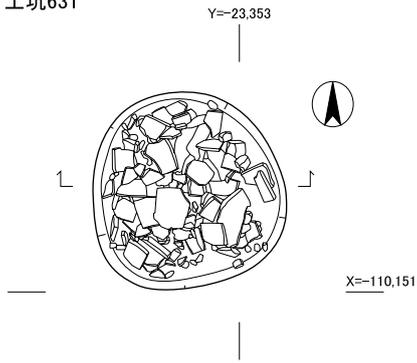


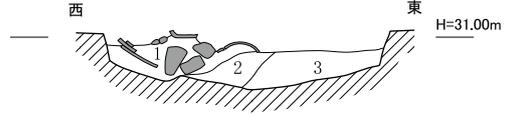
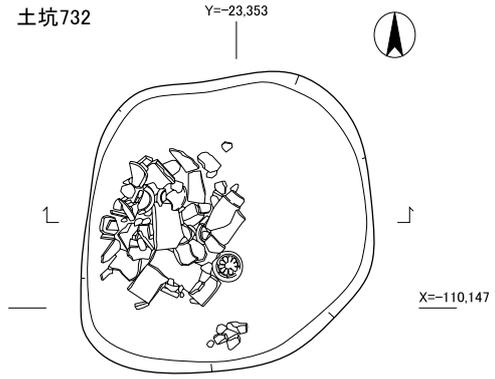
図33 土坑96・106実測図(1:30)

土坑631



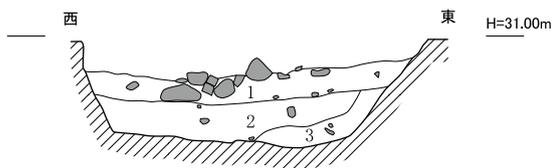
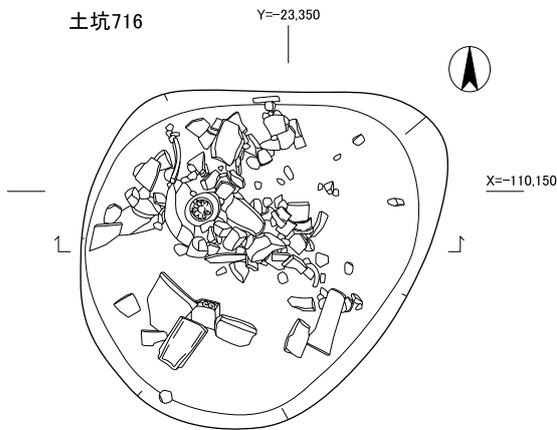
- 1 10YR3/2黒褐色シルト+細砂やや粘質  
焼土・炭・瓦多量含む
- 2 10YR3/1黒褐色シルト+細砂  
φ2~3cm礫少量、焼土・炭・瓦含む

土坑732



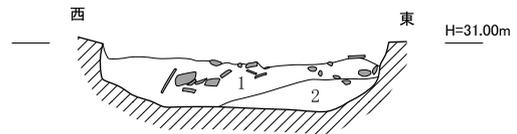
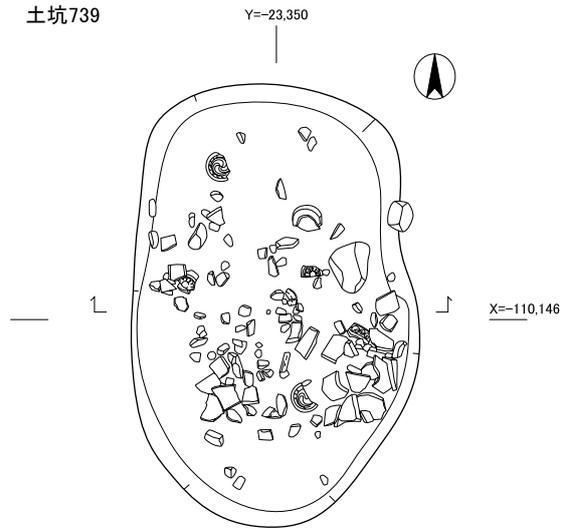
- 1 10YR4/2灰黄褐色シルト+細砂 焼土・炭・瓦多量含む
- 2 10YR3/2黒褐色シルト+細砂 焼土・炭・瓦含む
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト+細砂

土坑716



- 1 2.5Y3/1黒褐色シルト+細砂  
φ10~15cm礫、焼土・炭・瓦多量含む
- 2 10YR3/1黒褐色シルト+粘土+細砂 焼土・炭・瓦含む
- 3 10YR3/1黒褐色シルト+細砂

土坑739



- 1 10YR3/1黒褐色シルト+細砂  
φ5~10cmの礫、焼土・炭・瓦多量含む
- 2 7.5YR3/3暗褐色シルト+細砂  
φ3~5cmの礫、焼土・炭・瓦含む



図34 土坑631・716・732・739実測図 (1 : 30)

cm、横25cm、厚さ10cm、長軸を南北方向に向けて据えている。石材は砂岩あるいは泥岩とみられる堆積岩である。周辺3～4mの範囲では、平安時代後期の整地層を2層確認した。この整地層は、後世の削平のため部分的にしか確認できず、範囲は明確にできなかった。礎石据付の掘形は、下層の平安時代後期整地層(図32-3層)に掘り込まれており、南北0.7m、深さ0.1mを測る。礎石443は礎石建物を構成する一つと思われ、上下2層の整地層は、その建物に伴う化粧土あるいは亀腹状基壇の構築土の可能性もある。

**礎石885・886(図32)** 2区西壁際中央付近で南北にぶ2基の礎石。礎石886は長さ35cm、幅15cm、厚さ15cm、長軸を南北方向に据える。石材は砂岩である。礎石885は平面形が方形で一辺

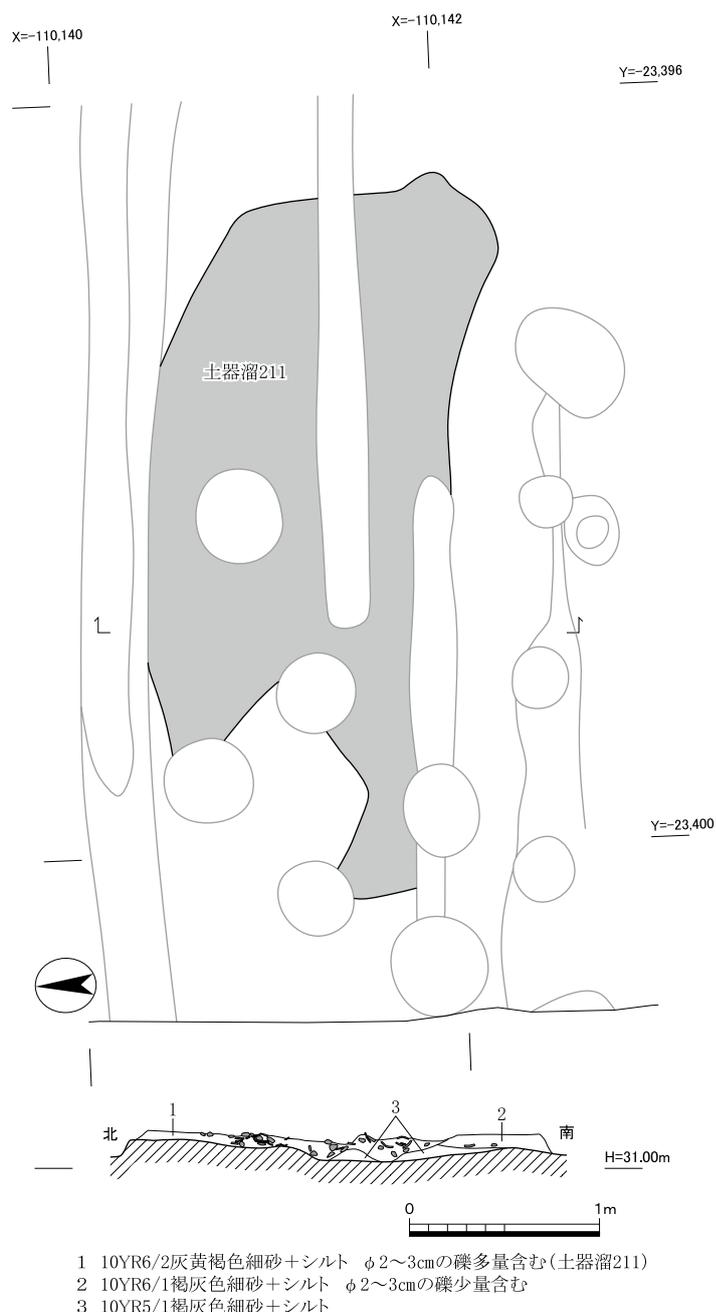


図35 土器溜211実測図(1:40)

15cm、厚さ15cmを測る。石材はチャートである。礎石885・866は、上面の標高は同じで31.5m、礎石芯々間の距離は1.9mを測る。この2つの礎石は、3期の入江820の埋め立てた後に建てられた礎石建物を構成するものと考えられる。

**土坑96(図33、図版36-1)** 1区西部で検出した。東側の一部は、攪乱土坑によって失われているが、本来の平面形は歪な方形を呈すると思われる。南北1.4m、東西1.1m、深さ0.25mである。土坑内からは焼土・炭と共に被熱痕跡のある瓦が多量に出土した。瓦はすべて和泉産である。

**土坑106(図33、図版36-2)** 1区西部の土坑96北側で検出した土坑。平面形は長方形を呈する。南北1.4m、東西0.9m、深さ0.6mを測る。土坑内からは焼土・炭と共に被熱痕跡のある瓦が多量に出土した。埋土は3層に分かれ、瓦は上層がもっとも多く下層が最も少ない。瓦はすべて和泉産である。

**土坑631(図34、図版36-3)** 2区中央部で検出した。平面形は円

形を呈する。径約0.8m、深さ0.6mである。土坑内からは焼土・炭と共に被熱痕跡のある瓦が多量に出土した。瓦はすべて山城産である。

土坑716（図34、図版36-4） 2区中央部の土坑631の東側で検出した。平面形は歪な楕円形を呈する。径約1.3m、深さ0.4mである。土坑内からは焼土・炭と共に被熱痕跡のある瓦が多量に出土した。埋土は3層に分かれ、瓦はほとんどが上層からの出土である。瓦はすべて山城産である。

土坑732（図34） 2区中央部の土坑631の北側で検出した。平面形は歪な方形を呈する。南北1.2m、東西1.1m、深さ0.2mである。土坑内からは焼土・炭と共に被熱痕跡のある瓦が出土した。瓦はすべて山城産である。

土坑739（図34） 2区中央部の土坑732の東側で検出した。平面形は歪な楕円形を呈する。南北1.8m、東西1.1m、深さ0.3mである。土坑内からは焼土・炭とともに被熱痕跡のある瓦が出土した。瓦はすべて山城産である。

土器溜211（図35、図版35-3） 1区西部で検出した整地土中に含まれる多量の土器群。南北1.5m、東西3.7mの範囲に不整形に広がる。掘形はなく、土器層は5cm程度の厚さを持つ。整地に伴い廃棄されたものと思われる。出土した土器は土師器の小皿がほとんどである。

#### 註

- 1) 小山田宏一「敷業工法の再検討－天然素材を用いた土構造物の補強－」『季刊考古学』102号 雄山閣 2008年
- 2) 鳥羽離宮東殿では、先に存在した東殿の池に接して近衛天皇陵（近衛天皇：久寿2年（1155）没）を造営することになったため、池の中に堤防（SX4）を設け、天皇陵と池を分離する区画施設とした。SX4は検出長約22m、幅約5m、高さ0.4mを測り、平面形は長方形である。土留は一辺4mほどの方形の区画が作られている。ここでは区画の底面に木や竹の枝・薄板・拳大の石を入れ、その上から土を盛っている。これは、水が抜けきらない状態で埋立て作業を行ったためと考えられている。『鳥羽離宮跡発掘調査報告 昭和60年度』京都市文化観光局 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1986年  
「鳥羽離宮跡第112次調査」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 3) 平安京内のピンク火山灰は、平安京左京三条二坊十町跡の11世紀後半の池から出土している。このほか、平安京右京五条三坊三町跡の10世紀の掘立柱建物の柱穴から出土した壁土の中に、始良Tn火山灰が確認されている。用途としては、それぞれ庭園の化粧や土壁の上塗り材や磨き粉などが考えられている。『平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年  
『平安京右京五条三坊三町』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年

## 第4章 遺物 (表3)

今回の調査で出土した遺物には、土器類・土製品・瓦類・銭貨・木製品・石製品・ガラス製品などがある。

遺物は、ほとんどが平安時代のものである。平安時代以前の遺物としては、弥生・古墳時代の土器が平安時代の整地層などから出土している。平安時代の遺物は、9世紀初頭から10世紀中頃、12世紀のものが出土している。10世紀後半から11世紀代のものはほとんど出土していない。鎌倉・室町時代の遺物は、小片を含めてもごくわずかでほとんど出土しない。江戸時代前期は17世紀前半の唐津焼などがわずかに出土し、江戸時代後期の18世紀以降の遺物は量的に増加する。これらの江戸時代の陶磁器類は、素掘り溝などから出土しているが、図示はしていない。

以下では、まず平安時代の土器類について遺構別・時期順に述べる。その後、それ以外の遺物を種類ごとに述べる。なお、墨書土器・木簡などの文字資料は土器・木製品とは別に扱った。

遺物の時期の表記は平安京・京都I期～XIV期の編年<sup>1)</sup>に依り、平安時代前・中期の土器の器形分類は平城京<sup>2)</sup>の分類を、輸入陶磁器の器形分類は山本信夫氏<sup>3)</sup>の分類を、製塩土器の器形分類は山中章氏<sup>4)</sup>の分類を準用する。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器5点		
古墳時代	須恵器		須恵器1点		
奈良時代	銭貨		銭貨1点		
長岡京期	瓦		瓦2点		
平安時代前期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器、製塩土器、墨書土器、硯、土製品、瓦、木製品、木簡、絵馬、銭貨、動物遺存体、植物遺存体、白色円礫		土師器84点、須恵器55点、緑釉陶器27点、灰釉陶器12点、黒色土器8点、輸入陶磁器8点、製塩土器9点、墨書土器30点、硯3点、土製品6点、瓦5点、木製品27点、木簡6点、絵馬1点、銭貨6点、動物遺存体、樹皮、種実、白色円礫		
平安時代中期	土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、墨書土器、硯、瓦、木製品、木簡、銭貨		土師器19点、須恵器4点、緑釉陶器2点、黒色土器1点、硯1点、墨書土器3点、瓦3点、木製品4点、木簡1点、銭貨3点		
平安時代後期	土師器、白色土器、瓦器、輸入陶磁器、墨書土器、土製品、瓦、木製品、石製品、ガラス製品		土師器127点、白色土器1点、瓦器2点、輸入陶磁器16点、墨書土器2点、土製品3点、瓦38点、木製品19点、石製品3点、ガラス製品1点		
江戸時代	銭貨		銭貨1点		
合計		289箱	550点 (46箱)	29箱	214箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より47箱多くなっている。

## 1. 土器類

### (1) 平安時代前期の土器類

落込み456（図36～38、図版37、表4）出土した土器類の総破片数は7,794点で、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・白色土器・灰釉陶器がある。器種・器形別の出土比率は表4のとおりである。時期はI期中段階から新段階を主とし、II期古段階のものも少量含まれる。

土師器には椀A・皿A・杯A・杯B・甕・高杯などがある。椀A（1～5）は口径12.2～14.2cm、器高3.4～3.2cmで、すべて外面にヘラケズリを施す。皿A（6～8）は口径15.2～19.0cm、器高2.0～2.6cmを測る。外面調整はヘラケズリを施すもの（7・8）と施さないもの（6）があり、口縁端部は肥厚するもの（8）と肥厚しないもの（6・7）がある。また、6の外面底部には格子状の線刻が焼成後に施される。確認できるのは縦横各3本である。線刻は鋭く刻まれており、刀子状<sup>5)</sup>の金属器で施されたと思われる。杯（9）と皿（10～12）は、落込み456から出土する土器のなかでは型式的に新しい一群で、II期古段階に属する。10の口縁端部には煤が付着する。杯A（13）は口径19.2cm、器高4.1cmを測る。杯B（14・15）はそれぞれ口径18.5cmと20.8cm、器高4.6cmと5.6cmを測る。杯A・Bは共に外面ヘラケズリ調整である。甕（16～19）は口径が17.0～17.6cmと21.0～24.2cmの大小のサイズがある。外面調整はナデ（16・17）とハケ目調整（18・19）によるものがある。口縁端部はつまみ上げるものが多いが、17は丸く収める。17は胎土も他とは異なり、0.5～3mmの白色粒を多く含む。高杯（20）は脚高20.0cm、裾部径17.2cmとやや大型のものである。脚部は軸を用いて成形し、断面八角形に面取りを施す。

須恵器には杯A・杯B・杯蓋・皿C・壺G・壺A・壺M・壺蓋・鉢D・甕がある。蓋（21～27）は口径18.2～21.5cm、器高1.0～1.5cmの扁平なもの（21～23）と口径13.6～18.2cm、器高2.1～2.4cmのやや高さのあるもの（24～27）とがある。24・25の天井部はヘラ切り後の調整をほとんど施さない。27は内面と外面口縁部付近に墨が付着し、内面底部が滑らかになっていることから、硯に転用されたと考えられる。皿C（28～30）は口径13.8～18.0cm、器高1.5～1.8cmを測る。口縁端部は外反するもの（28）と肥厚するもの（29・30）がある。30は内面と外面口縁部付近に墨が付着し、内面底部が滑らかになっていることから硯に転用されたと考えられる。杯A（31～36）は底部から口縁部へ直線的に立ち上がるもの（31～34）と丸味を持って立ち上がるもの（35・36）がある。口径は11.6cm（31）・13.2～14.2cm（32・33・35・36）・18.4cm（34）と大きく3つに分かれる。31は形態と胎土の特徴から猿投産と推定される。杯B（37～42）は径高指数から2群に分かれる。37～40は口径12.0～15.5cm、器高4.4～5.6cmで、径口指数が0.32～0.38、41・42は口径13.8～14.6

表4 落込み456出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	椀・皿・杯	4256	79.1%
	高杯・盤	164	3.0%
	甕	785	14.6%
	他	168	3.1%
	不明	9	0.2%
	小計	5382	100.0%
黒色土器	椀・皿・杯	115	71.0%
	鉢	2	1.2%
	甕	44	27.2%
	他	1	0.6%
	不明	0	0.0%
	小計	162	100.0%
須恵器	椀・皿・杯	766	39.0%
	壺・瓶	363	18.5%
	鉢	174	8.9%
	甕・大壺	661	33.6%
	その他	1	0.1%
	不明	0	0.0%
	小計	1965	100.0%
緑釉陶器	椀・皿	210	95.9%
	壺・瓶	0	0.0%
	他	9	4.1%
	不明	0	0.0%
	小計	219	100.0%
白色土器	椀・皿	9	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	9	100.0%
灰釉陶器	椀・皿	41	71.9%
	壺・瓶	14	24.6%
	他	2	3.5%
	不明	0	0.0%
	小計	57	100.0%
総数		7794	100.0%

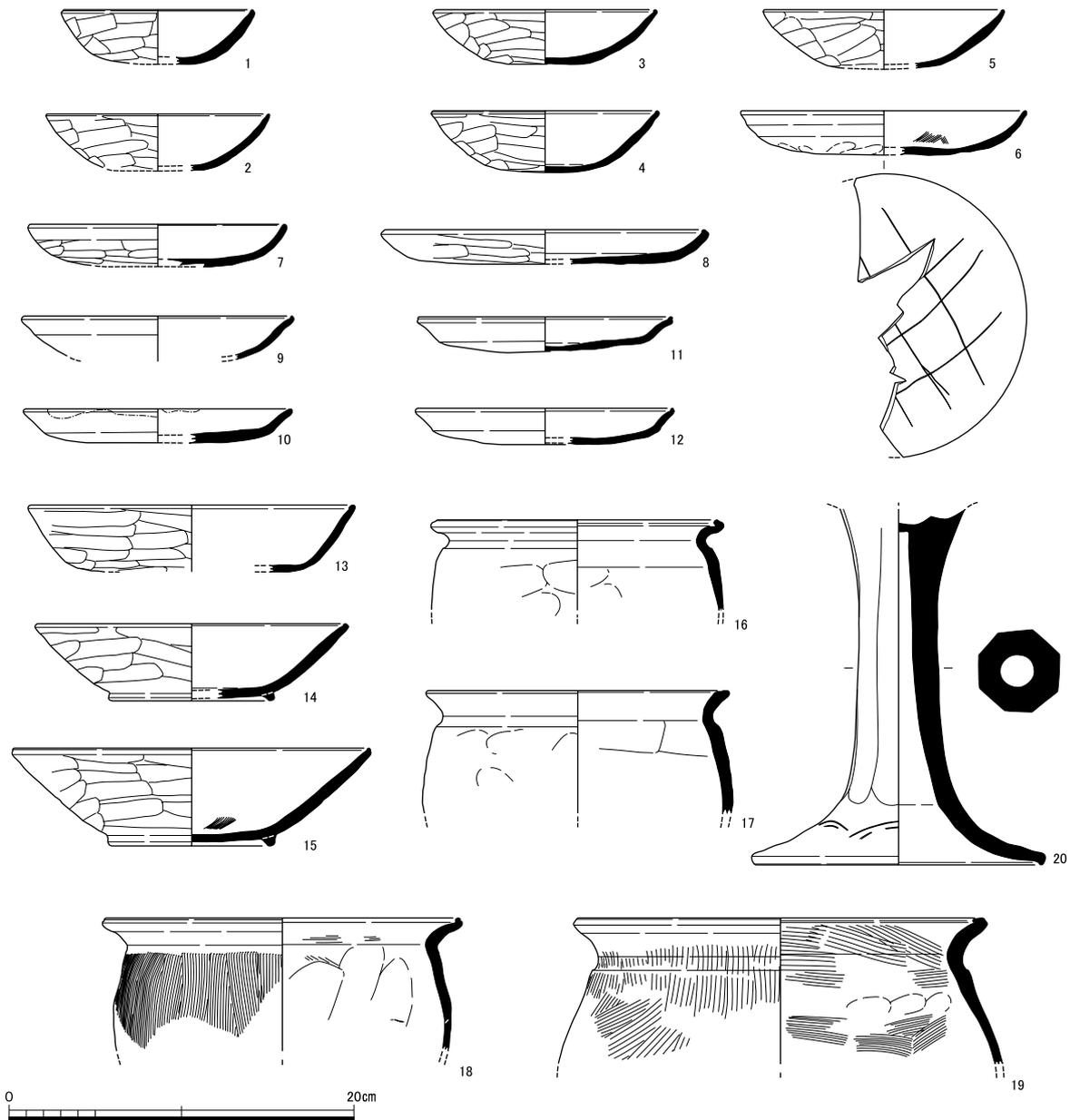


図36 落込み456出土土器実測図1 (1:4)

cm、器高6.0～6.1cmで、径口指数が0.41～0.43となる。壺蓋(43～45)は天井部が丸味を持つもの(43・44)と平坦なもの(45)がある。44は胎土と形態の特徴から猿投産と推定される。壺G(46)は体部高11.2cm、体部はナデ調整、肩部から頸部は回転ナデ調整、底部はヘラ切り後に粗いナデ調整。胎土は粗く径1mmの白色粒、暗灰色粒を多く含む。壺A(69)は口径13.8cmを測る。球形の体部から肩部は張り気味で、直立する短い頸部が付く。肩部に自然釉が掛かる。壺M(47・48)は体部が寸胴形のもの(47)と丸味を持つもの(48)がある。いずれも底部は糸切り未調整である。壺底部(49～51)は3点ある。鉢D(52～54)は口縁端部が肥圧しないもの(52)と肥圧するもの(53)がある。54の底部は糸切り後ナデ調整を施す。甕(55)は外面格子タタキを施す。焼成はやや軟質で、色調は橙褐色を呈する。

緑釉陶器には皿・耳皿・椀がある。皿(56～58)は口径が13.5cm、器高2.1cm(56・57)と口径

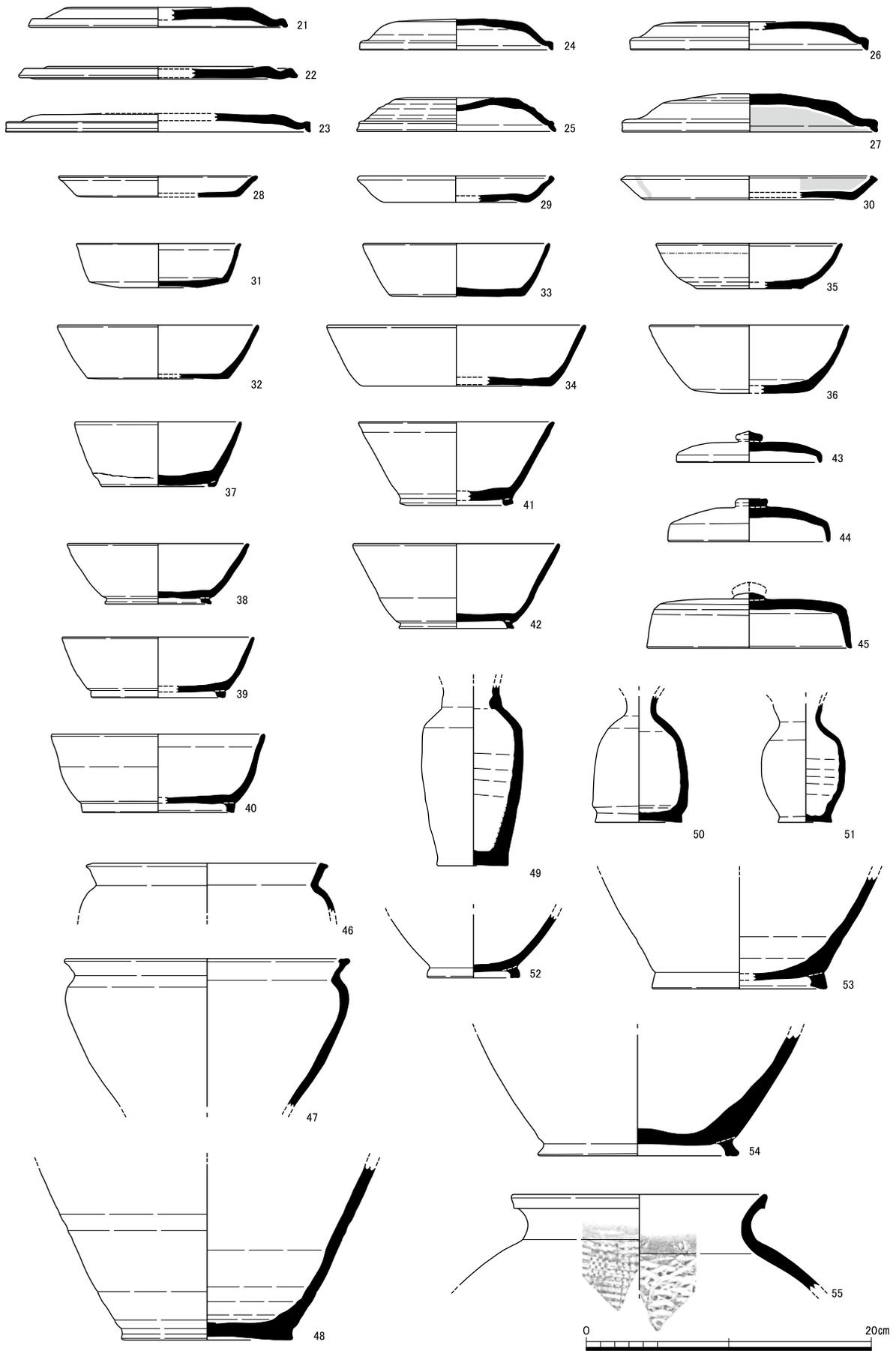


图37 落込み456出土土器实测图2 (1:4)

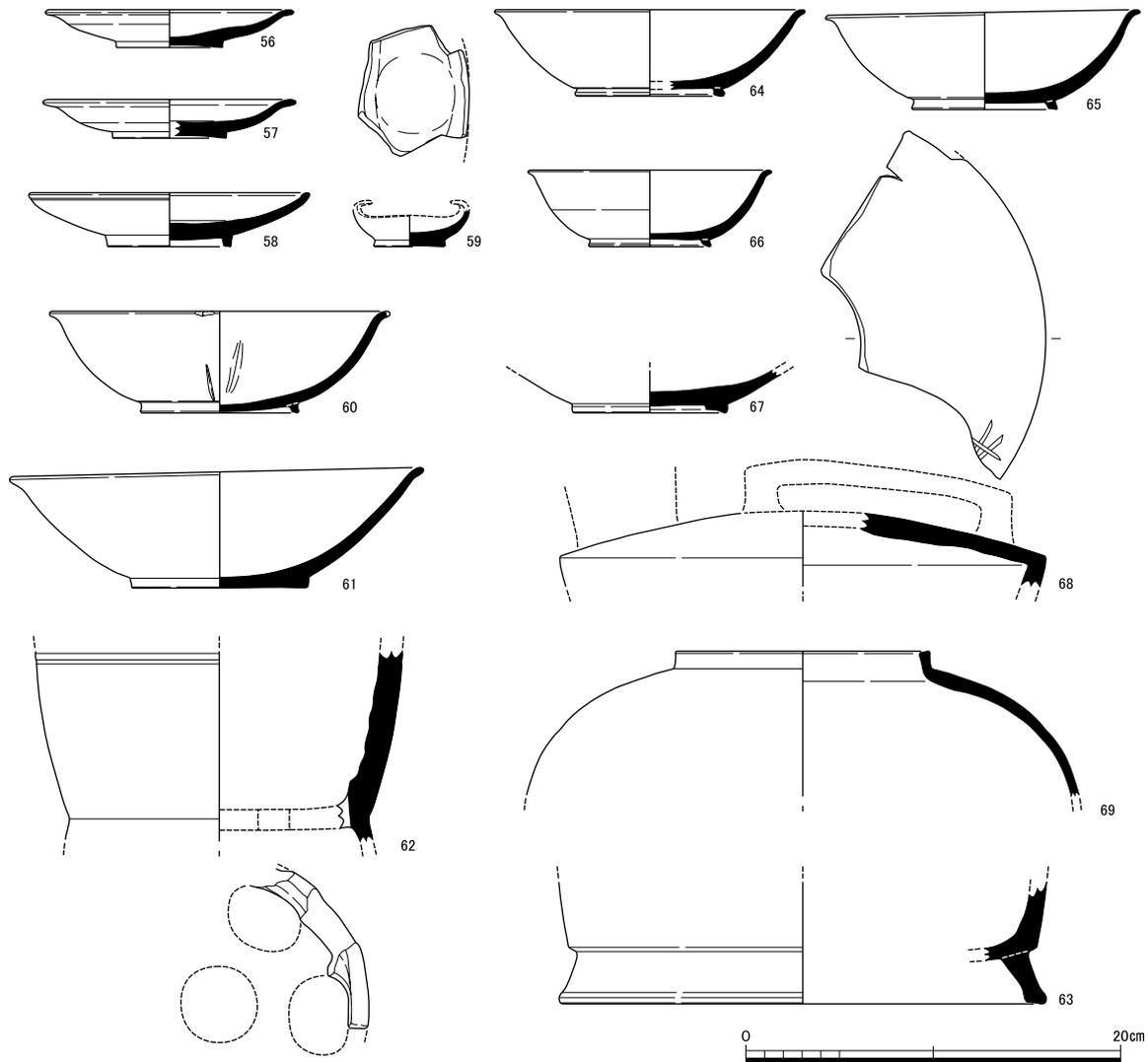


図38 落込み456出土土器実測図3 (1:4)

15.2cm、器高3.0cm (58) がある。高台はいずれも削り出しで、平高台 (56・57) と輪高台 (58) があり、56はヘラケズリ後未調整、57・58はヘラミガキを施す。施釉は濃緑色の釉薬を全面に掛けるが、むらがある。焼成は軟質。いずれも京都産である。耳皿 (59) の施釉は濃緑色の釉薬を全面に掛けるが、むらがある。焼成は軟質。京都産である。椀 (60・61) は2点ある。60は口径18.4cm、器高5.5cmを測る輪花椀で、高台は貼り付け輪高台である。施釉は透明感のある薄緑色の釉薬を全面に均質に掛ける。尾張産である。61は口径22.2cm、器高6.2cmを測る大型の椀である。高台は削り出しの平高台で、高台内もヘラミガキを施す。施釉は濃緑色の釉薬を全面に掛けるが、むらがある。焼成は軟質。京都産である。

緑釉単彩陶器には甌 (62) と炉 (63) がある。いずれも施釉は淡緑色の釉薬を底部以外の外面に掛ける。焼成は軟質である。

灰釉陶器には椀・皿・平瓶がある。椀 (64～66) は口径16.7cm前後 (64・65) と口径13.2cm (66) のものがある。内面には降灰釉が掛かる。皿 (67) の高台径は8.2cmを測る。内面に降灰釉が掛かる。平瓶 (68) は肩部のみが出土している。肩部にヘラ記号がある。外面に降灰釉が厚く掛かる。

井戸359（図39、図版37・38、表5） 出土した土器類の総破片数は1,467点で、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器がある。器種・器形別の出土比率は表5のとおりである。時期はI期中段階から新段階である。

土師器には椀A・皿A・杯A・杯B・甕・高杯などがある。皿C（70）は口径15.0cm、器高2.0cmを測る。やや厚手で、口縁部上半は外反する。胎土には径1mmの赤色粒が含まれる。皿A（71～75）は法量から、口径15.1～15.8cm、器高2.0～2.6cmを測る（71～73・75）と口径17.8cm、器高1.9cmとやや大型の（74）に分かれる。外面調整は口縁部付近を除いてヘラミガキを施すものが多いが、75はナデ調整のみである。口縁端部はいずれも外反気味である。椀A（76～83）は口径13.1～14.2cm、器高2.4～3.6cmを測る。外面調整はヘラケズリを施すもの（76～80）と施さないもの

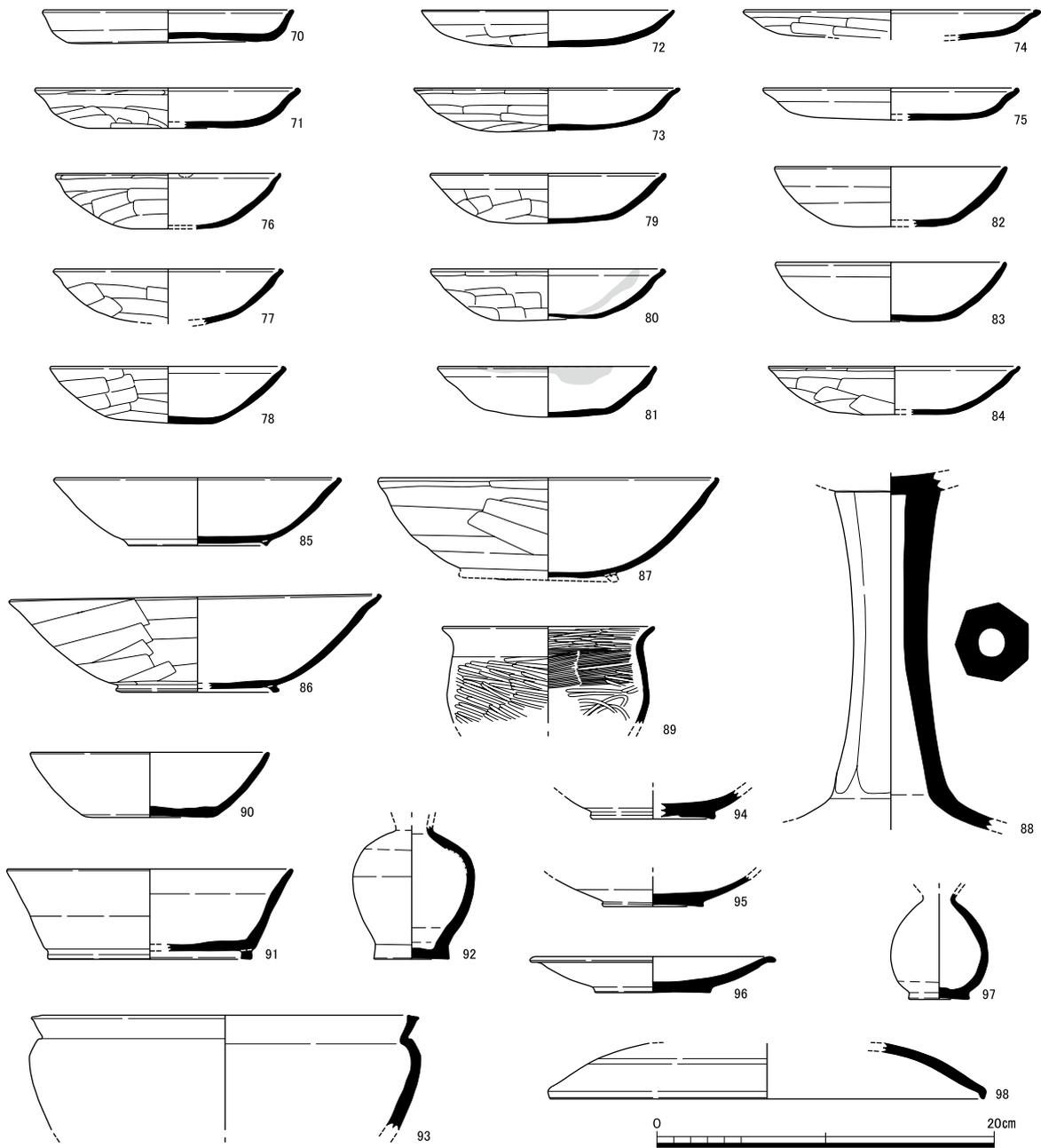


図39 井戸359出土土器実測図（1：4）

表5 井戸359出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	椀・皿・杯	1013	88.3%
	高杯・盤	36	3.1%
	甕	89	7.8%
	他	8	0.7%
	不明	1	0.1%
	小計	1147	100.0%
黒色土器	椀・皿・杯	1	2.6%
	鉢	5	13.2%
	甕	32	84.2%
	他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	38	100.0%
須恵器	椀・皿・杯	68	28.3%
	壺・瓶	45	18.8%
	鉢	36	15.0%
	甕・大甕	88	36.7%
	その他	1	0.4%
	不明	2	0.8%
	小計	240	100.0%
緑釉陶器	椀・皿・杯	33	91.7%
	壺・瓶	2	5.6%
	他	1	2.8%
	不明	0	0.0%
	小計	36	100.0%
白色土器	椀・皿・杯	0	-
	壺・瓶	0	-
	他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
灰釉陶器	椀・皿・杯	4	66.7%
	壺・瓶	2	33.3%
	他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	6	100.0%
総数		1467	100.0%

表6 溝329出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	椀・皿・杯	2267	82.6%
	高杯・盤	132	4.8%
	甕	318	11.6%
	他	19	0.7%
	不明	7	0.3%
	小計	2743	100.0%
黒色土器	椀・皿・杯	86	57.3%
	鉢	8	5.3%
	甕	55	36.7%
	他	1	0.7%
	不明	0	0.0%
	小計	150	100.0%
須恵器	椀・皿・杯	174	27.0%
	壺・瓶	103	16.0%
	鉢	102	15.8%
	甕・大甕	264	41.0%
	その他	0	0.0%
	不明	1	0.2%
	小計	644	100.0%
緑釉陶器	椀・皿・杯	212	91.8%
	壺・瓶	7	3.0%
	他	3	1.3%
	不明	9	3.9%
	小計	231	100.0%
白色土器	椀・皿・杯	11	91.7%
	壺・瓶	0	0.0%
	他	1	8.3%
	不明	0	0.0%
	小計	12	0.0%
灰釉陶器	椀・皿・杯	77	80.2%
	壺・瓶	19	19.8%
	他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	96	100.0%
輸入陶磁器	椀・皿・杯	4	57.1%
	壺・瓶	3	42.9%
	他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	7	100.0%
総数		3883	100.0%

(81～83)がある。80・81には煤が付着する。杯A(84)は口径15.0cm、器高2.9cmを測る。外面調整は口縁部付近を除いてヘラケズリを施す。杯B(85～87)は口径12.2cm、器高4.0cmの(85)と口径20.4～22.2cm、器高5.7～6.0cmのやや大型の(86・87)がある。外面調整はいずれもヘラケズリである。高杯(88)は脚部残存高21.5cmを測るやや大型のものである。脚部は軸を用いて成形し、断面7角形に面取りを施す。

黒色土器には甕(89)がある。口径12.8cmを測る。色調は体部外面が褐色、それ以外は黒色である。

須恵器には杯A・杯B・壺M・鉢Dがある。杯A(90)は口径15.0cm、器高2.9cmを測る。色調は灰白色、焼成はやや軟質である。内面底部に墨が付着するが、硯として利用された痕跡は認められない。杯B(91)は口径17.0cm、器高5.5cmを測る。色調は暗灰色、焼成は硬質である。壺M(92)は底部径4.5cmを測る。外面底部は糸切り未調整である。鉢D(93)は口径23.2cmを測る。口縁部は弱く「く」の字形に屈曲する。

緑釉陶器には皿・壺・蓋がある。皿(94～96)は口径が14.0cm、器高2.1cmの(96)と底部径が6.2cmと7.5cmの(94・95)がある。94は貼り付けによる蛇の目高台である。尾張産である。95・96は削り出しによる平高台、京都産である。施釉は淡緑色の釉薬を95が外面底部以外、他は全面施釉である。壺(92)は底径4.5cmを測る。外面底部は糸切り未調整である。施釉は濃緑色の釉薬を全面施釉するが、むらがある。蓋(98)は口径26.2cmを測る。施釉は透明感のある淡緑色の釉薬を薄く全面施釉する。尾張産である。

溝329(図40、図版38、表6)出土した土器類の総破片数は3,883点で、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器がある。器種・器形別の出土比率は表6のとおりである。時期はI期新段階からII期古段階である。

土師器には椀A・皿A・杯A・杯B・甕などがある。皿A(99～102)は口径13.0～15.0cm、器高1.4～1.6cmの(99～101)が主となる。102は大型で、口径18.6cm、器高2.1cmである。口縁部は102を除いて外反し、口縁端部は小さく肥厚する。椀A(103)は口径13.2cmを測る。外面口縁部調整はヨコ

ナデである。杯A(105～107)には形態から2つに分かれる。104は口径13.7cm、器高3.0cmを測

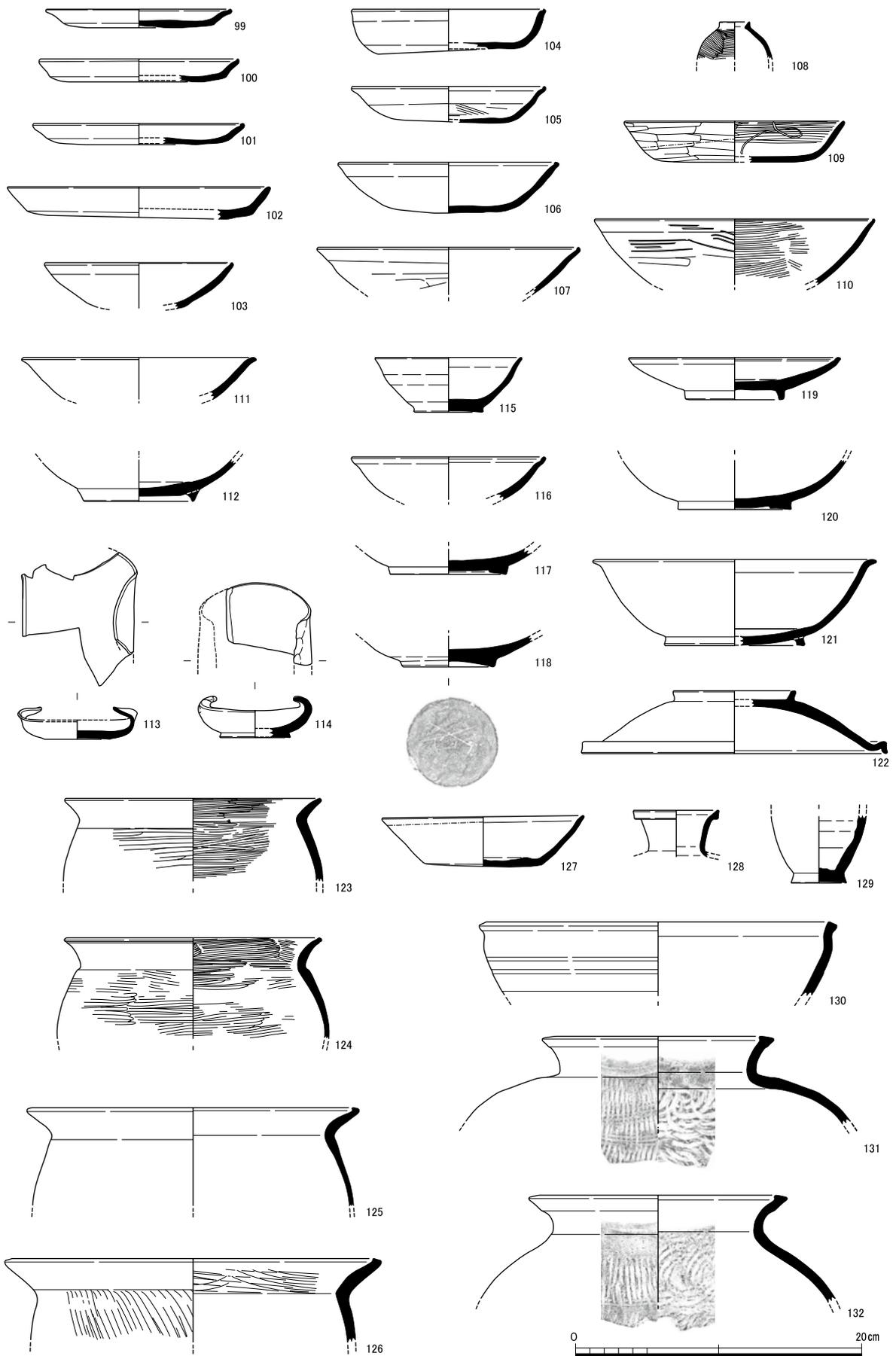


图40 沟329出土土器实测图（1：4）

る。丸味を帯びた口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。色調は赤褐色で、胎土に0.1mmの白色粒をやや多く含む。形態・胎土の特徴から河内産と推定される。105～107は平安京内で一般に出土する杯Aである。105は口径13.8cm、器高2.6cmを測り、外面調整はすべてヨコナデ調整である。甕(125・126)は2点あり、それぞれ口径23.4cmと26.4cmを測る。いずれも口縁部は「く」の字形に屈曲し、端部は肥厚する。体部外面調整はナデ(125)と粗いハケ目(126)を施すものがある。

黒色土器には壺・杯・椀・甕がある。壺(108)は体部が丸味を帯びて頸部は小さく立ち上がる小型の壺である。杯(109)は口径15.6cm、器高3.0cm、椀(110)は口径19.6cmを測る。いずれも内外面にヘラミガキを施すが、外面はやや粗く、109の内面にはミガキの上に暗文を施す。

灰釉陶器には椀・皿・耳皿がある。皿(111)は口径16.6cmを測る。口縁部は外反する。施釉は口縁部を除く内面に刷毛塗りで施す。椀(112)は底部のみで、底径7.8cmを測る。高台断面は三角形を呈する。施釉は内面のみで、内面底部に重ね焼き痕跡を残す。耳皿(113)は底部には高台が付かず、糸切り未調整である。施釉は内面のみである。甕(123・124)はいずれも口径約18.2cmを測り、口縁部はいずれも「く」の字形に屈曲し、内外面にヘラミガキを施す。

緑釉陶器には椀・皿・耳皿・蓋がある。椀(115・116・120・121)は口径10.2～20.0cm、器高3.8～6.2cmと小型のものからやや大型のものがある。底部は、糸切り未調整(115)と貼り付け高台による輪高台(120)と蛇の目高台(121)がある。ヘラミガキは、外面底部以外を内外面に粗く施すもの(115・116)と内外面全面に密に施すもの(120・121)がある。施釉はいずれも内外面全面に施され、121は釉厚が他のものよりも厚く均質である。焼成は硬質(115・118・121)と軟質(116・120)のものがある。皿(117～119)は119が口径14.8cm、器高3.0cmを測る。底部はいずれも削り出しで、蛇の目高台(117)、平高台(118)、輪高台(119)がある。ヘラミガキは外面底部を除く内外面に粗く施す。施釉は内外面全面に薄く施すもの(117・119)とまったく施さないもの(118)がある。蓋(122)は口径20.8cm、器高4.4cmを測る。体部はやや丸味を持ち、天井部にリング状の取手を付する。口縁部は大きく外反して先端で下方に折り曲がる。ヘラミガキは内外面の全面に密に施される。施釉は濃緑色の釉薬を内外面全面に厚く施す。胎土は白色であるが、器壁断面は両端が白色、中位は暗灰色のサンドイッチ状となる。産地は115～119が山城産、119～121が尾張産、122が長門産である。

須恵器には杯A・壺M・鉢D・甕がある。杯A(127)は口径14.2cm、器高3.6cmを測る。底部はヘラ切りである。壺M(128・129)は口径6.0cm(128)と底径4.0cm(129)を測る。129の底部は糸切りである。鉢D(130)は口径20.0cmを測る。口縁部は「く」の字形を呈するが、屈曲は小さい。甕(131・132)はそれぞれ口径が16.2cm(131)と18.2cm(132)を測る。外面は縦方向平行タタキ、内面は同心円状の当具痕跡を残す。

水場448(図41) 土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器がある。時期はI期新段階からII期古段階である。

土師器には椀A・皿A・杯A・杯蓋がある。椀A(133)は口径13.6cm、器高3.0cmを測る。外面

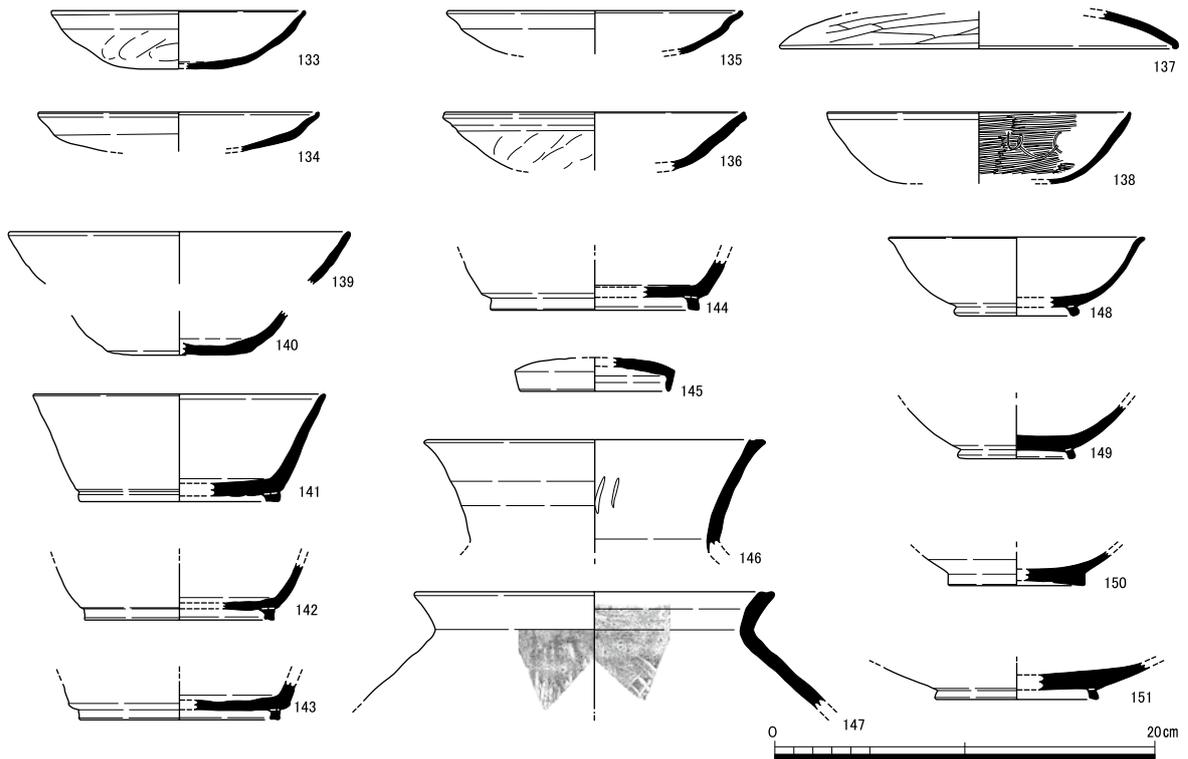


図41 水場448出土土器実測図（1：4）

口縁部調整はヨコナデである。皿A（134）は口径14.8cmを測る。口縁部は小さく外反し、端部は上方につまみ上げる。杯A（135・136）は口径15.6cmを測る。皿Aの口縁部外面調整はヨコナデ調整である。蓋（137）は口径21.2cmを測る。外面調整はヘラケズリである。

黒色土器には杯（138）がある。口径16.2cmを測る。内面にヘラミガキ、暗文を施す。

須恵器には杯A・杯B・壺M・鉢D・甕がある。杯A（139・140）は2点あり、139は口径14.2cmを測る。140の底部はヘラ切りである。杯B（139～144）は口径がわかるものは少ない。141は口径15.6cm、器高5.8cmを測る。いずれも底部外周に断面が方形の高台を貼り付ける。壺蓋（145）は口径7.8cmを測る。天井部はやや丸味を持ち、口縁部は下方に垂直に曲がる。壺（146）は口径18.2cmを測る。頸部内面に2条のヘラ記号がある。甕（147）は口径19.0cmを測る。口縁部は「く」の字形を呈するが、屈曲はやや弱い。甕（131・132）はそれぞれ口径が16.2cm（131）と18.2cm（132）を測る。外面は縦方向平行タタキ、内面はナデ調整である。

緑釉陶器には椀・皿がある。椀（148・149）は2点あり、148は口径13.8cm、器高4.2cmを測る。高台はいずれも貼り付けによる輪高台である。ヘラミガキは外面底部以外に全面に施す。施釉は内外面全面に、148は透明感のある緑色、149は淡い緑色を呈する。いずれも尾張産である。皿（151）は底部のみである。底径8.6cmを測る。高台は削り出しによる蛇の目高台である。ヘラミガキは外面底部以外に粗く施す。施釉は内外面全面に淡緑色の釉葉を薄く掛ける。山城産である。

灰釉陶器には皿の底部（151）がある。底径は8.6cmを測る。高台は貼り付けにより断面が方形を呈する。内面底部に降灰釉が厚く掛かる。また、高台内には墨が一面に付着するが、硯として使用されたような平滑感はない。

表7 土坑189出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	椀・皿・杯	737	89.9%
	高杯・盤	25	3.0%
	甕	58	7.1%
	他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	820	100.0%
黒色土器	椀・皿・杯	0	0.0%
	鉢	3	8.6%
	甕	32	91.4%
	他	0	0.6%
	不明	0	0.0%
	小計	35	100.0%
須恵器	椀・皿・杯	24	29.3%
	壺・瓶	15	18.2%
	鉢	18	22.0%
	甕・大甕	24	29.3%
	その他	0	0.0%
	不明	1	1.2%
	小計	82	100.0%
緑釉陶器	椀・皿	16	94.1%
	壺・瓶	1	5.9%
	他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	17	100.0%
白色土器	椀・皿	0	0.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	0	0.0%
灰釉陶器	椀・皿	4	66.7%
	壺・瓶	2	33.3%
	他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	6	100.0%
総数		960	100.0%

土坑189(図42、図版39、表7) 出土した土器類の総破片数は960点で、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器がある。器種・器形別の出土比率は表7のとおりである。時期はⅡ期古段階から中段階を主とする。

土師器には椀A・杯A・杯B・皿A・甕がある。椀A(152~157)は口径13.0~13.8cm、器高2.9~3.5cmを測るもの(152~156)と口径15.2cm、器高3.3cmとやや大きいもの(157)がある。外面口縁部調整はヨコナデである。154は口縁部内外面に煤が付着し、内面口縁部に「×」状の線刻が焼成後に施される。杯A(158~165)は口径15.2~16.2cm、器高2.9~3.4cmを測るもの(159~163)が主となるが、口径18.1~19.2cm、器高3.4~3.8cmを測る大型のもの(164・165)もある。口縁部外面調整はいずれもヨコナデ調整であるが、158は体部外面にヘラケズリを施す。色調は158が灰褐色で、他は橙褐色である。杯B(166~168)は口径21.0cm、器高5.2cmを測るもの(166)と口径26.2cmを測る大型のもの(167)がある。い

ずれも体部外面調整はヘラケズリである。皿A(169~173)は口径16.2~16.9cm、器高1.5~2.1cmを測る。口縁端部は肥厚するもの(170~173)と肥厚しないもの(169)がある。口縁部外面調整はいずれもヘラケズリである。甕(174~177)は体部が寸胴形のもの(174)と丸味を帯びるもの(175~177)がある。口径は24.2cm(174)・18.6cm(175)・24.2cm(176)・28.5cm(177)である。口縁端部は上方につまみ上げるもの(174)、丸く収まるもの(175)、肥厚するもの(176・177)がある。174の胎土には0.5mm程度の赤褐色粒が多く含まれる。

黒色土器には甕(178)がある。口径は12.4cmを測る。全体に器壁は磨滅しているが、内面の口縁部にヘラミガキがわずかに残る。

須恵器には杯A・杯B・鉢D・盤A・壺Mがある。杯A(179)は口径13.5cm、器高4.0cmを測る。やや丸味を帯びる体部は外側に開きながら立ち上がり、端部は丸く収まる。杯B(180)は口径12.5cm、器高4.4cmを測る。鉢D(181)は口径24.6cmを測る。口縁部は「く」の字形を呈するが、屈曲は弱い。盤A(182)は口径32cm、器高11.4cmを測る。平底の底部から体部は外側に開きながら直線的に立ち上がる。口縁端部は上方にわずかにつまみ上げる。底部はヘラ切りである。壺M(183)は口径6.6cmを測る。

緑釉陶器には椀(184)と皿(185)の底部がある。184は底部径5.6cm、185は底部径6.6cmを測る。いずれも高台は削り出しによる平高台である。ヘラミガキは内面に粗く施し、外面は磨滅のため不明。施釉は内外面の全面に透明感のある淡緑色の釉薬を薄く掛ける。山城産である。

灰釉陶器には椀の底部(186)がある。底部径9.0cmを測る。高台は貼り付けにより断面は方形を呈する。内面に降灰釉が掛かる。

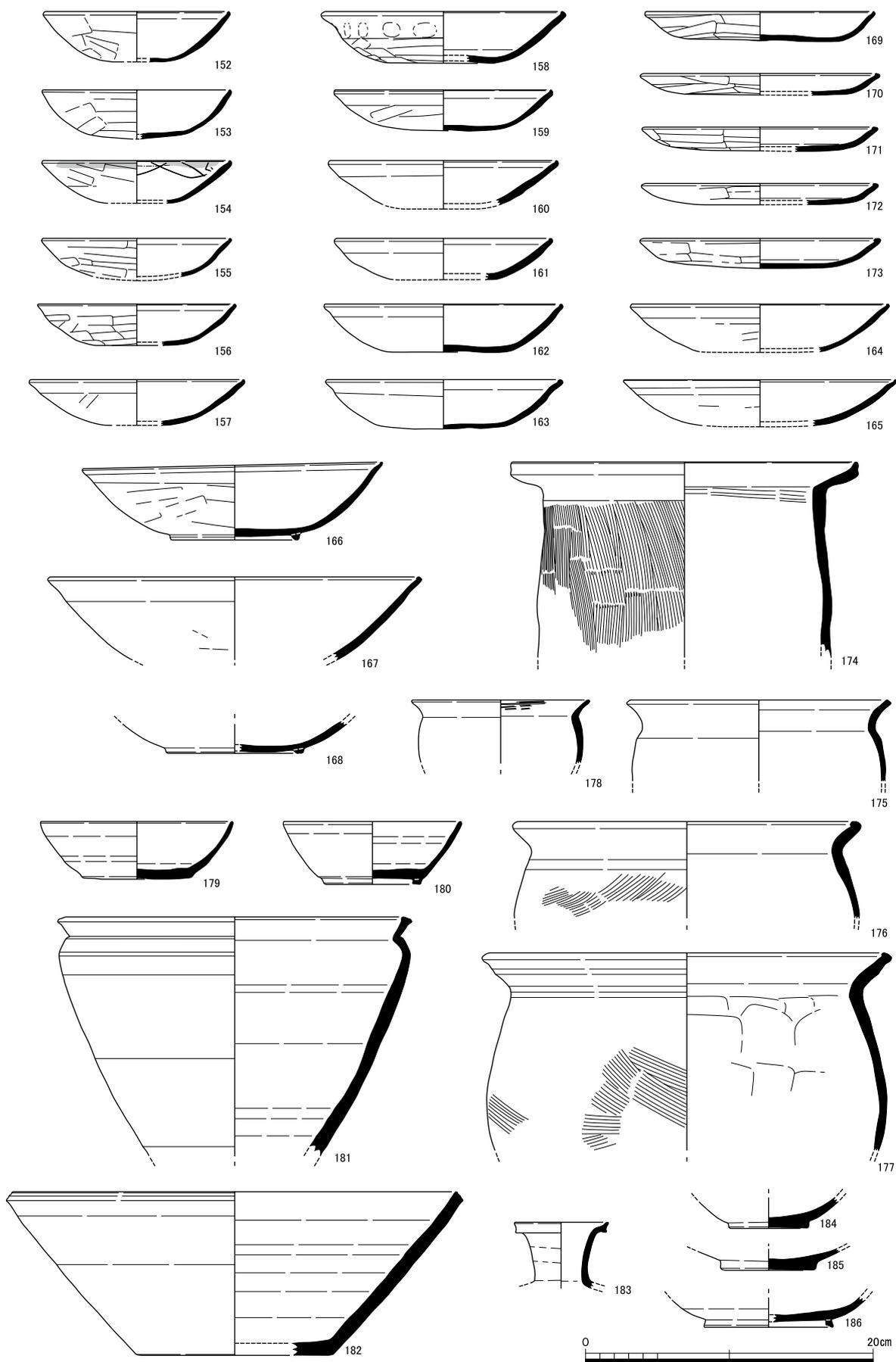


图42 土坑189出土土器实测图（1：4）

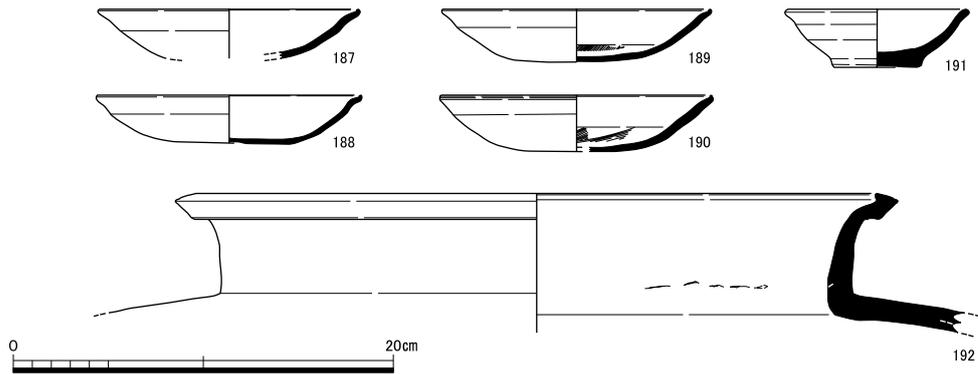


図43 井戸847出土土器実測図（1：4）

## （2）平安時代中期の土器類

井戸847（図43、図版39）土師器・須恵器・緑釉陶器がある。時期はⅡ期中段階である。

土師器には杯Aがある。杯A（187～190）は口径13.8～14.5cmを測る。口縁部の屈曲が強く器壁が薄いもの（187～189）と屈曲が弱く器壁が厚いもの（190）がある。

須恵器には甕（192）がある。口径38.2cmを測る。張り気味の肩部から口縁部は垂直に立ち上がり、口縁端部は肥厚する。内外面ともにすり消しで、タタキ・当て具痕跡は確認することができない。

緑釉陶器には椀（191）がある。口径9.8cm、器高3.0cmを測る。高台は削り出しによる平高台である。外面底部は糸切りである。ヘラミガキは外面底部以外に全面に粗く施す。施釉は内面に濃緑色の釉薬を施釉するが、外面は器面がほとんど剥離しており範囲は不明である。焼成は軟質。山城

表8 溝261出土土器の構成 産である。

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	椀・皿・杯	726	85.8%
	高杯・盤	39	4.6%
	甕	71	8.4%
	他	2	0.2%
	不明	8	1.0%
	小計	846	100.0%
黒色土器	椀・皿・杯	17	56.7%
	鉢	0	0.0%
	甕	13	43.3%
	他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	30	100.0%
須恵器	椀・皿・杯	39	25.3%
	壺・瓶	25	16.2%
	鉢	28	18.2%
	甕・大壺	62	40.3%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
小計	154	100.0%	
緑釉陶器	椀・皿・杯	32	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	32	100.0%
白色土器	椀・皿・杯	4	57.1%
	壺・瓶	1	14.3%
	他	0	0.0%
	不明	2	28.6%
	小計	7	0.0%
灰釉陶器	椀・皿・杯	2	25.0%
	壺・瓶	4	50.0%
	他	2	25.0%
	不明	0	0.0%
	小計	96	100.0%
総数		1077	100.0%

溝261（図44、表8）出土した土器類の総破片数は1,077点で、土師器・須恵器・黒色土器・白色土器・緑釉陶器・灰釉陶器がある。器種・器形別の出土比率は表8のとおりである。時期はⅡ期新段階を主とする。

土師器には皿A・杯A・杯B・甕がある。皿A（193・194）は口径13.2cm、器高1.3cmを測るもの（193）と口径14.2cmを測るもの（194）がある。杯A（195～198）は口径14.2～16.2cm、器高2.5～3.4cmを測る。杯B（199～201）は口径16.4cm、器高3.0cmを測るもの（200）、口径17.6cm、器高4.0cmを測るもの（199）、口径19.2cmを測るもの（201）がある。皿Aと杯A・Bの手法・形態は共通しており、口縁部は屈曲し、口縁端部は上方につまみあげる。高杯脚部（202）は底部径14.2cmを測る。断面六角形に面取りを施す。甕（203）は口径13.2cmを測る。体部外面は斜め方向の平行タタキ痕がわずかに残る。

須恵器には杯B・壺L・壺Mがある。壺L（204）は口径10.2

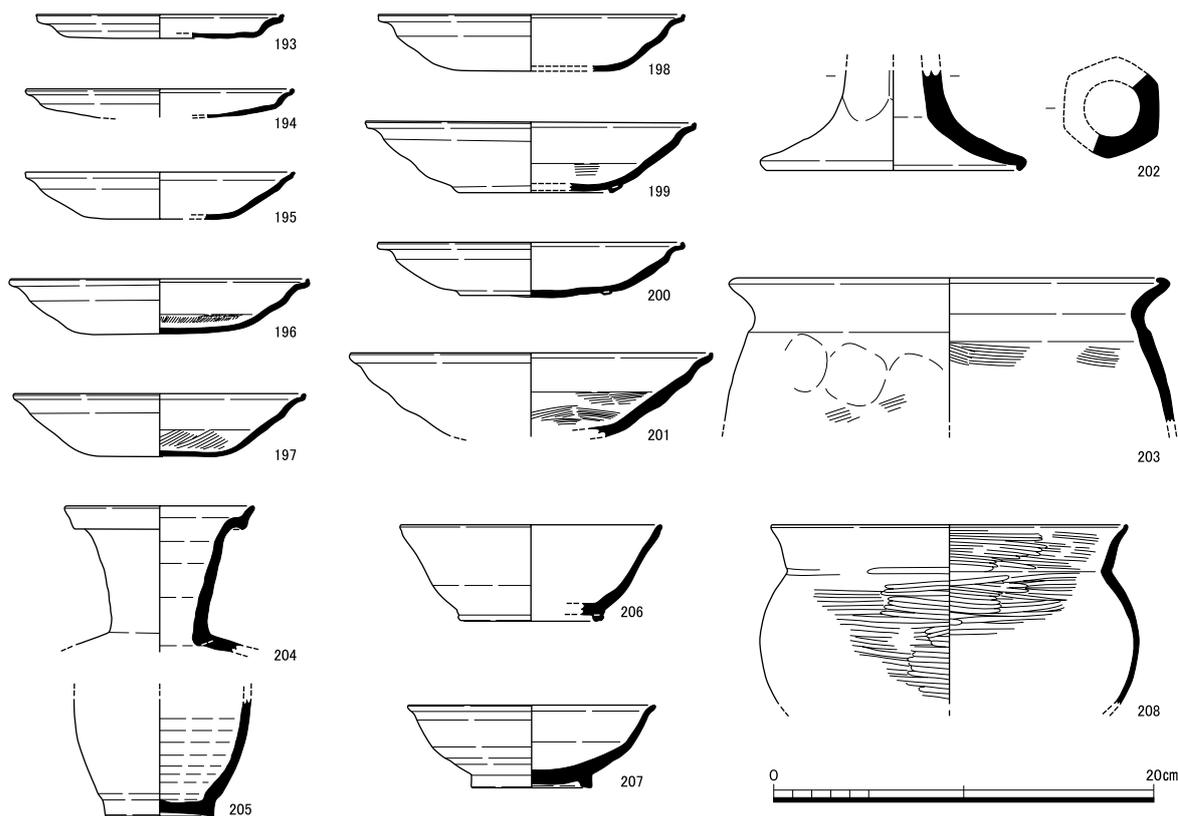


図44 溝261出土土器実測図（1：4）

cmを測る。頸部は外側に開きながら立ち上がり、口縁部は屈曲して凹面をなす。壺M（205）は底径6.0cmを測る。底部はヘラ切りである。杯B（206）は口径14.8cm、器高5.1cmを測る。

緑釉陶器には椀（207）がある。口径13.2cm、器高4.4cmを測る。高台は削り出しによる輪高台、ヘラミガキは外面底部を除いて全面に粗く施す。施釉は透明感のある淡緑色の釉薬を外面底部以外に掛ける。山城産。

黒色土器には甕（208）がある。口径18.8cmを測る。内外面にヘラミガキを施すが、外面口縁部は煤の付着により確認できない。

**柘状遺構876**（図45） 土師器・須恵器・黒色土器・白色土器・緑釉陶器があるが、図示できるものは土師器のみである。時期はⅡ期新段階である。

土師器には杯A・杯Bがある。杯A（209～211）は口径20.4～20.6cmを測る。杯B（212）は口径24.6cm、器高3.9cmを測る。杯A・Bは手法・形態が共通しており、口縁部は屈曲し、口縁端部は上方につまみあげる。

### （3）平安時代後期の土器類

**池462**（図46） 土師器・輸入陶磁器があり、土師器の皿が大半を占める。皿Ac（213・214）は口径10.0cmを測る。皿N（215～223）には口径9.8～10.2cm（215～219）、14.2～15.7cm（220～

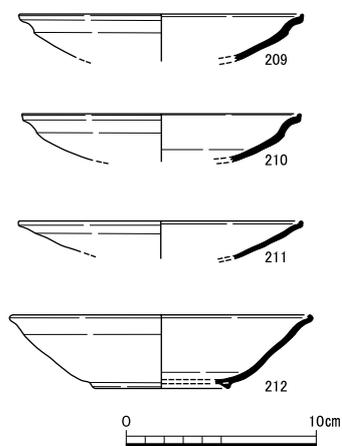
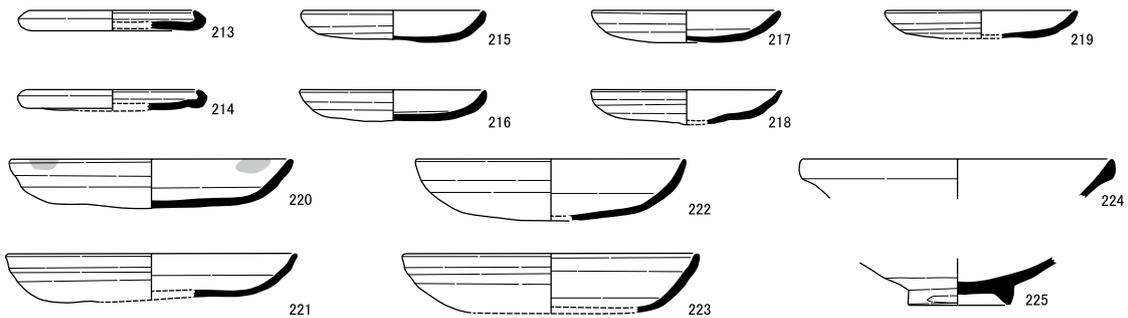
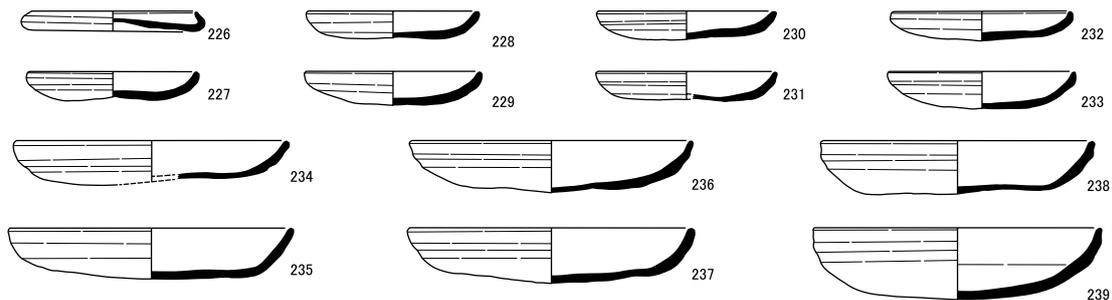


図45 柘状遺構876出土土器実測図（1：4）

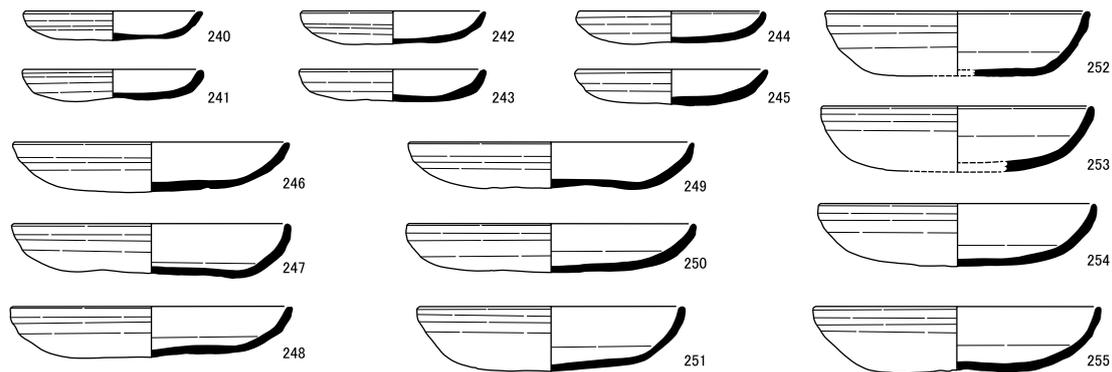
池462



岬848土留内側構築土



岬848土留外側構築土



池452

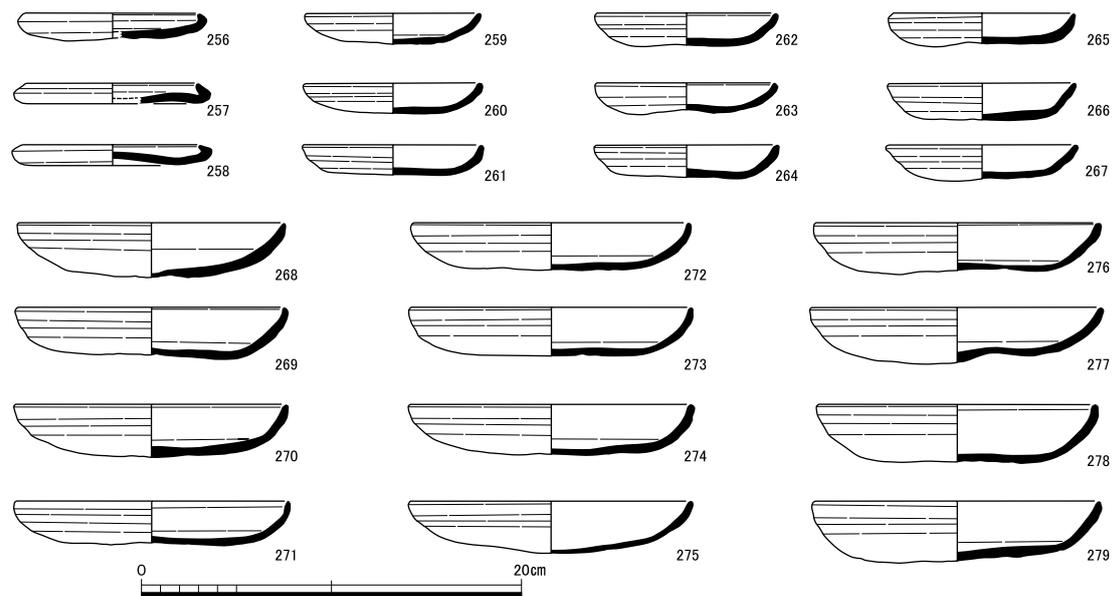
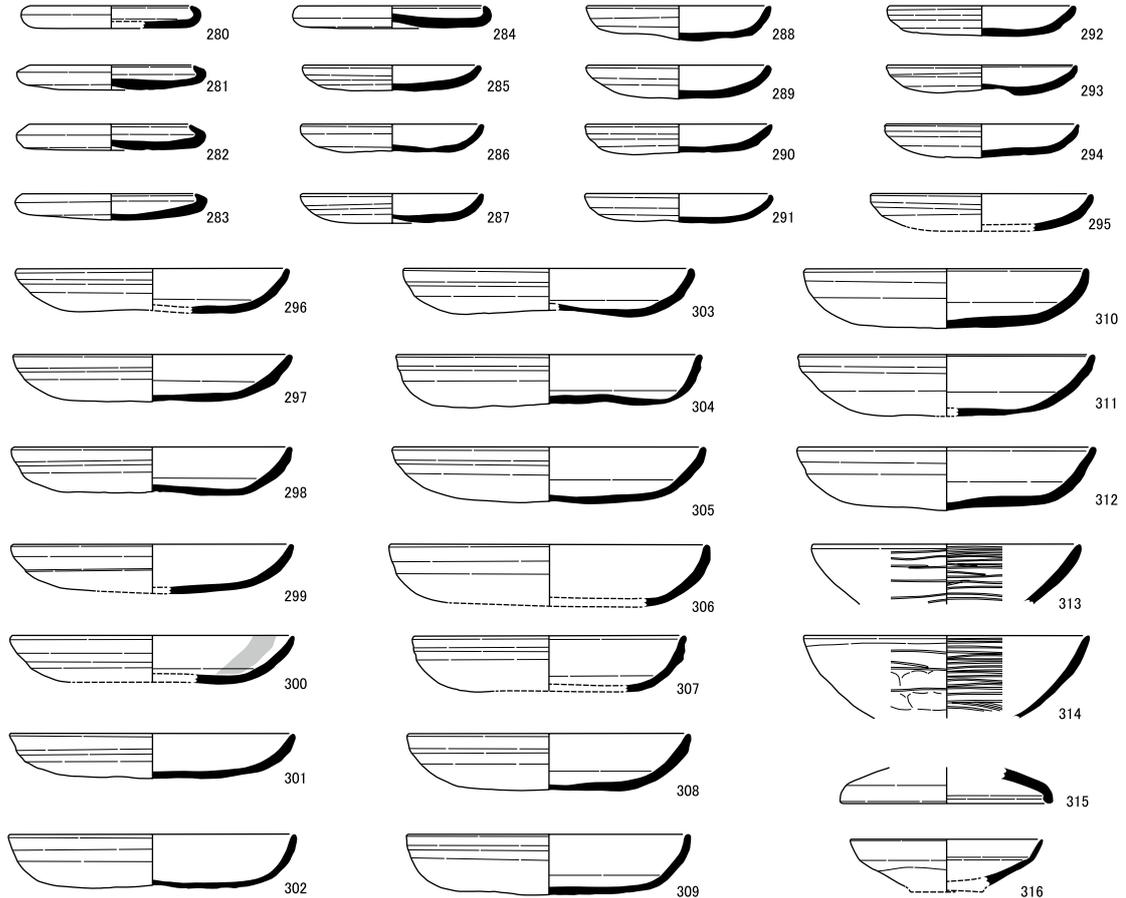


图46 池462、岬848、池452出土土器实测图（1：4）

223) の2群がある。口縁部には2段のナデが施され、外側に開き気味のもの(220・221)と上方につまみ上げるもの(222・223)がある。220は口縁端部に煤が付着している。222・223は器高3.2cmの深手の皿である。これらの土師器の時期はV期古段階から中段階である。

輸入陶磁器には白磁碗Ⅳ類の口縁部(224)と底部(225)がある。224の口径は16.7cm、225の底径は5.4cmを測る。

入江820



池288

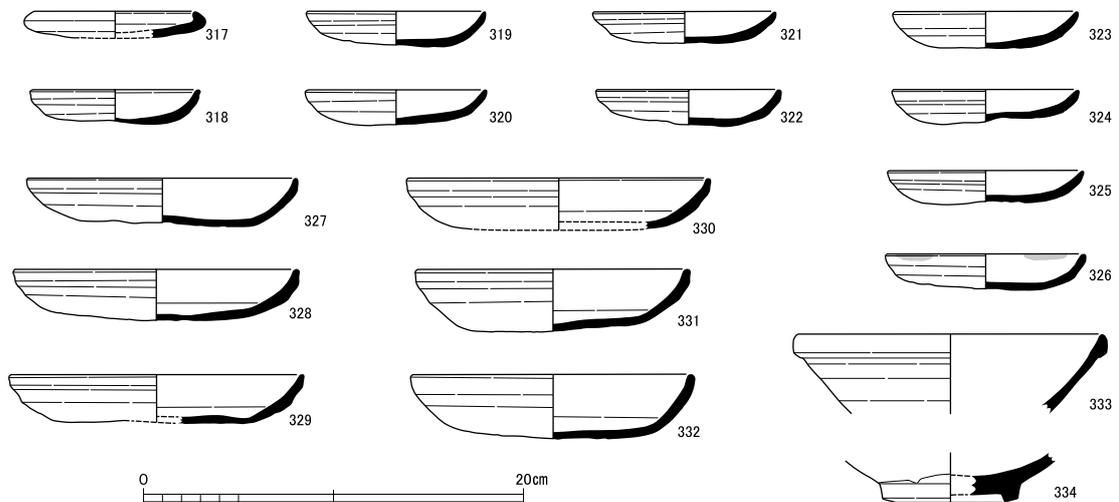


図47 入江820、池288出土土器実測図(1:4)

岬848土留内側構築土（図46、図版39） 土師器の皿がある。皿Ac（226）の口径は9.7cmを測る。皿N（227～239）には口径9.1～10.0cm（227～233）、14.6～15.3cm（234～239）の2群がある。口縁部には2段のナデが施され、口縁端部は上方につまみ上げる。239は器高3.8cmの深手の皿である。これらの土師器の時期はV期古段階から中段階である。

岬848土留外側構築土（図46、図版39） 土師器の皿がある。土師器は皿N（240～255）である。口径から9.5～10.2cm（240～245）と14.4～15.3cm（246～255）の2群がある。口縁部には2段のナデが施され、口縁端部は上方につまみ上げる。251～255は器高3.4～3.5cmの深手の皿である。これらの土師器の時期はV期古段階から中段階である。

池452（図46、図版40） 土師器の皿がある。皿Ac（256～258）の口径は10.0～10.6cmを測る。皿N（259～279）には口径が9.3～10.2cm（259～267）と14.2～15.5cm（268～279）の2群がある。口縁部には2段のナデが施され、口縁端部は上方につまみ上げる。278・279は器高3.1～3.3cmの深手の皿である。275は口縁端部に煤が付着している。278の底部内面に煤が斑点状に付着する。これらの土師器の時期はV期古段階から中段階である。

入江820（図47、図版40） 土師器・白色土器・瓦器・輸入陶磁器があり、土師器の皿が大半を占める。時期はV期古段階から中段階である。

土師器には皿Ac（280～284）・皿N（285～312）がある。皿Acの口径は9.5～10.5cmを測る。皿Nには口径9.5～10.3cm（285～294）、11.8cm（295）、14.5～17.0cm（296～312）の3群がある。口縁部には2段のナデが施され、口縁端部は上方につまみ上げる。307～312は器高2.9～3.3cmの深手の皿である。300の内面には煤が付着している。

瓦器には樟葉型の椀（313・314）があり、底部を欠損する。口径は313が14.2cm、314が15.0cmを測る。

白色土器には高杯（315）の脚部がある。底径は11.2cmを測る。

輸入陶磁器には白磁皿VI類（316）がある。口径は10.2cmを測る。

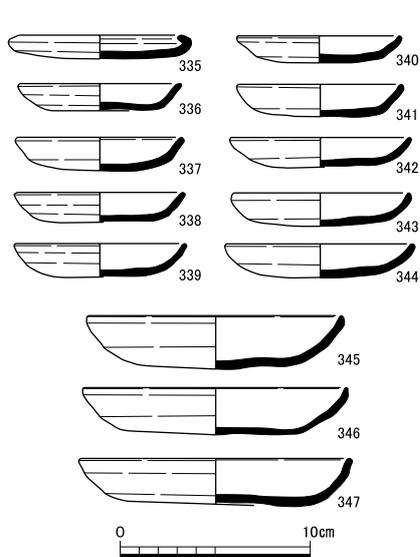


図48 土器溜211出土土器実測図（1：4）

池288（図47、図版40） 土師器・輸入陶磁器があるが、土師器の皿が大半を占める。

土師器には皿Ac（317）・皿N（318～332）がある。皿Acの口径は9.6cmを測る。皿Nには口径9.0～10.6cm（318～326）、14.3～16.1cm（327～332）の2群がある。口縁部には2段のナデが施され、口縁端部は上方につまみ上げる。331・332は器高3.3～3.4cmの深手の皿である。326の口縁端部に煤が付着している。これらの土師器皿の時期はV期中段階である。

輸入陶磁器には白磁椀IV類の口縁部（333）と底部（334）の破片がある。333の口径は16.5cm、334の底径は7.2cmを測る。

土器溜211 (図48) 土師器がある。土師器には皿Ac (335)・皿N (336～347) がある。皿Acの口径は9.3cmを測る。皿Nは口径8.7～10.1cm (336～344)、13.7～14.6cm (345～347) の2群がある。皿は底部から口縁部への立ち上がりが緩やかである。345は器高が2.9cmを測る深手の皿である。これらの土師器の時期はV期中段階である

#### (4) その他の土器類

輸入陶磁器 (図49、図版40・41) 越州窯青磁・白磁・長沙窯黄釉陶器・黄釉鉄絵陶器などがあり、大きく平安時代前期と平安時代後期に属するものに分かれる。多くが江戸時代の素掘り溝からの出土であるが、一部、岬848構築土などからも出土している。

越州窯青磁 (348～351) には碗・杯・托・唾壺などがある。唾壺 (348) は口径15.2cmを測る。口縁部下方に削り出しによる突帯、上方に2条の沈線を巡らす。口縁端部は上方に屈曲する。施釉は全面に黄灰色の釉薬が掛けられる。胎土は精良である。近世素掘り溝から出土。托 (349) は底径6.0cmを測る。内面が底部から体部へかけて急激に立ち上がる。施釉は内外面の全面に黄灰色の釉薬が掛けられる。胎土には黒色の細粒が含まれる。近世素掘り溝から出土。杯 (350) は底部がわずかに窪み、体部は外側に開きながら立ち上がる。施釉は内外面全面に黄灰色の釉薬が掛けられる。胎土は精良である。2区池452南岸構築土から出土。碗 (351) は底径7.2cmを測る。施釉は内外面全面に黄灰色の釉薬が掛けられるが、底部外周は部分的に削り、目跡が残る。胎土は精良である。岬848土留外側構築土から出土。

平安時代前期の白磁には碗 (352・353) がある。いずれも近世素掘り溝からの出土である。352は底径7.0cmを測る。高台はやや幅の広い蛇の目高台である。施釉は高台畳付け以外の内外面に施す。色調はやや青みを帯びた白色である。353は底径7.0cmを測る。高台は輪高台である。施釉は高

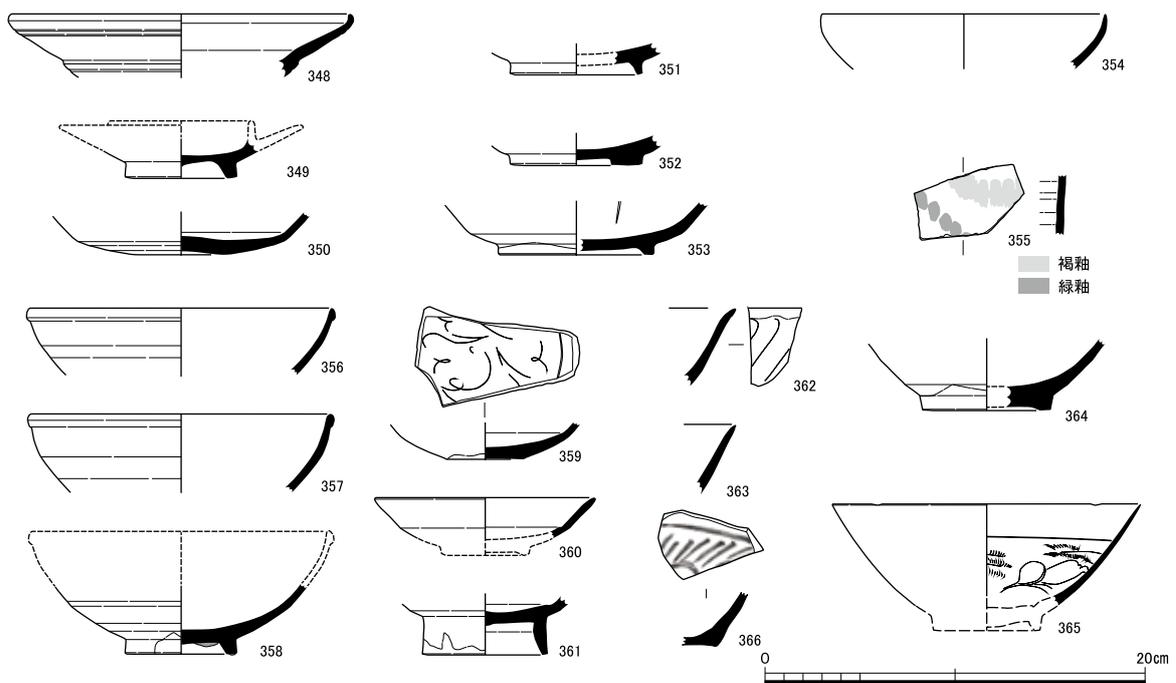


図49 輸入陶磁器実測図 (1 : 4)

台畳付け以外の内外面に施し、色調は乳白色を呈する。

長沙窯黄釉陶器（354・355）には椀・水注がある。いずれも近世素掘り溝から出土。椀（354）は口径15.0cmを測る。施釉は灰黄色の釉薬を薄く全面に掛ける。焼成はやや軟質で、胎土は精良、色調は淡橙色を呈する。水注（355）は体部の小片である。施釉は外面のみ、白化粧を施した淡灰色の素地に黄灰色の釉薬を掛け、その上から褐彩と緑彩を施す。焼成は硬質である。

平安時代後期の白磁（356～365）には椀・皿がある。白磁椀Ⅱ類（356～358）は、356が口径16.2cm、357が口径16.8cmを測る。施釉は高台以下以外の内外面に掛ける。色調は淡灰白色を呈する。皿（359・360）は2点ある。359は底部は上げ底気味で、内面に花文状のヘラガキを施す。施釉は外面底部以外に全面に施す。色調は淡灰白色を呈する。1区平安時代後期整地層から出土。360は口径11.6cmを測る。体部下半で屈曲する。施釉は全面に施す。色調は黄白色を呈する。1区平安時代後期整地層から出土。白磁椀Ⅴ類（361～363）は底部と口縁部がある。362の外面にはヘラガキによる花卉文を施す。施釉はいずれも内外面で、361は底部外面と高台内側以外である。色調は灰白色を呈する。361は岬848土留外側構築土、362・363は1区平安時代後期整地層から出土した。白磁椀Ⅳ類（364）は底部径6.8cmを測る。施釉は外面高台以下以外である。色調は白灰色を呈する。近世素掘り溝から出土。白磁椀（365）は口径16.4cmを測る。体部から口縁部は外側に開きながら直線的に立ち上がる。口縁は輪花状を呈する。施釉は内外面に施し、色調はやや青みを帯びた透明感のある白色である。内面にはヘラガキと櫛刀により草花文様が施される。器壁はきわめて薄く、青白磁の可能性もある。池452から出土。

黄釉鉄絵陶器は盤（366）が出土している。施釉は内面のみで鉄絵を施し黄灰色の釉薬を掛ける。石組溝262から出土。

製塩土器（図50、図版40） 製塩土器（367～375）は落込み456から出土した。破片数にして約130点、重量にして1,710gを測り、平安京内の一つの遺構からの出土量としては多い。口径9.0～10.6cmを測る。全体の形が判明するものはないが、口縁部は外反するもの（367～371）と直立するもの（372）がある。成形方法は、ほとんどが粘土紐巻き上げであるが、内面に布目を残す型作り成形（372・375）もある。口縁形態・成形技法の違いから、製塩土器分類のC類（372）とG類（367～371）になる。

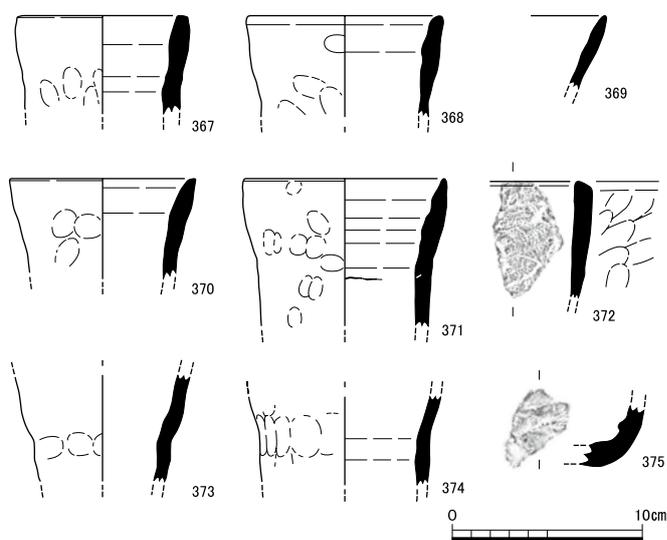


図50 製塩土器実測図（1：4）

もの（372）がある。成形方法は、ほとんどが粘土紐巻き上げであるが、内面に布目を残す型作り成形（372・375）もある。口縁形態・成形技法の違いから、製塩土器分類のC類（372）とG類（367～371）になる。

弥生土器・須恵器（図51） 弥生土器・古墳時代の須恵器は少量出土するが、すべて平安時代の整地層などからの出土で遺構に伴うものはない。

弥生土器は壺・甕が出土している。いずれも器面はやや磨滅している。

甕 (376) は口縁部が受口状を呈し、端部は上方につまみ上げる。口縁部内面はハケ目調整、その他は磨滅により不明である。色調は暗灰褐色で、胎土に0.5mmの白色粒をわずかに含む。2区南西部平安時代中期整地層から出土。甕 (377) は底部である。外面調整はハケ目で、色調は灰褐色を呈する。2区平安時代後期整地層から出土。

壺 (378～380) はすべて底部である。外面調整は378が縦方向ヘラケズリ、他は磨滅のため不明である。色調は378が灰褐色、379が明褐色、380が黄褐色である。379の胎土には1～3mmの白・灰色粒を多く含む。時期はいずれも判然としないが、378が後期、それ以外は中期と思われる。378が1区平安時代前期整地層、379がタタキ433構築土、380が池452から出土。

須恵器は壺の頸部 (381) が出土している。頸部上方には2条の突帯を巡らし、その下方に波状文を施す。全体に磨滅が著しい。池452から出土。

## 2. 土製品 (図版49)

土馬 (図52) 大きさには大小がある。脚の裏から背までが3.8～4.0cmを測るもの (387・391) と5.2cmを測るもの (389) である。いずれも粘土板から頸部・尾部・四肢をつまみ出し、折り曲げて成形する。頭部は粘土円盤を折り曲げて頸部に挟み成形する。焼成はすべて土師質である。387・391が水場448から、388～390が落込み456から出土。

土錘 (図52) 完形のものはない。392は直径1.6cm、重さ11.8g、393は直径0.9cm、重さ4.3g、394は直径1.1cm、重さ4.0gを測る。焼成はすべて土師質。392・393は2区南西部の平安時代後期整地層、394は池462から出土。

硯・その他 (図53) 硯には風字硯と圈足円面硯があり、円面硯に似た用途不明の土製品がある。すべて須恵質である。硯にはすべて墨痕が認められる。

風字硯 (382～384) は堤部の立ち上がりの高さに違いはあるが、製作技法は共通している。粘土板の縁を折り曲げて堤部とし、堤部外面及び端面はヘラケズリ、内面はナデ、外面底部はヘラミガキを施す。硯面は使用により平滑になっており、382・384には焼成時の

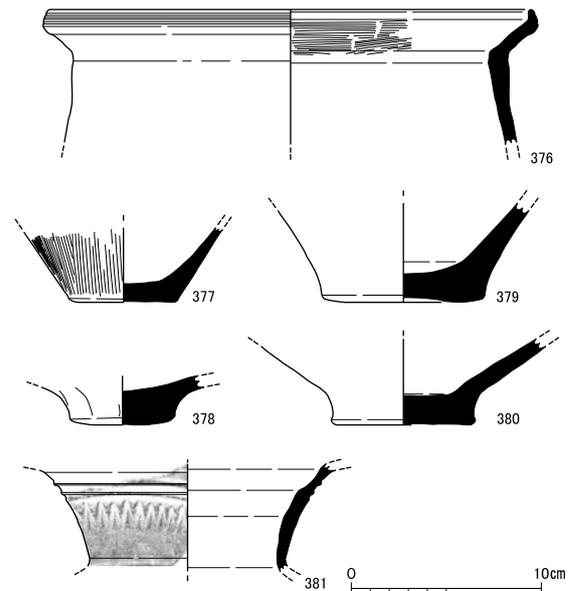


図51 弥生・古墳時代土器実測図 (1:4)

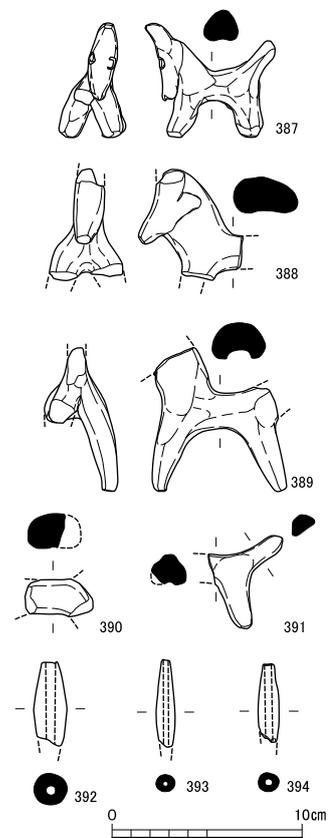


図52 土製品実測図1 (1:4)

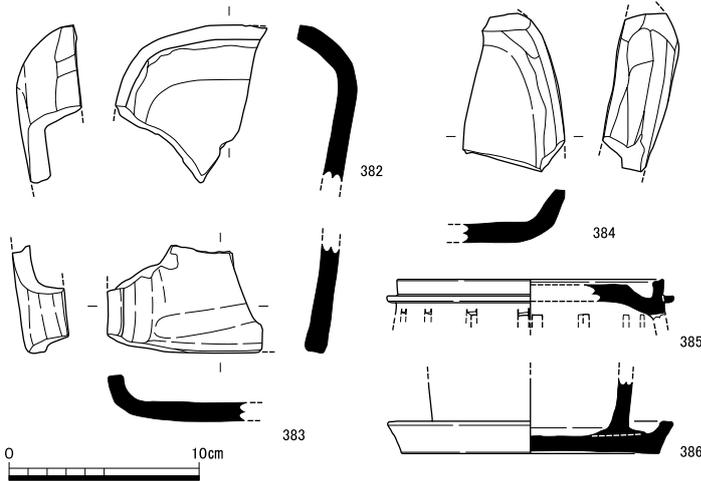


図53 土製品実測図2 (1:4)

降灰が認められる。382・384が1区平安時代前期整地層から、383が落込み456から出土。

圈足円面硯(385)は外堤径14.2cmを測る。陸部は平坦で、外堤部は貼り付け成形で、回転ナデ調整によって海部を作る。硯面は使用により平滑になっている。焼成時の降灰が硯面の裏面に認められる。近世素掘り溝から出土。

円面硯形土製品(386)は外形は円形で、外堤状の立ち上がりと内側の脚状の立ち上がり、その間の凹部からなる。外堤状部径15.2cm、立ち上がり高0.7cm、脚状になる立ち上がりは基底部径10.2cm、残存高3.6cmを測る。成形は円盤状の底部に、外堤状部は内外面を回転ナデ、脚状の内底部は貼り付け後に回転ナデを施す。外面底部は回転ヘラ切りである。降灰釉が外堤状部とその内側の凹部に掛かるが、脚状の内堤部の内側には掛からない。このことから脚状立ち上がりの内側は中空であったことがわかる。形状は無脚の円面硯に似ており、外堤状部が外堤部、脚状の立ち上がりが内堤部、その間の凹部が海部を形成するともみられるが、その場合硯面と海部の比高差が高くなりすぎる。また墨痕もみられない。平安京内では類例の出土はなく、用途は不明である。1区南西部の平安時代前期整地層から出土。

### 3. 瓦類 (図版42～46)

瓦当は時期別に見ると、長岡京期、平安時代前期・中期・後期があり、量的には後期のものが大半を占める。出土遺構をみると、前・中期の瓦は柱穴・溝・整地層などから散発的に出土し、後期の瓦は瓦の廃棄土坑である土坑96・106・631・716・732・739からまとまって出土する。以下では、初めに瓦廃棄土坑出土の平安時代後期の瓦について様相について述べる。個々の瓦についてはその後に、山城産の軒丸瓦・軒平瓦、和泉産の軒丸瓦・軒平瓦、丸瓦、平瓦の順で、産地毎・種類別に述べる。

#### (1) 瓦廃棄土坑出土の平安時代後期の瓦 (表9・10)

平安時代後期の瓦が主に出土した廃棄土坑は、検出位置から西群(土坑96・106)と東群(土坑631・716・732・739)に分かれるが、瓦の産地も東西それぞれで異なる。西群の土坑からは和泉産瓦のみが出土し、東群の土坑からは山城産瓦のみが出土する。いずれの土坑からも被熱痕跡のある瓦とともに焼けた壁土や炭化物などが出土している。共伴する土師器皿の小片には时期的な差は認め難く、東西に分かれて存在した建物が火災によって同時に焼失し、その瓦を廃棄したものと思われる。一つの宅地に同時併存した建物に、それぞれ産地の異なる瓦が葺かれていた理由は明らかではないが、瓦の入手経路に多様性が存在したことが窺われる。

表9 西群土坑出土瓦の重量一覧表

	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	重量計(kg)
土坑96	30.82	16.70	15.60	35.72	98.84
土坑106	49.30	58.60	24.10	92.62	224.62
重量計(kg)	80.12	75.30	39.70	128.34	323.46
比率	24.77%	23.28%	12.27%	39.68%	100.00%

表10 東群土坑出土瓦の重量一覧表

	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	重量計(kg)
土坑631	4.24	11.08	9.26	13.62	38.20
土坑716	3.90	6.10	10.80	10.96	31.76
土坑732	3.80	5.72	11.62	6.34	27.48
土坑739	4.00	4.62	9.18	8.30	26.10
重量計(kg)	15.94	27.52	40.86	39.22	123.54
比率	12.90%	22.28%	33.07%	31.75%	100.00%

瓦類の構成比率を重量比でみると、西群土坑出土の和泉産瓦は、軒丸瓦が約25%、軒平瓦が約23%、丸瓦が約12%、平瓦が約40%である。東群土坑出土の山城産瓦は、軒丸瓦が約13%、軒平瓦が約22%、丸瓦が約33%、平瓦が約32%となる<sup>6)</sup>。西群と東群で若干比率が異なるが、いずれも軒丸瓦・軒平瓦の比率が高いことが共通している。また平瓦をみると、明確な打欠き痕跡は見出せないが、縦半分程度に割れたものが多い。これらのことから、瓦廃棄土坑から出土した瓦は、桧皮・板葺き建物などの棟瓦として利用されていたものと考えられる。なお、ほぼ完形の和泉産の重量は、軒丸瓦が約3kg(瓦32)、軒平瓦が約5kg(瓦38)、丸瓦が約2kg(瓦43)、平瓦が約3kg(瓦48)である。各種瓦の出土重量を単純に個体重量で割り算すると、軒丸瓦が約27枚、軒平瓦が15枚、丸瓦が約20枚、平瓦が約43枚となる。

瓦の廃棄時期は、遺構の検出状況から庭園遺構4期廃絶時期と同じ12世紀前半でも中頃に近い時期と考えられる。和泉産瓦は、平安京内からまとまって出土することはほとんどなく、その年代を知りうる例はこれまで極めて少なかった。今後の瓦編年の基準となると思われる。

## (2) 山城産軒丸瓦 (図54)

軒丸瓦は平安時代前・中・後期のものがそれぞれあるが、後期の瓦が大半を占める。

瓦1は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。近世の素掘り溝から出土した。瓦当裏面はほとんど遺存しないがナデ調整、側面はヘラケズリである。焼成はやや軟質で、色調は外面が黒色、内面は白灰色を呈する。胎土は比較的精良で0.1～0.5mmの白色粒を含む。平安時代前期。

瓦2は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。井戸359の井戸枠内から出土した。間弁は複線で表現され特徴的である。瓦当裏面は遺存しない。焼成はやや軟質で、色調は外面が黒色、内面は白灰色を呈する。胎土は比較的精良で0.1～0.5mmの白色粒を含む。平安時代前期。

瓦3は単弁十二葉蓮華文の小型軒丸瓦である。1区の平安時代後期整地層から出土した。瓦当裏面はナデ調整、側面はヘラケズリである。色調は外面が黒色、断面は灰褐色を呈する。胎土には0.1～0.5mmの白色粒をやや多く含む。岸辺瓦窯のKa3と同範と思われるが、岸辺瓦窯出土瓦としては

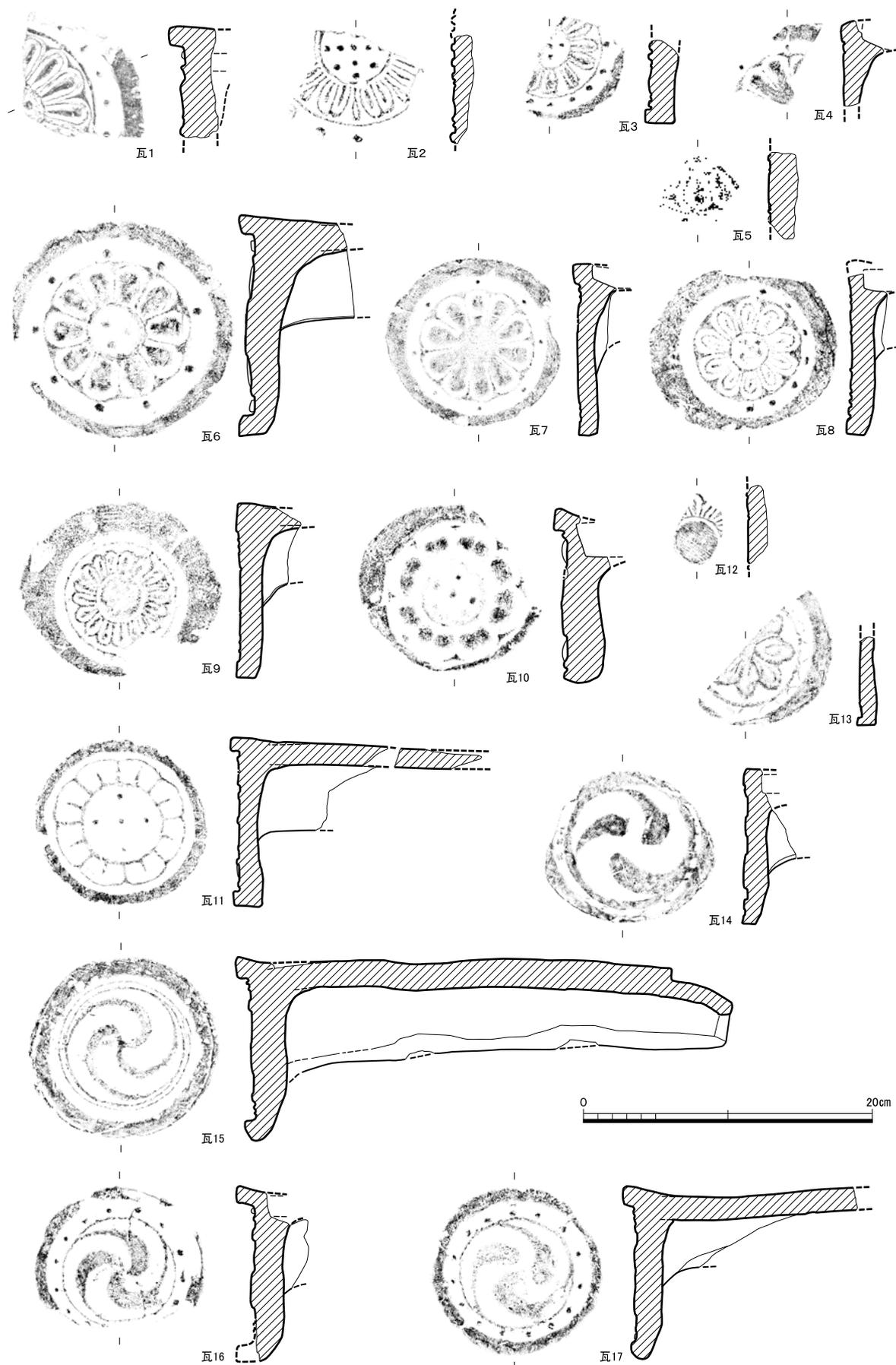


图54 山城産軒丸瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

胎土に砂粒が多い<sup>7)</sup>。

瓦4・5は複弁四葉蓮華文軒丸瓦である。共に近世の素掘り溝から出土した。瓦当裏面は遺存しないが、断面が凹型を成す剥離状況から一本作り成形と考えられる。色調は、瓦4は内外面が橙白色、瓦5は外面が黒色内面は橙白色を呈する。いずれも胎土は精良で0.1～0.5mmの白色粒を少量含む。平安時代中期。

瓦6は単弁十葉蓮華文軒丸瓦である。岬848土留外側構築土から出土した。瓦当裏面はナデであるが、下端部は斜め方向のヘラケズリ、側面もヘラケズリを施す。色調は内外面共に黒褐色を呈する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。平安時代後期。同範が尊勝寺跡より出土している。

瓦7は単弁十葉蓮華文軒丸瓦である。土坑732から出土した。瓦当裏面はナデ、側面はヘラケズリである。色調は瓦当面が灰白色、瓦当裏面と断面が黒色を呈する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。平安時代後期。この他に同範瓦が土坑732から3点出土している。

瓦8は単弁十葉蓮華文軒丸瓦である。土坑716から出土した。瓦当裏面はナデ、側面はヘラケズリである。色調は瓦当面上端が黒色、他は灰白色を呈する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。平安時代後期。この他に同範瓦が土坑739から4点出土している。

瓦9は単弁十七葉蓮華文軒丸瓦である。集石856から出土した。瓦当裏面はナデ、側面はヘラケズリである。色調は外面が黒灰色、断面は灰白色を呈する。胎土には0.1mmの白色粒、雲母を少量含む。平安時代後期。この他に同範瓦が土坑739から4点出土している。

瓦10は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。岬848土留内側構築土から出土した。瓦当裏面及び側面は粗いナデである。色調は外面が黒灰色、断面は灰白色を呈する。胎土には0.1mmの白色粒、雲母を少量含む。平安時代後期。この他に同範瓦が土坑739から4点出土している。

瓦11は蓮華文軒丸瓦である。土坑739から出土した。瓦当裏面調整は剥離により不明である。色調は内外面共に灰白色を呈する。胎土に0.5mmの白色粒・黒色粒を少量含む。平安時代後期。この他に同範瓦と思われる小片が土坑739から1点出土している。

瓦12は蓮華文軒丸瓦である。土坑732から出土した。瓦当裏面ナデ、側面はヘラケズリである。色調は内外面共に灰白色を呈する。胎土に0.5mmの白色粒・黒色粒を少量含む。平安時代後期。

瓦13は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。土坑732から出土した。瓦当裏面・側面はナデである。丸瓦部は凸面が縄タタキ、凹面は布目が残る。色調は内外面共に橙灰色を呈する。胎土に0.5～2mmの白色粒を多く含む。平安時代後期。

瓦14は巴文軒丸瓦である。土坑732から出土した。右巻きの三巴の尾部は繋がって圏線状をなし、この外側には多くの範傷がみられる。瓦当裏面はナデ、側面はヘラケズリである。色調は外面・断面共に灰白色を呈する。胎土に0.5～2mmの白色粒を多く含む。平安時代後期。この他に同範瓦が、土坑631から1点、土坑732から2点出土している。

瓦15は巴文軒丸瓦である。土坑631から出土した。右巻きの三巴の尾部は繋がって圏線状をなす。瓦当側面・裏面はナデである。丸瓦部は凸面が縄タタキ、凹面は布目が残る。色調は外面・断面ともに灰白色を呈する。胎土は1～3mmの白色・灰色粒を多く含む。平安時代後期。

瓦16は巴文軒丸瓦である。土坑716から出土した。右巻きの三巴の尾部は繋がって圏線状をなし、この外側に珠文を配する。瓦当裏面・側面はナデである。色調は外面が黒色、断面が灰白色を呈する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。平安時代後期。この他に同範瓦が土坑716から3点、土坑739から5点出土している。

瓦17は同範の巴文軒丸瓦である。土坑716から出土した。右巻きの三巴の尾部は繋がって圏線状をなし、この外側に珠文を配する。瓦当裏面・側面はナデである。丸瓦部は凸面が縄タタキ、凹面は布目が残る。16の色調は外面が黒色、断面が灰白色を呈する。胎土は1～2mmの白色粒を多く含む。平安時代後期。

### (3) 山城産軒平瓦 (図55)

瓦18は均整唐草文軒平瓦である。井戸359の井戸枠内から出土した。瓦当顎部凹凸面ともに横方向ヘラケズリ、側面縦方向ヘラケズリである。平瓦部は凹面布目、凸面は縄タタキの後縦方向ヘラケズリを施す。色調は外面・断面ともに灰白色を呈する。胎土は1mm程度の白色・暗灰色粒を少量含む。長岡京7757型式である。<sup>8)</sup>

瓦19は均整唐草文軒平瓦である。ピット796から出土した。瓦当顎部凹面横方向ヘラケズリ、側面縦方向ヘラケズリである。色調は外面が黒色、断面が黒灰色である。胎土は精良で1mm程度の白色・赤色粒を呈する。時期は、瓦当文様や胎土などから長岡京期と思われるが不明である。

瓦20は均整唐草文軒平瓦である。近世の素掘り溝から出土した。色調は外面が黒色、断面が灰白色を呈する。胎土は1～2mmの白色・暗灰色粒を多く含む。時期は平安時代前期かと思われるが不明である。

瓦21は均整唐草文軒平瓦である。ピット702から出土した。瓦当顎部及び凹面ともに横方向ヘラケズリ、側面縦方向ヘラケズリである。色調は外面が黒色、断面が暗灰色を呈する。胎土は0.5mm程度の白色粒を少量含む。岸辺瓦窯のKb6型式と同範と思われるが、胎土の特徴から大山崎瓦窯<sup>9)</sup>と考えられる。

瓦22は均整唐草文軒平瓦である。集石856から出土した。瓦当凹凸面ともに横方向ヘラケズリ、側面は縦方向ヘラケズリである。色調は外面が黒色、断面が灰色を呈する。胎土は0.5mm程度の白色粒を少量含む。時期は平安時代中期末。

瓦23は唐草文軒平瓦である。土坑732から出土した。瓦当部成形は半折曲げ技法による。瓦当凸面は横方向ヘラケズリ、凹面と裏面はヨコナデ、側面は縦方向ヘラケズリである。平瓦部は、凸面には幅1cmの板状工具による縦方向のタタキの後ナデ、凹面は布目である。色調は瓦当面が暗灰色の他は外面断面共に灰白色を呈する。胎土は0.5mm程度の白色粒を少量含む。時期は平安時代後期。この他に同範瓦が土坑631から3点、土坑732から1点出土している。

瓦24は唐草文軒平瓦である。土坑716から出土した。瓦当部成形は半折曲げ技法による。瓦当凹凸・裏面ともに横方向ヘラケズリ、側面は縦方向ヘラケズリである。平瓦部は、凸面には縦方向のナデ、凹面は布目である。色調は瓦当面が黒色の他は外面断面共に灰白色を呈する。胎土は0.5mm程度の白色粒を少量含む。時期は平安時代後期。この他に同範瓦が土坑631から3点、土坑716か

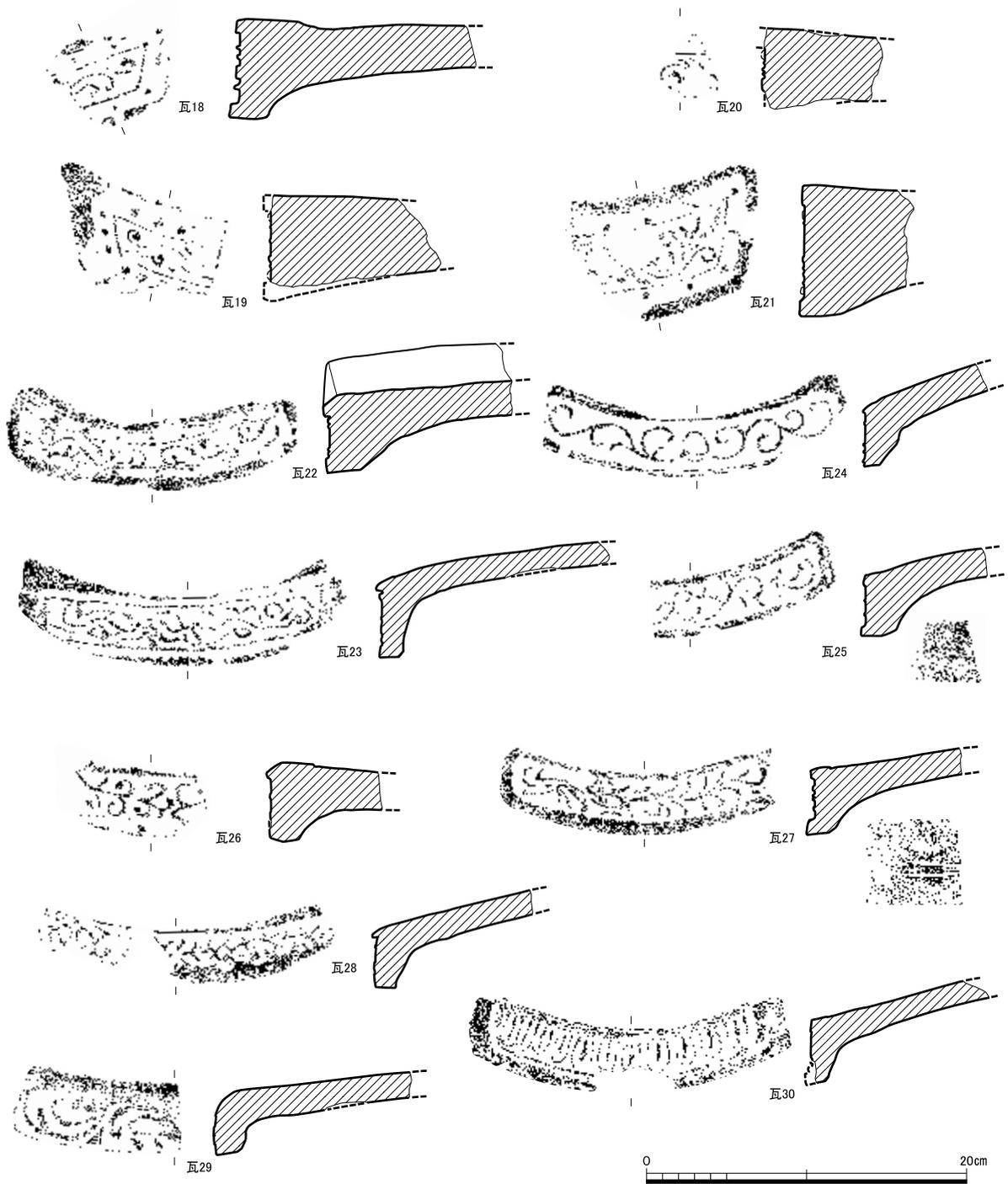


図55 山城産軒平瓦拓影及び実測図（1：4）

ら13点、土坑739から19点出土している。

瓦25は偏向唐草文軒平瓦である。集石856から出土した。瓦当部成形は半折曲げ技法による。瓦当凹凸面は横方向ヘラケズリ、裏面はヨコナデ、側面は縦方向ヘラケズリである。平瓦部は、凸面は縦方向のナデ、凹面は布目である。色調は外面が黒灰色、断面が灰白色を呈する。胎土は0.5mm程度の白色粒を少量含む。時期は平安時代後期。この他に同範瓦が土坑631から3点、土坑716から13点、土坑739から19点出土している。

瓦26は偏向唐草文軒平瓦である。平安時代後期整地層から出土した。瓦当部成形は半折曲げ技法による。瓦当凹凸面は横方向ヘラケズリ、裏面はヨコナデ、側面は縦方向ヘラケズリである。平瓦部は、凸面は縦方向のナデ、凹面は布目である。色調は外面・断面ともに灰白色を呈する。胎土は1～2mmの白色粒を含む。時期は平安時代後期。

瓦27は偏向唐草文軒平瓦である。土坑732から出土した。瓦当部成形は半折曲げ技法による。瓦当凹凸面は横方向ヘラケズリ、裏面はヨコナデ、側面は縦方向ヘラケズリである。平瓦部は、凸面はナデでヘラ記号が残り、凹面は布目である。色調は外面が黒色、断面は灰白色を呈する。胎土は1mmの白色粒を少量含む。時期は平安時代後期。この他に同範瓦が土坑631から4点、土坑732から2点出土している。

瓦28は偏向唐草文軒平瓦である。土坑732から出土した。瓦当部成形は半折曲げ技法による。瓦当凹凸面は横方向ヘラケズリ、裏面はナデ、側面は縦方向ヘラケズリである。平瓦部は、凸面はナデ、凹面は布目である。色調は外面・断面ともに灰白色を呈する。胎土は0.5～1mmの白色・暗灰色粒を少量含む。時期は平安時代後期。

瓦29は唐草文軒平瓦である。土坑732から出土した。瓦当部成形は折曲げ技法による。瓦当凹凸面は横方向ヘラケズリ、裏面は粗いナデ、側面は縦方向ヘラケズリである。平瓦部は、凸面はナデ、凹面は布目である。色調は外面・断面ともに灰白色を呈する。胎土は0.5～1mmの白色・暗灰色粒を少量含む。時期は平安時代後期である。

瓦30は剣頭文軒平瓦である。土坑631から出土した。瓦当部成形は半折曲げ技法による。瓦当凹凸面は横方向ヘラケズリ、裏面はナデ、側面は縦方向ヘラケズリである。平瓦部の凸面はナデ、凹面は一部に布目があるがほぼコビキ痕跡のみである。色調は外面が黒灰色、断面は灰白色を呈する。胎土は0.5～1mmの白色・暗灰色粒を少量含む。時期は平安時代後期である。この他に同範瓦が土坑631から16点、土坑716から13点、土坑732から2点出土している。

#### (4) 和泉産軒丸瓦・軒平瓦 (図56)

瓦31・32は同範の単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦31は範が新しい段階で製作されたもの、瓦32は範を使い続けた結果、傷んだ段階で製作されたもので特に中房の蓮子が不鮮明となる。共に土坑106から出土した。瓦当側面は縦方向ヘラケズリ、裏面はナデである。丸瓦部は凸面が縦方向ヘラケズリ、凹面は布目が残る。玉縁には犬釘を通すための釘穴が穿たれる。釘穴は、瓦31が平面形は方形で9×7mm、瓦32は平面形が楕円形で12×7mmを測る。色調は瓦31が外面は黒灰色、断面が灰白色を呈する。瓦32は外面・断面ともに灰白色で一部2次的な被熱により赤褐色となる。胎土はともに精良で砂粒をほとんど含まない。平安時代後期。この他に同範瓦が土坑96から3点、土坑106から11点出土している。

瓦33・34は同範の単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。共に中央に大きな範傷が認められるが、瓦34の方が範の傷みは進行している。瓦33は土坑96から、瓦34は土坑106から出土した。瓦当側面は縦方向ヘラケズリ、裏面はナデである。瓦当厚は34の方が厚い。丸瓦部は凸面が縦方向ヘラケズリ、凹面は布目が残る。瓦33の玉縁には犬釘を通すための釘穴が穿たれる。釘穴の平面形は方形、

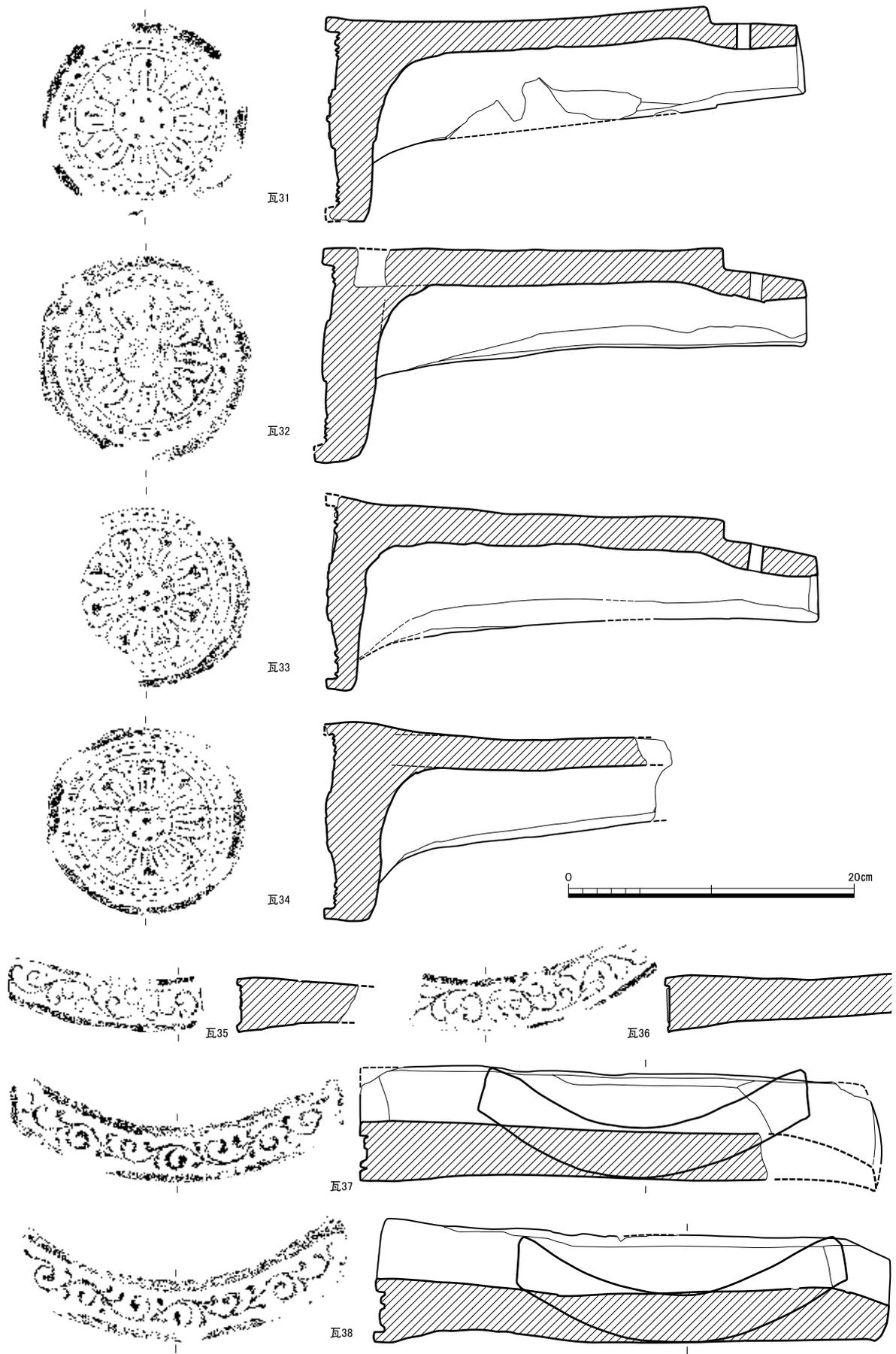


图56 和泉産軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（1：4）

凸面側で7×7mmを測る。色調は33・34ともに外面・断面は灰白色を呈し、一部二次的な被熱により赤褐色となる。胎土はともに精良で砂粒をほとんど含まない。平安時代後期。この他に同范瓦が土坑96から3点、土坑106から2点出土している。

瓦35・36は均整唐草文軒平瓦である。いずれも土坑96から出土した。製作痕跡は共通する。瓦当凹凸面は横方向ヘラケズリ、側面は縦方向ヘラケズリである。瓦35の平瓦部は、凸面には幅約2cmの板状工具による縦方向のナデ、瓦当部付近では横方向のナデ。凹面は幅約2cmの板状工具による横方向のナデを施し、一部布目が残る。色調は外面が黒灰色で部分的に二次的な被熱により赤灰

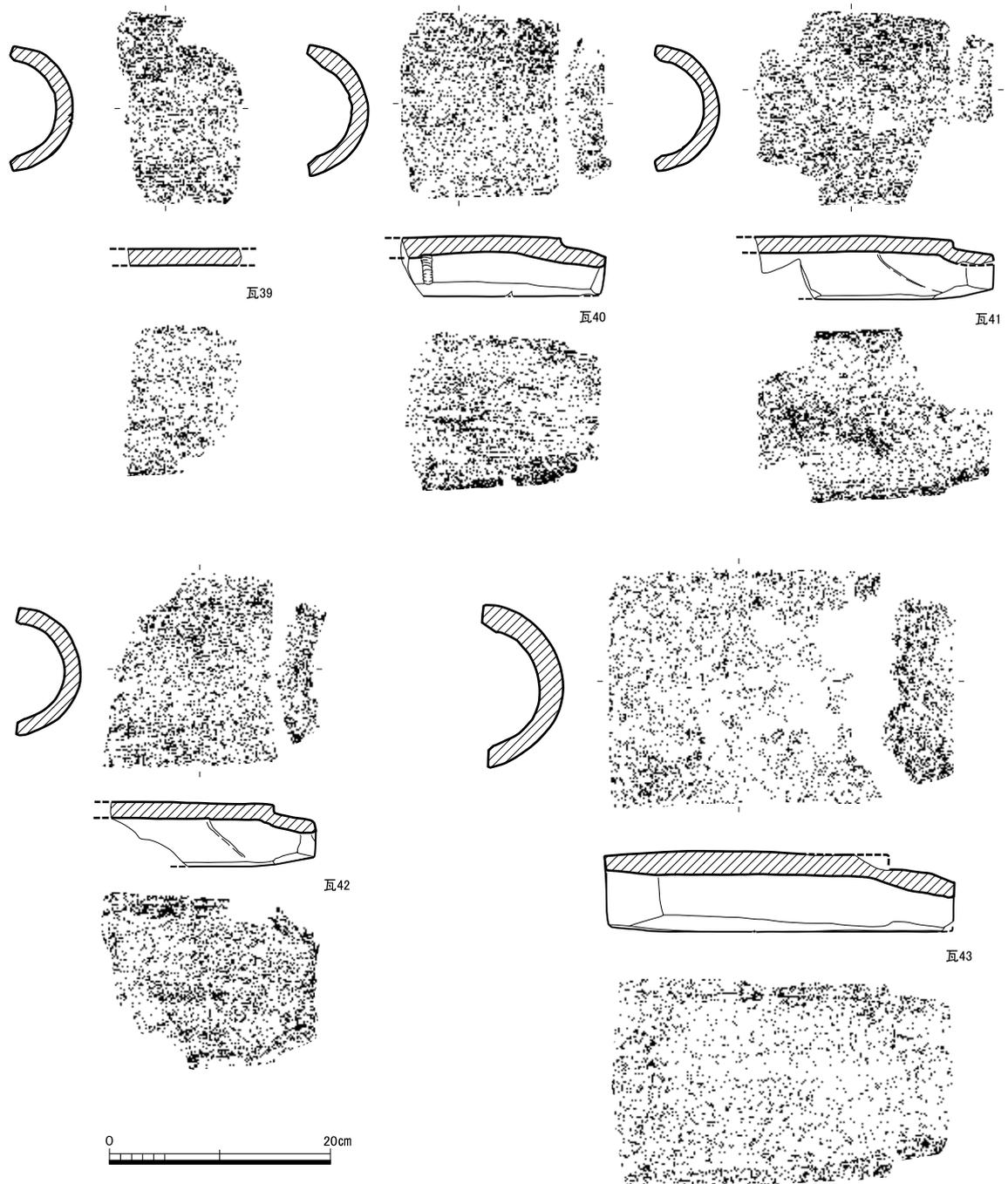


図57 丸瓦拓影及び実測図 (1 : 6)

色、断面は灰白色を呈する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。時期は平安時代後期。

瓦37は偏向唐草文軒平瓦である。土坑106から出土した。瓦当凹凸面は横方向ヘラケズリ、側面は縦方向ヘラケズリである。平瓦部は、凸面には縦方向の縄タタキ、凹面は布目が残る。狭端部は横方向のヘラケズリを施すことで平瓦部の厚さを減じている。色調は外面が黒灰色、断面は灰白色を呈する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。時期は平安時代後期。これらの他に同範瓦が土坑96から2点、土坑106から19点が出土している。

瓦38は偏向唐草文軒平瓦である。土坑106から出土した。製作手法は瓦37と共通している。瓦

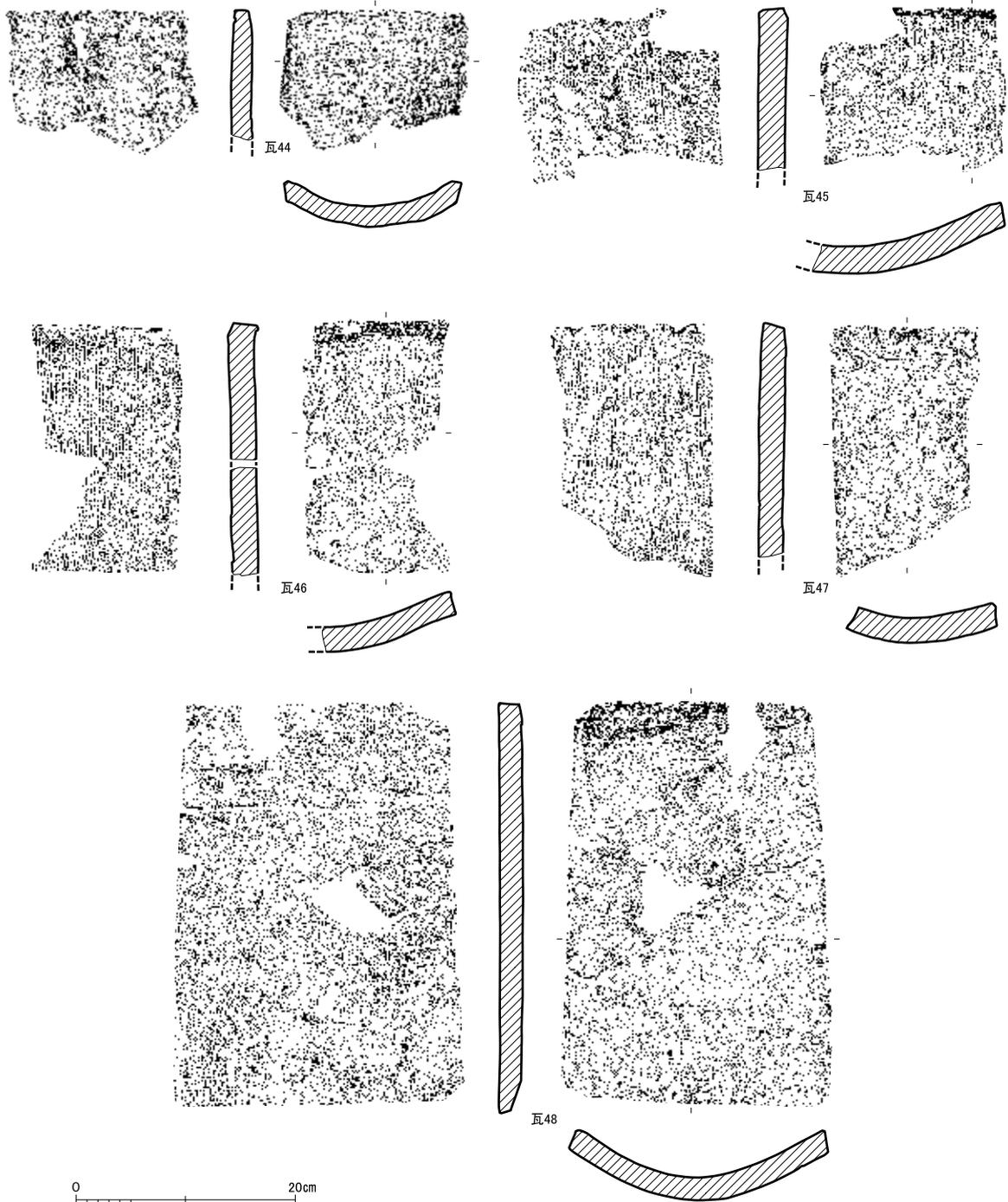


図58 平瓦拓影及び実測図（1：6）

当凹凸面は横方向ヘラケズリ、側面は縦方向ヘラケズリである。平瓦部は、凸面には縦方向の縄タタキ、凹面は布目が残る。狭端部は横方向のヘラケズリを施すことで平瓦部の厚さを減じている。色調は外面が黒灰色、断面は灰白色を呈する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。時期は平安時代後期。これらの他に同範瓦が土坑96から2点、土坑106から8点が出土している。

#### (5) 丸瓦 (図57)

瓦39～42は山城産の丸瓦である。瓦39・41・42は土坑732から、瓦40は土坑739から出土した。いずれも凸面は縄タタキ、凹面は細かい布目が残る。瓦39・41の凸面は縄タタキ後に一部縦方向のヘラケズリをし、2条のヘラガキを施す。色調は瓦39～41は外面が黒灰色、断面は灰白色、瓦42は外・断面ともに黒灰色、断面は灰白色を呈する。胎土はいずれも精良であるが、3～5mmの白色粒・暗灰色粒を微量含む。時期は平安時代後期。

瓦38は和泉産の丸瓦である。土坑96から出土した。いずれも凸面は縄タタキ、凹面は粗い布目が残る。色調は凸面が黒灰色、凹面と断面が灰白色を呈する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。時期は平安時代後期。

#### (6) 平瓦 (図58)

瓦44は山城産の平瓦である。土坑716から出土した。凹面は粗い布目残り、凸面はナデを施す。色調は凹面が黒灰色、凸面と断面が灰白色を呈する。胎土には3～5mmの白色粒・暗灰色粒を含む。

瓦45～48は和泉産の平瓦である。瓦45は土坑96・106の2つの遺構から破片が、瓦46は土坑106から、瓦47は土坑96から、瓦48は土坑106から出土した。瓦48のみが完形である。

瓦45・46は凹凸面の両面に縄タタキを施し、凹面狭端部に横方向のヘラケズリを施す。色調はいずれも凸面が黒灰色、凹面と断面が灰白色を呈する。胎土には1mmの白色粒・暗灰色粒を少量含む。

瓦47・48の凹面は細かい布目を残し、凸面に縄タタキを施す。瓦48は凹面狭端部に横方向のヘラケズリを施す。色調は瓦47の凸面が黒灰色、凹面と断面が灰白色を呈し、瓦48は2次的な被熱により赤褐色を呈する。胎土には1mmの白色粒・暗灰色粒を少量含む。

### 4. 木製品 (図版47・48)

木製品は9世紀のものが27点、10世紀のものが4点、12世紀のものが19点を数える。用途別には、工具1点・服飾具12点・容器8点、食事具5点・遊戯具4点・祭祀具8点・部材8点、不明4点を数える。

#### (1) 平安時代前期の木製品 (図59～62)

木1・2は挽物で、木皿である。平坦な底部から短く外傾する口縁部を挽き出す。木1は内外面とも不定方向の直線的な刃痕が多数あり、俎板として転用される。底部外面の中央には3～4箇所轆轤の爪痕が残る。木1は径22.4cm、器高2.1cm、木2は器高1.6cmを測る。木1・2とも樹種はヒノキ。落込み456から出土。

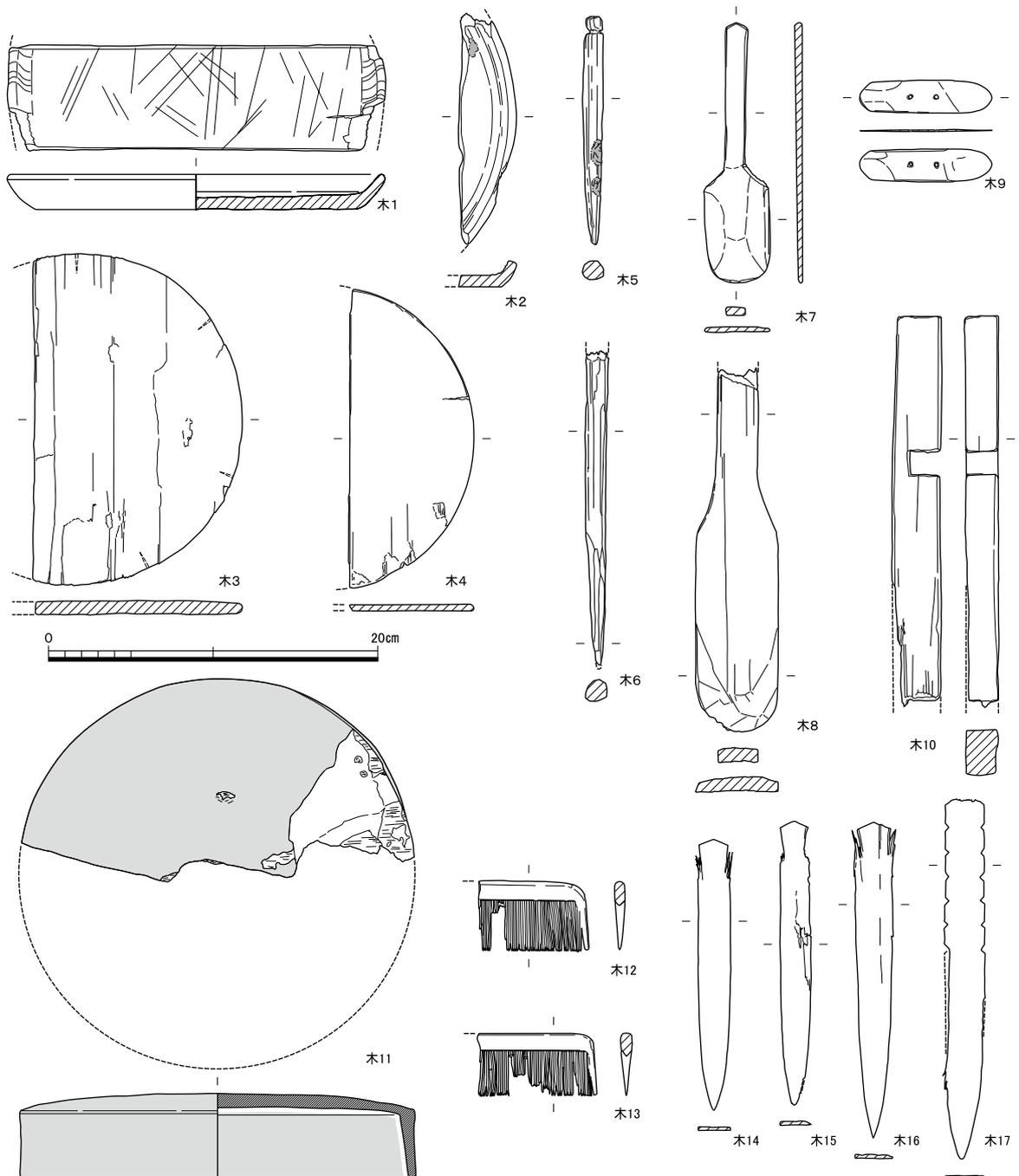


図59 木製品実測図1 (1:4)

木3・4は曲物の底板である。木3は側縁に木釘痕が4箇所ある。径20.2cm、厚さ0.8cmを測る。木4は径9.5cmに復元でき、厚さ0.4cmを測る。木3・4とも樹種はヒノキ。落込み456から出土。

木5は丸棒状で、先端を尖らせる。完形である。上端からやや下がった箇所の周縁を切り欠き、溝を巡らす。木針か留針の可能性はある。下半に焦げ痕がある。長さ約14.0cm、最大径1.4cmを測る。樹種はスギ。落込み456から出土。

木6は丸棒状を呈し、一端は欠損、一端は尖らせる。現存長約19.2cm、最大径約1.5cmを測る。先端部には段がつき、器面は荒れる。他の器物に強く差し込むことで生じた段の可能性はある。樹種はイヌガヤ。落込み456から出土。

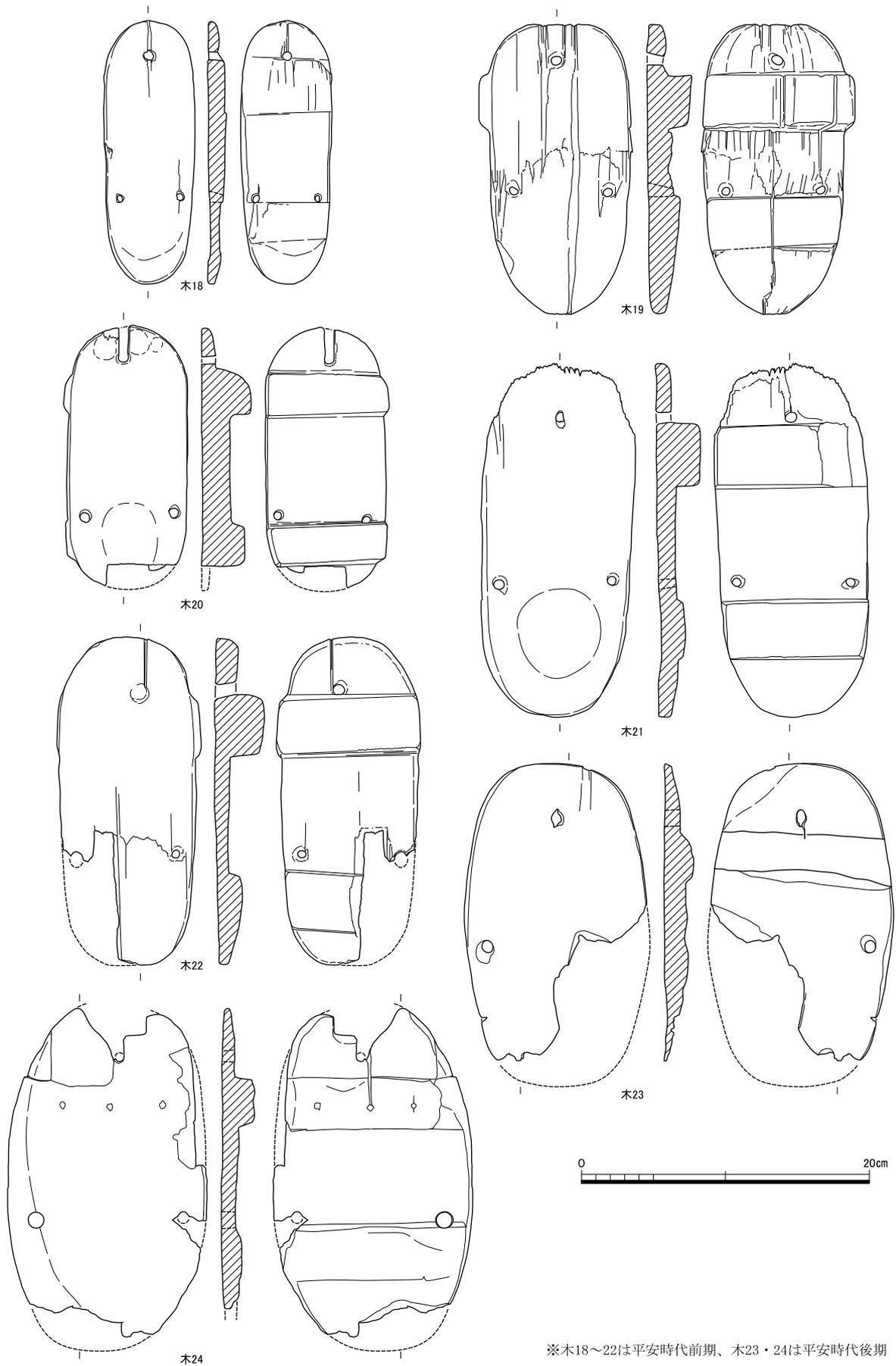


図60 木製品実測図2 (1:4)

木7・8は杓子形木製品である。木7は完形である。柄に対して身幅が広く、身の先端は丸みをつける。身は削っており、柄から身に向かって厚さが減じる。長さ15.9cm、身幅4.0cm、厚さ0.3～0.5cmを測る。樹種はイヌガヤ。木8は上半を欠損し、身の先縁は半円形に削る。身の一面は先端に向かって削り込み、先端は片刃状を呈する。現存長約22.4cm、身幅約5cm、厚さ約0.8cmを測る。樹種はスギ。木7・8ともに落込み456から出土。

木9は長方形の薄板の両端を半円形に削る。中央2箇所穴がある。両端部に向かって削り込む。長径8.1cm、短径2.1cm、中央部の厚さ0.1cmを測る。樹種はヒノキ。落込み456から出土。

木10は角棒状を呈する。長軸方向の端面に切り欠きがあり、組み合わせ部材であろう。現存長約24.0cm、幅2.8cmを測る。樹種はスギ。落込み456から出土。

木11は漆器の蓋である。半分を欠損する。直立する縁部とわずかに甲盛状の天井を挽き出し、内外面に黒漆が厚く塗られる。径24.2cm、高さ5.2cmを測る。樹種はケヤキ。水場448掘形から出土。

木12・13は横櫛である。いずれも長方形を呈し、肩部に丸みをもたす。木12は切通し線を背の上縁に平行して描く。現存幅約6.7cm、高さ約4.3cm、背の厚さ約0.8cmを測る。3cmあたりの歯数は29枚ある。木13は切通し線を背の上縁に平行して描く。現存幅約7.3cm、高さ約4.9cm、背の厚さ約0.7cmを測る。3cmあたりの歯数は35枚ある。いずれも樹種はイスノキ。木12・13ともに井戸359から出土。

木14～17は斎串である。木14～16は圭頭で、上端木口から両側縁にかけて複数の切り込みを行う。木14は長さ15.7cm、幅2.1cm、厚さ0.2cmを測る。木15は長さ17.4cm、幅1.9cm、厚さ0.2cmを測る。木16は長さ19.3cm、幅約2.3cm、厚さ0.2cmを測る。木17は上部を欠損する。両側縁から切り欠きを行い、残存部で6箇所ある。現存長22.1cm、幅2.4cm、厚さ0.1cmを測る。いずれも樹種はヒノキ。いずれも井戸359から出土。

木18～22は連歯下駄である。

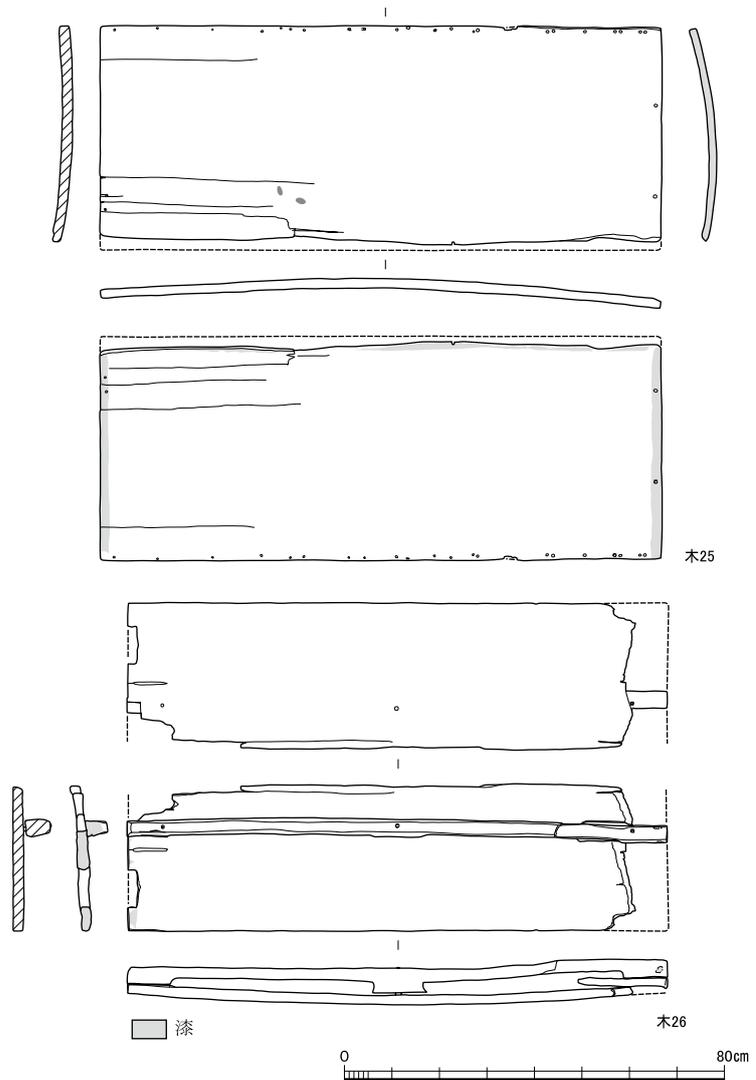


図61 木製品実測図3 (1:16)

木18は長さ約18.3cm、幅約8.4cmを測る。樹種はケヤキ。木19は台の前壺周りに指の圧痕が遺存しており、右足用とみられる。長さ約20.3cm、幅約9.6cmを測る。樹種はヒノキ。木20は台の前壺周りに指の圧痕が3箇所、踵の圧痕が1箇所あり、右足用とみられる。現存長18.2cm、幅約8.2cmを測る。樹種はヒノキ。木21は長さ約24.8cm、幅約10.3cmを測る。樹種はヒノキ。木22は台の前壺周りに指の圧痕があり、左足用とみられる。現存長22.8cm、幅約9.4cmを測る。樹種はヒノキ。いずれも落込み456から出土。

木25・26は櫃である。一般に四本の脚付のものを「唐櫃」、脚を持たず長側に手懸棧を付けるものを「和櫃」と呼び分けられている<sup>10)</sup>。木25は和櫃の蓋の天板である。平面形は長方形を呈し、長辺の一方は欠損する。長さ約118.5cm、現存幅約46.2cm、厚さ約2.2cmを測る。樹種はスギ。短辺と長辺の欠損側の木口に黒漆が塗られる。黒漆の幅は約2.0cmを測る。両短辺には2つの穴があり、右短辺は片隅に寄せて、左短辺は一定の間隔をあけている。長辺の欠損側には穴が1箇所、もう一辺には穴が22箇所ある。穴は天板と側板を接合する釘穴であるが、長辺の22箇所の穴は釘穴ではないことが考えられる。正倉院宝物の和櫃は稜角すべてに黒漆が塗られ、身幅が60～80cmある。それに対して、木25は一辺に黒漆の塗布痕がなく、幅が狭いことから側縁が欠損したものと考えられ、22個の穴は割れた天板を結束する補修孔の可能性がある。木26は和櫃の身の長側板で、手懸棧が付く。現存長約107.5cm、現

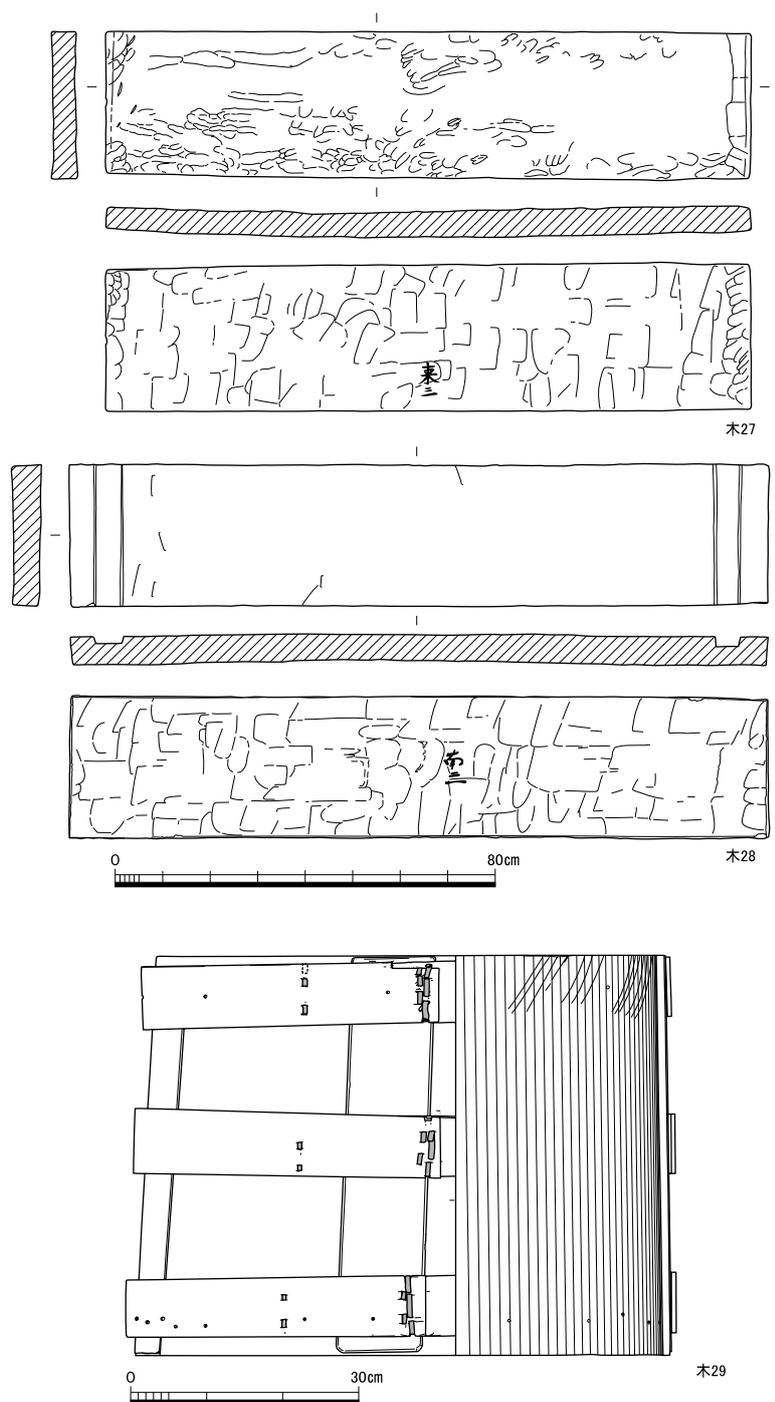


図62 木製品実測図4 (1:16、1:10)

ものを「和櫃」と呼び分けられている<sup>10)</sup>。木25は和櫃の蓋の天板である。平面形は長方形を呈し、長辺の一方は欠損する。長さ約118.5cm、現存幅約46.2cm、厚さ約2.2cmを測る。樹種はスギ。短辺と長辺の欠損側の木口に黒漆が塗られる。黒漆の幅は約2.0cmを測る。両短辺には2つの穴があり、右短辺は片隅に寄せて、左短辺は一定の間隔をあけている。長辺の欠損側には穴が1箇所、もう一辺には穴が22箇所ある。穴は天板と側板を接合する釘穴であるが、長辺の22箇所の穴は釘穴ではないことが考えられる。正倉院宝物の和櫃は稜角すべてに黒漆が塗られ、身幅が60～80cmある。それに対して、木25は一辺に黒漆の塗布痕がなく、幅が狭いことから側縁が欠損したものと考えられ、22個の穴は割れた天板を結束する補修孔の可能性がある。木26は和櫃の身の長側板で、手懸棧が付く。現存長約107.5cm、現

存幅約30.5cm、厚さ約2.2cmを測る。手懸棧は長さ約114.0cm、幅約3.2cm、厚さ2.5～5.2cmを測る。樹種はスギ。長側板は一端を欠損し、手懸棧は完存する。平面形は長方形を呈し、短辺の下部には組継の柄（ホゾ）がある。手懸棧は角棒に刳形を施し、中央と両端で長側板と接合する。右端の手懸棧と長側板の接合部は破損しており、間に別材を補充する。手懸棧には中央と両端に釘穴が3箇所あり、中央と一方の端部には鉄釘が遺存する。長側板と手懸棧の木口、木口面には黒漆が塗られる。いずれも井戸359から出土。

木27・28は井戸359の井戸枠の横板である。いずれも平面形は長方形を呈し、井戸枠として据えた内面側と、外面側とでは調整法が異なる。内面側は手斧で荒削りした後、槍鉋で丁寧<sup>11)</sup>に削り平滑に仕上げている。外面側は手斧調整のみで左右両側から削っている。番付を示すと思われる墨書は外面側にある。樹種はいずれもヒノキ。木27は井戸枠西辺の上から4段目の横板である。長さ約136.0cm、幅約31.2cm、厚さ約5.5cmを測る。外面側の中央上端部に「東三」の墨書があり、文字が倒立状態で井戸枠として使用されていた。木28は井戸枠南辺の上から2段目の横板である。長さ148.8cm、幅30.2cm、厚さ5.8cmを測る。両端部には井戸枠を組み合わせるための2条の溝が掘られている。溝は幅約5.0cm、深さ約2.0cmを測る。外面側の中央やや右寄りに「南三」の墨書がある。上端面の右寄りに鉄釘が遺存する（井戸359の記述参照）。

木29は井戸359底部に据えられた曲物である。径約72.5cm、高さ約53.0cmである<sup>11)</sup>。曲物本体となる側板の外側に籬（タガ）を上・中・下の3段に嵌め、その間に四方に縦板4枚を差し込む。上・下段の籬と側板・縦板は木釘で結合する。側板は長さ約250cm、厚さ約1cmの薄板を円形に曲げ、両端の重ね合わせ部分を桜皮の紐で綴じ合わせる。綴じ合わせは2列である。重ね合わせた際に外側になる側板の端部には面取りを施す。内面全体にはケビキをいれる。ケビキは側板の上下縁に対して縦平行線を0.9～1.4cm間隔でいれ、上端付近は部分的に斜平行線にいれる。籬は幅8cm前後、厚さ0.5cmの薄板を円形に曲げて、両端を重ね合わせた部分の2箇所を桜皮の紐で綴じ合わせる。重ね合わせ部分はやや厚みを減じている。綴じ合わせは、重ね合わせた際の内側になる端部付近は1列内2段綴じ、外側になる端部付近は2列前外3段後内2段綴じである。紐綴じ部分の前列は籬の上下縁に切り欠きを施す。籬と側板・縦板を結合する釘穴は、上段が10箇所、下段が25箇所ある。縦板は幅約11cm、厚さ0.2cmの薄板の周縁には面取りを施す。樹種は側板・籬・縦板・木釘のすべてヒノキである。

## (2) 平安時代中期の木製品 (図63)

木30は横櫛である。長方形を呈し、肩部に丸みをもたす。切通し線は背の上縁に平行して引く。3cmあたりの歯数は32枚ある。現存幅約4.3cm、高さ約4.1cm、背の厚さ0.9cmを測る。樹種はイスノキ。井戸847から出土。

木31は匙形木製品である。柄の上半は欠損する。柄は緩やかに削り込み、身との境界に稜をつくる。身の先縁は半円形を呈する。現存長約7.4cm、身幅2.5cm、厚さ0.4cmを測る。樹種はヒノキ。井戸847から出土。

木32は長い薄板の両端の両側縁を切り欠いた木製品であり、一端の両側縁を欠損する。長さ約

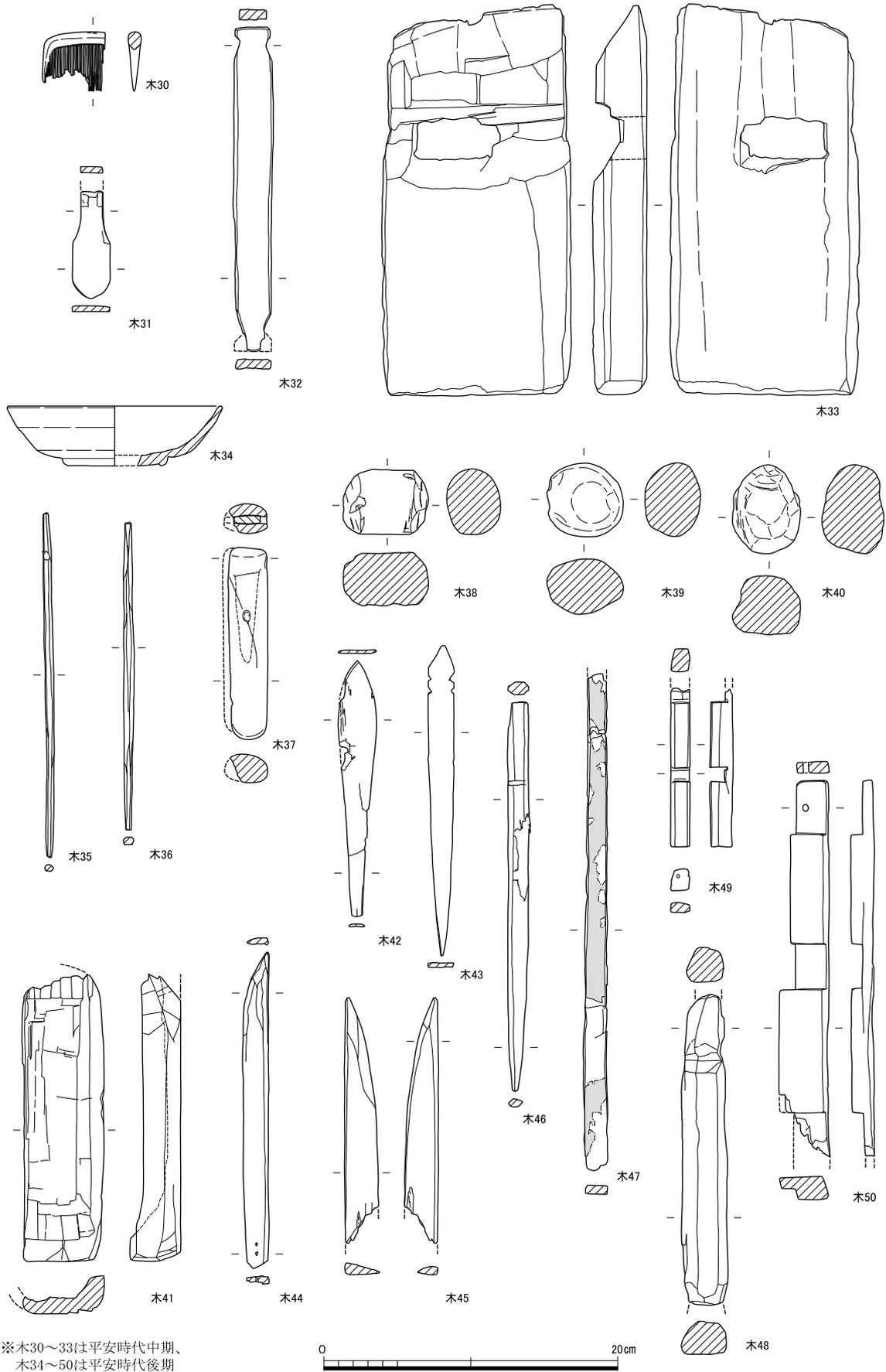


図63 木製品実測図5 (1:4)

22.3cm、幅約2.5cm、厚さ0.6～0.7cmを測る。樹種はスギ。柝状遺構828から出土。

木33は長方形の厚板を加工した木製品である。一端の木口は斜めに切り欠き、片刃状を呈する。一方の面は平滑であり、一方の面は片刃に近い箇所、片刃に平行して断面台形の削り込みを作る。削り込み箇所には、削り込みに平行して長方形の穿孔を施す。組み合わせの部材であろう。現存長26.8cm、幅12.9cm、厚さ約3.7cmを測る。樹種はスギ。井戸847から出土。

### (3) 平安時代後期の木製品 (図60・63)

木23・24は連歯下駄である。台幅は広い。木23は現存長20.8cm、幅約12.7cmを測る。樹種はトチノキ。池452から出土。木24は前歯に釘穴状の小穴が3箇所穿たれる。釘は遺存せず錆も付着しない。釘穴とすれば、折れた前歯を木釘で接合するためのものと考えられる。現存長23.0cm、現存幅13.9cm、穴の径約0.4cmを測る。樹種はクリ。入江820から出土。

木34は漆器椀である。体部は緩やかに外傾し、底部は輪高台を削り出す。高台内面の削り込みは浅い。底部外面を除く全面に黒漆を薄く塗る。口径14.6cm、器高4.2cmを測る。樹種はトチノキ。入江820から出土。

木35・36は箸である。細長い割り材の全面を削り、断面形は6～7角形を呈するが、楕円形に近い形状である。両端はさらに削り込み、やや尖らせる。木35は長さ21.2cm、最大径0.7cmを測る。木36は長さ23.7cm、最大径0.6cmを測る。いずれも樹種はイヌガヤ。池452から出土。

木37は刀子の柄であり、棒状の柄は器面を粗く削り調整する。柄元は半円形に削る。鉄製の刀子の茎を焼き、柄に装着する。柄頭内面は焦げる。茎が柄頭の下部に遺存する。柄頭に近い場所に目釘穴がある。最大長13.3cm、現存幅2.7cm、短径2.0cmを測る。目釘穴の径は約0.5cmを測る。樹種はヒノキ。入江820から出土。

木38～40は木球である。枝などの芯持材を使用し、器面を削る。木38は円柱状の両端を削り込み、側縁は皮を剥いだ程度である。長さ5.7cm、最大径4.4cmを測る。樹種はエゴノキ。池452から出土。木39は上・下端、側縁とも粗く削る。断面形は扁平である。長さ5.2cm、最大径5.1cmを測る。樹種はカキノキ。岬848から出土。木40は円柱状の両端と側縁を粗く削る。長さ6.1cm、最大径4.6cmを測る。樹種は種不明の広葉樹。土坑716から出土。

木41は舟形である。船首と左舷側を欠損する。舟槽は粗く削り込む。現存長19.7cm、現存幅5.5cm、高さ2.6cmを測る。樹種はスギ。池452から出土。

木42は柳葉状の鏃形を呈する。一面は削り取った状態で未調整、一面は粗く削る。先端の側縁側を刃状に削る。長さ17.7cm、最大幅2.7cm、厚さ約0.2cmを測る。樹種はヒノキ。池462から出土。

木43は圭頭で両側縁に切り欠きが2箇所あり、下端は尖らせる。斎串あるいは塔婆形であろう。長さ21.3cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを測る。樹種はヒノキ。池452から出土。

木44・45は割り材の薄板を使用した刀形である。側面は大半が未調整である。木44は完形で、切っ先の両側面を削って刃をつけ、基部には2箇所穿孔する。長さ21.7cm、幅1.7cm、厚さ0.4～0.5cmを測る。樹種はスギ。土坑716から出土。木45は柄部を欠損する。刀身の両側面を削って刃をつける。現存長16.8cm、現存幅2.3cm、峰の厚さ0.8cmを測る。樹種はスギ。池452から出土。

木46は断面が扁平な棒状を呈し、先端を尖らせた留針状の製品である。長さ26.7cm、幅1.4cm、厚さ0.9cmを測る。樹種はスギ。池462から出土。

木47は断面形が方形の棒状の製品で、両端とも欠損する。側縁と表面には黒漆が薄く塗られる。平坦面は両側縁から黒漆がしみ込み、他の部材に貼られていた可能性がある。調度具などの部材であろう。現存長34.1cm、幅1.5cm、厚さ0.6cmを測る。樹種はスギ。入江820から出土。

木48は棒状の両端を切り落とし、器面を粗く削った木製品である。側縁は斜めに削り、断面形は台形を呈する。一端に寄った箇所の方から切り欠く。現存長21.4cm、最大径4.0cmを測る。樹種はスギ。池462から出土。

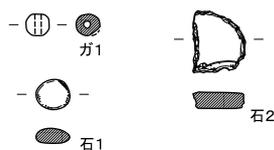
木49・50は一端を欠損する部材である。角材の4面を削り、相欠きの仕口を施す組み合わせ部材である。木49は木口に釘穴が1箇所ある。現存長25.7cm、幅3.3cmを測る。樹種はヒノキ。入江820から出土。木50は一側縁を欠損する。一端の仕口面に釘穴が1箇所ある。切欠きがあることから格子の部材の可能性がある。現存長10.8cm、幅1.8cmを測る。樹種はヒノキ。池452から出土。

## 5. 石製品・ガラス製品 (図64、図版49)

石製品では基石・石帯・石鍋が、ガラス製品では数珠玉が1点出土した。平安時代後期の庭園遺構からの出土である。

ガ1は球形を呈し、中心部に紐通し孔が貫通する。灰白色を呈し、数珠玉であろう。最大径1.2cm、孔径0.3cm、重さ約2.6gを測る。蛍光X線分析によりケイ素 (Si)・カルシウム (Ca)・鉛 (Pb) 元素を検出した。鉛 (Pb) に鋭いピークがあり、比重が約3.8であることから鉛ガラスと考えられる<sup>12)</sup>。入江820から出土。

石1は平面形が楕円形を呈し、断面形は上部がわずかに甲盛状である。緑がかった黒色を呈し、基石であろう。長径1.8cm、短径1.5cm、厚さ0.8cm、重さ3.3gを測る。岬848土留内側構築土から出土。



石2は平面形が扇形を呈する。板状に加工された素材の上・下面は研磨され、周縁を打撃により粗く成形する。白色を呈し、石帯の丸軛の未製品であろう。石英質で縞模様がみられることから、瑪瑙の可能性もある。現存長2.6cm、現存幅3.2cm、厚さ0.9cm、重さ13.8g、比重約2.6を測る。池452北岸構築土から出土。

石3は滑石製の石鍋である。口縁部外面に縦長の把手を削り出す。把手から口縁端面にかけて「×」印を陰刻する。外面は研磨を丁寧に施し平滑、内面も研磨を施すが鑿跡がわずかに残る。底部内面には製作時の鑿跡が明瞭に残る。外面は煤が付着する。口径13.1cm、器高6.7cmを測る。池462から出土。

図64 石製品・ガラス製品実測図  
(1 : 4)

## 6. 銭貨 (図65、図版49)

銭貨は、皇朝十二銭が10枚、江戸時代に铸造された銭貨が1枚を数える。銭1は神功開寶で、初鑄は天平神護元年(765)である。左の「寶」・下の「開」の部分が遺存する。復元外径2.5cm、孔径0.5cm、現存重量1.0gを測る。落込456から出土。銭2～4は隆平永寶で、初鑄は延暦15年(796)である。銭2は右半部の「隆」・「平」・「永」の部分が遺存する。現存重量1.3gを測る。銭3・4は外径2.4cm、孔径0.6cm、重量3.6g・2.2gを測る。銭2は2区南東部の第1面遺構検出中、銭3・4は落込456から出土。銭5・6は富壽神寶で、初鑄は弘仁9年(818)である。銭5・6は外径2.3cm、孔径0.6cm、重量3.0g・2.9gを測る。銭5は2区南西部の平安時代前期整地層、銭6は水場448から出土。銭7・8は延喜通寶で、初鑄は延喜7年(907)である。銭7・8は外径1.8cm、孔径0.5cm、重量1.7g・2.3gを測る。銭7は池452東岸、銭8は1区平安時代後期整地層から出土。銭9は遺存状態が不良である。3文字目の「永」の右側にはらいがあることと全体の大きさから、貞観永寶と推測される。初鑄は貞観12年(870)である。外径1.9cm、孔径0.5cm、重量3.0gを測る。溝261古段階から出土。銭10は遺存状態が不良であるが、2文字目「元」の右足、3文字目の「大」があることから、乾元大寶と推測される。初鑄は天徳2年(958)である。外径1.9cm、孔径0.5cm、重さ1.8gを測る。1区平安時代後期整地層から出土。銭11は文久永寶である。初鑄は文久3年(1863)である。外径2.7cm、孔径0.7cm、重さ3.7gを測る。1区近世素掘り溝から出土。

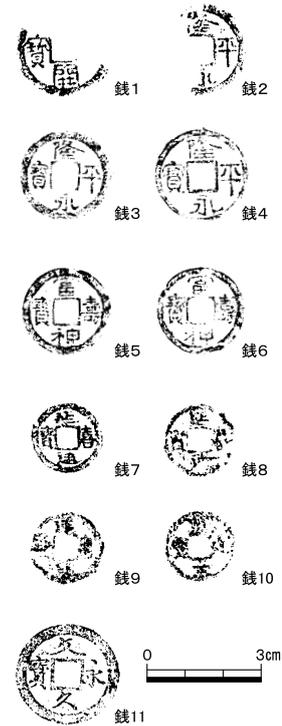


図65 銭貨拓影(1:2)

## 7. 動物遺存体・植物遺存体 (図版50)

**動物遺存体** 骨1はニホンジカの頭蓋骨であり、前頭骨から後頭骨の部分である。骨表面の遺存状態は不良であるが、周縁が整っており、割り取られた可能性がある。前頭骨の角突起には斧・鉈様の刃物の痕跡があり、枝角を切断したと考えられる。骨2はイヌの頭蓋骨であり、側頭骨(右)の部分である。骨1・2ともに井戸359から出土。

遺存状態が悪く掲載はしていないが、これらのほかにも落込み456からは、ウシの中手骨(左右不明)・ウマの切歯(上下左右不明)・イノシシあるいはニホンジカの上腕骨(右)、井戸359からウシあるいはウマの長管骨、溝329からニホンジカの中足骨(右)が出土した。

**植物遺存体** 桜皮は、1枚の樹皮が両端から中央方向に丸まって、大小のロールになっている。材として加工されたものである可能性がある。幅約4cm。2区の平安時代前期の整地層から出土。

食用と思われる植物の種子が平安時代前期と後期の遺構から出土している(付章1参照)。1・2はオニグルミ、3はヒメグルミ、4～10はモモ、11～13はウメである。1・2は入江820、3～13は落込み456からの出土である。

## 8. 墨書土器（図66～68、巻頭図版5、表11）

墨書土器は、9・10・12世紀のものが出土している。出土点数は35点を数え、平安京内における1件の調査からの出土数としては多い。この他に図示していないが墨書土器の可能性のある墨痕のあるものが17点ある。ただし文字全体がわかる資料は少なく、判読できるものは少ない。時期別では9世紀前半が大半を占め30点、10世紀前半は3点、12世紀前半は2点である。9世紀前半の土器は落込み456（墨1～20）・落込み875（墨21）・水場448（墨22）・池452（墨23）・井戸359（墨24）・溝329（墨25～30）から、10世紀前半の土器は井戸847（墨31）・柝状遺構828（墨35）・2区の平安時代後期整地層（墨32）から、12世紀前半の土器は池462（墨33）・入江820（墨34）からそれぞれ出土した。

器種別にみると、9世紀前半は土師器9点・須恵器19点・緑釉陶器1点・灰釉陶器が1点である。10世紀前半は土師器1点・灰釉陶器2点である。12世紀前半は土師器1点・山茶椀1点となる。器形別に見ると杯・椀・皿などの供膳形態が大半を占め、壺などの貯蔵形態は極めて少ない。

以下では出土遺構別・時期順に述べる。なお、実測図の墨書は赤外線スキャン画像を貼り込んだものである。

墨1はリング状に墨痕が残るが、文字か記号かは不明。

墨2の墨痕は鮮やかで、筆の運びから文字と思われる。

墨3は「黄」と読めるが、墨書されている位置からは横に偏がつくかあるいは別文字が存在した可能性がある。

墨4は半円状の墨書が2つ重なっている。文字の一部か記号かは不明。

墨5・6はそれぞれ「井」・「井」の文字に似るが、筆の運びからは文字ではなく、記号とみられる。

墨7は須恵器杯の外面底部に鮮やかな墨痕があるが、判読できない。

墨8は文字と思われるが、判読できない。

墨9は須恵器杯底部の内外面に墨書があるが、判読できない。

墨10は墨痕は鮮やかであるが、判読できない。記号の可能性もある。

墨11は「三」と読めるが、左側が欠損のため不明である。

墨12は判読不能。

墨13は記号。

墨14は「十」と読めるが、文字の一部であり不明。

墨15は墨6と同じ「井」状の記号か。

墨16は判読できない。

墨17は「月」または「弓」の可能性はある。

墨18は「米」印に似た記号と思われる。

墨19は判読できない。

墨20は土器の上下とは逆方向に「内」の可能性のある墨書がある。また、この左右にも墨痕があ

落込み456

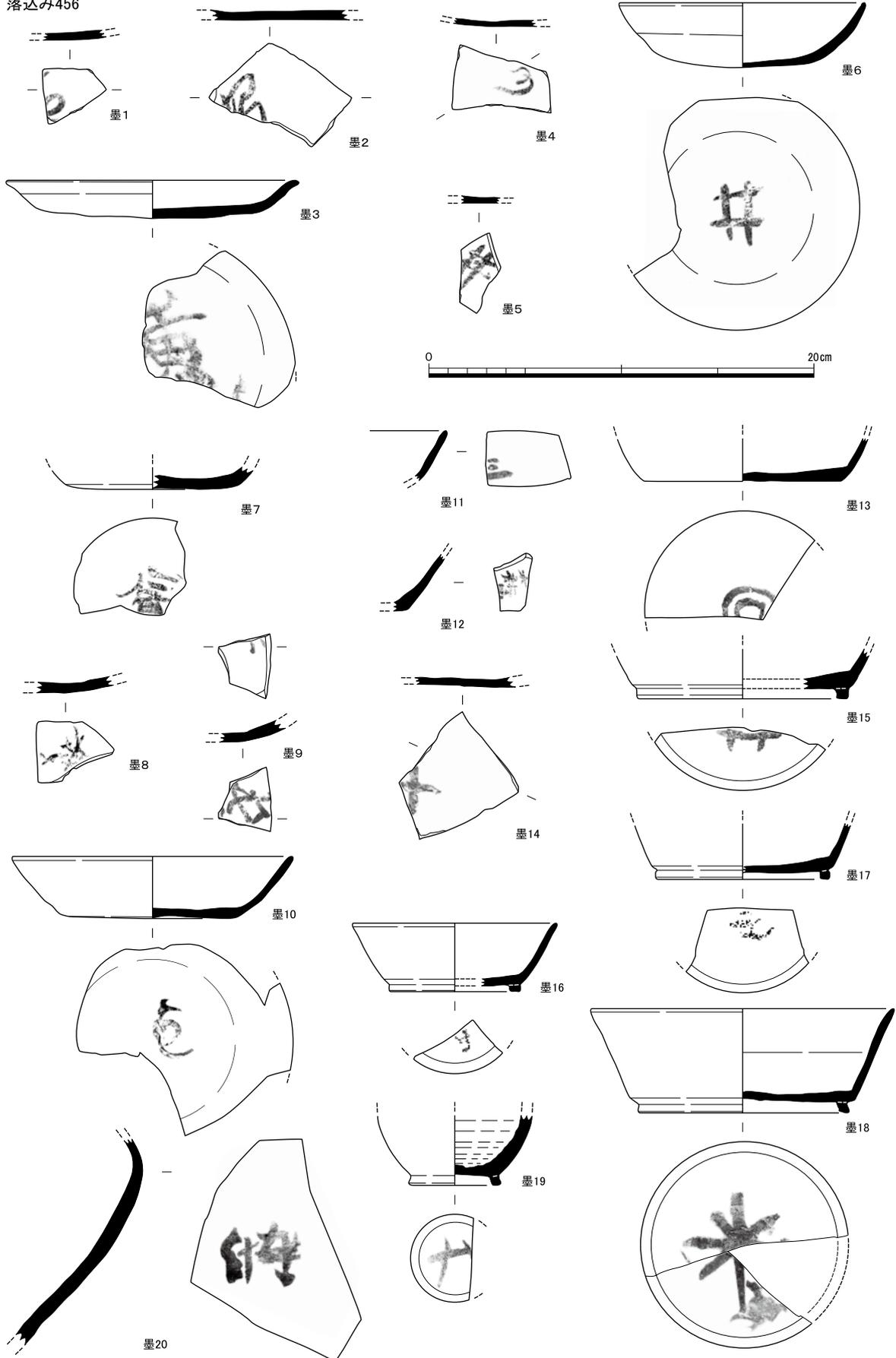
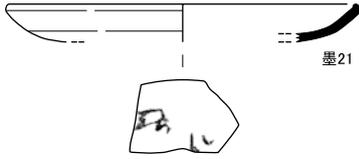
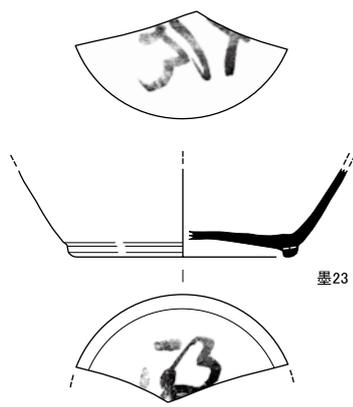


图66 墨書土器実測图1 (1:3)

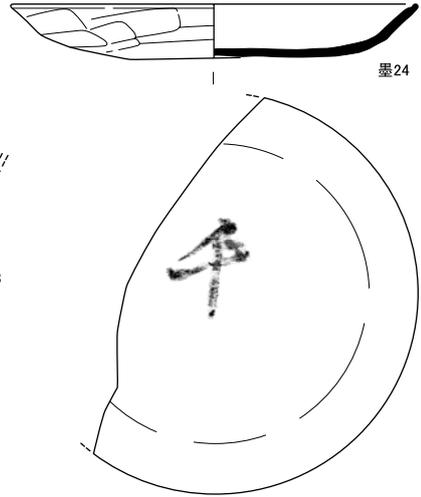
落込み875



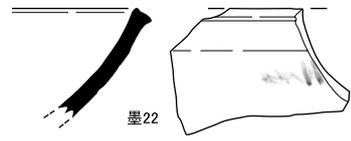
池452



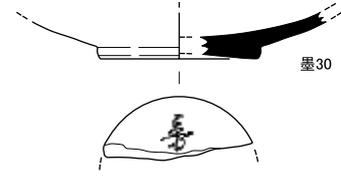
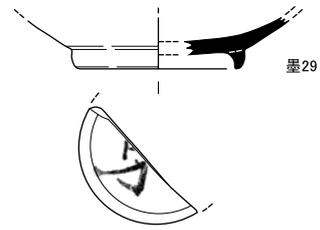
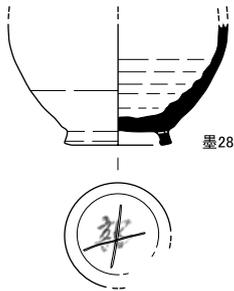
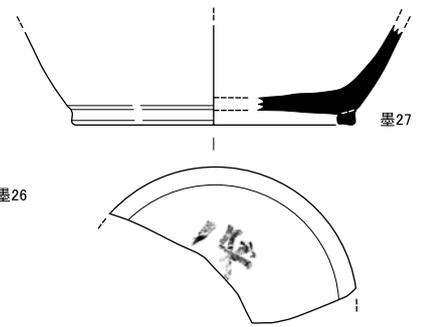
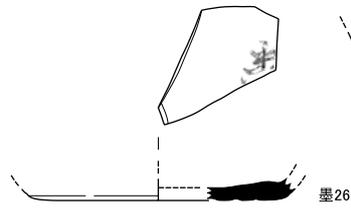
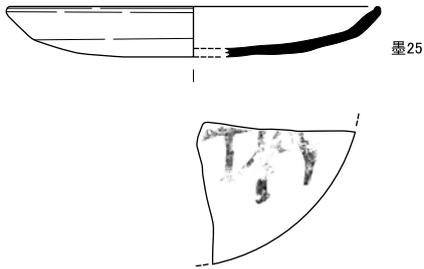
井戸359



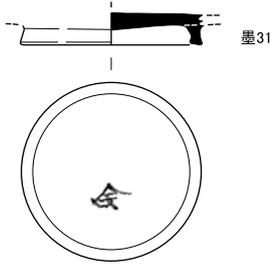
水場448



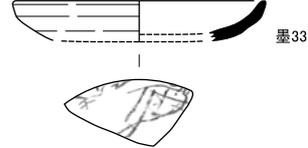
溝329



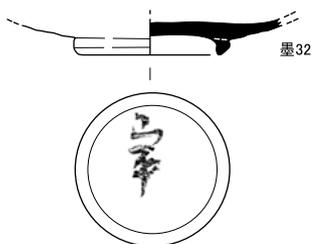
井戸847



池462



平安時代後期整地層



入江820

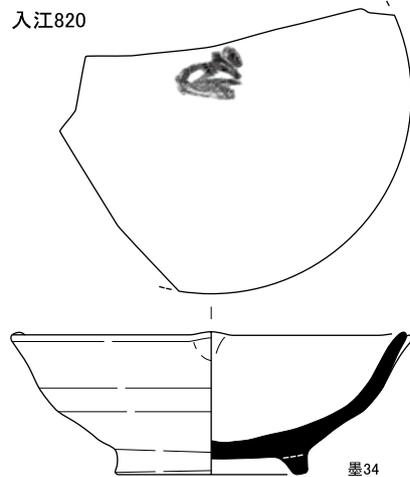


图67 墨書土器実測图2 (1:3)



表11 出土墨書土器一覽表

No.	地区	遺構	器種	器形	墨書部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
墨1	1区	落込み456	土師器	皿	外面底部				
墨2	1区	落込み456	土師器	皿	外面底部				
墨3	1区	落込み456	土師器	皿A	外面底部	15.3	2.0		
墨4	1区	落込み456	土師器	皿	外面底部				
墨5	1区	落込み456	土師器	椀?	外面底部				
墨6	1区	落込み456	土師器	椀	外面底部	12.9	3.4		
墨7	1区	落込み456	須恵器	杯A	外面底部			9.0	
墨8	1区	落込み456	須恵器	杯A	外面底部				
墨9	1区	落込み456	須恵器	杯A	内外面底部				
墨10	1区	落込み456	須恵器	杯A	外面底部	14.6	3.2	9.3	
墨11	1区	落込み456	須恵器	杯A	外面体部～口縁部				
墨12	1区	落込み456	須恵器	杯A	外面体部				
墨13	1区	落込み456	須恵器	杯A	外面底部			10.3	
墨14	1区	落込み456	須恵器	杯A	外面底部				
墨15	1区	落込み456	須恵器	杯B	外面底部			11.0	
墨16	1区	落込み456	須恵器	杯B	外面底部	10.7	3.6	6.8	
墨17	1区	落込み456	須恵器	杯B	外面底部			9.1	
墨18	1区	落込み456	須恵器	杯B	外面底部	15.9	5.5	11.0	
墨19	1区	落込み456	須恵器	壺M	外面底部			4.9	
墨20	1区	落込み456	須恵器	鉢D	外面体部				
墨21	2区	落込み875	土師器	皿	外面底部～口縁部	14.0			
墨22	1区	水場448	須恵器	鉢D	外面体部～口縁部				
墨23	2区	池452	須恵器	杯B	内外面底部			9.1	
墨24	1区	井戸359	土師器	皿A	外面底部	16.1	2.2		
墨25	1区	溝329	土師器	皿A	外面底部	14.8	2.1		
墨26	1区	溝329	須恵器	杯A	内面底部			10.0	
墨27	1区	溝329	須恵器	杯B	外面底部			11.3	
墨28	1区	溝329	須恵器	壺M	外面底部			4.3	×印のヘラ記号
墨29	1区	溝329	灰釉陶器	椀	外面底部			6.9	
墨30	1区	溝329	緑釉陶器	皿	外面底部			6.6	山城産
墨31	2区	井戸847	灰釉陶器	不明	外面底部			7.2	
墨32	2区	平安後期整地層	灰釉陶器	皿	外面底部			6.2	
墨33	1区	池462	土師器	皿	外面底部～口縁部	10.1	1.7		
墨34	2区	入江820	山茶椀	椀	内面底部	15.7	5.7	7.6	
墨35	2区	柘状遺構828	土師器	皿	内外面底部	20.5	2.1		

るが、判読はできない。

墨21は土師器の外面に「己」と記号のような薄い墨痕が認められるが判読できない。

墨22は「二」の可能性はある。

墨23の内面の「□所」は家政機関を表すものである可能性がある。

墨24は「千」。

墨25は筆の運びから文字の可能性が高いが、判読できない。

墨26は「悉」の可能性はある。

墨27は「作」の可能性はある。

墨28外面底部に焼成前の×印のヘラ記号があり、「部」の文字が墨書される。

墨29は墨痕は鮮やかであるが、文字の一部であり判読できない。

墨30は今回出土した墨書土器で唯一つ緑釉陶器に墨書されたもの。「帝」あるいは「童」の可能性はある。

墨31は判読できない。

墨32は「山平」と読める。

墨33は文字・記号あるいは絵画の可能性もある。

墨34は判読できない。

墨35はやや特殊な土器であるので以下に詳述する。Ⅲ期中段階の土師器の皿Lの内外面底部に、文字や樹木・馬の顔などが墨書される。文字には漢字と仮名文字がある。外面底部の四角の中に放射状に6本の線を描いた図は、東寺の観智院・亮禪と宝蓮華寺・亮尊が13世紀に記した、真言密教における事相と図像の百科事典である『白宝口抄』（びやくほうくしょう）にほぼ同じものがある。ここでは個人の命運を司る本命星や本命元辰星の求め方を解説する図として掲載されている。本命星や本命元辰星は道教の北斗信仰に由来し、平安時代の陰陽道や仏教にも取り入れられる。土器の図が陰陽道に由来するものか、仏教に由来するものかは不明である。本命星や本命元辰星は生年によって異なり、馬の絵と「午」の文字はその年を表す可能性がある。「午」の文字の周りに複数の「日」の文字がある。内面底部の樹木は松の木を描いたものかと思われ、その右下には「我鬼鬼」の文字がある。呪符には、「日」「月」「口」「鬼」などの文字小さく並べて書くものが多いが、「鬼鬼」は鳥羽離宮出土の天罡符木簡などにもみえる<sup>13)</sup>。これらのことから、この墨書土器はまじないに関連するものと考えられるが、内外面の墨書全体で一定の意味を持つのか、またその用途などは不明である。

柘状遺構828

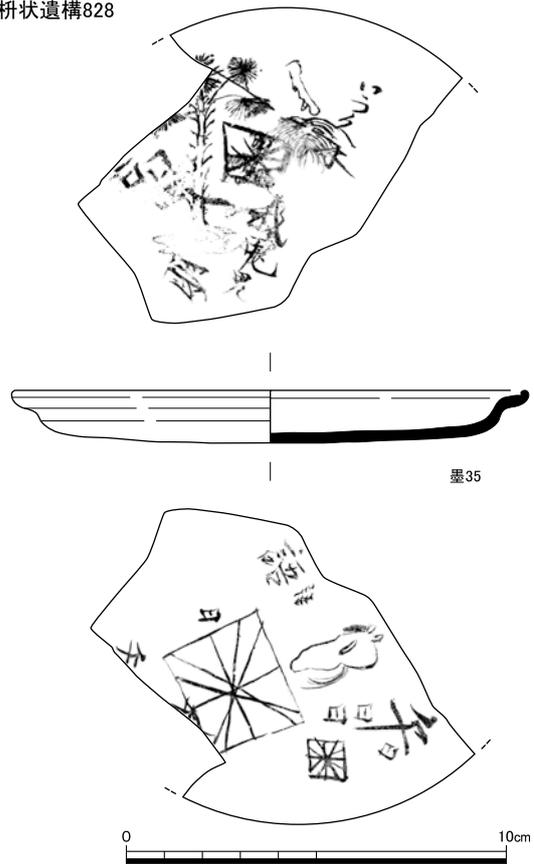


図68 墨書土器実測図3（1：2）

## 9. 木簡・絵馬（図69、巻頭図版4、図版51・52）

木簡・絵馬は9世紀前半と9世紀末のものが出土している。出土点数は木簡が7点、絵馬が1点である。木簡を時期別・遺構別にみると、9世紀前半の木簡は落込み456から5点（木墨1～5）、井戸359から1点（木墨6）、9世紀末から10世紀初めの木簡は井戸847から1点（木墨7）である。絵馬（木墨8）は落込み456からの出土である。

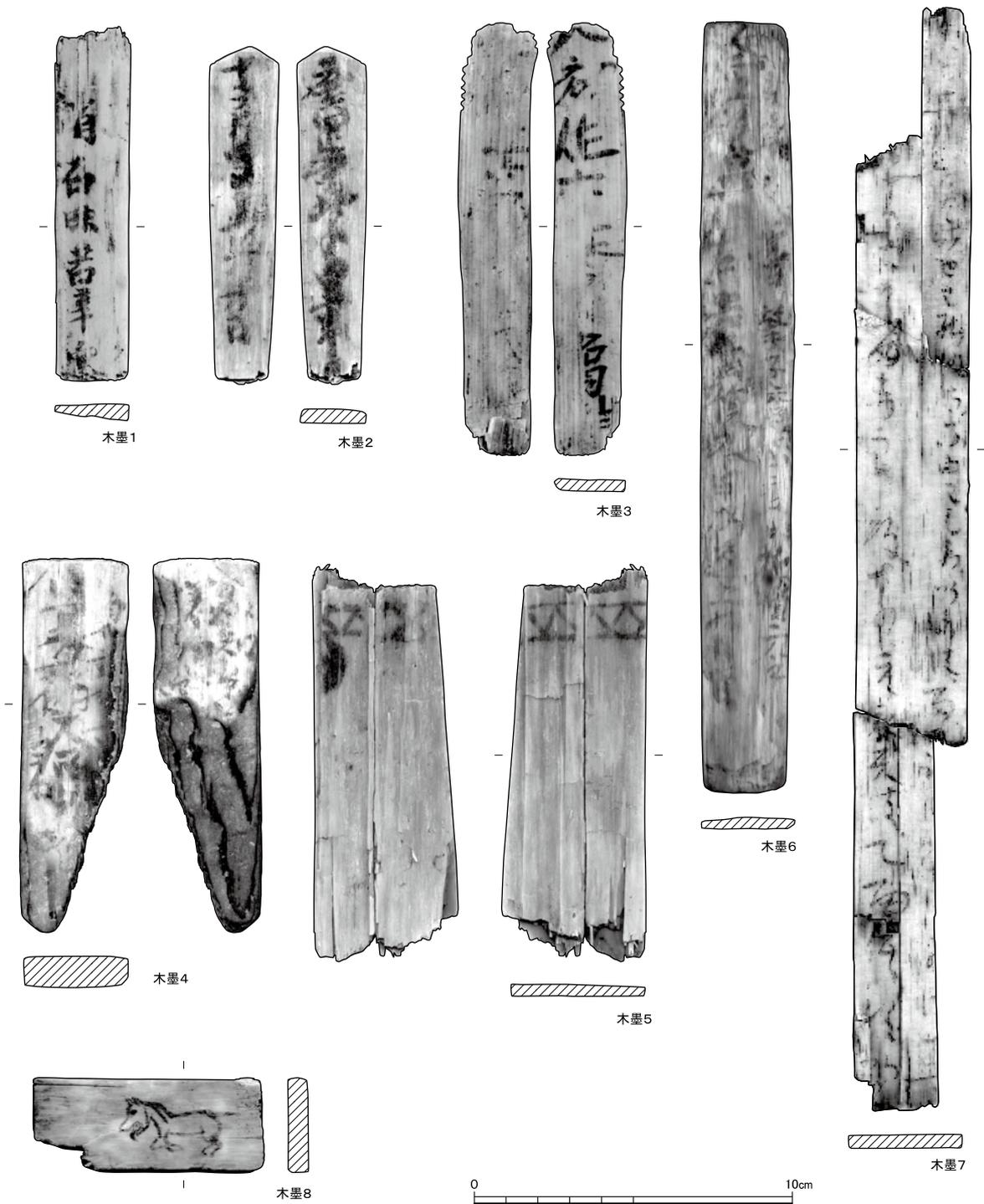


図69 木簡・絵馬実測図（1：2）

木簡訳文

木壘 1

消石味苦辛寒 × (112)×33×5 081

木壘 2

・「廣岡<sup>郷カ</sup>地子黒米□  
 ・「<sup>(3字か4字)肆カ</sup>□□□升廿日 (107)×22×5 019

木壘 3

・ □部佐<sup>(6字程度カ)</sup> □□□□□□  
 ・ □□□□ (137)×23×4 081

木壘 4

・ □□□□<sup>知知知カ</sup>  
 □□□□<sup>知カ</sup>  
 □□□□<sup>知カ</sup>  
 ・ □□□□  
 □□□□<sup>大カ(重ね書きカ)</sup> (118)×33×10 081

木壘 5

・ (符録カ)  
 ・ (符録カ) (123)×45×4 081

木壘 6

「<sup>見品カ</sup> □口 □□子六口□□六口□折櫃二合  
 返上□□□  
 右器□□不□仍返上□□□□<sup>高損カ用カ 元月四日カ</sup>」 244×29×4 011

木壘 7

(<sup>奈尔カ川カ 欠カ</sup> □□波□尔左□也己能波奈不由己毛利以末波、留<sup>也カ</sup>度□久□□能波奈(仮名の字母)  
<sup>なにかつカ くカ やカ</sup> □□は□にさ□やこのはなふゆこもりいまはゝるへと□く□□のはな□□  
 × □□□□るまらとすかたそ□<sup>えカ</sup>てはへる□□□□<sup>つといカ</sup>  
 ( □□<sup>欠カ</sup> 留末良度寸可多曾□天波<sup>衣カ</sup>留<sup>徒カ</sup>度<sup>以カ</sup>□□ (仮名の字母)  
 (348)×35×4 081

木墨1は上下の両端が折れている。樹種はスギ・板目材である。「消」の文字の上には左方向の矢印状の細線が2条、金属器で墨書前に刻まれている。「消石」(硝石・硫酸ナトリウム)の薬としての効能について説明している。消石は瀉下剤で、「苦」とは味を表し熱をとる作用、「寒」とは体を冷やす消炎・鎮痛作用でをこれらを併せ持つことを表す。<sup>14)</sup>「消石、味苦辛寒」と同じ文章は、『本草集注』(五世紀末に陶弘景が編纂した医書)や『新修本草』(唐の高宗の勅によって顕慶4年(659)李勣らが修訂した20巻の医書)にもみられる。典薬寮では延暦6年(787)までは『本草集注』、それ以降は『新修本草』をテキストに利用しており、本木簡は『新修本草』に拠っている可能性が高い。<sup>15)</sup>

木墨2は上端は圭頭状に削られ、下端は欠損する。樹種はスギ・板目材である。「廣岡□〔郷カ〕」から地子として輸納された黒米に付された荷札木簡。廣岡郷は播磨国佐用郡と美作国勝田郡と武蔵国豊島郡にある。

木墨3は上端の両側面に鋸歯状の刻目がある。上下端ともに欠損する。樹種はヒノキ・柾目材である。文字は木簡の幅に収まらない部分があり、刻目は、文字が書かれた後、何らかの目的で二次利用する際に施されたものと考えられる。

木墨4は下半は両面ともに炭化している。樹種はスギ・板目材である。墨書は左右に続いており、側面は折れているとみられる。両面に多数の小さな文字を書き込んでいるが判読できない。

木墨5は曲物のような薄板の両面に、X字状の文様が両面に墨書されている。上下端は欠損している。樹種はヒノキ・板目材である。

木墨6は上下端・両側面いずれにも欠損部分はない。樹種はヒノキ・板目材である。上部に「返上」などを記し、その下部に2行で文字を記す。右行に「折櫃」などの物品名と数量を記した上で、左行に何らかの理由で物品を返上する旨を述べる。「返上」の下1文字は「状」の可能性もある。

木墨7は右行と左行の2行書きで仮名文字が記されている。上下は欠損している。右行は「難波津に 咲くやこの花 冬こもり 今は春べと 咲くやこの花」の歌の全文が仮名文字で書かれている。<sup>16)</sup>右行は冒頭の部分は文字が薄く、下半以下の文字の右半分が欠損している。文字は歌の後にも続く。一方、左行は文字の大きさが右行よりも大きい。また、「はへる」(侍る)と読める部分があることから、歌ではなく散文である可能性が高い。基本的には左行も仮名文字と考えられるが、なお検討の余地が残る。樹種はヒノキ・柾目材である。

木墨8は横板の中央やや右寄りに左向きの馬の全身を描く。口は少し開き舌を出す。前脚は両方を上げ、後脚は両方が地に着く。尾は横方向に伸びている。長さ7.1cm、幅3.0cm、厚さ0.6cmを測る。板に馬の絵を描く「絵馬」は、全国で奈良時代を中心に80点余りが出土している。<sup>17)</sup>都城遺跡では、平城京・後期難波宮・平安京から出土している。これらの馬は、顎を引き、同じ片側の前後の足を上げる姿「側対歩」で描かれるなど共通があるものが多い。大きさは長さが約14~30cm、ものがある。<sup>18)</sup>奈良時代の都城遺跡出土のものとは大きく異なっており、大きさは全国的に見ても最小である。樹種はヒノキ・板目材である。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV
古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新

- 2) 『平城宮発掘調査報告X I』 奈良国立文化財研究所 1982年
- 3) 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年
- 4) 山中 章「古代宮都の「製塩土器」小考」『杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究』 1993年
- 5) 線刻土器は平安京ではほとんど出土例がないが、平城・長岡京出土の線刻土器については、官司の雑事に従事した非識字層の食器の識別のためのものと指摘されている。  
山中 章「行政機構の非識字層」『日本古代都城の研究』1997年
- 6) 軒丸瓦と丸瓦、軒平瓦と平瓦の識別は、和泉産瓦については厚さと胎土を指標とした。和泉産瓦は、軒丸瓦・軒平瓦の丸瓦部・平瓦部と丸瓦・平瓦とでは厚さが明確に異なっており、識別は容易である。一方、山城産の瓦には、和泉産瓦のように厚さの明確な違いはなく、各出土瓦の瓦当の有無、丸瓦では瓦当と丸瓦の接合痕跡の有無に拠らざる得なかった。この為、山城産瓦は軒丸瓦・軒平瓦の比率がさらに高くなる可能性もある。
- 7) 『岸部瓦窯発掘調査概報-吹田市小路-』大阪府教育委員会 1968年  
岸部瓦窯の軒瓦型式名は以下の文献による。  
『吹田市史 第8巻』吹田市役所 1981年  
網 伸也「平安京造営と瓦生産」『古代文化』第57巻11号 2005年
- 8) 『長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会 1987年
- 9) 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第31集 大山崎町教育委員会 2005年
- 10) 正倉院の和櫃についての記述以下の文献に依拠する。  
正倉院事務所編『正倉院宝物』全10巻 毎日新聞社 1994~1997年
- 11) 平安京内で出土した最大の曲物は、右京七条一坊十四町跡で検出した9世紀初頭の井戸（SE54）の底部に据えられたものであり、径82cm・高さ37cmを測る。側板の上段に箍を嵌め、釘で結合する。今回出土した井戸359の曲物は、それより径は小さいが、高さがある。また、側板と箍の間に縦板を挟み、構造が異なる。
- 12) 蛍光X線分析は、東京文化財研究所の北野信彦氏による。
- 13) 鈴木久男・前田義明「京都・鳥羽離宮跡」『木簡研究』第10号 1988年
- 14) 鳥越泰義『正倉院薬物の世界』平凡社 2005年
- 15) 吉野秋二氏のご教示による。
- 16) 仮名文字の概念は次の文献に拠る。  
鈴木景二「平安京右京三条一坊六町（藤原良相西三条第）出土の墨書土器」『平安京右京三条一坊六・七町跡-西三条第（百花亭）跡-』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
- 17) 島内洋二「出土絵馬小考-讀良郡条里遺跡出土の絵馬について-」『大阪文化財研究』第23号 財団法人大阪府文化財センター 2003年
- 18) 江浦 洋「難波宮跡出土絵馬雑考」『考古学論集』第6集 考古学を学ぶ会 2005年

## 第5章 ま と め

今回の調査は、平安京左京四条一坊二町の北東部で行い、主として平安時代前期から後期の遺構・遺物を検出し、その土地利用の変遷が明らかとなった。ただし、この間の遺構・遺物を絶え間なく検出したわけではなく、中期後半（10世紀後半から11世紀末）の遺構は存在せず、遺物も小片を含めてほとんどない。遺構は、平安時代前期から中期前半と平安時代後期の大きく2つに分かれ、それぞれで様相が異なっている。平安時代前期から中期は、掘立柱建物や井戸などの居住を示す一般的な遺構と共に、道路側溝よりも幅の広い護岸が施された宅地内排水溝を検出し、自然地形（落込み456）を埋める大規模な整地跡を確認した。後者の遺構は平安京内ではほとんど類例がなく、落込み456埋土からの多量の墨書土器の出土と共に、朱雀大路に面するという調査地の位置と相まって特異な様相を示す。平安時代後期は、二町の北東部に4時期の変遷を重ねる庭園遺構を中心とする遺構群を検出した。庭園遺構は、すべて平安京土器編年Ⅴ期古段階の土器型式1型式の中に収まる。平安京内では、これまでの調査で多くの庭園遺構を検出しているが、短い時間幅のなかで、これほどの改変を行っている例はなく、貴重な事例となった。

以下では、まず遺構の変遷について述べたのち、若干の問題点について触れたい。

### 1. 遺構の変遷

#### (1) 平安時代前期 (図70)

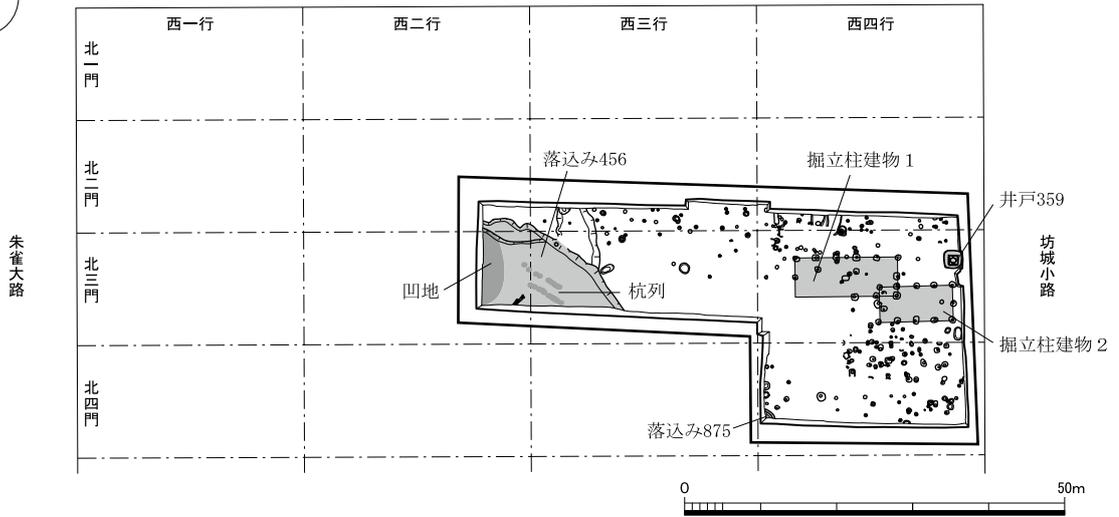
平安時代前期は、掘立柱建物1・2、井戸359、溝329、水場448、落込み456などがある。出土した遺物から、遺構群は前期1期（I期中段階から新段階）と前期2期（I期新段階からII期中段階）に分かれ、それぞれ順に述べる。

**前期1期** この段階の遺構には、落込み456、井戸359、掘立柱建物1・2がある。落込み456は北東から南西へ下がる自然地形であるが、これを埋めて平坦地の造成が行われる。南北11m以上・東西約19m以上、深さ約0.8mの大規模な埋立ては、平安時代初頭の平安京内では他に例をみない。調査地点である左京四条一坊二町は、その西限が朱雀大路の東築地となっている。調査地は、天神川扇状地と鴨川扇状地に挟まれた谷状の地形に位置している（図9）。落込み456の南西側がどこまで続くのかは不明であるが、これを放置すれば雨水が集中し朱雀大路に影響を与えることは容易に想像できる。落込み456の埋立ては、二町内の整備はもとより平安京造営とその整備の一環として行われた可能性が考えられる。ただし落込み456はすべて埋められたのではなく、その西端には凹地が残されていたとみられる（図版10-29・30層）。凹地の埋土は湿地状堆積であったことを示す粘土が堆積している。湧水あるいは流入する水量が多く、その処理施設の水溜めとして埋め残したことが考えられる。また、落込み456の底面で検出した北西から南東方向の2条の杭列がある。底面に突き刺さる杭の深度が浅いことから、落込み456の埋立て中に設置したものと考えられる。埋立て中の土留として設けられた可能性があるが、板の痕跡がなく、どのように機能していたかは課題として残る。杭の樹種はアカガシ亜属など6種類以上が確認され、落込み456埋土の花粉



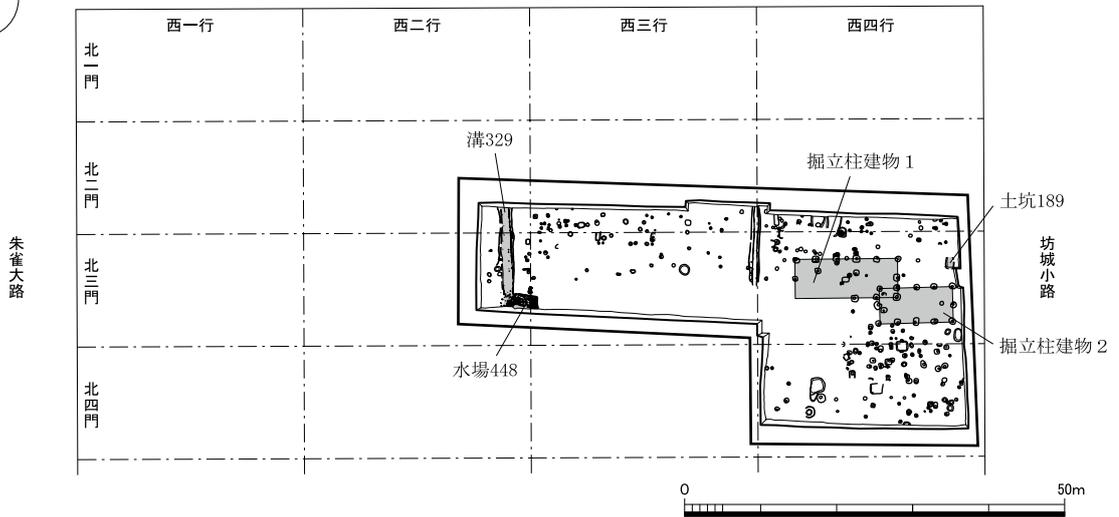
平安時代前期1期

六角小路



平安時代前期2期

六角小路



平安時代中期

六角小路

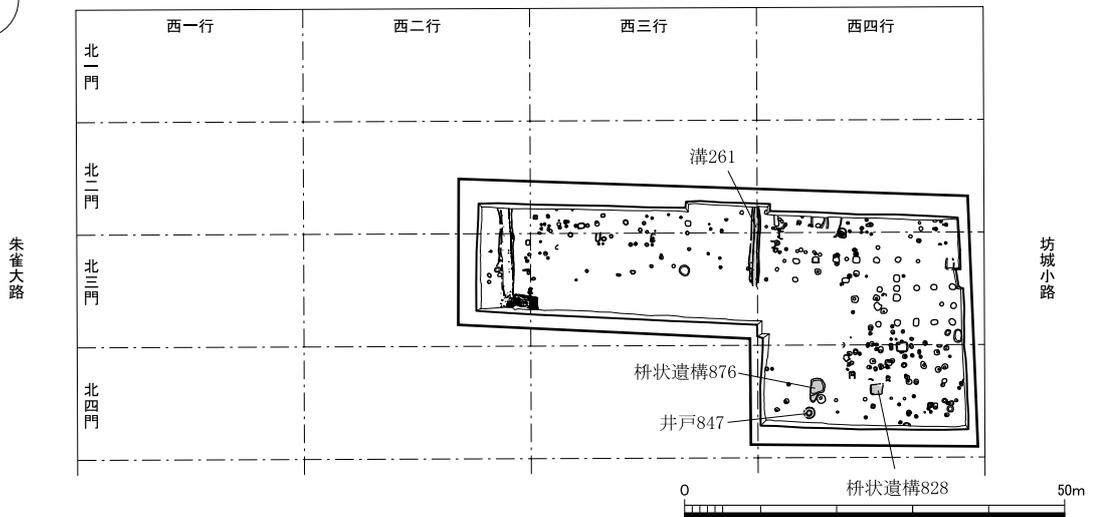


図70 遺構変遷図1 (1 : 1,000)

分析で明らかになった木本類の種類構成と矛盾がなく、周辺の雑木を集めたものと推測される。後述の溝326・261の護岸に用いられた杭や横板がスギ・ヒノキに限定されるのとは対照的である。落込み456埋土に含まれる花粉及び種実は草本類の割合が高く、カタバミ属・スベリヒユなどの人里や荒地に一般的な種類が多いことが特徴である。植生からは、周辺は既に未開の原野ではなく人為的な影響を受けていたと考えられるが、杭の樹種からは、なお周辺に雑木が存在する平安京造営当初の姿が浮かぶ。

一方、調査区内で最も標高が高い北東部には、枡の一边が1.2mを越える大型の井戸が構築される。井戸枡には、「東・西・南」の方位と「一・二・三」の数字を組み合わせた墨書が記されており、井戸を組み立てる際の番付を表すものと考えられる。ただし「北」は存在せず、使用位置と墨書の示す位置が異なっており、別の地で井戸枡として使用されていたものが再利用されたものと考えられる。掘立柱建物の2棟は平安時代前期のどの段階で建造されたものか明らかではないが、一部重複して建てられており、いずれかが井戸359と併存したとみられる。いずれも底は付かず、宅地内の主要建物ではない。井戸と近接することや二町の東端近くに位置することから、雑舎である可能性がある。ただし、掘立柱建物1は桁行柱間は9間と大きく、二町の性格を考える上で留意すべき点である。遺構の配置や地形から、二町内の土地利用としては調査区東部が主で、西部は雨水などの影響を受けやすく居住には不適であったと考えられる。

**前期2期** この段階には溝329、水場448などがある。この時期には、落込み456は西側の凹地も埋められ、上面は平坦に整地されており、溝329と水場448が構築される。溝329は杭と横板で護岸された幅1mを越える南北方向の溝であり、大規模な排水施設が必要であったことを示している。この時期に方位に沿った護岸を施す排水施設が構築されたことから、都城の中心部として計画的な土地の整備が行われたと考えられる。溝329から京内の調査としては多くの墨書土器が出土しており、この整備にも公的機関や有力者層の関連が窺える。また、溝329と接続する水場448の機能は明らかではないが、堰板によって水を溜める構造であることから、洗い場のような施設が想定される。

## (2) 平安時代中期 (図70)

平安時代中期には、溝261、井戸847、枡状遺構828・876がある。時期は、遺物から9世紀末から10世紀前半(Ⅱ期中段階から新段階)のものである。

9世紀末には井戸847が構築される。径0.6mの円形縦板組で、長さが不揃いの縦板と曲物の側板を構築材として利用する。縦板は整然と並ばず、隙間を埋めるように詰め込まれ、丁寧な作りとは言いがたい構造であるが、「なにはつ」の歌が墨書された木簡が出土した。10世紀前半には溝261と枡状遺構828・876が構築される。溝261は西三・四行の境界線にある溝であり、杭と横板で護岸が施される。杭列には2時期の重複が認められ、短期間に作り替えられたが、最終的には砂で埋まっており、大量の土砂を運搬するような流れがあったと考えられる。平安時代前期に引き続き、湧水や流れ込む水量が多く、排水施設が不可欠であったのであろう。枡状遺構828と827の構造は井戸と類似するが、底面が井戸847に比べて30～40cm高く、湧水点には達しておらず、水溜めな

どの機能が考えられる。この時期の建物を復元することはできなかったが、調査区南東部にあるピット群が建物の痕跡と考えられ、この時期にも居住空間として利用されたと考えられる。

### (3) 平安時代後期 (図71～73)

平安時代後期には庭園遺構(池・遣水・岬・景石など)を主として、礎石建物1、石組溝262、柵1～3、土坑などがある。庭園遺構は3回の作り替えが行われており、4時期にわたる変遷が明らかとなった。以下では、平安時代後期の遺構の変遷を、庭園遺構が存在する時期とその廃絶後をあわせて後期1～5期に分けて述べる。出土遺物からは、後期1～3期はいずれも12世紀前半(V期古段階)で時間差が認め難いが、後期4期はやや新しい要素(V期中段階)がみえる。後期5期は遺物の出土がほとんどないが、柱穴の埋土が平安時代後期の整地層に近いことから、後期4期の後、間もない頃と考えられる。

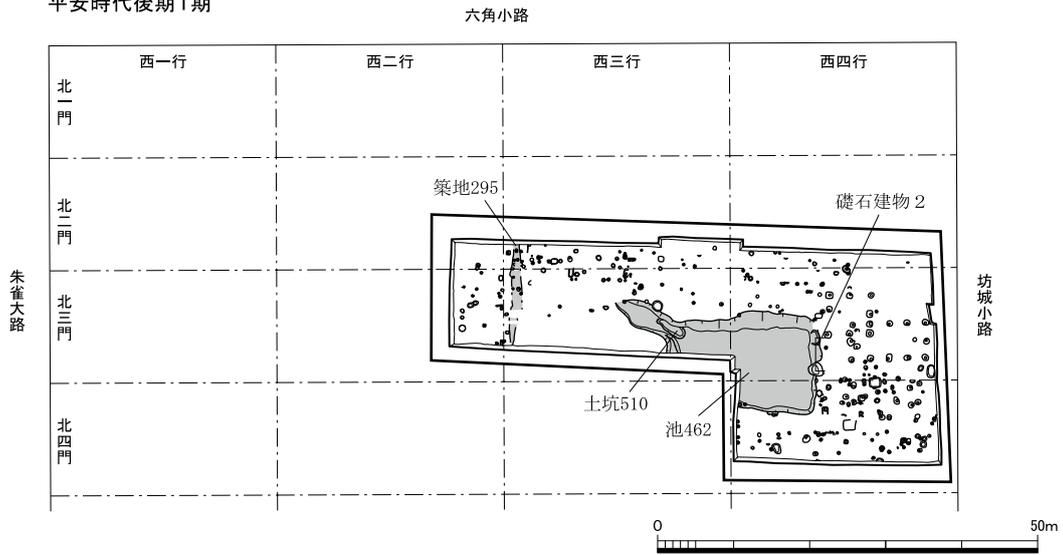
**後期1期** 検出した遺構には池462、土坑510、礎石建物2、築地295がある。池462は南東部を検出していないものの、方形の池と思われる。その中心は、西三・四行の境界線と北三・四門の境界線のほぼ交点付近に位置しており、池の位置は計画的に設定されたとと思われる。明確な導水施設は検出していないが、土坑510は遣水の一部の可能性があり、北西方向から水を引いていたとみられる。池462東岸には礎石建物2がある。池に突き出る釣殿のような建物が想定できる。このような建物の調査例として、雲林院跡<sup>1)</sup>、平安京右京三条一坊六町跡(西三条第跡)<sup>2)</sup>、平安京右京三条二坊十六町跡(斎宮邸跡)<sup>3)</sup>などがある。宅地規模を考える境界施設として、二町の東西中心に位置する築地295がある。平安時代後期のどの段階で構築されていたかは明らかではない。庭園の中心施設である池は、3回の作り替えによって規模は小さくなっていく。しかし、各時期で池の位置に変化はなく、池周辺に存在したと思われる建物群の配置関係も大きな変動はなかった可能性が高い。このように考えると、築地295あるいはそれに先行する区画施設が当初から存在していた可能性は高く、宅地規模は最大でも1/2町となる。これは後期2～4期に引き継がれると考えられる。

**後期2期** 池452・遣水509・岬848などの庭園遺構を主に検出した。池452は、全体の形状としては、後期1期の池462の方形の池を継承するが、池462の主に北東部を埋めて岬848を構築し、東岸の形状は大きく変化する。池への導水施設として遣水510があり、水は北西方向から南東方向へ水を引いていたとみられる。遺構面の地形は北東に高く南西に低くなっている。水を引きやすいのは北東から南西方向であるが、遣水の位置・方向とは逆方向となる。遣水の位置は、建物配置や泉などの水源との関係で決定されたとと思われる。遣水の位置は庭園遺構1期から3期までは変動していない。

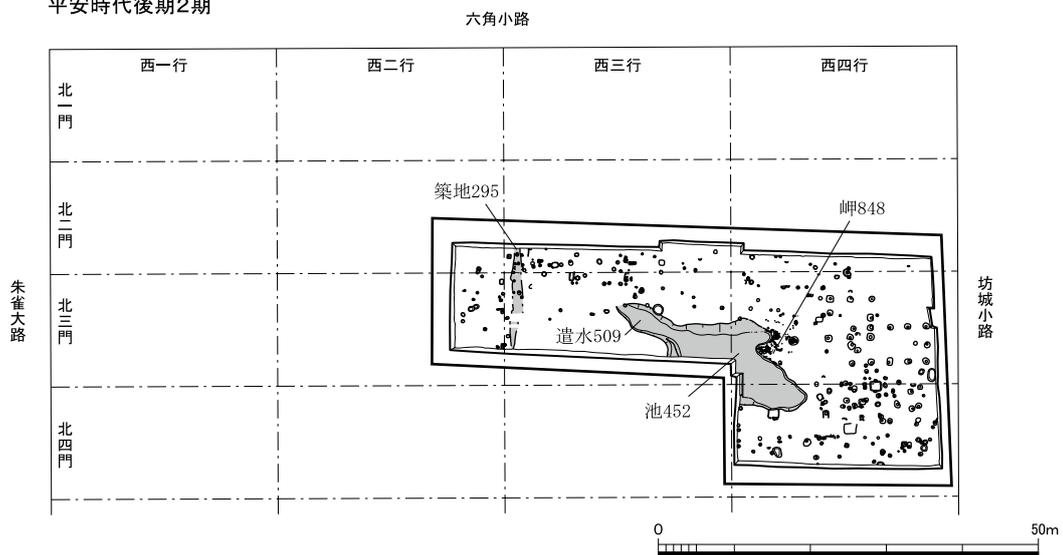
**後期3期** 主な遺構としては、池450・入江820・遣水457などの庭園遺構を検出した。池450と入江820は一つの池でそれぞれ北東部と南東部にあたる。後期2期の池452北東部を大きく埋め立て、池の平面形に方形池の面影は無くなる。池の平面形や意匠は最も変化に富む。池の水は、遣水457から池450へと導き、その途中には花崗岩とチャートの4石で構成される瀬落し449が設けられる。遣水からその注ぎ口の落差は約0.3mあり、その肩口には石組も設けられる。池南東部を構成する入江820は、直線的な平面形で北西部の池450とは対照的である。また、後期1・2期の池



平安時代後期1期



平安時代後期2期



平安時代後期3期

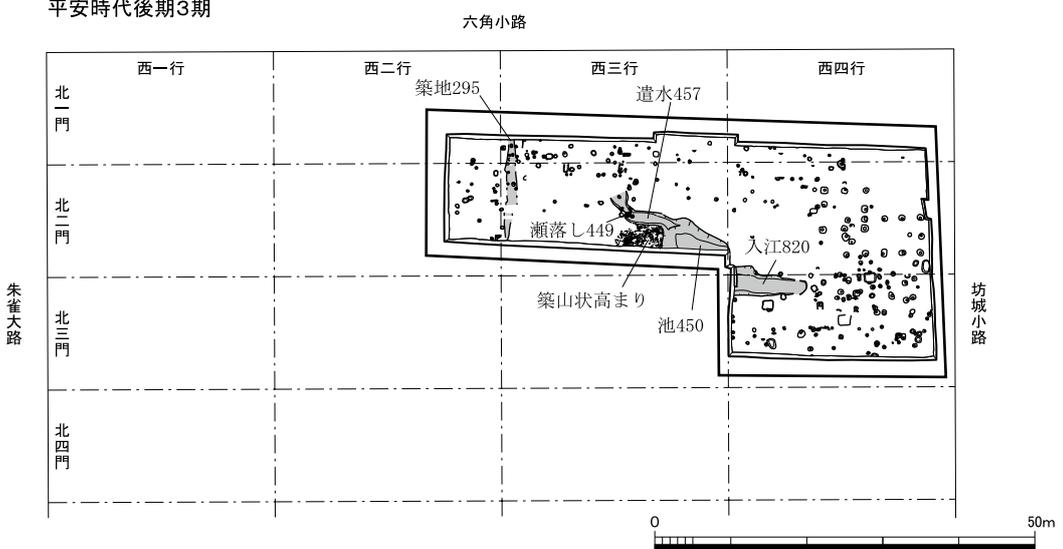


図71 遺構変遷図2 (1:1,000)

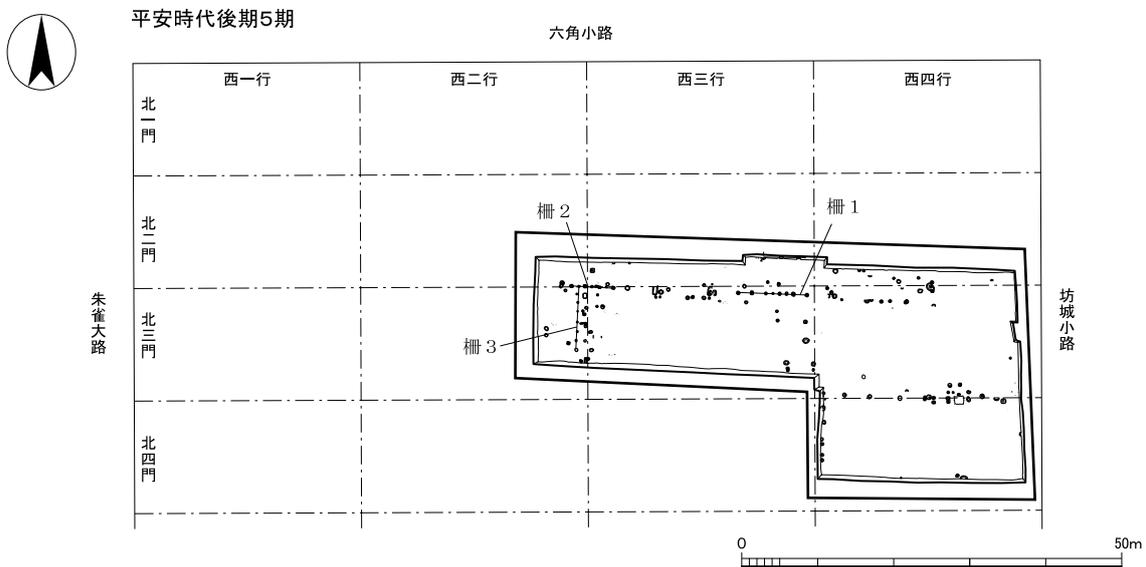
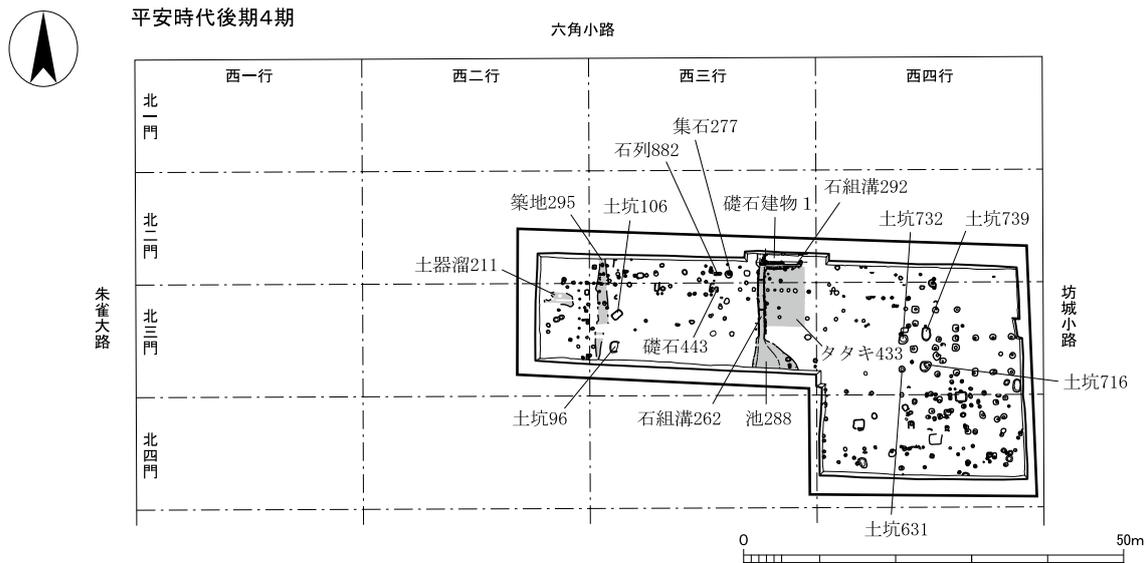


図72 遺構変遷図3 (1:1,000)

の底面が同じものを継承していたが、入江820の底面は、後期2期の池462の底部に土を盛り、新たに池底を作っており、ここでも大きな変化が認められる。

後期4期 検出した遺構には、池288、礎石建物1、石組溝262・292、タタキ433、瓦廃棄土坑(土坑96・106・631・716・732・739)などがある。

庭園遺構は、池の規模が最も小さくなり、形状も変化に乏しい。導水施設はこれまでの池北西部からの遣水であったが、池288の真北にある石組溝262に変わる。後期1～3期の池北西部の底面は、基本的に同じものを継承していたが、ここではその上に土を持って新たに作られている。これまでの池とは大きな違いがあり、後期1～3期の池と共通するのは西岸の位置以外にはない。宅地の性格などにも変化があった可能性がある。

礎石建物1は調査区の北端で検出したため、規模は明らかではないが、石組溝262・292を建物の南と西の雨落溝とし、池288にも近いことなどから宅地内の主要建物の一つであったと思われる。

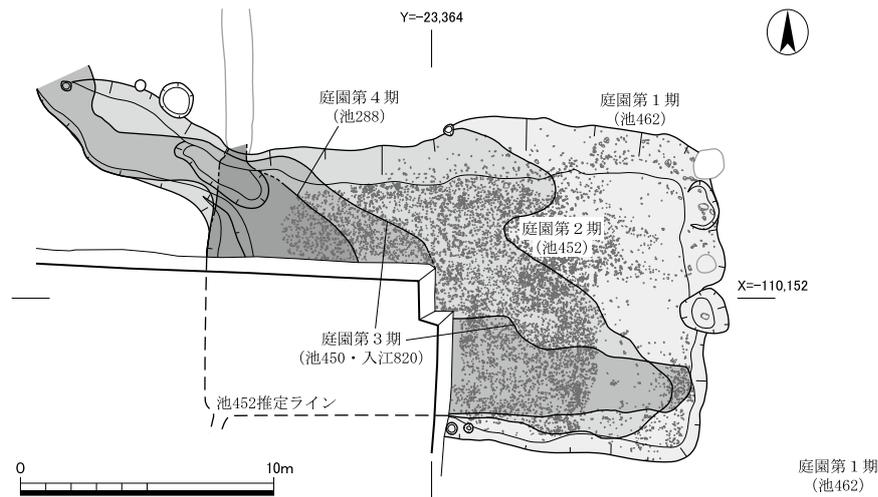


図73 池変遷図 (1 : 300)

る。タタキ433は、池288と礎石建物1に挟まれる位置にあることや、東西5m、南北8mで40㎡という一定規模を有することから、建物の一部ではなく、その全体に構築されたものと考えられる。礎石や掘立柱は検出していないが、簡易な屋根で覆われる四阿構造が想定される。これらの位置や構造、また石組溝262南端部と池288から多量の土師器皿が出土していることから、タタキ433は饗宴・儀礼の際に使用する場であった可能性が考えられる。

石組溝262・292の埋土には炭化物が含まれ、石組溝292の石の一部には被熱痕跡も確認された。また、池288の東西両側で検出した瓦の廃棄土坑からは焼けた壁土や炭化物、被熱痕跡のある瓦などが出土している。これらのことから、この時期の建物などの施設は、火災で焼失した可能性が高いと考えられる。

**後期5期** 検出した遺構としては、柵1～3がある。柵1・2は北二・三門の境界線上、柵3はほぼ二町の東西中心ライン上に位置する。それぞれの柵の検出位置から庭園遺構の廃絶後に宅地は分割され、その規模は最大でも1/8町となる。土地利用の実態は明らかにはし難いが、柵以外の遺構が存在しないことから、宅地としての利用はなく、耕作地であった可能性が高い。

## 2. 庭園遺構と大江公仲邸・藤原為隆の「坊城堂」について (図74)

12世紀前半に庭園を伴う宅地の存在が明らかとなった。文献史料に拠ると、調査地である平安京左京四条一坊二町には、11世紀末から12世紀前半に2つの土地利用の在り方を知ることができる。

一つは散位従四位下大江公仲の邸宅である。嘉保2年(1095)に罪に問われ隠岐国へ配流される際、この地の邸宅を分割して処分している。処分の際、丑寅角(北東の角地)は室家大江家(妻)、辰巳角(南東角地)は男以実(息子)、戌亥角(北西角地)は女子(娘)に分け、未申角(南西角地)は堂敷地として1町を4分割している<sup>4)</sup>。この邸宅の復元は大田静六氏が早くに行っているが<sup>5)</sup>、近年、藤田勝也氏によってその修正案が提示されている<sup>6)</sup>。それによると二町の北東部の1/4町に主要建物が集中していたとされる。

今一つは、大治2年(1127)12世紀前半に参議藤原為隆が仏堂を建立している<sup>7)</sup>。この仏堂は「三

間四面丈六堂」で「丈六阿弥陀仏、薬師、不動像、五尺四大天王像」が安置され、この他の仏堂に「懺法堂」や「迎講堂」、「居所」などもあり、「前池」を備えたその様子は「風流絶妙也」であったと記されている（以下では為隆建立の仏堂を「坊城堂」として述べる）。

調査によって明らかとなった4時期の庭園遺構のうち、いずれかが為隆の庭園に当てはまることは明らかである。以下に試論を述べてみたい。為隆は仏事を約30年間行ってきたことを保安5年（1124）に自身の日記に記している<sup>8)</sup>。仮にこれが大治2年に建立された仏堂と同じ場所で行ったとすると、大江

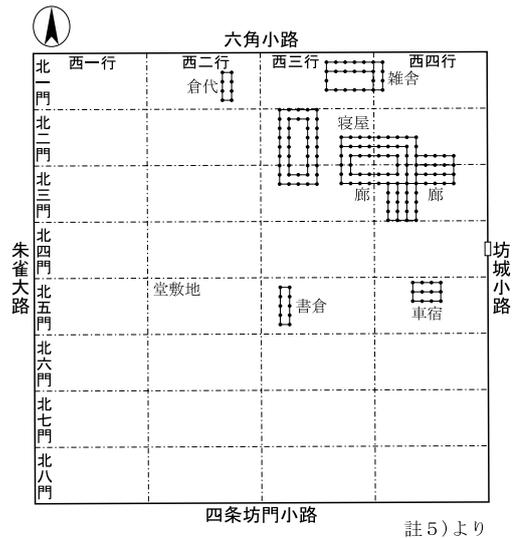


図74 大江公仲邸復元図

公仲が財産を処分した嘉保2年（1095）の直後に為隆は、左京四条一坊二町にこの地を入手したことになる。1期の庭園遺構から出土した土器は平安京土器編年V期古段階であり、その実年代は1090年頃から1120年頃と考えられている。年代の上限は大江公仲が1町規模邸宅4分割する頃に合致する。史料上、公仲邸に庭園の有無は明らかではないが、1期の池462の一部が埋められて2期の池452に作り替えられるのは、為隆が二町の地を入手後に、公仲の庭園を作り替えたことを示している可能性がある。その場合、庭園遺構が二町の北東1/4町の中央やや南寄りに計画的に配置されていることと、藤田勝也氏の公仲邸の中心施設が北東1/4町に集中するという指摘とも符合する。次に、大治2年建立の「坊城堂」の庭園遺構がいずれに該当するかが問題となる。3期の庭園遺構は、池450・入江820・遣水457などから成り、全体の景観が1～4期の池の中で最も変化に富む。4期の庭園遺構の池288は規模が小さく、全体に景色の変化も乏しい。「風流絶妙」と記された大治2年建立の「坊城堂」の庭園として最も相応しいのは、3期の庭園遺構と思われる。

為隆はこの地以外にも万里小路三条坊門や烏丸二条にも邸宅を有しており<sup>9)</sup>、左京四条一坊二町の坊城堂は、複数の仏堂があることから居住空間ではなく、仏事空間であった可能性が高い。3期から4期の池の変化は、池の極端な縮小、遣水から石組溝への導水施設の変化など、それまでの池を継承するものはほとんどなく、継続性を認め難い。為隆は大治5年に「坊城堂」で亡くなっている<sup>10)</sup>。その死後に土地利用の在り方が変化した可能性もある。

### 3. 「なにはつ」木簡について（表12）

9世紀後半の井戸847から出土した木簡には、2行に渡って仮名文字が記されており、右行に「なにはつ」の歌の全文が記されていた。

「難波津に 咲くやこの花 冬こもり 今は春べと 咲くやこの花」

この歌は、『古今和歌集』の「仮名序」に安積山の歌と共に、初学者が手習いの材料として使う歌として紹介されている。この歌を記した資料は、木簡・墨書土器の出土資料以外にも瓦や建築部

材などと多岐に渡り、今回のものを合わせると38例となる<sup>11)</sup>。木簡での最古例は7世紀代の徳島県観音寺遺跡出土例で、万葉仮名で記されている。本例と同じ9世紀代では、平安京右京三条一坊六町跡出土檜扇<sup>12)</sup>、富山県高岡市東木津遺跡出土木簡、射水市赤田I遺跡出土墨書土器などがある。ただし、ほとんどは歌の一部のみが記されたものであり、歌の全文が記されたと確定できるものは今回出土したものが初めてとなる。栄原永遠男氏によると、「歌木簡」は復元長60cmで歌が一行で書かれている。その用途としては手習いなどのほか、饗宴などの際に手に持って歌を唱和する際に用いられたと考えられている。今回出土した木簡は、残存長は約35cmと短い<sup>13)</sup>が、その中に歌の全文が記されている。また左行には散文が書かれており、これまでの歌木簡の形態・文字の記し方などが異なる点が多く、用途も違うと思われる。一つの可能性としては、右行の歌の注釈などを左行に記したのかもしれない。

平安京での9世紀後半の仮名文字の出土例は、平安京右京三条一坊六町跡（西三条第跡）出土の同時期の墨書土器に続くものである。『古今和歌集』（延喜5年（905）成立）の序文には「仮名序」と「真名序」がある。今回出土した「なにはつ」の仮名木簡は、まさに『古今和歌集』が編まれるその前夜にあたり、今後仮名文字の成立と普及を考えるのに重要な定点を与えるものと思われる<sup>14)</sup>。

最後に今回の調査成果を通観すると、平安時代前期は自然地形の窪地に対して大規模な埋立てを行い（落込み456）、宅地内の排水施設としては他に例をみない規模のものを構築している（溝359）。これらは雨水の影響を受け易い地形的な理由に対処するものである。それは二町内の整備は当然であるが、西側に存在する平安京のメインストリートの朱雀大路やその築垣への雨水の影響を防ぐことも、その施工理由として考えられる。調査地は、朱雀大路に面する平安京内の一等地とはいえ、雨水の影響を受け易く宅地として必ずしも適しているとは言えない。大規模な造成や大型の井戸の構築に加えて、落込みや井戸から出土した多量の墨書土器や木簡などの出土とあわせてみると、土地利用としては高位の貴族などの邸宅というよりも公的な施設が存在した可能性が高い。

平安時代中期前半は遺構数が少ないが、排水溝（溝）や井戸、柵状遺構の存在から、何らかの土地の利用が存在したことは明らかである。また、「なにはつ」の木簡は、歌の全文が記された初めてのものであり、散文とみられる文字も併せて記される。今後、歌木簡の機能とともに、「仮名」文字の成立と普及を考える貴重な資料となろう。

平安時代中期後半は遺構・遺物が存在せず、土地利用の断絶時期となる。既往の周辺調査でもこの時期の建物・道路側溝などの遺構が検出された例はほとんどなく、右京の衰退とともに平安京の変容時期となることを示している。

平安時代後期になると、庭園・礎石建物などを中心とした遺構が検出され、土地利用が活性化する。庭園は4時期の変遷があるが、それぞれは史料に残る大江公仲邸や藤原為隆の「坊城堂」に伴うものと考えられる。

平安時代前期は、埋立てによる大規模な整地や大型の井戸、多量の墨書土器や木簡の出土など公

表12 「歌木簡」と今回出土「なにはつ」木簡集成表

番号	呼称	a面の文字	b面の文字	出土場所	木簡の年代	現存長(cm)	現存幅(cm)	現存厚(cm)	型式番号
1	はるくさ木簡	皮留久佐乃皮斯米之刀斯□	なし	前期難波宮内南西隅付近	7世紀中	(18.5)	2.65	0.5~0.65	019
2	なにはつ木簡	奈尔己矢己 奈尔波ツ尔...	墨書	観音寺遺跡徳高南環状道路 自然流路 SR1001 V層	7世紀後半の土器が 伴出	(16.1)	(4.5)	0.7	019
3	なにはつ木簡	奈尔波ツ尔...	□□倭了 物ア...	石神遺跡の北側 SD4089	天武朝ごろ	(29.5)	(2.9)	0.4	081
4	とくとくさだめて木簡	□止止佐田目 手... (2行書き)	羅久於母閉 皮(2行書き)	飛鳥池遺跡南北溝 SD110	出土した溝の下限は 持統朝	(12.5)	(1.6)	0.3	081
5	なにはつ木簡	奈尔波ツ尔... / 佐久□□職職... (2行書き)	[ ]皮皮職職職馬 采田評	藤原京左京七条一坊西南坪の 池状遺構 SX501	大宝初年	38.7	3.4	0.4	011
6	たたなづく木簡	多々那都久... (習書・落書)	(習書・落書)	藤原宮内から北流する溝 SD105	7世紀末~8世紀初 め	(9.4)	(2.6)	0.2	081
7	両面なにはつ木簡	□矢己乃者奈夫由...	□伊己册理伊...	平城宮第1次大極殿院の南西部 SD3825A	和銅~養老期	(25.1)	2.0	1.3	051
8	あさかやま木簡	奈迭波ツ尔... □夜己能波 □□由己□	阿佐可夜... [ ]流夜真	宮町遺跡西大溝 SD22113	天平16年~17年初 以前に埋没	(7.9+14.0)	(2.2)	0.1	081
9	玉に有れば木簡	玉尔有皮手尔麻伎母知而伊□	□□皮伊加尔□□	平城宮東張出部東南隅左京二坊 坊間大路西側溝 SD5781	天平19年 木簡が伴出	(13.6)	2.2	0.2	019
10	なにはつ木簡	□□□□佐久□...	□知知知屋...	辻井遺跡 旧夢前川河川跡	7世紀初頭~8世紀 の木簡が伴出	(34.4)	3.4	0.3	019
11	あまるとも木簡	阿万留止毛... (2行書きと推定)	墨書	平城宮跡土坑 SK219	出土土坑は天平 宝字未年に埋没	17.1	(1.4)	0.2	019
12	あさはぎ木簡	阿支波支乃之多波毛美□	□□□馬馬 馬...	馬場南遺跡川 SR1	第二期(760年~長岡 京期)に埋没	(23.4)	(2.4)	0.6~1.2	019
13	ものさし転用木簡	目毛美須流安保連紀我...	「奈尔」	平城宮東院地区南北溝 SD3236B	宝龜5年木簡が伴出	(58.5)	3.0	0.4	019
14	なにはつ木簡	奈尔波都尔佐	なし(割層)	西河原宮ノ内遺跡	奈良時代後半	(14.4)	(3.2)	—	091
15	はるなれば木簡	波流奈礼波伊万志...	由米余伊母波夜 久...	秋田城跡外郭東門跡外 土取り穴 SG1031	延暦10~14年ごろ	(18.1)	(2.0)	0.6	081
16	はるべと木簡	はルマ止左くや古乃は□	なし	東木津遺跡溝 SD60	9世紀後半~10世紀 前半	25.0	3.4	0.6	011
17	なにはつ木簡	□□は□にさ□□やこのはなふゆこもり いまはゝるへと□く□□のはな□□ / ×□□□□るまらとすかたそ□□てはへ る□□□□	なし	平安京左京四条一坊二町跡 井戸847	9世紀後半	(34.8)	3.5	0.4	081

※ 註13) 奈良永達男2011を元に作成、一部改編。

的な施設の存在が推定される。後期になると、貴族の邸宅あるいは仏堂などのプライベートな空間に変化している。これは律令国家の都城である平安京から中世都市京都への生まれ変わりを反映するものと捉えることもできる。

註

- 1) 『雲林院跡』京都文化博物館調査研究報告 第15集 京都文化博物館 2002年
- 2) 『平安京右京三条一坊六・七町跡－西三条第（百花亭）跡－』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
- 3) 『平安京右京三条一坊十五・十六町跡－「齋宮」の邸宅跡－』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 第21冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 4) 『平安遺文』1338号
- 5) 太田静六「従四位下・大江公仲の所領と邸宅」『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987年
- 6) 藤田勝也『日本古代中世住宅史論』中央公論美術出版 2004年 第二章「雑舎と対屋」の註12に大江公仲邸の復元案を示している。またその想定図は以下に発表している。  
藤田勝也・古賀秀策『日本建築史』昭和堂 2001年
- 7) 『中右記』大治二年（1127）十月十七日条
- 8) 『永昌記』保安五年（1124）四月十五日条
- 9) 『殿暦』永久四年（1116）九月二十三日条  
『中右記』大治二年（1127）十二月十二日条
- 10) 『長秋記』大治五年（1130）九月十四日条
- 11) 森岡 隆「安積山の歌を含む万葉木簡三点と難波津の歌」『木簡研究』三一号 2009年 森岡氏の集成は34例。その後、奈良県斑鳩町中宮寺旧伽藍跡出土の平瓦に刻まれたものが1例、平安京内で今回のものを合わせて3例、合計4例が出土している。
- 12) 註2に同じ。
- 13) 栄原永遠男『万葉歌木簡を追う』和泉書院 2011年
- 14) 今回出土した歌木簡の文字は、いわゆる「草仮名」と呼ばれるものである可能性もある。しかし現在、「草仮名」を巡っては、歴史学、国語学、書道史の各分野で再定義が行われている途上にある。また、今回の「なにはつ」仮名木簡は全文解読にも至っていないので、ここでは「仮名」として報告をした。「草仮名」の概念、9・10世紀の仮名文字の出土資料については、以下の文献にまとめられている。  
鈴木景二「平安京右京三条一坊六町（藤原良相西三条第）出土の墨書土器」、註2文献所収。

# 付章 1 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

今回の分析調査では、平安京左京四条一坊二町跡の発掘調査区における、9世紀前半および12世紀前半の古環境に関する情報を得ることを目的として、花粉分析、大型植物化石分析を実施した。なお、本報告では、発掘調査時に公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した大型植物化石分析結果も含めて検討する。

## 1. 調査区の層序概要

調査地点の層序を模式柱状図として図1に示す。発掘調査により明らかになった9世紀前半の調査区の地形は、西部が湿地、その東側が砂礫を主とする河川堆積物からなる微高地（沖積リッジ）からなる。沖積リッジを構成する堆積物は側方への層相変化が著しい扇状地性堆積物からなり、その上部は人為的擾乱の影響を強く受けている。一方、調査区西部の湿地（落込み456）を構成する堆積物は有機質泥からなるが、9世紀前半に土地の拡大を目的として実施された2回の埋め立て土により覆われている。最初の段階は、砂礫と湿地堆積物由来の有機質泥ブロックが利用され、沖積リッジ東斜面側から堆積斜面を形成しながら、落込み456の西端付近まで埋め立てが行われている。埋め立て土中には土留のためとみられる杭列も確認されている。これら埋め立てにより形成された平坦面最上部は固く締まっており、構築時に突き固められている可能性がある。2回目の埋め立ては、最西端部に残存した凹地がほぼ充填された段階に行われており、砂礫・泥ブロックなどを利用し、客土されている。最初の段階の埋め立て時に残存した凹地は、有機質泥質砂～砂質泥により充填されており、上位ほど泥がちで有機質が少なくなる。

12世紀前半の遺構は、1区中央南部では園池がその下位の基盤をなす河川堆積物を掘削して構築されている。池を充填する堆積物はやや有機質を含む砂質泥層堆積物からなり、下部には礫が敷かれている。有機質を含む砂質泥層の上位には、大礫、中礫、砂質泥のブロック土（偽礫・微小ブロック）を利用した整地層が累重する。この整地層は、下半部は間隙密度の大きい大礫・中礫サイズのブロック土、上半部でブロック土のサイズが小さくなり、最上部では間隙がほとんど認められなくなり、固く締まった薄層からなる客土の積層からなる。このような層相から、突き固めを行いながら整地が行われた状況が窺える。これらの堆積物からは12世紀前半の遺物が出土することから、12世紀前半に南部に池が構築されたものの、その後、何らかの理由により埋め立てられ、整地が行われ、新たな土地利用が行われたことになる。

分析試料は、12世紀前半の庭園遺構2期の池452充填堆積物と9世紀前半の遺物を多量に含む調査区最西端の落込み456充填堆積物について実施した。調査地点の12世紀前半の池452の基盤をなす堆積物は淘汰の悪い砂礫からなる。池充填堆積物は塊状をなすやや有機質を含む泥質砂～砂質

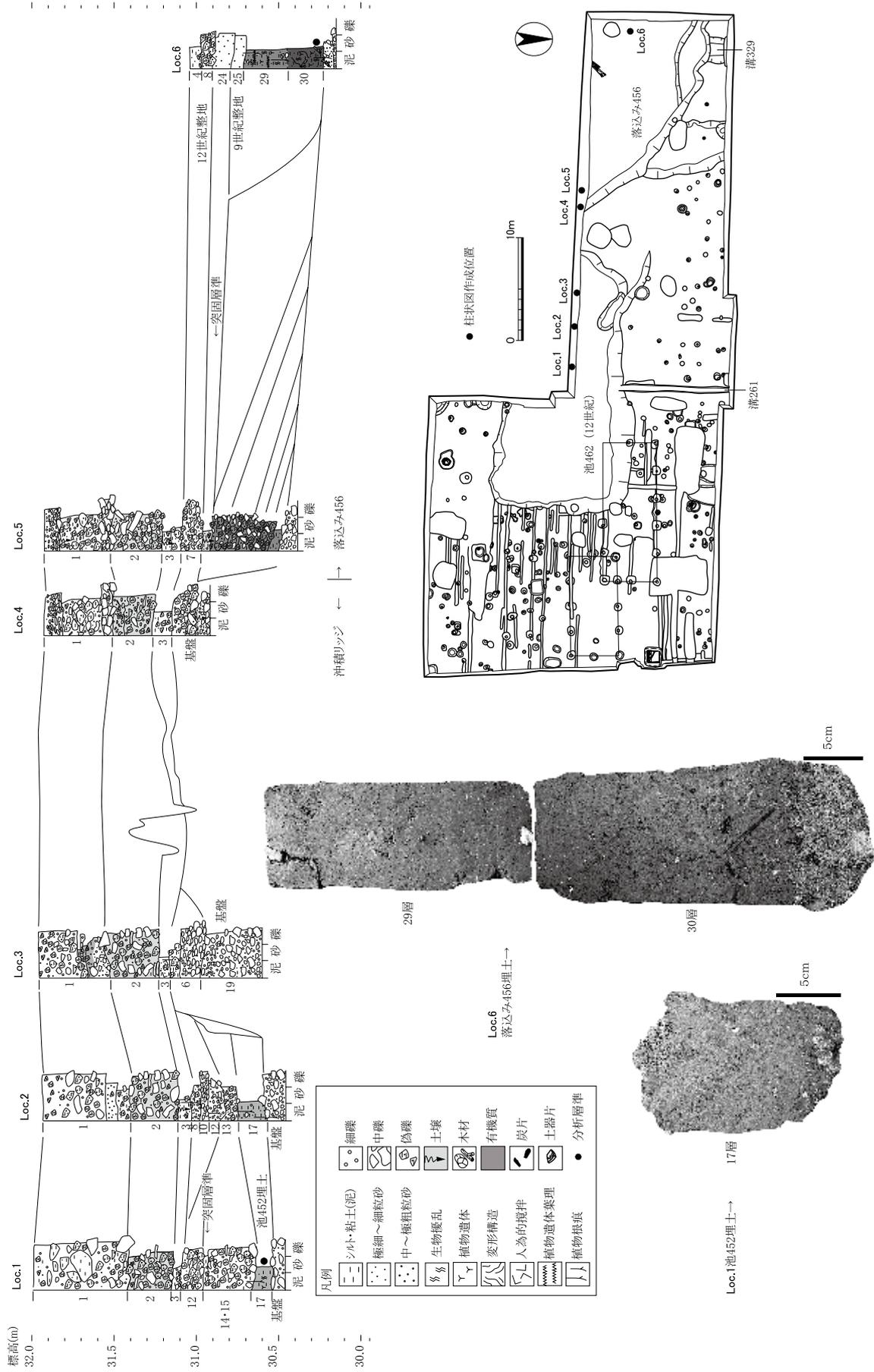


図1 調査地点の層序および分析試料採取位置

泥からなり、偽礫、細礫・中礫がわずかに混じる。上位層から連続する根成孔隙などの棲管も確認される。最上部は人為的な整地土の偽礫堆積物に覆われている。

落込み456の基盤は砂礫からなる。充填堆積物は最下部が礫混じり中粒砂～細粒砂、その上位に有機質泥質砂～砂質泥が累重する。生物擾乱が顕著で多数の棲管が確認される。また、人為的営力により取り込まれた遺物、炭片、木製品、種実などの植物遺体が混じる。また、不明瞭ながら塑性変形しており、ロード状の構造が確認される。このような構造は、地震動による変形構造に類似するが、特定するには至らなかった。なお、平安時代に京都盆地に大きな影響を与えたとみられる大規模な記録地震（京都市防災会議,1996）は、827年8月11日（天長4年7月12日、M〔マグニチュード〕6.8）、887年8月26日（仁和3年7月30日、M8級）、938年5月22日（天慶元年4月15日、M7）、976年7月22日（貞観元年6月18日、M6.7以上）、1096年12月17日（永長元年11月24日、M8級）、1099年2月22日（康和元年1月24日、M8級）、1185年8月13日（文治元年7月9日、M7.4）などがある。

## 2. 分析方法

### （1）花粉分析

試料約10gについて、フッ化水素酸による泥化、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman（1952,1957）、Faegri and Iversen（1989）などの花粉形態に関する文献や、島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）などの邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

### （2）大型植物遺体分析

試料200cc（311g）を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後の試料を粒径別にシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体や葉遺体を拾い出す。拾い出しは、試料50cc（74g）に含まれる種実遺体は全てを対象とし、残りの試料150cc（237g）は、木本類や主な栽培種、試料50ccで検出されなかった分類群や状態が良好な種実遺体を対象とする。

種実遺体や葉遺体の同定は、現生標本および藤下（1984）、石川（1994）、中山ほか（2000）、鈴木ほか（2012）などを参考に実施し、状態別（完形、破片（半分以下）、炭化）の個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。

種実類以外は、一覧表の下部に定性的な量比をプラス「+」で表示する。また、デジタルノギスを用いて、栽培種などの主な種実遺体の大きさを計測し、結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸保存し、返却する。

### 3. 結果

#### (1) 花粉分析

結果を表1、図2に示す。いずれの試料からも花粉化石が豊富に産出し、保存状態も比較的良好である。

落込み456：30層（9世紀前半）：総花粉に占める木本花粉が30%程度、草本花粉が50%程度である。木本花粉では、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属アカガシ亜属がやや高く、スギ属、サワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属などを伴う。

草本花粉では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属、オオバコ属、水生植物のガンマ属・サジオモダカ属・ミズオアイ属・ゴキヅル属、栽培植物のソバ属などが産出する。このほか、回虫卵、鞭虫卵などの寄生虫卵も産出する。

池452：17層（12世紀前半）：総花粉に占める木本花粉の割合は、50%程度、草本花粉は30%程度である。木本花粉ではマツ属（複維管束亜属を含む）が40%と優占する。このほかモミ属、ツガ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属などが低率に伴う。このほか、虫媒性で花粉生産量が少ない、サクラ属、カキノキ属、タニウツギ属などが比較的目的だった産状を示す。

草本花粉では、イネ科が比較的多産し、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属、オオバコ属、水生植物のイボクサ属・ミズオアイ属・スイレン属・ヒシ属・ゴキヅル属、栽培植物のソバ属・ベニバナ属などが産出する。このほか、回虫卵、鞭虫卵などの寄生虫卵が産出する。

#### (2) 大型植物化石分析

結果を表2に示す。裸子植物1分類群（マツ属複維管束亜属）の葉が1個と、被子植物50分類群（コナラ属、シマサルナシ、ヒサカキ属、キイチゴ属、サンショウ属、サジオモダカ属、オモダカ科、スブタ、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、イネ、エノコログサ属、イネ科（メヒシバ類、その他）、ミクリ属、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、カヤツリグサ属（A、B）、カヤツリグサ科、ギシギシ属、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、サナエタデ近似種、スベリヒユ、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、タガラシ、キンポウゲ属、アブラナ科、キジムシロ類（隆条斜上型）、カタバミ属、エノキグサ、モモルディカメロン型、マクワ・シロウリ型、メロン類、スズメウリ、ゴキヅル？、アリノトウグサ、チドメグサ属、シソ属－イヌコウジュ属、イヌコウジュ近似種、メハジキ属、ナス、ナス属、タカサブロウ、コオニタビラコ）の種実が545個の、計546個が抽出・同定された。3個は同定ができなかったが、同一分類群・部位と考えられる（キンポウゲ属の果実に似る）2個を不明A、残りの1個を不明Bとしている。分析残渣（抽出同定対象外）は、木材、炭化材、植物片、蘚苔類の茎・葉、昆虫類、砂礫類が確認された。試料50cc(74g)

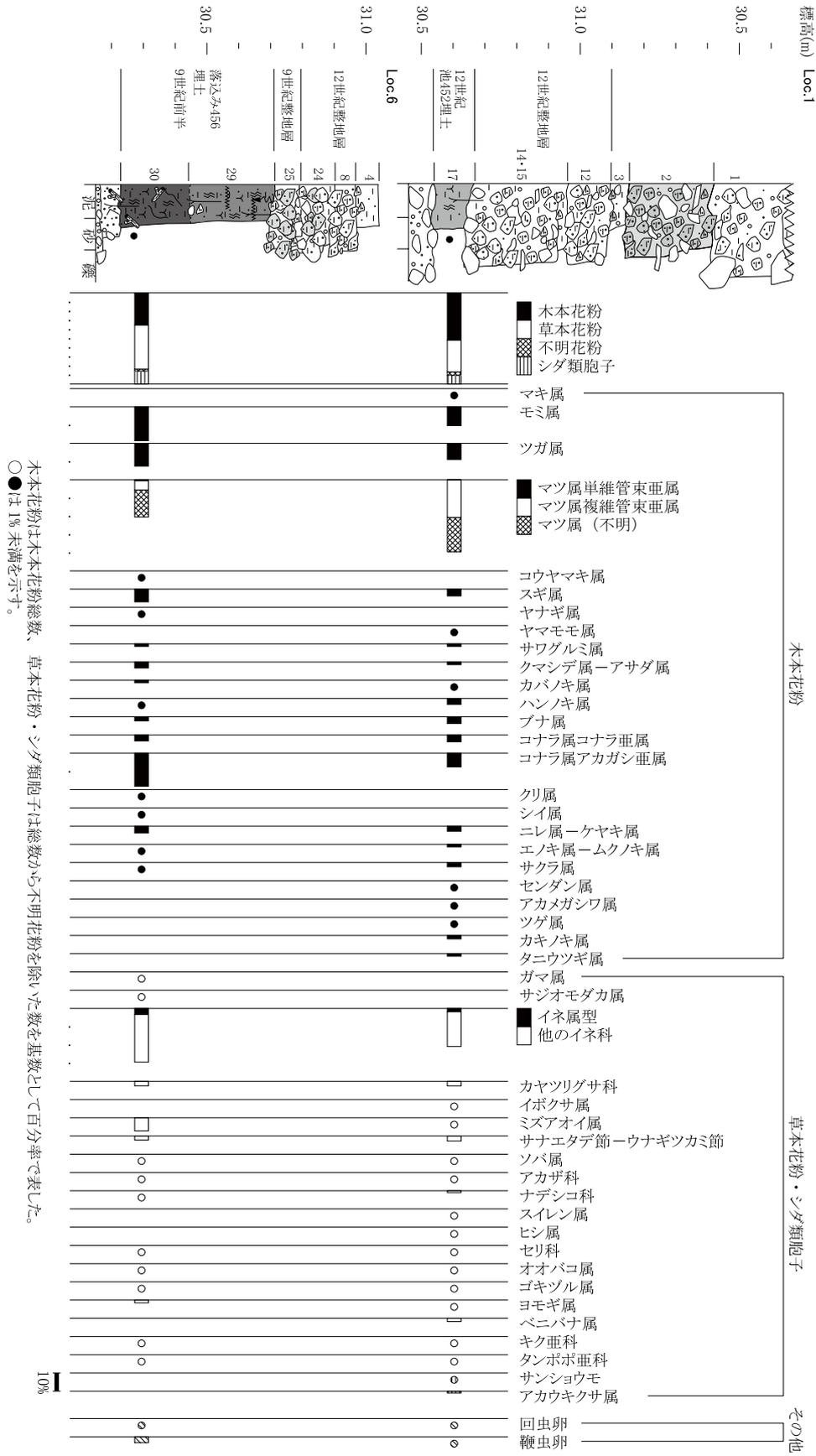


図2 主要花粉化石の層位分布

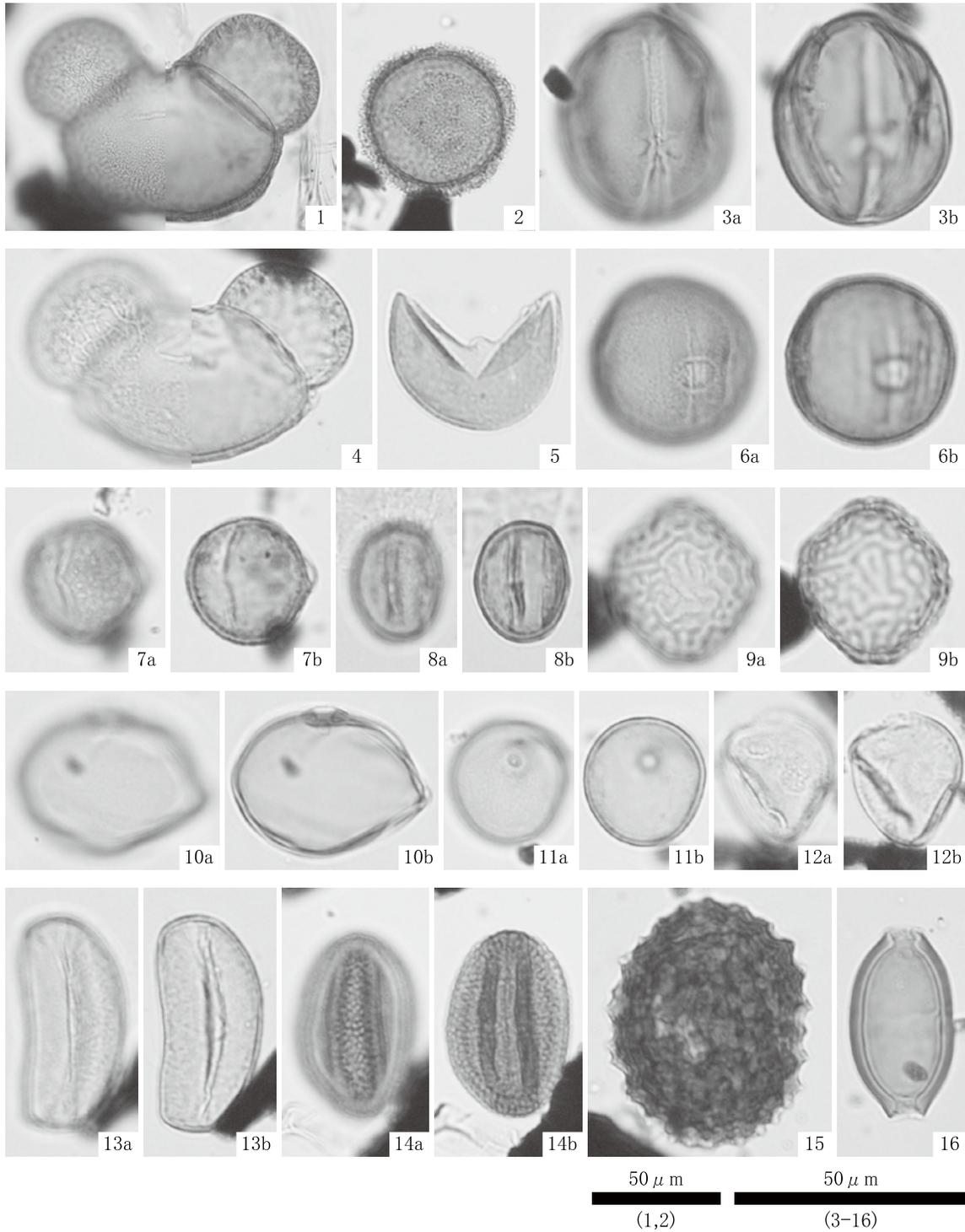
表1 花粉分析結果

種類	遺構名・層名	
	池452	落込み456
	17層	30層
木本花粉		
マキ属	1	-
モミ属	22	40
ツガ属	19	27
トウヒ属	-	2
マツ属単維管束亜属	-	1
マツ属複維管束亜属	44	11
マツ属(不明)	40	32
コウヤマキ属	-	1
スギ属	8	15
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	1
ヤナギ属	-	2
ヤマモモ属	1	-
サワグルミ属	3	3
クマシデ属-アサダ属	3	7
カバノキ属	1	3
ハンノキ属	7	2
ブナ属	8	5
コナラ属コナラ亜属	8	7
コナラ属アカガシ亜属	16	39
クリ属	-	1
シイ属	-	2
ニレ属-ケヤキ属	6	8
エノキ属-ムクノキ属	3	1
サクラ属	5	1
ミカン科	3	-
センダン属	2	-
アカメガシワ属	1	-
ツゲ属	1	-
モチノキ属	-	1
ノブドウ属	1	-
ウコギ科	1	-
ミズキ属	-	1
ツツジ科	-	1
カキノキ属	4	-
エゴノキ属	2	-
イボタノキ属	-	1
タニウツギ属	3	-
草本花粉		
ガマ属	-	1
サジオモダカ属	-	3
イネ属型	7	20
他のイネ科	76	156
カヤツリグサ科	10	15
イボクサ属	1	-
ミズアオイ属	1	43
ギシギシ属	1	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	11	13
ソバ属	2	1
アカザ科	2	4
ナデシコ科	4	4
スイレン属	1	-
カラマツソウ属	-	2
キンボウゲ属	1	1
キンボウゲ科	1	2
アブラナ科	1	2
バラ科	5	-
マメ科	-	2
キカシグサ属	-	3
ヒシ属	3	-
アカバナ属-ミズユキノシタ属	-	2
セリ科	2	2
オオバコ属	1	1
オミナエシ属	1	-
ゴキツル属	1	3
ヨモギ属	2	9
ベニバナ属	7	-
キク亜科	2	5
タンポポ科	1	1
不明花粉		
不明花粉	15	13
シダ類胞子		
ヒカゲノカズラ属	1	-
イノモトソウ属	1	2
サンショウモ	1	-
アカウキクサ属	4	-
他のシダ類胞子	33	85
合計		
木本花粉	213	215
草本花粉	144	296
不明花粉	15	13
シダ類胞子	40	87
合計(不明を除く)	397	598
その他		
回虫卵	3	2
鞭虫卵	4	20
不明寄生虫卵	1	-

表2 落込み456の大型植物化石分析結果

分類群	部位	状態	層位・分析量		備考
			30層	50cc	
			150cc	(74g)	
木本					
マツ属複維管束亜属	葉	破片	-	1	状態不良のため横断面確認不可
コナラ属	果実	破片	-	2	アカガシ亜属?
シマサルナシ	種子	破片	-	1	
ヒサカキ属	種子	完形	-	1	ヒサカキの可能性
キイチゴ属	核	完形	-	2	
サンショウ属	種子	破片	3	-	サンショウ?
草本					
サジオモダカ属	果実	破片	2	-	
オモダカ科	種子	完形	1	1	
スプタ	種子	破片	-	1	
ミズアオイ近似種	種子	完形	13	+	
		破片	1	+	
コナギ近似種	種子	完形	-	1	
イボクサ	種子	完形	-	5	
		破片	1	-	
イネ	穎(基部)	破片	23	24	
	穎	破片	136	+	
		破片炭化	3	-	
エノコログサ属	果実	完形	1	+	
		破片	6	+	
イネ科(メヒシバ類)	果実	完形	3	+	
		破片	4	+	
イネ科(その他)	果実	完形	1	+	
		破片	9	+	
ミクリ属	果実	完形	1	1	
イヌホタルイ近似種	果実	完形	1	-	
ホタルイ属	果実	完形	1	2	
		破片	2	+	
カヤツリグサ属A	果実	完形	2	+	
カヤツリグサ属B	果実	完形	1	+	
カヤツリグサ科	果実	完形	7	+	
		破片	1	+	
ギシギシ属	果実	完形	2	3	
		破片	1	+	
	果実・花被	完形	-	1	
	花被	破片	4	+	
ミソソバ	果実	完形	-	2	
		破片	5	+	頂部3,基部2
ヤナギタデ近似種	果実	完形	-	1	
		破片	4	+	
ボントクタデ近似種	果実	破片	1	+	
サナエタデ近似種	果実	完形	-	1	
		破片	5	+	
		花被	2	+	
スベリヒユ	種子	完形	1	2	
ナデシコ科	種子	完形	14	+	複数種
		破片	6	+	
アカザ属	種子	完形	2	+	
ヒユ属	種子	完形	17	+	
		破片	8	+	
タガラシ	果実	完形	12	+	
		破片	21	+	
キンボウゲ属	果実	完形	-	1	
アブラナ科	種子	完形	2	2	
キジムシロ類(隆条斜上型)	核	完形	-	2	
カタバミ属	種子	完形	9	+	
		破片	7	+	
エノキグサ	種子	破片	1	-	
モモルディカメロン型	種子	破片	-	1	
マクワ・シロウリ型	種子	完形	-	1	
		破片	1	2	
メロン類	種子	破片	12	17	
スズメウリ	種子	破片	1	-	
ゴキツル?	種子	破片	2	-	
アリハトウグサ	核	完形	-	1	
チドメグサ属	果実	完形	6	+	
		破片	8	+	
シソ属-イヌコウジュ属	果実	完形	3	2	
		破片	9	9	
イヌコウジュ近似種	果実	完形	-	1	
メハジキ属	果実	完形	-	2	
ナス	種子	完形	3	16	
		破片	11	20	
ナス属	種子	完形	-	3	小型
タカサブロウ	果実	完形	5	3	
		破片	2	+	
コオニタビラコ	果実	完形	-	1	
不明A		完形	1	+	キンボウゲ属?
		破片	1	+	
不明B		完形	1	-	
種実以外(抽出同定対象外)					
木材			-	+	
炭化材			+	+	
植物片			+	++	
蘚苔類の茎・葉			+	+	
昆虫類			+	+	
砂礫類			+	++	

注)抽出同定は、試料50ccは全種実、試料150ccは木本や主な栽培種、50ccで検出されなかった分類群や状態が良好な種実を対象とする。



- |                        |                           |
|------------------------|---------------------------|
| 1. モミ属(池452 17層)       | 2. ツガ属(池452 17層)          |
| 3. カキノキ属(池452 17層)     | 4. マツ属(池452 17層)          |
| 5. スギ属(池452 17層)       | 6. ブナ属(池452 17層)          |
| 7. コナラ属コナラ亜属(池452 17層) | 8. コナラ属アカガシ亜属(池452 17層)   |
| 9. ニレ属-ケヤキ属(池452 17層)  | 10. イネ科(イネ属型)(落込み456 30層) |
| 11. イネ科(池452 17層)      | 12. カヤツリグサ科(池452 17層)     |
| 13. ミズアオイ属(落込み456 30層) | 14. ソバ属(池452 17層)         |
| 15. ベニバナ属(池452 17層)    | 16. 鞭虫卵(落込み456 30層)       |

図3 花粉化石

の出土個数は410個で、草本種実407個と大半（99.3%）を占める。

栽培種は、イネの穎の基部が47個、破片が136個（50cc）、炭化した穎の破片が3個（50cc）、モルディカメロン型の種子が1個、マクワ・シロウリ型の種子が4個、メロン類の種子が29個、ナスの種子が50個の、計270個が確認され、全体の約半数（50.5%）を占める。なお、シソ属－イヌコウジュ属には、エゴマやシソなどの栽培種の可能性を含むが、出土果実は小型（径1.2～1.5mm）で、典型的な栽培種と判断可能な大型果実（径1.8mm以上）は確認されなかった。

栽培種とその可能性を除いた分類群は、木本は、常緑針葉樹で高木になる二次林要素のマツ属複維管束亜属と、広葉樹のコナラ属（おそらく常緑高木のアカガシ亜属？）、ヒサカキ属（おそらく常緑低木のヒサカキ）、落葉低木のキイチゴ属、サンショウ属（おそらく落葉低木のサンショウ）、落葉藤本のシマサルナシなどの、本地域に分布する常緑広葉樹林（照葉樹林）の構成種や、林縁や伐採地などの明るい場所に生育する陽樹が確認された。なお、複維管束亜属の葉横断面観察を試みたが、保存状態が不良のため、アカマツとクロマツの区別ができなかった。

草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多く、沈水植物のสบタ、抽水植物のサジオモダカ属、オモダカ科、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、ミクリ属、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、湿生植物のミゾソバ、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、タガラシ、スズメウリ、ゴキヅル？、タカサブロウ、コオニタビラコなどの水湿地生植物や、エノコログサ属、イネ科（メヒシバ類他）、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、ギシギシ属、サナエタデ近似種、スベリヒユ、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、キンボウゲ属、アブラナ科、キジムシロ類（隆条斜上型）、カタバミ属、エノキグサ、アリノトウグサ、チドメグサ属、イヌコウジュ近似種、メハジキ属、ナス属などの、やや乾いた場所にも生育可能な中生植物が確認された。

各分類群の写真を図4・5に示し、主な分類群の形態的特徴などを以下に述べる。また、主な種実遺体の計測値を表3に示す。

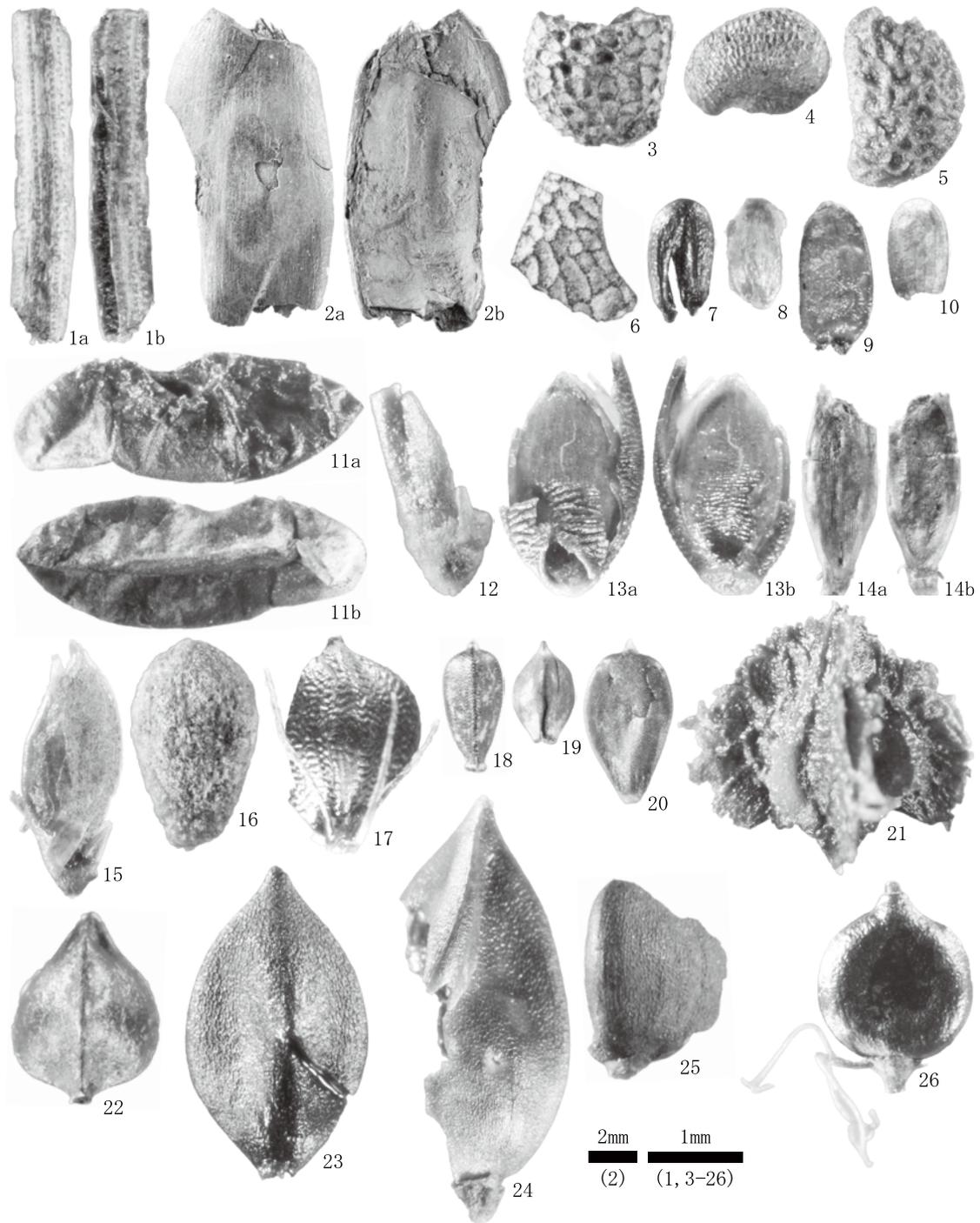
・イネ（*Oryza sativa* L.） イネ科イネ属

穎（果）は淡～灰褐色、炭化個体は黒色、長さ6～7.5mm、幅2.5～3mm、厚さ1mm程度の扁平な長楕円体を呈す。基部に径1mm程度の斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲朶を構成する。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。出土穎は全て破片で、最大2.5mmを測る。

・メロン類（*Cucumis melo* L.） ウリ科キュウリ属

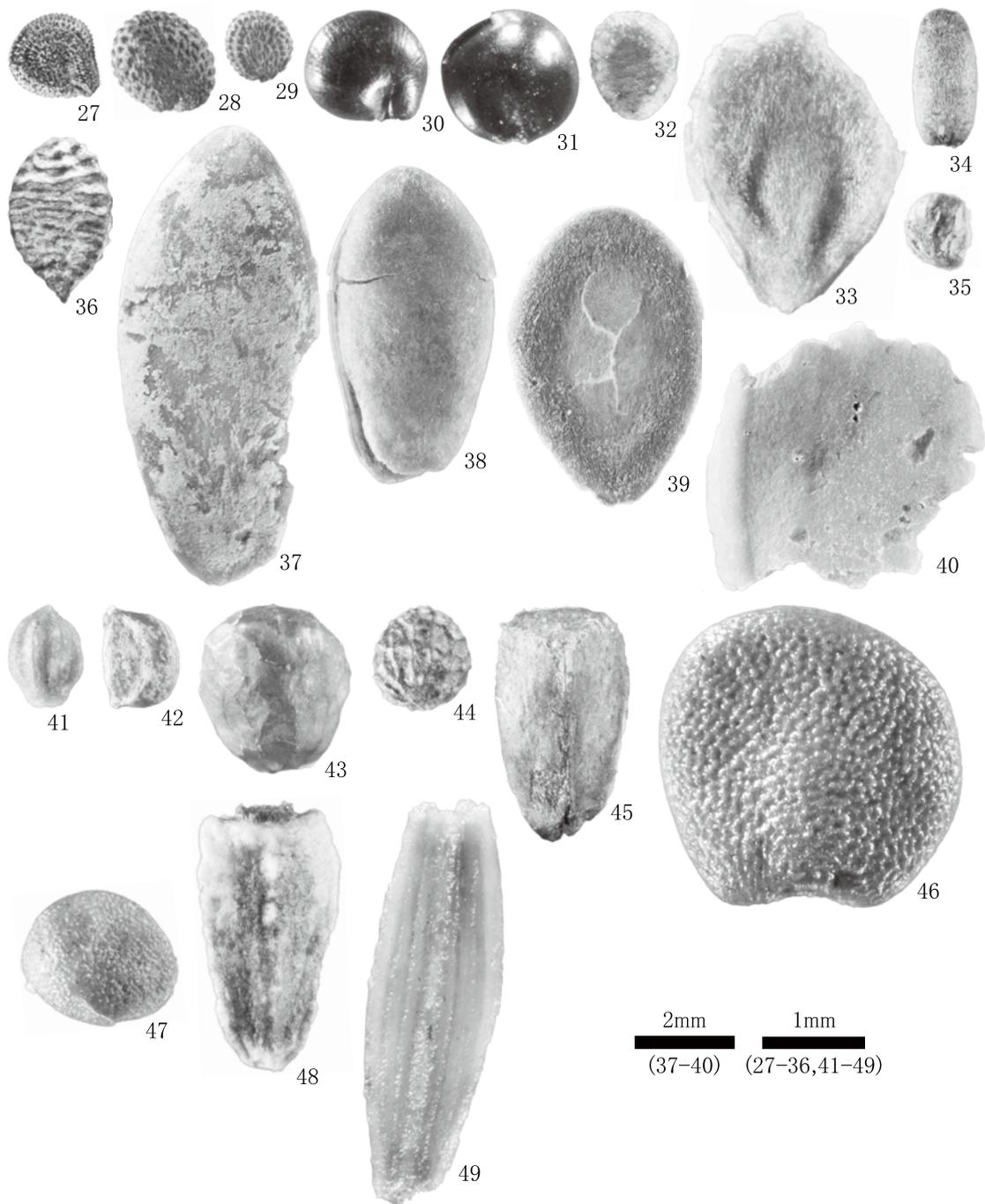
種子は淡灰褐色、扁平な狭倒皮針形で、基部に倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面には縦長の細胞が密に配列する。長さの欠損がない5個の長さは6.2～9.1mm、幅は3.2～3.9mm、厚さは1.2mmを測り、1個が藤下（1984）の基準による大粒のモルディカメロン型（長さ8.1mm以上）、4個が中粒のマクワ・シロウリ型（長さ6.1～8.0mm）に分類される。なお、長さの復元が困難な破片をメロン類としている。

・ナス（*Solanum melongena* L.） ナス科ナス属



- |                              |                              |                             |
|------------------------------|------------------------------|-----------------------------|
| 1. マツ属複雑管束亜属 葉(落込み456 30層)   | 2. コナラ属 果実(落込み456 30層)       | 3. シマサルナシ 種子(落込み456 30層)    |
| 4. ヒサカキ属 種子(落込み456 30層)      | 5. キイチゴ属 核(落込み456 30層)       | 6. サンショウ属 種子(落込み456 30層)    |
| 7. オモダカ科 種子(落込み456 30層)      | 8. スブタ 種子(落込み456 30層)        | 9. ミズアオイ近似種 種子(落込み456 30層)  |
| 10. コナギ近似種 種子(落込み456 30層)    | 11. イボクサ 種子(落込み456 30層)      | 12. イネ 穎(基部)(落込み456 30層)    |
| 13. エノログサ属 果実(落込み456 30層)    | 14. イネ科(メシバ類) 果実(落込み456 30層) | 15. イネ科 果実(落込み456 30層)      |
| 16. ミクリ属 果実(落込み456 30層)      | 17. イヌホタルイ近似種 果実(落込み456 30層) | 18. カヤツリグサ属A 果実(落込み456 30層) |
| 19. カヤツリグサ属B 果実(落込み456 30層)  | 20. カヤツリグサ科 果実(落込み456 30層)   | 21. ギンギン属 果実・花被(落込み456 30層) |
| 22. ギンギン属 果実(落込み456 30層)     | 23. ヤナギタデ近似種 果実(落込み456 30層)  | 24. ミソソバ 果実(落込み456 30層)     |
| 25. ポントクタデ近似種 果実(落込み456 30層) | 26. サナエタデ近似種 果実(落込み456 30層)  |                             |

図4 種実・葉遺体(1)



- |                                 |                              |
|---------------------------------|------------------------------|
| 27. スベリヒユ 種子(落込み456 30層)        | 28. ナデシコ科 種子(落込み456 30層)     |
| 29. ナデシコ科 種子(落込み456 30層)        | 30. アカザ属 種子(落込み456 30層)      |
| 31. ヒユ属 種子(落込み456 30層)          | 32. タガラシ 果実(落込み456 30層)      |
| 33. キンボウゲ属 果実(落込み456 30層)       | 34. アブラナ科 種子(落込み456 30層)     |
| 35. キジムシロ類(隆条斜上型) 核(落込み456 30層) | 36. カタバミ属 種子(落込み456 30層)     |
| 37. モモルディカメロン型 種子(落込み456 30層)   | 38. マクワ・シロウリ型 種子(落込み456 30層) |
| 39. スズメウリ 種子(落込み456 30層)        | 40. ゴキツル? 種子(落込み456 30層)     |
| 41. アリノトウゲサ 核(落込み456 30層)       | 42. チドメグサ属 果実(落込み456 30層)    |
| 43. シソ属-イヌコウジュ属 果実(落込み456 30層)  | 44. イヌコウジュ近似種 果実(落込み456 30層) |
| 45. メハジキ属 果実(落込み456 30層)        | 46. ナス 種子(落込み456 30層)        |
| 47. ナス属 種子(落込み456 30層)          | 48. タカサブロウ 果実(落込み456 30層)    |
| 49. コオニタビラコ 果実(落込み456 30層)      |                              |

図5 種実・葉遺体(2)

表3 落込み456の主な種実遺体の計測値

分類群	部位	番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
モモルディカメロン型	種子	-	9.1	3.9	0.8+	半分厚, 図5-37
マクワ・シロウリ型	種子	1	6.2	3.2	1.2	図5-38
マクワ・シロウリ型	種子	2	7.1+	3.0+	0.7+	
マクワ・シロウリ型	種子	3	6.6+	3.4+	0.5+	
マクワ・シロウリ型	種子	4	7.1+	3.5+	0.7+	
シソ属-イヌコウジュ属	果実	1	1.3	1.1	0.9	図5-43
シソ属-イヌコウジュ属	果実	2	1.4	1.3	1.0	
シソ属-イヌコウジュ属	果実	3	1.2+	1.2+	-	
シソ属-イヌコウジュ属	果実	4	1.0+	1.1+	-	
シソ属-イヌコウジュ属	果実	5	1.1+	1.1+	-	
シソ属-イヌコウジュ属	果実	6	1.5	1.4	0.8+	
シソ属-イヌコウジュ属	果実	7	1.3	1.1	0.8+	
シソ属-イヌコウジュ属	果実	8	1.4	1.2	1.0+	
シソ属-イヌコウジュ属	果実	9	1.2+	0.9+	0.4+	
イヌコウジュ近似種	果実	-	1.0	0.9	0.7	網目模様明瞭, 図5-44
ナス	種子	1	2.9	3.0	0.9	図5-46
ナス	種子	2	3.1	2.9	0.7	
ナス	種子	3	2.7	2.9	0.9	
ナス	種子	4	2.8	3.3	0.4	
ナス	種子	5	2.3	3.1	0.6	
ナス	種子	6	2.6	3.1	1.1	
ナス	種子	7	2.4	3.1	0.9	
ナス	種子	8	2.6	3.0	0.5	
ナス	種子	9	2.6	3.2	0.9	
ナス	種子	10	2.6	3.1	0.4	
ナス	種子	11	2.4	2.8	0.9	
ナス	種子	12	3.0	2.7	0.4+	
ナス	種子	13	2.5	2.7	0.4	
ナス	種子	14	2.9	2.9	0.6+	
ナス	種子	15	2.6+	2.9	0.5	
ナス	種子	16	2.9	2.9	0.5	
ナス	種子	17	2.7	3.0	0.8+	
ナス	種子	18	2.8	2.9	0.5	
ナス属	種子	1	1.4	1.3	0.3	図5-47
ナス属	種子	2	1.4+	1.3+	0.2+	
ナス属	種子	3	1.1+	1.7+	0.2+	

(注) 計測はデジタルノギスを使用。

種子は灰黄褐色、扁平で歪な腎臓形で基部はやや肥厚し、くびれた部分に臍がある。種皮は柔らかく、表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。欠損がない種子14個の長さは、最小2.3～最大3.1(平均2.9±標準偏差0.2)mm、幅は2.7～3.3(平均3.0±0.2)mm、厚さは0.4～1.1(平均0.7±0.3)mmを測る。なお、長さ1.1～1.4mm、幅1.3～1.7mm、厚さ0.3mmのナスよりも小型で網目模様もより微細な種子3個は、野生種に由来する可能性が高いため、ナス属としている。

#### 4. 考察

上述してきた分析結果と発掘調査時に京都市埋蔵文化財研究所によって実施された各時期の遺構出土種実および12世紀前半の池452堆積物の種実分析結果(表4・5)を踏まえ、9世紀前半および12世紀前半の調査地点および周辺の植生に関する検討を行う。

##### (1) 落込み456埋立て期(9世紀前半)

分析調査を行った落込み456充填堆積物は、初段階の埋め立てが行われた後、1区西端に埋め残された凹地を充填した堆積物で、層相から湿地のような堆積場で形成されたことが推定される。このような堆積環境を踏まえると、産出した花粉化石や大型植物化石は、遠方より水流や飛来したものも含まれるものの、調査地点近辺の植生を強く反映している可能性が高い。

表4 池452埋土出土の種実分析結果

分類群	部位	層位・分析量		生育場所
		南壁17層	1700ml	
木本				
キイチゴ属	核	2		山野・道端
トゲ		1		
草本				
タデ科(三稜形)	果実	4		水辺・湿地・道端
ザクロソウ	種子	20		道端・畑
スベリヒユ	種子	32		畑・道端
ツメクサ	種子	58		道端
ハコベ属	種子	15		道端・畑
ヒユ属	種子	9		畑・道端
タガラシ	果実	23		水田
キンボウゲ属	果実	1		山野・道端
オニバス	種子	1		池・沼(浮葉性)
オトギリソウ属	種子	2		湿地
キジムシロ属	果実	1		野原・河原
カタバミ属	種子	3		道端・畑
メロンの仲間	種子	1		栽培
ミズキンバイ	種子	1		池・沼(沈水性)
チドメグサ属	果実	23		道端・庭・野原
コナスビ	種子	1		道端
シソ属	果実	2		道端
シロネ属	果実	1		水辺
ナス	種子	2		栽培
タカサブロウ	果実	18		湿地・水田
オモダカ属	果実	1		水田・溝
トチカガミ	種子	1		湖・沼(浮遊性)
コナギ	種子	1		水田
イボクサ	種子	2		水田・沼
イグサ属	種子	2		湿地
エノコログサ属	果実	1		道端・荒地・野原
カヤツリグサ科(三稜形)	果実	58		湿地・山野
カヤツリグサ科(扁平形)	果実	42		湿地・山野
スゲ属	果実	1		湿地・山野
その他				
昆虫	頭・上翅・胸腹・脚	多数		
蛾	繭	4		

花粉化石群集および大型植物化石群集は、いずれも草本類の占める割合が高いことが特徴である。産出種類をみると、ガマ属、サジオモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、コウホネ属、ゴキヅル属などの水生植物、ギシギシ属、アリノトウグサ、カヤツリグサ属、ギシギシ属、チドメグサ属などの湿った場所に生育する種もしくはその種を含む種類、エノコログサ属、スベリヒユ、カタバミ属、アカザ属、エノキグサ、イヌコウジュなどの荒れ地や路傍、畑などの人里に普遍的に存在する種類、やや肥沃な原野や河原などに生育するメハジキ、ナス属、水田や放棄水田に生育するキカシグサ属などが確認される。

このように本層準から産出した草本類は、人里や荒地に普遍的に存在する種類が多く、調査地点近辺は草が広がっており、人為的植生攪乱を受ける場所であったと推定される。また、産出する水生植物は抽水植物が主体で、池沼に生育する浮葉植物、浮水植物、

表5 各時期の遺構出土の種実分析結果

地区	遺構	時代	1段目:種類 2段目:部位 3段目:状態								
			モモ			ウメ		オニグルミ		ヒメグルミ	コウホネ属
			核			核		核		核	種子
			完形	破片 (1/2以上)	破片 (1/2以下)	完形	破片 (1/2以上)	破片 (1/2以上)	破片 (1/2以下)	破片 (1/2以上)	完形
2区	第1面	12世紀以降	1	1							
1区	池288	12世紀	1		1(食痕)						
2区	入江820	12世紀	26(食痕1)		1	2(食痕1)	1	1	1		
1区	土坑106	12世紀	1								
1区	タタキ433	12世紀	1								
2区	岬848	12世紀		1							
2区	土坑716	12世紀	1								
1区	溝329	9世紀	1								
1区	井戸359	9世紀	1(食痕)	3					1		
1区	第3面	9世紀	2	1	1						
1区	水場448	9世紀	1								
1区	落込み456	9世紀	7	13				3	1	9	
1区	落込み456	9世紀	12(食痕1)	1	5	3(食痕1)	1	1			
1区	落込み456	9世紀	1								
1区	落込み456	9世紀	32(食痕1)	14	2		3				
その他の遺構		9~12世紀	4	3				1			

沈水植物は産出しないことから、凹地内は完全に滞水する状態ではなかったと推定される。層相からみた堆積環境とも同調的である。

栽培種に由来するもの、あるいはその可能性があるものとして、花粉化石ではイネ属型、ソバ属、ベニバナ属、大型植物化石ではイネの穎やメロン類（マクワ・シロウリ型主体でモモルディカ型を含む）の種子、ナスの種子が確認される。このほか、発掘調査時に出土した種実にはモモ、ウメの核も確認されている。これらが当時の調査地点周辺で栽培もしくは持ち込まれて利用されていたと考えられる。花の構造上イネの穎の中には花粉化石が含まれることから、検出された花粉化石は、穎に付着していた可能性も考慮しておく必要がある。このほか、大型植物化石で産出した、シマサルナシ、キイチゴ属、サンショウ、現地調査時に出土したオニグルミ、ヒメグルミなどの果実は可食植物である。これらも利用されていた可能性がある。

ところで本堆積物からは、定量的なデータは得られていないものの、回虫卵、鞭虫卵といった寄生虫卵が無視できないほどの量が産出する。これら寄生虫卵の産状および、上記したように食用となる種実が産出することを踏まえると、調査地点は、人糞などの汚物が流入するような場所であったとも考えられる。

一方、木本類の産状をみると、花粉化石では種類数は多いが、際だって高率な種類はない。同様な花粉化石群集は、平安京右京三条一坊跡でも確認されており、広域的な植生を反映している可能性がある。木本花粉の産出種類のうち、スギ属は谷沿いや湧水地などの適湿地に林分を形成する種類である。その他のモミ属、ツガ属、マツ属なども、扇状地面、谷頭、斜面地など土壤流失が起きやすいなど、土地条件の悪い場所が更新適地とされる種類である。また、アカガシ亜属は、シイノキ属などと共に暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素であり、安定した場所に生育する種類である。木本類の種実遺体では、マツ属複維管束亜属、コナラ属（おそらく常緑高木のアカガシ亜属？）、ヒサカキ属（おそらく常緑低木のヒサカキ）、落葉低木のキイチゴ属、サンショウ属（おそらく落葉低木のサンショウ）、落葉藤本のシマサルナシが産出するが、産出量は多くない。花粉化石と同様に常緑広葉樹林（照葉樹林）の構成種や、林縁や伐採地などの明るい場所に生育する陽樹が確認され、重複する種類もあることから、これらは遺跡周辺域の照葉樹林やその林縁部などに生育していたと考えられる。

## （2）池452機能期（12世紀前半）

池452充填堆積物は、生物擾乱を受けているやや有機質を含む砂質泥からなり、比較的静穏な堆積環境で形成された堆積物とみなせる。したがって、植物化石群集も局地的な植生を強く反映している可能性が高い。

花粉化石群集は、木本類が比較的多く産出し、その中ではマツ属（複維管束亜属を含む）が優占する。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は、成長が早く痩地に育つ陽樹であり、二次林の代表的な樹種である。このため人為的な森林破壊によって増加することが知られており、これまでの平安京跡の調査においても平安時代以降にマツ属花粉の増加が確認されている。その一方で、マツは有用性や樹形の美しさなどから植栽されることもしばしばあり、平安京の庭園でも植栽

されていたことが、文献などの調査により明らかにされている(飛田,2002)。今回検出されたマツ属も、こうした二次林や植栽に由来すると考えられる。植栽に由来するとすれば、花粉生産量が多いことから、分析結果は実際の植生より過大評価されていると考えておく必要がある。また、今回の花粉分析結果では、虫媒性で花粉生産量の少ない、サクラ属、カキノキ属が比較的目標だった産状を示している。当該期の遺構出土種実には、ウメ・モモが確認されているが、これらはサクラ属に含まれる種であり、カキノキ属は栽培種である。これらの樹種も池近辺に植栽されていた可能性がある。

一方、草本類をみると、先述の9世紀前半の落込み456の植物化石群集と同様に、人里や荒地に普遍的に存在する種類のほか、湿った場所や水域に生育する植物からなる。このことから調査地点近辺は、草本植物が生育する開けた場所で、人為的植生攪乱を受ける場所であったと推定される。ただし、水生植物の種類構成をみると、花粉化石では、イボクサ属、ミズアオイ属、スイレン属、ヒシ属、ゴキヅル属、サンショウモ、アカウキクサ属、種実分析ではオニバス、トチカガミ、タガラシ、コナギが産出し、抽水植物の他に浮葉植物や浮水植物も伴っている特徴が確認される。これら水生植物は、当時の池の水域に生育していた可能性が強い。また、栽培種およびその種を含む種類は、9世紀前半と同様な種類が産出することから、同様な植物が利用されていたものと推定される。栽培種とみられるベニバナ属は比較的多く産出しており、前栽として存在した可能性もある。

#### 引用文献

- Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I) .Almqvist&Wiksell,539p.
- Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II) ,147p.
- Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.
- 藤下典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法.古文化財の自然科学的研究,古文化財編集委員会編,同朋舎,638-654.
- 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 京都市防災会議,1996,京都と周辺地域の地震活動の特性 京都と周辺地域の有感地震データベース(解説).京都市防災会議専門委員会・京都大学大学院理学研究科 尾池和夫 監修,69p.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.
- 中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種-.誠文堂新光社,272p.
- 飛田範夫,2002,日本庭園の植栽史.京都大学学術出版会,435p.

## 付章 2 石組溝262掘形出土の火山灰分析結果

株式会社 京都フィッシュン・トラック

### 1. 試料

本試料は、平安京左京四条一坊二町跡での発掘調査において、12世紀末（平安時代後期）の石組溝262掘形からパッチ状に検出された、白色の火山灰状サンプルである。

### 2. 分析方法

以下に処理工程について説明を加える。

#### (1) 前処理

まず半湿状態の生試料を適宜採取秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、2 l ビーカー中で数回水替えしながら水洗し、そののち超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を濃度1～2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交換を繰り返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別（60,120,250mesh）を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120-250mesh（1/8-1/16mm）粒径試料に比重分別処理を加えることなく、封入剤（Nd=1.54）を用いて岩石薄片を作成した。

#### (2) 全鉱物組成分析

前述の封入薄片を用い、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・岩片・その他の5項目について、1薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数し含有粒子数の量比百分率を測定した。

#### (3) 重鉱物分析

主要重鉱物であるカンラン石（Ol）・斜方輝石（Opx）・単斜輝石（Cpx）・褐色普通角閃石（Bhb）・緑色普通角閃石（Ghb）・不透明（鉄）鉱物（Opq）・カミングトン閃石（Cum）・ジルコン（Zr）・黒雲母（Bt）・アパタイト（Ap）を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有の少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理による重鉱物の濃集を行うことが多いが、特に火山ガラスに包埋された重鉱物はみかけ比重が減少するため重液処理過程で除外される危険性がある。さらに風化による比重変化や粒径の違いが分析結果に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

#### (4) 火山ガラス形態分類

前処理で作成した検鏡用薄片中に含まれる火山ガラス形態を、吉川（1976）に準拠してH：扁平型（Ha, Hb）、C：中間型（Ca, Cb）、T：多孔質型（Ta, Tb）に分類した<sup>1)</sup>。またこれらの形態に属さないものを、It：不規則型として一括し示した。なお含有率を測定するため200個の粒子を測定した。その過程で着色したものやスコリア質のものおよび亀ノ甲型と呼ばれる特

異なる形態をもつ火山ガラスの有無もチェックした。さらに火山ガラスの水和現象を観察し、山下・檀原（1995）に基づき水和（hydration）やスーパーハイドレーション（super hydration）の程度についても可能な限り半定量的に記載した<sup>2)</sup>。

### （5）火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製された120-250mesh（1/8-1/16mm）粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（RIMS）を用い火山ガラスの屈折率を測定した<sup>3)</sup>。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり50個以上の火山ガラス片を測定するが、火山ガラスの含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

温度変化型屈折率測定法は火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算温度から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である<sup>4)</sup>。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名（Series および Sample Name）が表示され、次に測定者名、Materialは対象鉱物名、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。カッコ内の式は浸液温度  $t$  から浸液の屈折率を算出するのに用いたものである。

測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。count,min,max,range,mean,st.dev,skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される<sup>5)</sup>。

## 3. 結果と考察

本試料は#60（粒径=0.250mm）以下の細粒分が90%以上を占める、細粒の珪長質ガラス質火山灰である。全鉱物組成における火山ガラス含有率は68%に達し、石英と斜長石から構成される軽鉱物は11.5%を占める。重鉱物は1.5%と少ない。岩片が1%と比較的多く、ガラス質岩片が卓越する。これらの特徴から本試料は純度の高いガラス質火山灰であることは確実である。

では、火山灰の対比となると、自然堆積層中の試料でないため多くの困難が伴う。しかし、いくつかの特徴がみられ以下に指摘する。まず火山ガラスについてである。形態的にバブル・ウォール型のガラス片が55.5%と半数を超え、その屈折率は $n=1.499-1.502$ （モード：1.501）を示す。これらの分析値は、本火山灰が典型的な珪長質の広域テフラの可能性を示唆する。しかし奇妙なことに、火山ガラスの気泡内容積の20-30%程度を水が占める現象（スーパーハイドレーション）が認められ、測定者を困惑させた。その理由は、スーパーハイドレーションの進行程度から推定されるテフラの年代は、およそ100万年程度と推定されるからである。すなわち、12世紀前半の地層に何故そのように古い火山灰が高純度で検出されるかは、自然状態では考えにくいからである。火山ガラスの屈折率・形態およびスーパーハイドレーションの程度を総合すると、近畿地方で該当する最も有力な火山灰は大阪層群のピンク火山灰と考えられる。重鉱物組成はこの対比と矛盾しない。すなわ

表1 テフラ分析結果表

全 鉱 物 組 成

火山 ガラス	軽 鉱物	重 鉱物	岩片	その 他	合計	備 考
136	23	3	38	-	200	火山gl: 珩長質bw>pm型。 大阪層群ピンク火山灰の可能性あり。
68.0	11.5	1.5	19.0	0.0	###	軽鉱物: Qz・pl。 重鉱物: Opq,GHb,Opq,Zr。 岩 片: gl質>石質。 其他: <u>        </u> 。

bw:パブルウォール、pm:軽石、sco.:スコリア、pl:斜長石、Qz:石英、af:アルカリ長石、Kf:カリ長石、chal:カルセドニ、Po:ポラント・オパール

重 鉱 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備 考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
-	2	-	-	8	23	-	2	6	-	41	火山glの付着したジルコンを含む。
0.0	4.9	0.0	0.0	19.5	56.1	0.0	4.9	14.6	0.0	100.0	Btは風化するものが主→本質物ではない可能性高い。

Ol:カンラン石、Opx,Cpx:斜方、単斜輝石、BHb,GHb:緑色・褐色角閃石、Opq:不透明鉱物、

Cum:カミングトン閃石、Zr:ジルコン、Bt:黒雲母、Ap:アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備 考
31	81	13	18	15	42	-	200	+	珩長質bw>pm型。
15.5	40.5	6.5	9.0	7.5	21.0	0.0	###		

H:扁平、C:中間型、T:多孔質、It:不規則型、incl:インクルージョン、devt:失透化、RI:屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最小	最大				
1.4990	1.5017	1.505	60	1.501	H,T,C

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類
最小	最大				
					測定対象外

斜方輝石: 劈開片上での最大屈折率 $n_2 \div r$ 、角閃石 $n_2 (\beta < n_2 < r)$ 、

斜長石: 劈開片上での最小屈折率 $n_1 (\alpha < n_1 < \beta)$

ち、少量とはいえ不透明鉄鉱物 (Opq)・緑色角閃石 (GHb)・斜長石 (Opx) を主とする重鉱物組成だけでなく、火山ガラスの付着したジルコンを含むことが特記される。

以上本試料のテフラ対比可能性について述べた。確実な対比にはさらに決定的な証拠が必要であり、ここではあくまでも可能性の指摘に止めたい。

#### 註

- 1) 吉川周作 (1976) :大阪層群中の火山灰層について。地質学雑誌.82 (8)、P479-515
- 2) 山下透・檀原徹 (1995) :火山ガラスのhydrationとsuper hydration -日本の広域テフラについて-  
フィッション・トラックニュースレター第8号、P 41-46
- 3) 横山卓雄・檀原徹・山下透 (1986) :温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定。第  
四紀研究.25 (1)、P 21-30  
Danbara T., Yamashita T., Iwano H. and Kasuya M. (1992) :An improved system for measuring  
refractive index using the thermal immersion method. Quaternary International.13/14、 P 89-91.
- 4) 檀原徹 (1993) :温度変化型屈折率測定法.日本第四紀学会編.第四紀試料分析法2.  
研究対象別分析法.149-157.東京大学出版会.
- 5) 1つが1個の火山ガラス片の測定結果を示す。

なお温度変化型屈折率測定装置RIMS TMと測定方法は、PAT.1803336,188883で特許登録および商標登録されています。

# 圖 版



第3面 平安時代前期遺構平面図 (1 : 300)



図版2 遺構



第2面 平安時代前期から中期遺構平面図 (1 : 300)



第1面 平安時代後期遺構平面図 (1 : 300)

図版4 遺構



庭園遺構 1 期平面図 (1 : 120)



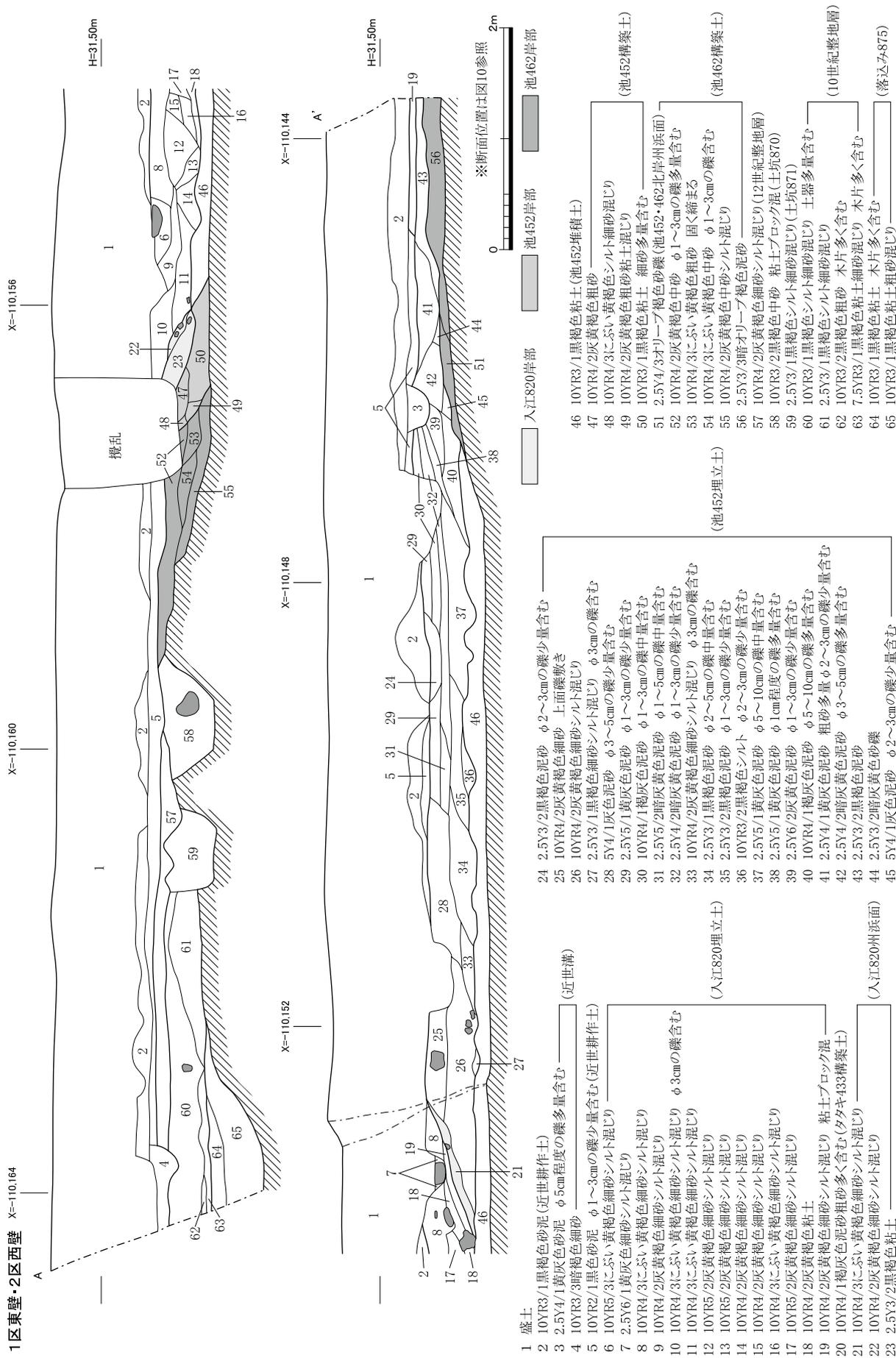
庭園遺構2期平面図 (1 : 120)



庭園遺構 3期平面図 (1 : 120)

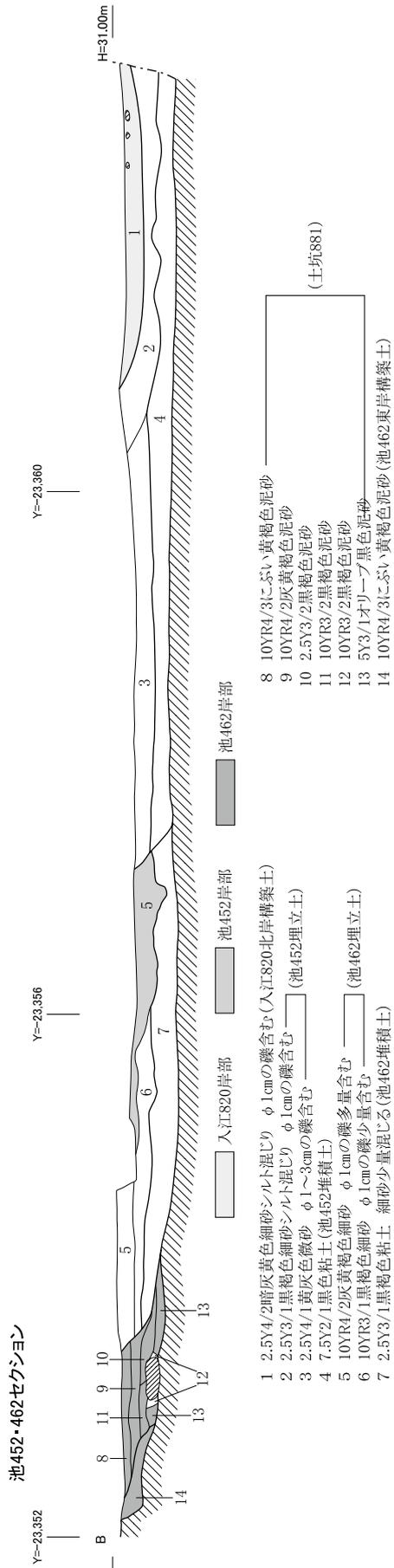


庭園遺構4期平面図 (1 : 120)

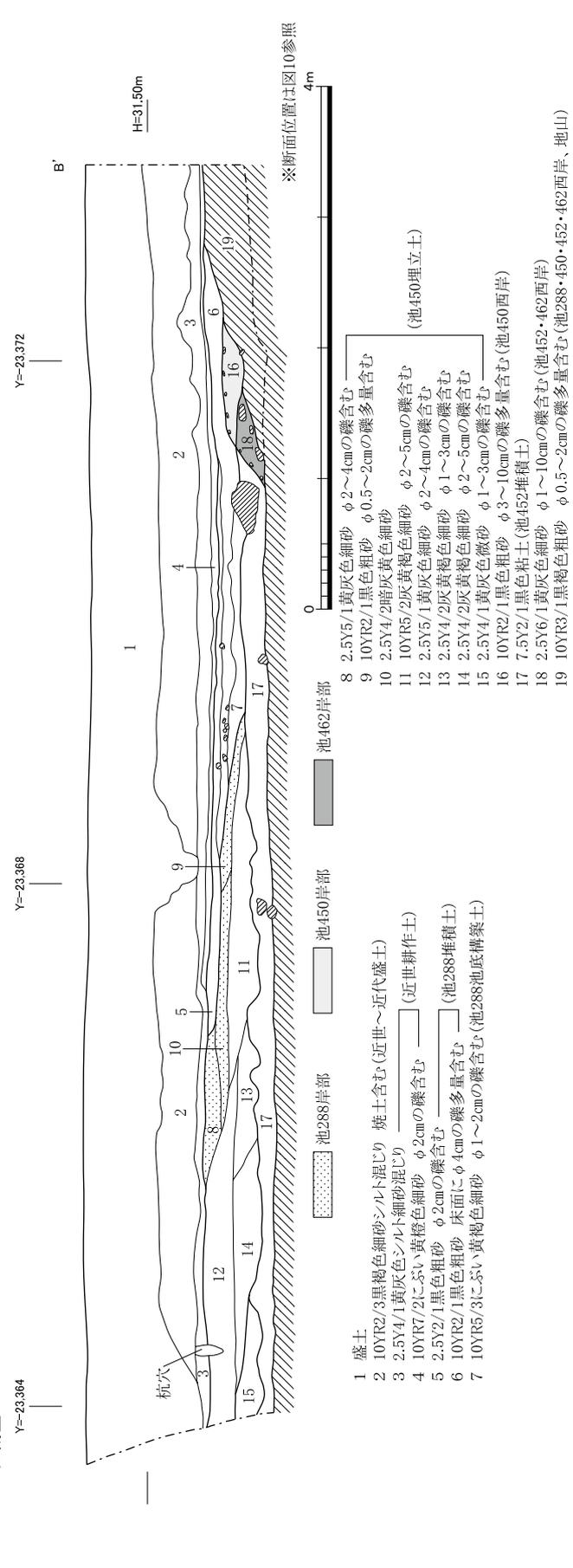


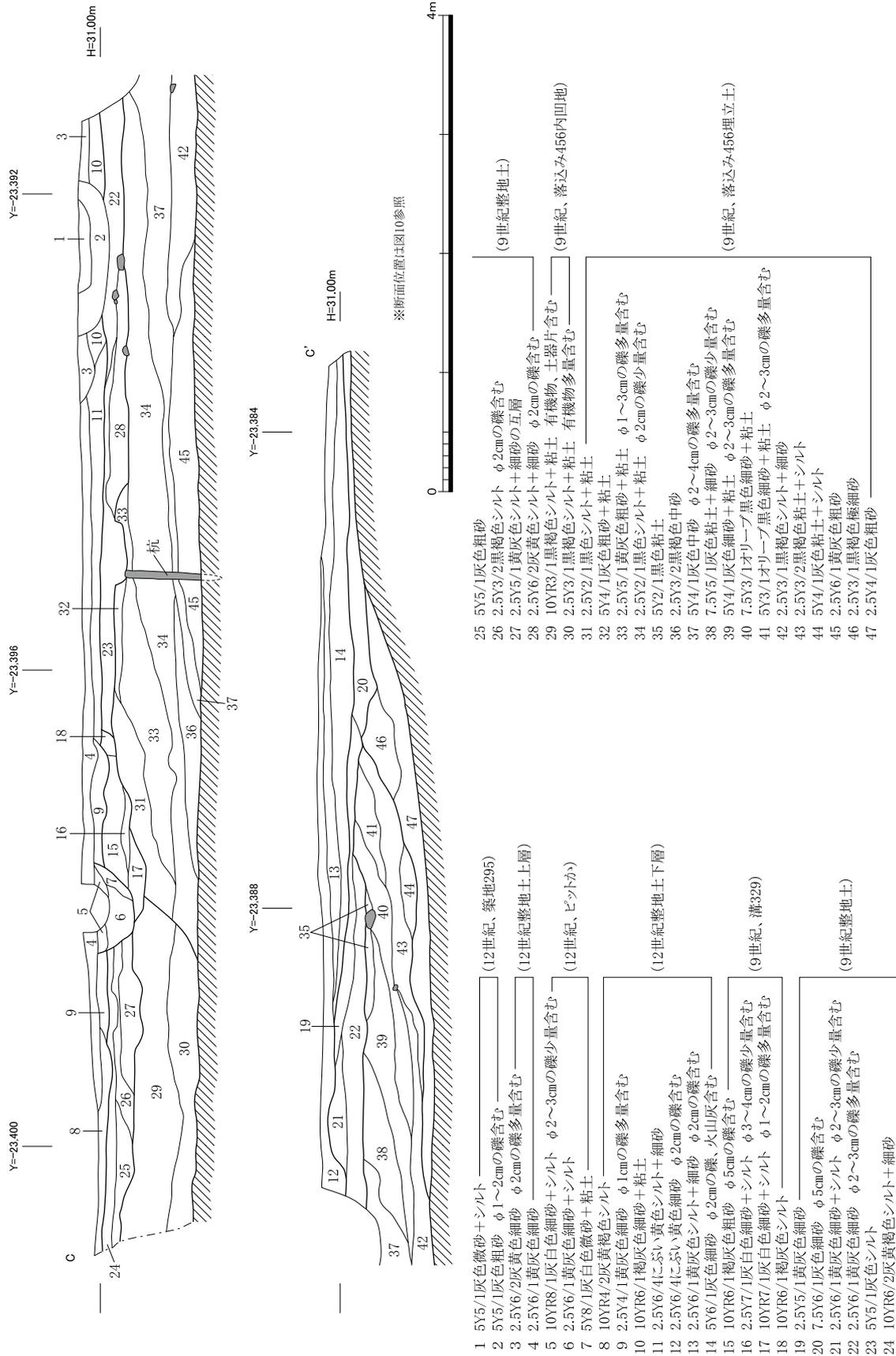
池南北断面図 (1 : 50)

池東西断面図 (1 : 50)



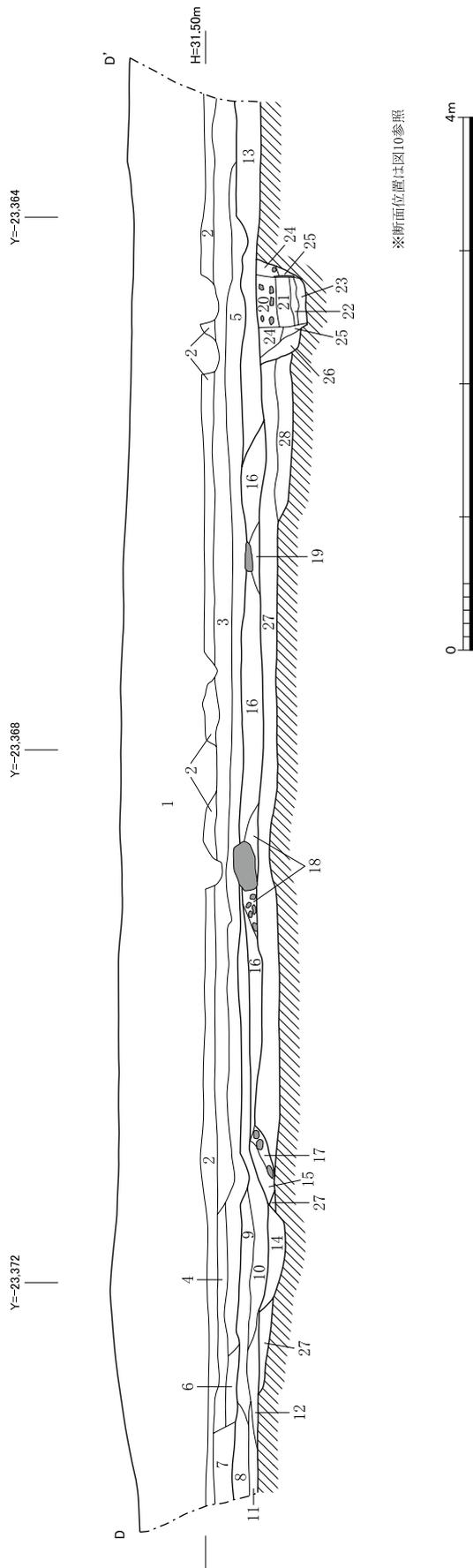
1区南壁





1区中央セクション断面図 (1 : 50)

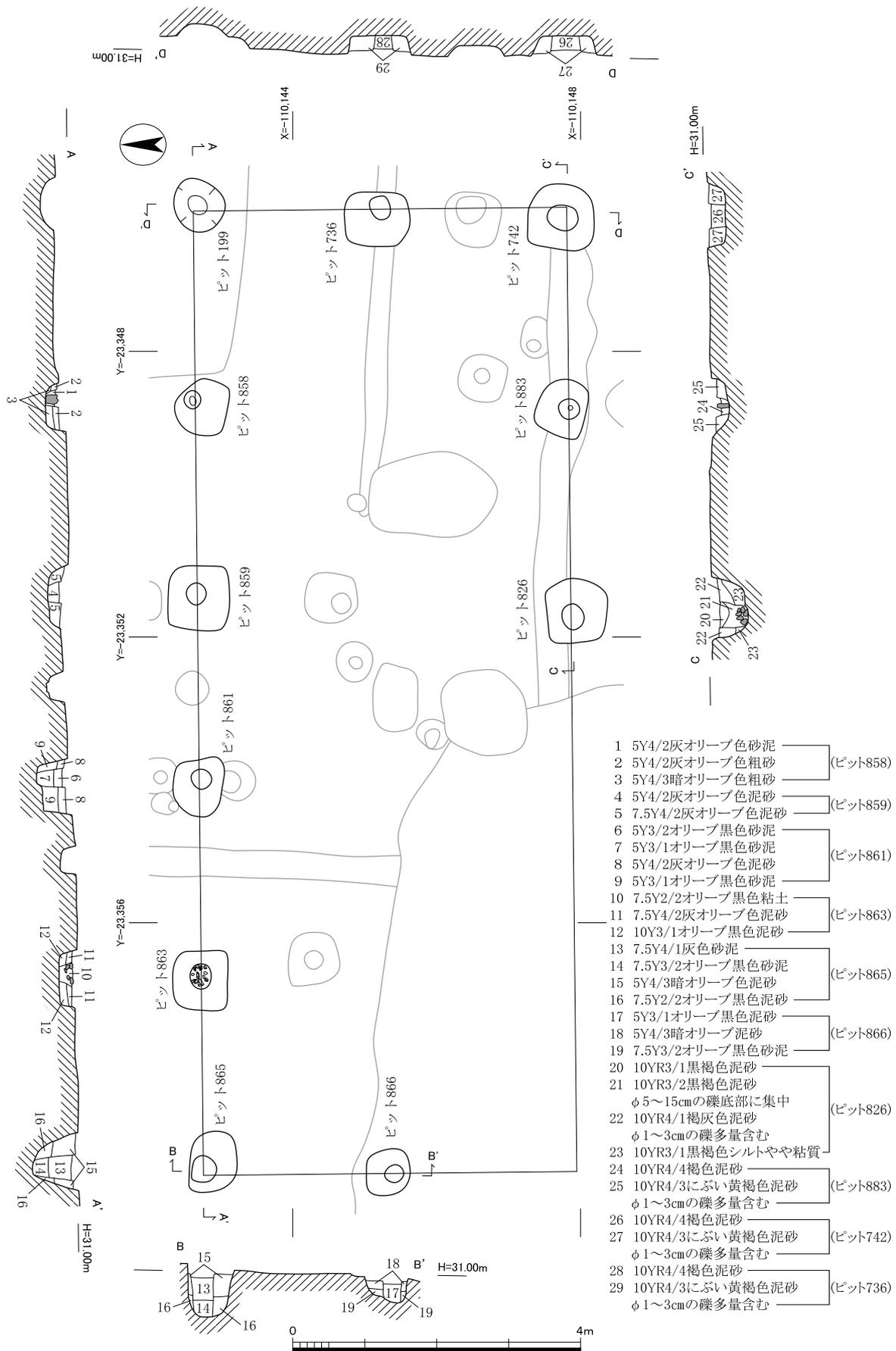
1区北壁断面図 (1:50)



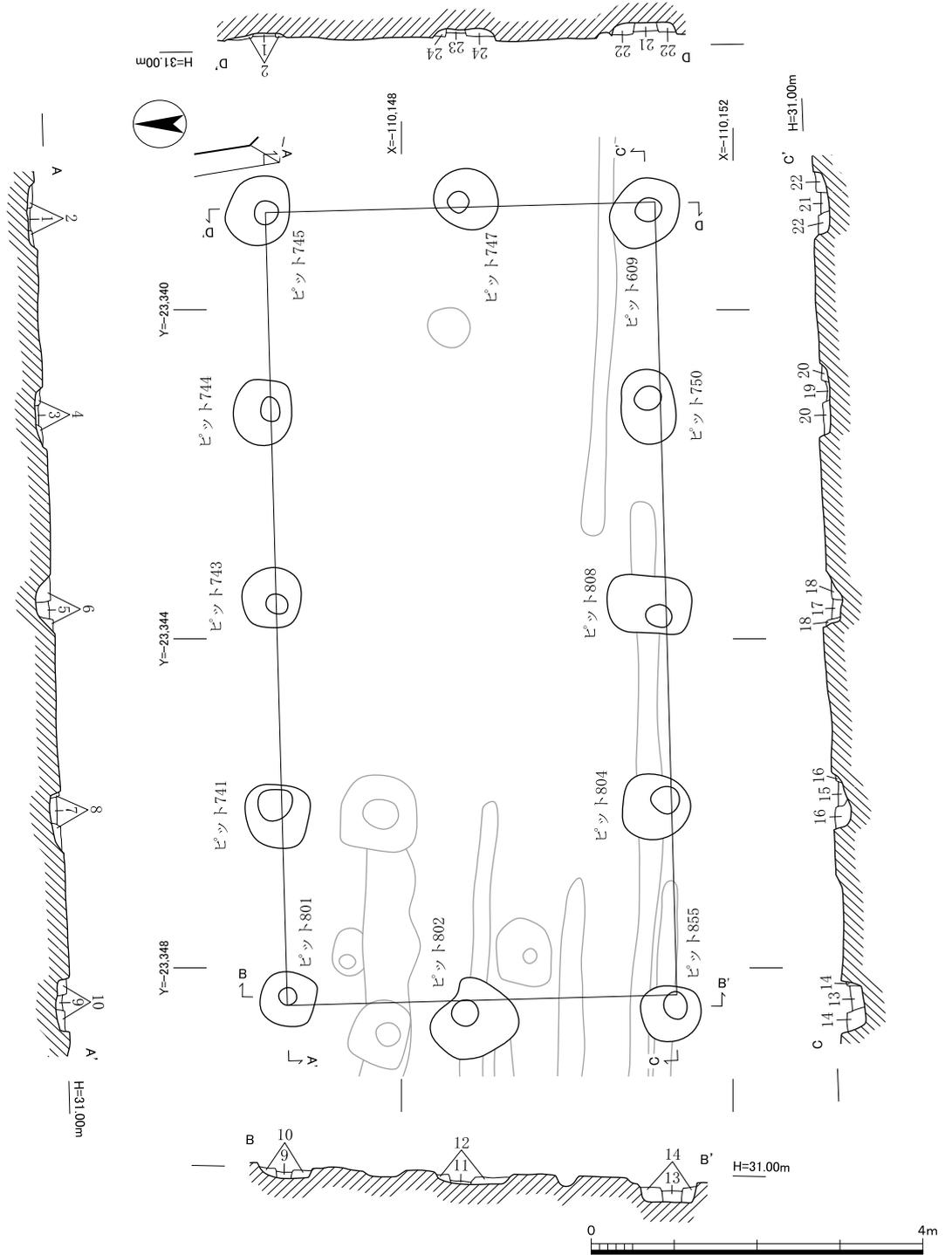
- 1 盛土
- 2 5YR4/3にぶい赤褐色微砂 焼土、焼け瓦、灰含む
- 3 7.5YR5/1褐色微砂シルト混じり
- 4 10YR4/1褐色微砂シルト混じり
- 5 5Y4/1灰色微砂シルト混じり
- 6 2.5Y3/2黒褐色微砂シルト混じり
- 7 10YR3/2黒褐色微砂シルト混じり
- 8 7.5YR5/6明褐色細砂 焼土含む
- 9 2.5Y3/2黒褐色細砂
- 10 2.5Y3/2黒褐色細砂
- 11 7.5YR3/1黒褐色細砂シルト混じり
- 12 5Y3/1オリーブ黒色細砂シルト混じり 焼土含む
- 13 10YR4/2灰黄褐色砂泥 小礫多く固く締まる
- 14 2.5Y4/2暗灰黄色細砂(右組溝262)

(近世耕作土)

- 15 10YR3/2黒褐色細砂シルト混じり(礎石採取り)
- 16 2.5Y3/2黒褐色微砂シルト混じり(基壇構築土)
- 17 2.5Y5/1黄灰色細砂(礎石掘形)
- 18 10YR4/3にぶい黄褐色細砂
- 19 2.5Y3/2黒褐色微砂シルト混じり (礎石掘付土)
- 20 5Y3/1オリーブ黒色細砂 φ2cmの礫含む
- 21 2.5Y6/4にぶい黄色粗砂 (溝261新段階)
- 22 5Y3/2オリーブ黒色泥砂
- 23 2.5Y5/3黄褐色細砂
- 24 2.5Y6/3にぶい黄色細砂
- 25 2.5Y6/4にぶい黄色細砂 (溝261古段階)
- 26 2.5Y6/3にぶい黄色細砂
- 27 10YR3/1黒褐色微砂シルト混じり (平安時代前期整地層)
- 28 2.5Y3/2黒褐色砂泥



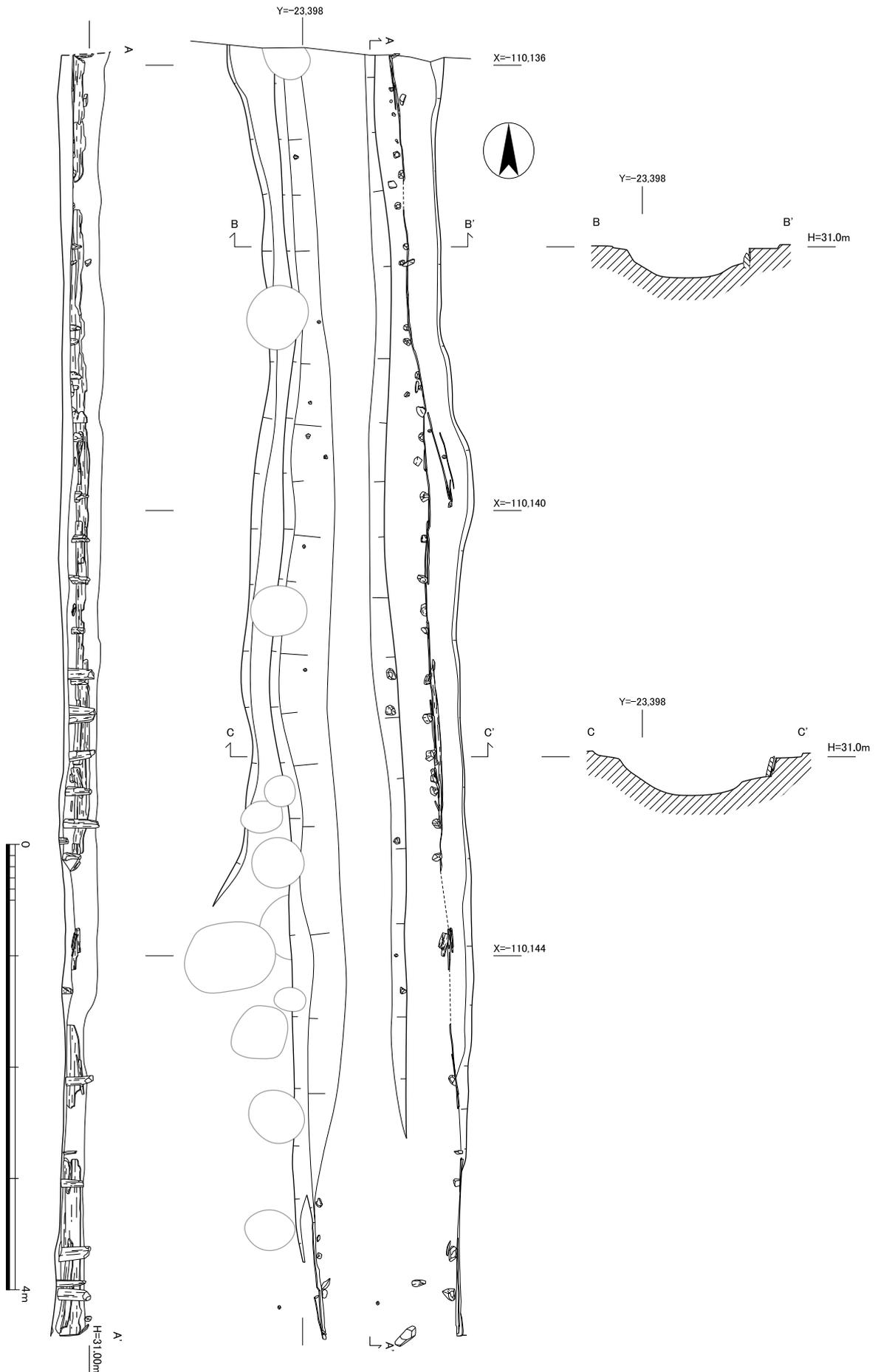
掘立柱建物1実測図 (1:80)



- |                       |          |                       |          |                    |          |
|-----------------------|----------|-----------------------|----------|--------------------|----------|
| 1 10YR3/2黒褐色泥砂        |          | 11 10YR3/2黒褐色泥砂       |          | 17 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 |          |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂     | (ピット745) | φ 5~10cmの礫多量含む        | (ピット802) | φ 1~2cmの礫少量含む      | (ピット808) |
| 3 10YR3/2黒褐色泥砂        |          | 12 10YR4/2灰黄褐色粗砂+泥砂   |          | 18 10YR3/3暗褐色泥砂    |          |
| 4 2.5Y4/1黄灰色泥砂        | (ピット744) | φ 5cm程度の礫少量含む         |          | φ 2~5cmの礫少量含む      |          |
| φ 5~10cmの礫多量含む        |          | 13 10YR3/1黒褐色泥砂       |          | 19 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 |          |
| 5 2.5Y3/2黒褐色泥砂        |          | φ 2~3cmの礫少量含む         | (ピット855) | φ 3~5cmの礫多量含む      | (ピット750) |
| φ 2~3cmの礫少量含む         | (ピット743) | 14 10YR3/1黒褐色泥砂       |          | 20 2.5Y4/1黄灰色泥砂+砂礫 |          |
| 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫+泥砂  |          | φ 2~3cmの礫少量含む         |          | φ 3~5cmの礫多量含む      |          |
| 7 10YR4/2灰黄褐色泥砂+砂礫    | (ピット741) | 15 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫+泥砂 |          | 21 10YR4/1褐灰色泥砂    |          |
| 8 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫+泥砂  |          | φ 3~5cmの礫多量含む         | (ピット804) | 22 10YR4/2灰黄褐色泥砂   | (ピット609) |
| 9 10YR3/2黒褐色泥砂        |          | φ 3~5cmの礫多量含む         |          | φ 5~6cmの礫少量含む      |          |
| φ 1~2cmの礫少量含む         | (ピット801) | 16 10YR4/2灰黄褐色砂礫+泥砂   |          | 23 10YR4/4褐色泥砂     |          |
| 10 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂+砂礫 |          | φ 3~5cmの礫多量含む         |          | φ 1~5cmの礫少量含む      | (ピット747) |
|                       |          |                       |          | 24 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 |          |
|                       |          |                       |          | φ 1~2cmの礫少量含む      |          |

掘立柱建物2実測図 (1 : 80)

図版  
14  
遺構



溝329実測図 (1 : 50)



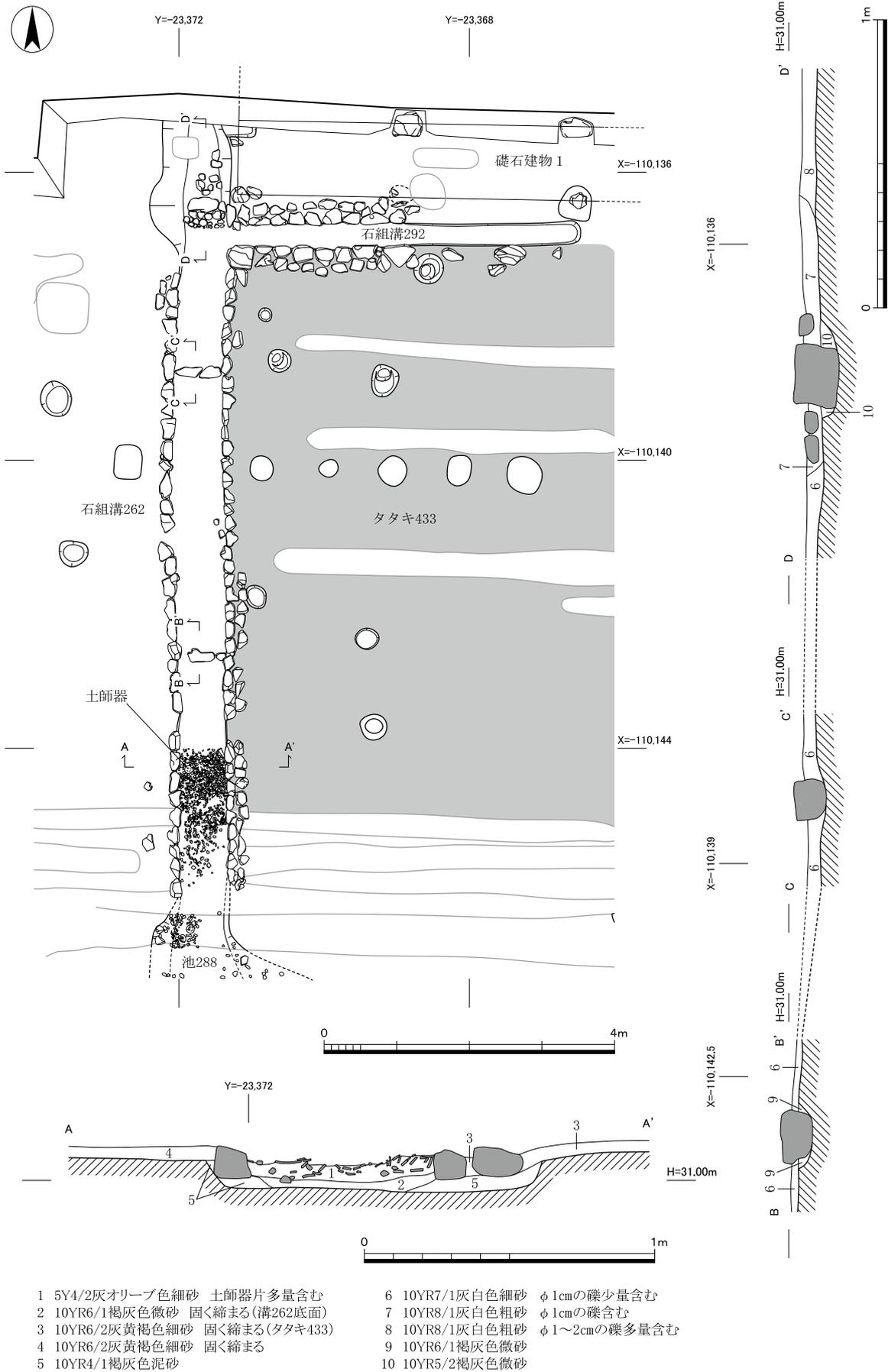
- 1 7.5Y3/1オリーブ黒色細砂 φ1~3cmの礫少量含む
- 2 2.5Y3/1黒褐色粘土シルト
- 3 2.5Y3/1黒褐色細砂
- 4 2.5Y2/1黒色シルト
- 5 10YR3/1黒褐色細砂~粗砂
- 6 10YR3/2黒褐色細砂シルト混じり(水場488床面)
- 7 7.5Y4/1灰色シルト(水場448掘形)

(水場448埋土)

- 8 10YR4/2灰黄褐色シルト φ10~20cmの礫含む(礫敷)
- 9 2.5Y4/1黄灰色粘土
- 10 2.5Y3/1黒褐色シルト粘質
- 11 10YR3/2黒褐色シルト
- 12 2.5Y3/2黒褐色シルト φ1~3cmの礫含む
- 13 10YR3/1黒褐色シルト

(平安時代前期整地層)

水場448実測図 (1 : 50)



石組溝262、タタキ433実測図（平面図1：80、断面図1：20）



1区 第1面全景（北東から）



1 1区西半 第3面全景（東から）



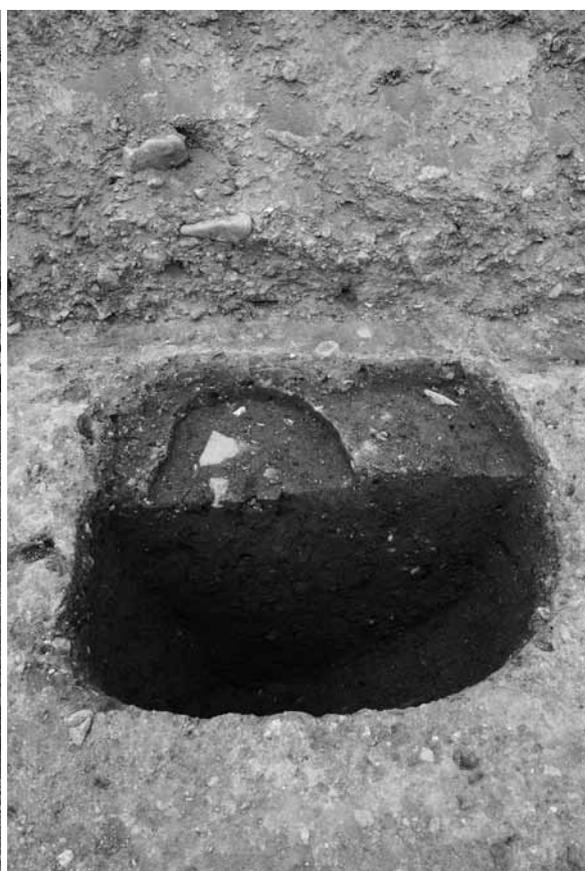
2 1区 落込み456（南東から）



1 2区 掘立柱建物2 (西から)



2 2区 掘立柱建物1 (西から)



3 2区 掘立柱建物1 ピット865断面 (南から)



1 1区 井戸359 (東から)



2 1区 井戸359 断割状況 (北西から)



1 1区 井戸359井戸枠構築状況（南西から）



2 1区 井戸359横棧取り付け状況（南西から）



3 1区 井戸359墨書「東三」（北西から）



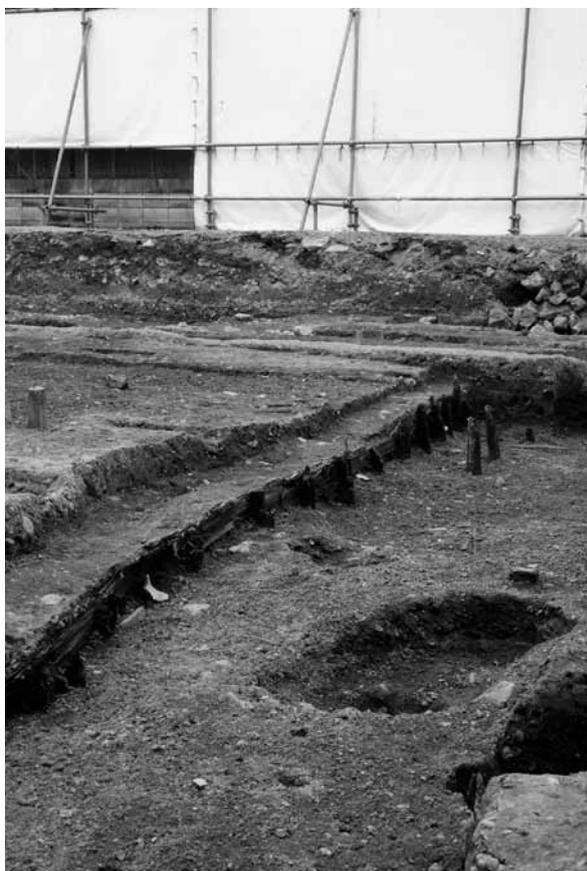
4 1区 井戸359（北から）



5 1区 井戸359和櫃出土状況（北から）



1 1区 溝329 (北から)



2 1区 溝329 (北西から)



3 1区 溝329 護岸杭断割状況 (北西から)



1 1区 水場448 (西から)



2 1区 水場448・溝329交差部 (北西から)



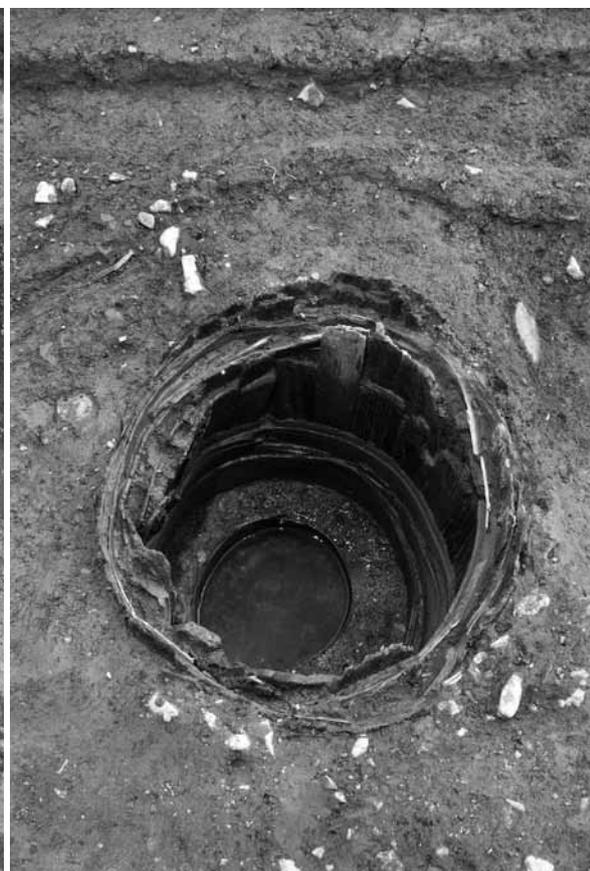
3 1区 水場448北肩断割状況 (東から)



1 2区 井戸847断割状況（北から）



2 2区 井戸847遺物出土状況（北から）



3 2区 井戸847完掘状況（北から）



1 1区 溝261 (北東から)



2 2区 枿状遺構828 (北東から)



3 2区 枿状遺構828 遺物出土状況 (北東から)



1 2区 池462 (北から)



2 2区 池462北岸 (南東から)



3 2区 池462南岸 (東から)



1 2区 池462東岸、礎石建物2（南西から）



2 1区 池462（南東から）



1 2区 池452 (北西から)



2 2区 池452 (北から)



3 2区 池452北岸 (東から)



1 2区 景石827・887 (南西から)



2 2区 集石856 (東から)



3 2区 岬848北岸構築状況 (北東から)



1 2区 岬848南岸土留（北東から）



2 2区 岬848北西岸土留（南西から）



3 2区 岬848南岸土留（西から）



1 2区 庭園遺構3期（北東から）



2 2区 入江820土器出土状況（南東から）



3 2区 入江820完掘状況（東から）



1 1区 池450 (北西から)



2 1区 池450、遺水457 (北東から)



3 1区 瀬落し449 (南東から)



1 1区東半 庭園遺構4期 (南西から)



2 1区池288 (北から)



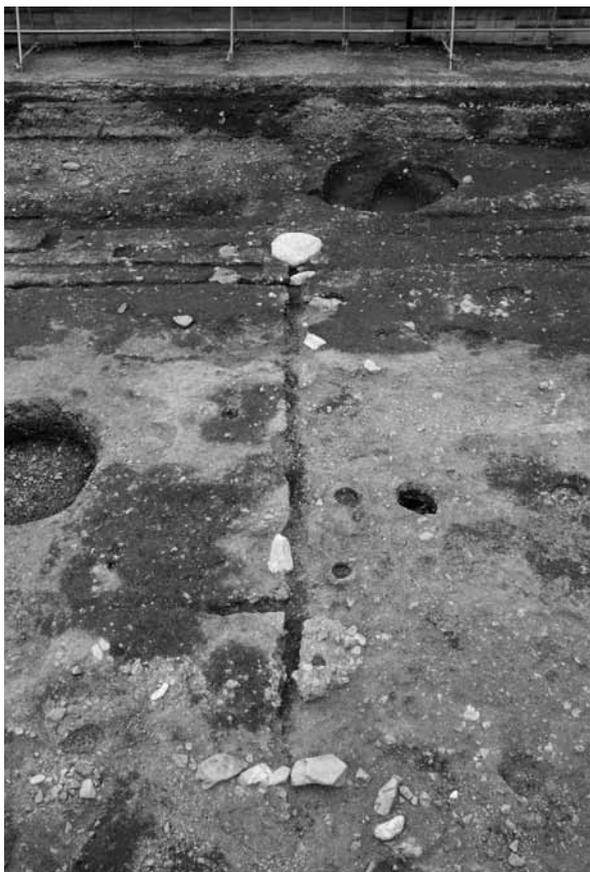
1 1区 礎石建物1、石組溝292 (西から)



2 1区 石組溝292北側堰石 (南西から)



3 1区 石組溝262 (南西から)



1 1区 列石882、礎石443 (北から)



2 1区 礎石443断割状況 (西から)



3 1区 土器溜211 (西から)



4 1区 礎石建物1断割状況 (東から)



1 1区 土坑96 (北から)



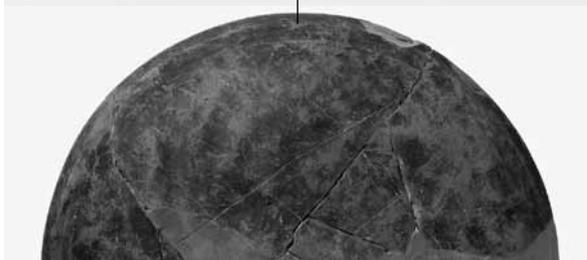
2 1区 土坑106 (南西から)



3 2区 土坑631 (北から)



4 2区 土坑716 (北から)



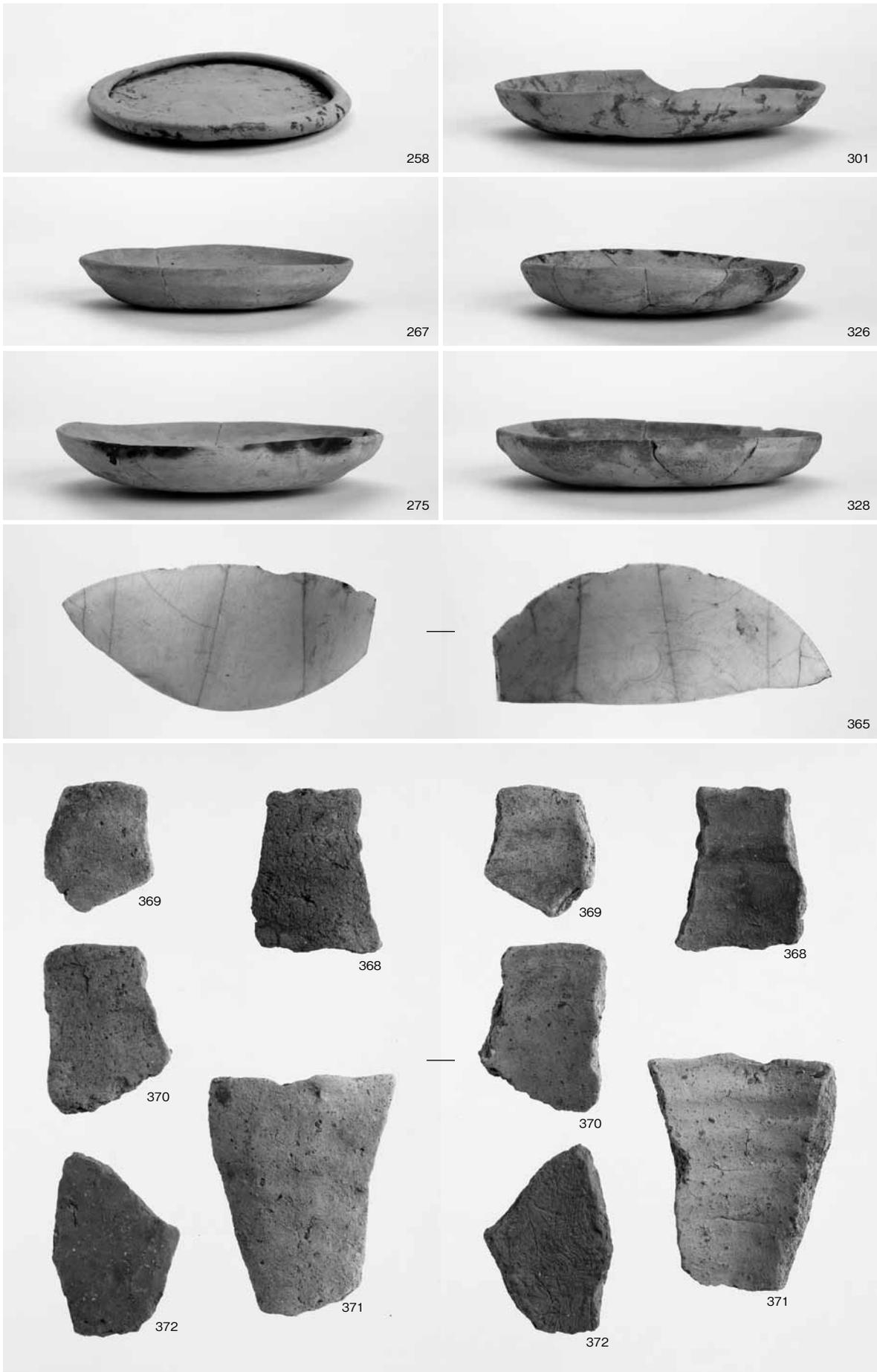
落込み456・井戸359出土土器



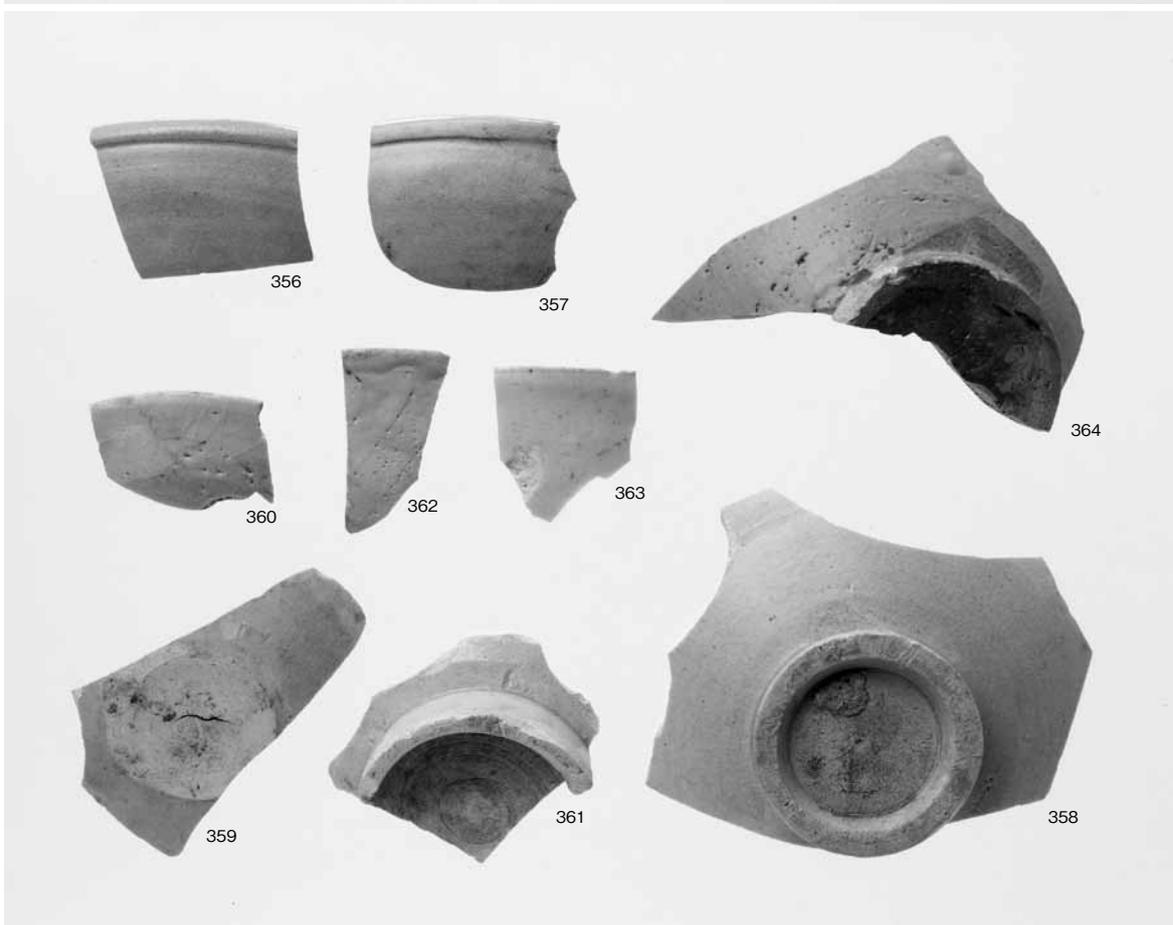
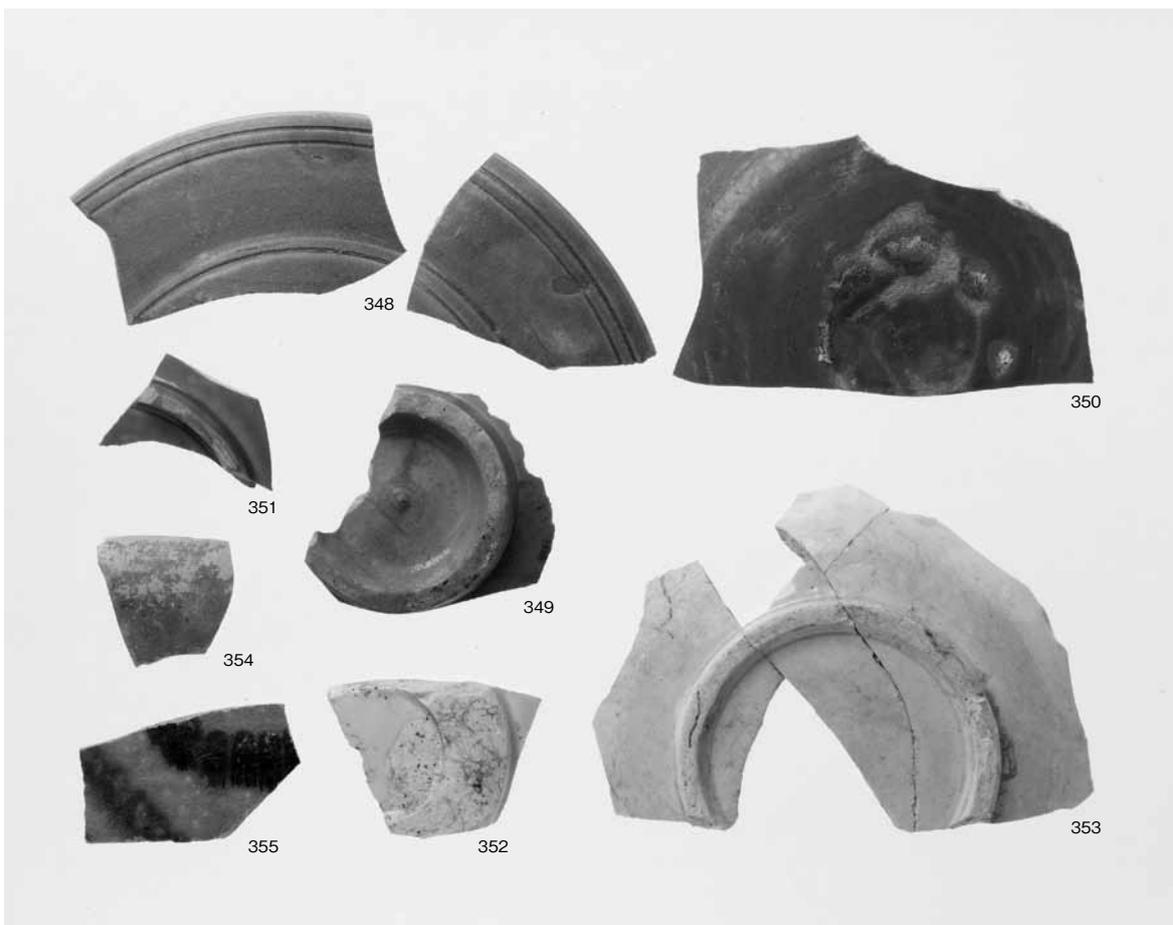
井戸359・溝329出土土器



土坑189・井戸847・岬848出土土器



池452・入江820・池288出土土器、輸入陶磁器、製塩土器



輸入陶磁器



軒丸瓦1



瓦14



瓦15



瓦16



瓦13



瓦31



瓦32



瓦33



瓦34



瓦18



瓦22



瓦19



瓦23



瓦21



瓦24



瓦25



瓦27



瓦26



瓦28



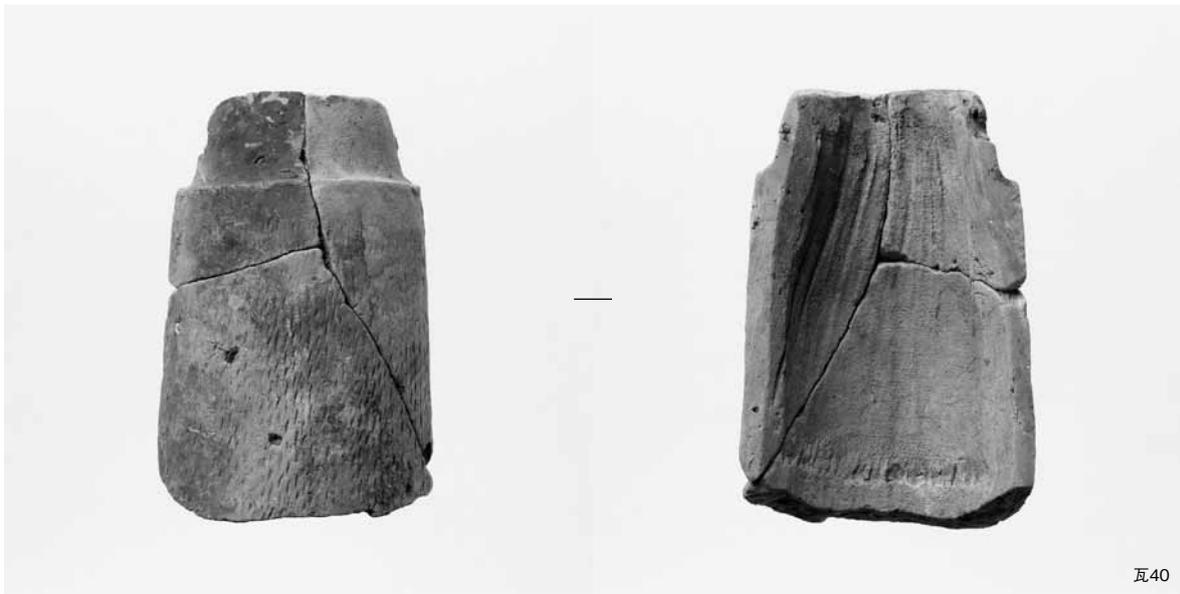
瓦29



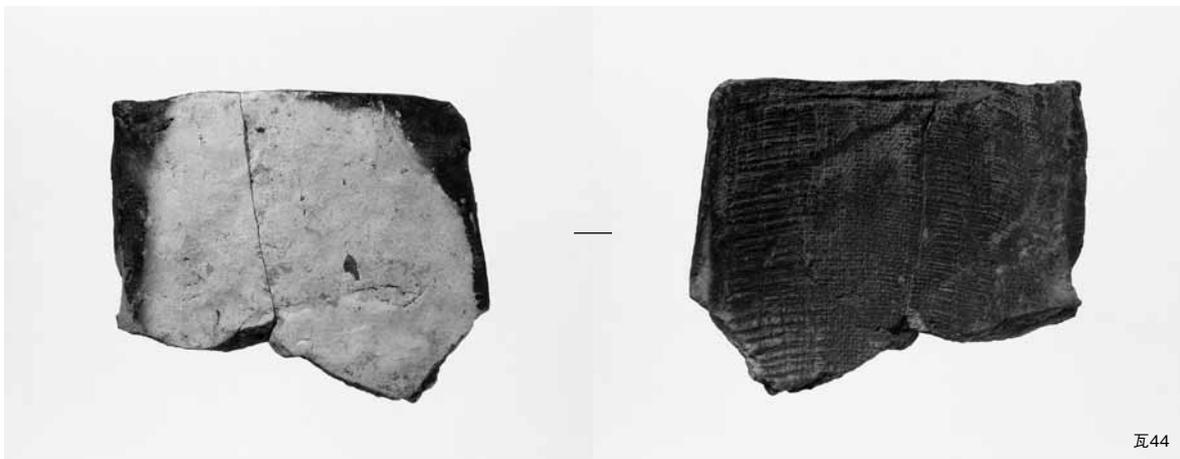
瓦30



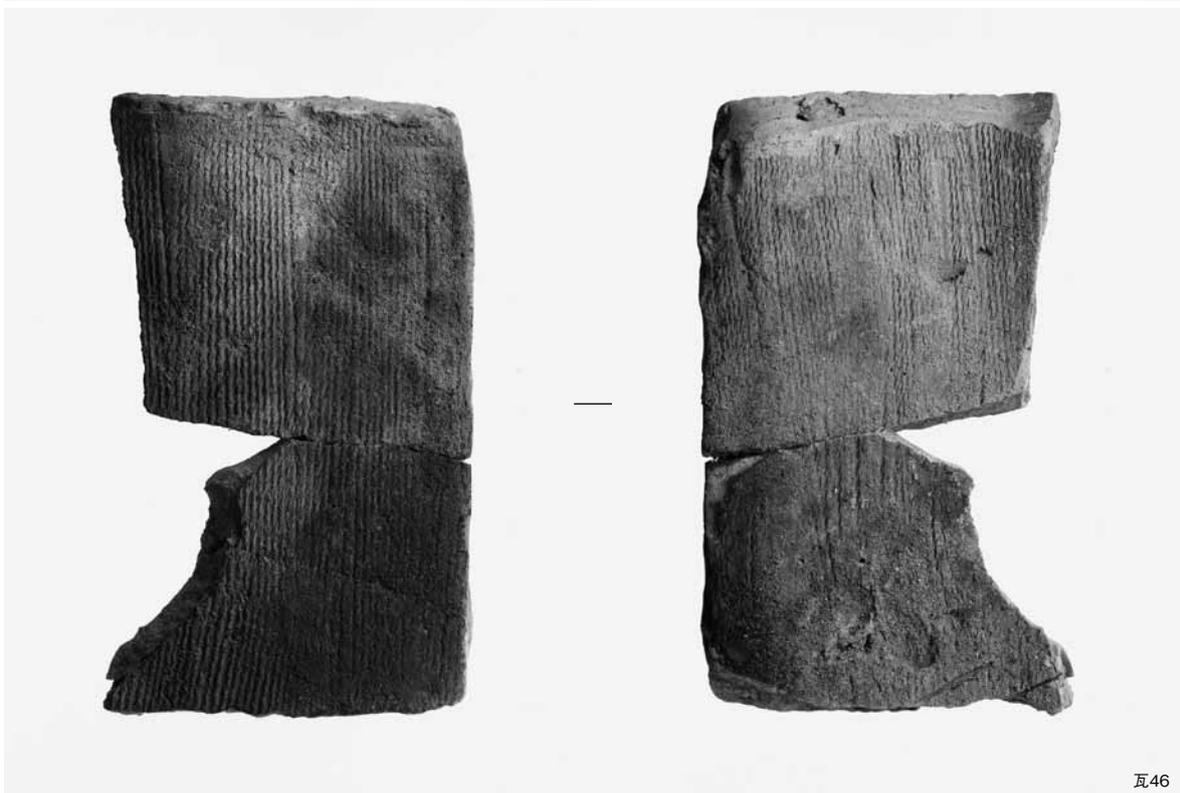
軒平瓦 2、丸瓦 1



瓦40



瓦44

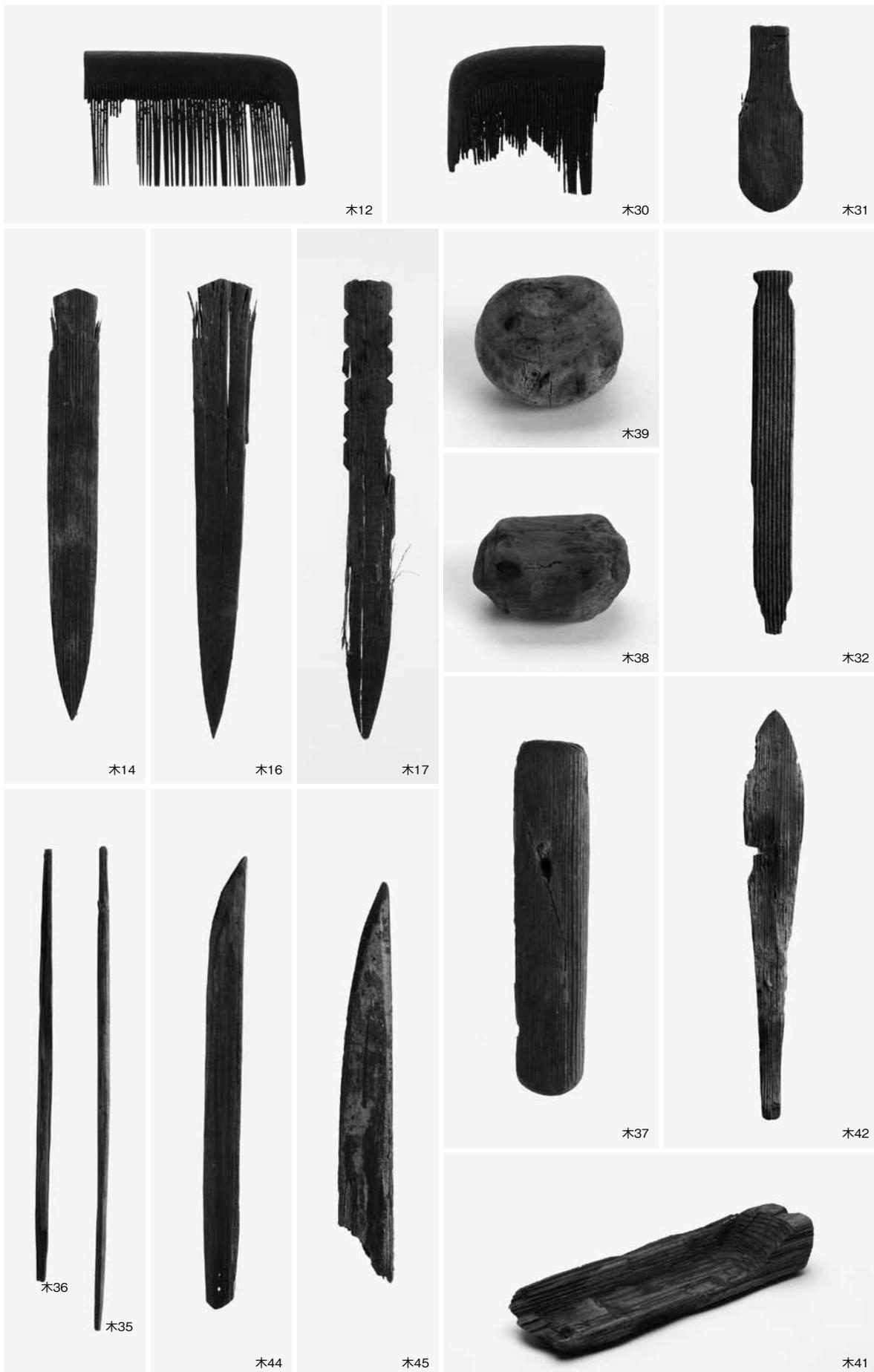


瓦46

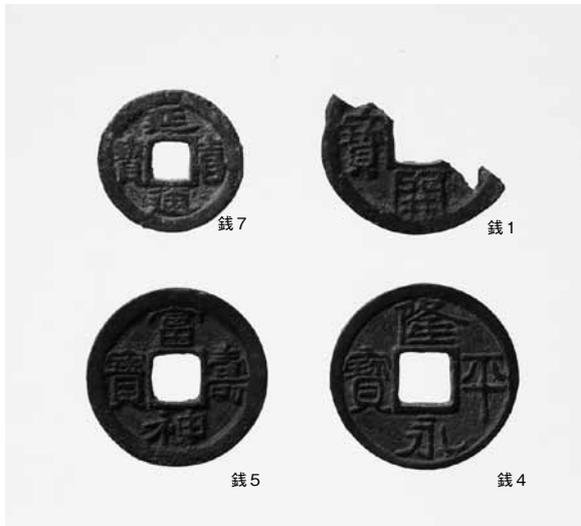
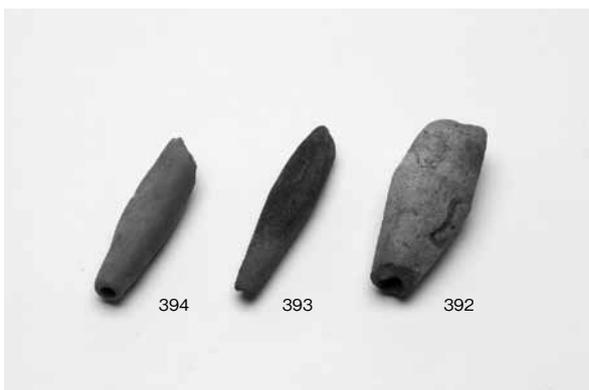
丸瓦2、平瓦



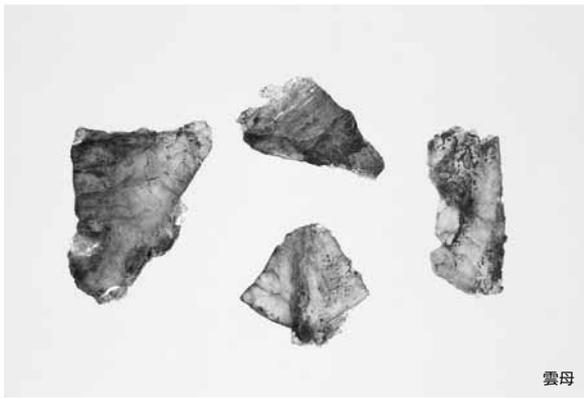
木製品 1 (落込み456出土)



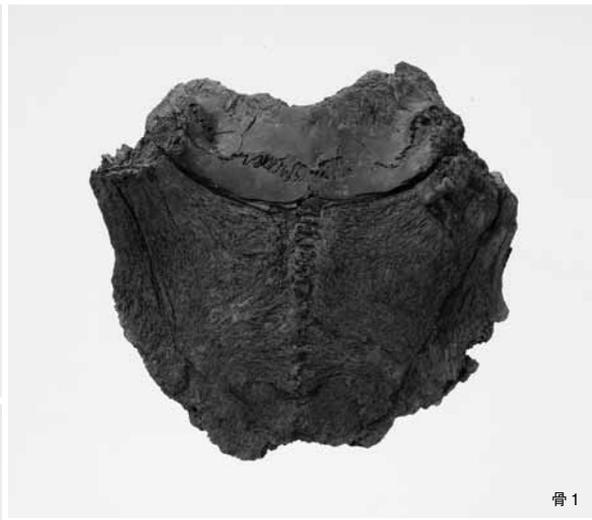
木製品 2 (井戸359・847、柵状遺構828、池452・462、土坑716出土)



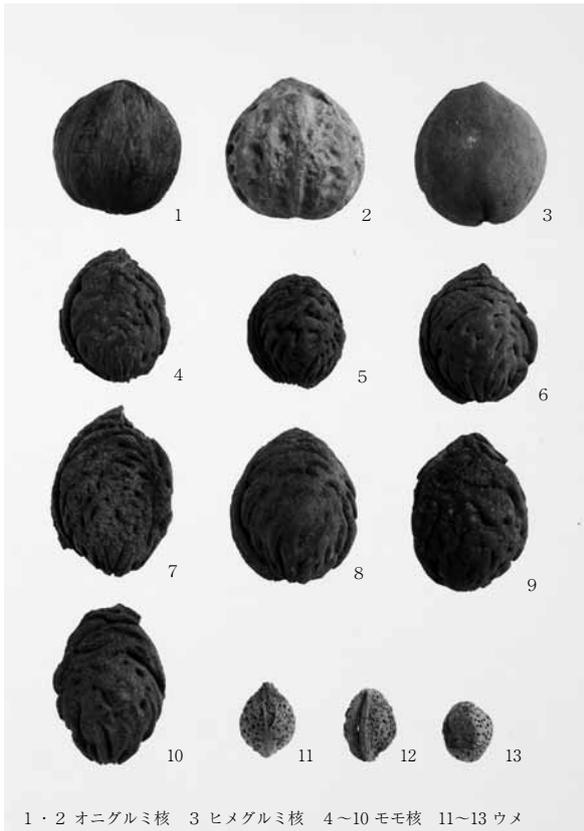
土製品・ガラス製品・石製品・銭貨



雲母



骨1



1・2 オニグルミ核 3 ヒメグルミ核 4～10 モモ核 11～13 ウメ



骨2



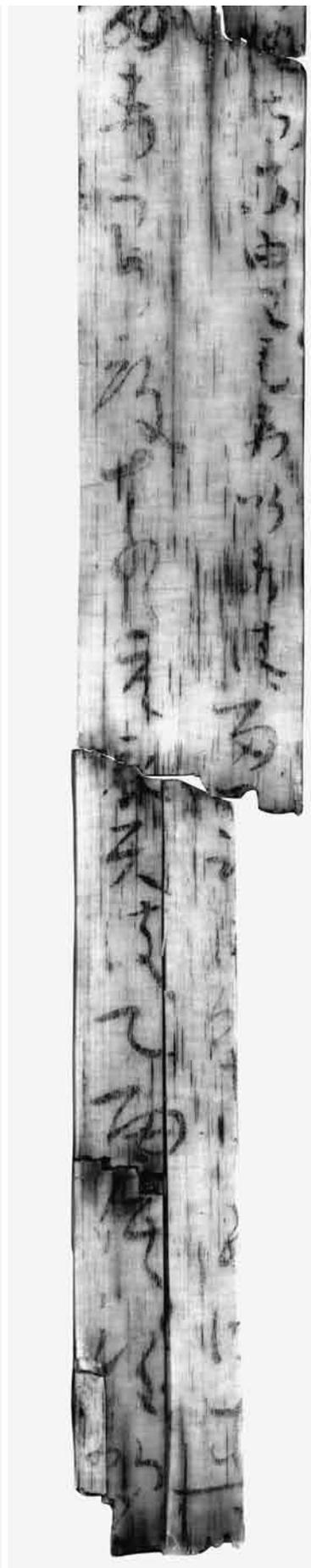
桜皮



白色円礫



木墨6



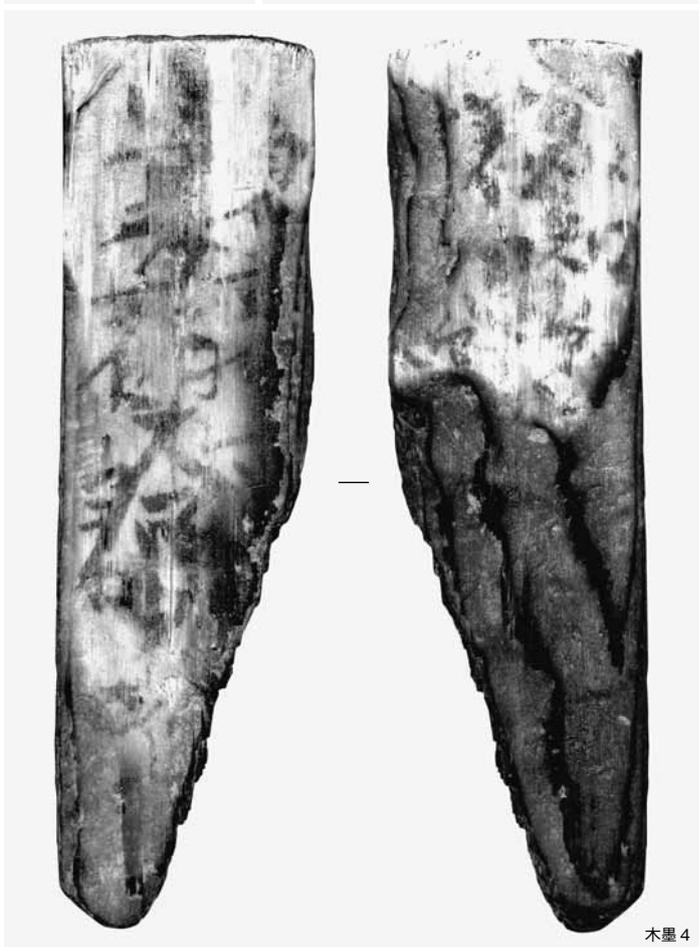
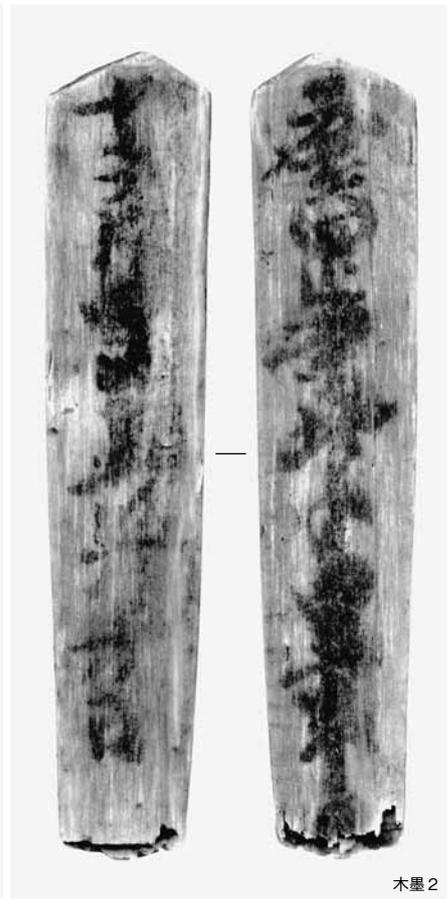
※



※

木墨7

木簡赤外線写真（原寸）



木簡・絵馬赤外線写真（原寸）

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょういちぼうにちょうあと							
書名	平安京左京四条一坊二町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2014-10							
編著者名	丸山真史・南 孝雄							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 みぶしゅじやくちょう 壬生朱雀町  37番の1・  37番の6	26100		35度 00分 25秒	135度 44分 38秒	2014年5月 16日～2014 年9月30日	1,323㎡	住宅建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	弥生時代		弥生土器		平安時代初頭に行われた自然地形に対する大規模な埋立を確認。 平安時代前・中期の宅地内排水施設を検出。 平安時代中期の井戸から仮名文字で書かれた「なにはつ」木簡が出土。		
		古墳時代		須恵器				
		奈良時代		銭貨				
		長岡京期		瓦				
		平安時代前期	掘立柱建物、溝、水場、井戸、土坑、ピット、落込み	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、白磁、青磁、製塩土器、墨書土器、土馬、瓦、木製品、木簡	平安時代後期の池を中心とする庭園遺構を検出。池は4時期の変遷があり、史料に見える大江公仲邸や藤原為隆の「坊城堂」に関連すると考えられる。			
		平安時代中期	溝、井戸、柵状遺構	土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、墨書土器・木簡				
平安時代後期	礎石建物、石組溝、柵、築地、タタキ、土坑、池、岬、瀬落し、入江、遣水	土師器、瓦器、白磁、青磁、墨書土器、瓦、木製品						

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-10

## 平安京左京四条一坊二町跡

発行日 2015年3月31日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961